富士宮市文化財調査報告書　第16集

富士宮市の遺跡

－富士宮市遺跡詳細分布調査報告書－

1993

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書　第16集

富士宮市の遺跡

－富士宮市遺跡詳細分布調査報告書－

1993

富士宮市教育委員会

序

富士山裾野の傾斜地にひろがる富士宮市は、温暖な気候、風土に恵まれ、遠く原始の時代より人々の生活が営まれ、市内の随所にはそれら先人の足跡として、貴重な遺跡が数多く残されています。

これらの遺跡は、先人たちの生活や文化などを知る手がかりとして、極めて重要なものであります。富士宮市では、文化財保護法の主旨に基づき、積極的な保護、保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めております。しかしながら、近年における地域開発の進展は、遺跡にたいして少なからず影響を与えつつあり、これらの遺跡の取り扱いがもっとも大きな問題となっております。このため、富士宮市でも遺跡の所在を明確にし開発事業等の調整段階での資料として、富士宮市遺跡地図を平成3年度に作成し、ご利用いただいております。

ここに刊行いたしました富士宮市遺跡詳細分布調査報告書「富士宮市の遺跡」は、昭和63年度から平成2年度までの3箇年で、市内全域を対象に実施した遺跡詳細分布調査により得られた成果から、各遺跡の性格や内容等を詳細に掲載しているものであり、平成4年度の文化庁、静岡県の補助事業として作成されたものであります。

最後になりましたが、本書の作成にあたり、ご指導をいただいた文化庁、静岡県教育委員会をはじめ、調査にご協力をいただいた各機関及び諸先生方には、厚く御礼申し上げるとともに、本書が文化財、郷土史を知る研究資料としてご活用いただければ幸いであります。

平成5年3月

富士宮市教育委員会
教育長　田口　哲

例　　言

1．本書は、富士宮市教育委員会が平成４年度事業として、国および静岡県の補助金を得て、静岡県教育委員会の指導のもとに作成した富士宮市遺跡詳細分布調査報告書『富士宮市の遺跡』である。

2．本書は、平成３年度に作成された『富士宮市遺跡地図』とともに、遺跡の所在と内容をひろく周知し、埋蔵文化財の保護、保存、さらにその普及、啓蒙をはかることを目的に作成したものである。

3．分布調査は、昭和63年度から平成２年度まで３箇年にわたり、野村昭光静岡県文化財保護指導員の指導のもと、富士宮市教育委員会社会教育課主査馬飼野行雄、渡井一信、同学芸員渡井英誉、同補助員望月秀雄、天野秀男、勝俣利雄、天野一作、太田川忠雄で実施した。

4．分布調査の資料整理は、以後２箇年を費やし、主に図化を平成３年度に、個表化を平成４年度に馬飼野、渡井英誉を中心として、富士宮市教育委員会臨時事務員芦川美智子、渡辺麻里、中山民子で実施した。

　なお、富士登山、信仰に関する資料は富士宮市教育委員会学芸員伊藤昌光の協力を得た。

5．本書の執筆は、馬飼野、渡井英誉があたり、これに分布調査報告を補充するために未発表の発掘調査報告を「富士宮市遺跡調査報告」として巻末に掲載した。文責は文末に示している。

　また、調査及び資料整理の指導をいただいた植松章八静岡県教育委員会青少年課課長補佐（富士宮市史執筆委員）には「富士宮市の遺跡と文化」と題して玉稿を賜った。

6．本書に用いている地形図は、昭62、部公第3154号によって建設省国土地理院長の承認、及び助言を得て富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。なお、地形図、遺構実測図に記する高度は全て海抜高度をもって示している。

7．本書の編集、印刷、出版に関する事務は、富士宮市教育委員会社会教育課文化振興係があたった。

8．分布調査、及び発掘調査に関する全ての資料の内、明記されているもの以外は、富士宮市教育委員会で保管している

目　　次

富士宮市遺跡分布図…… 1
富士宮市遺跡調査カード…… 9
富士宮市の遺跡と文化…… 115
富士宮市遺跡調査報告…… 143
富士宮市遺跡関係文献…… 235

凡　　例

1．本書の富士宮市遺跡調査カード（以下、調査カード）の遺跡番号、地図番号は、全て『富士宮市遺跡地図』のそれに対応する。

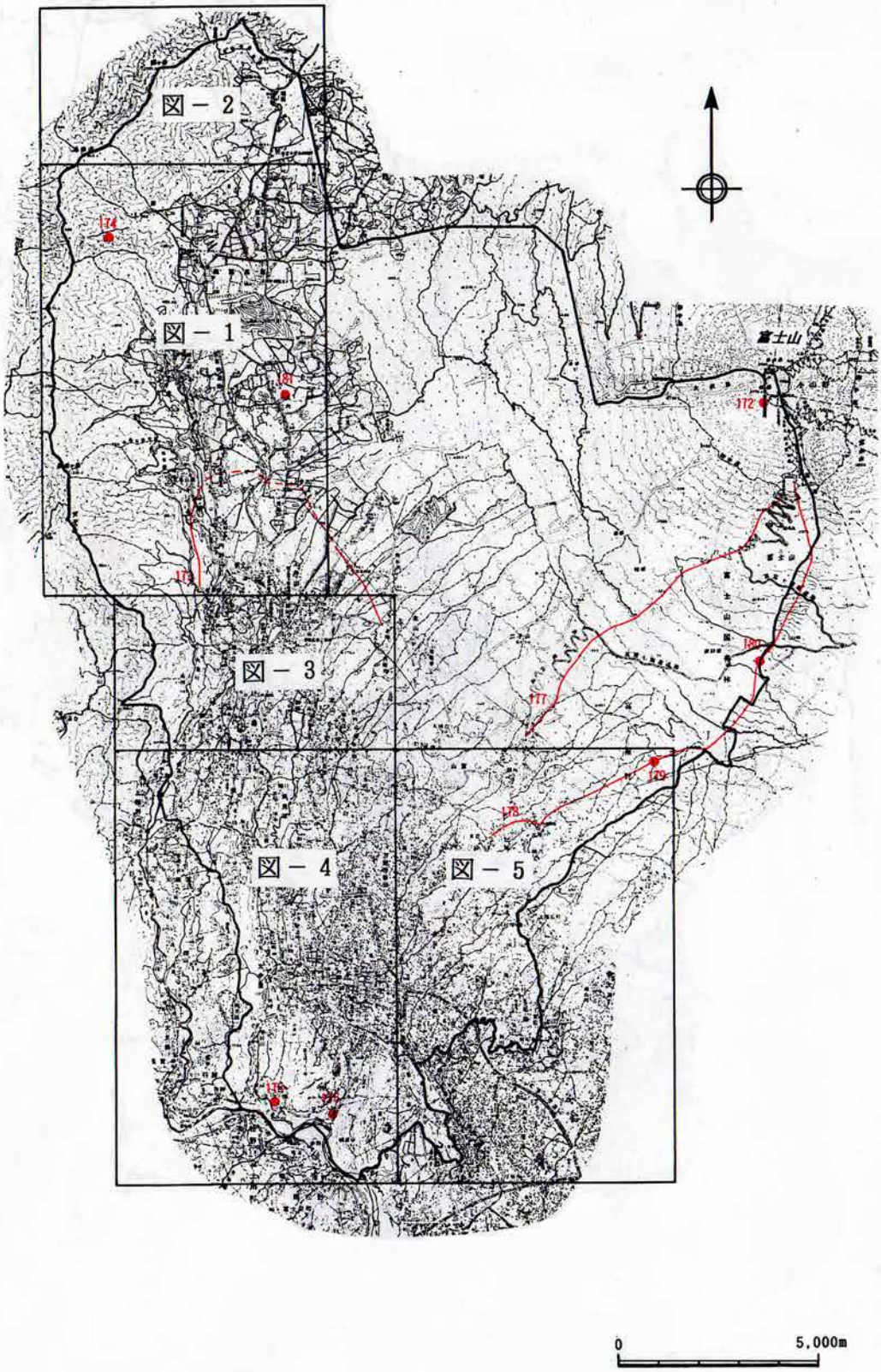
2．本書の調査カードにおける所在地は、各遺跡の最も占有面積の多い字名を記し、基本的にはそれを遺跡名としている。

3．本書の調査カードにおける種別は、土器、石器等の遺物の散布が認められる場所を「散布地」、その略に「散」を用い、以下、発掘調査や形状から内容の知れるものに「集落」、その略に「集」、祭祀跡、その略に「祭」、「古墳」とそれ以外の埋葬施設を「墓、墓地」として、中世以降はさらに具体的に「城跡」、「城館」、「経塚」、「土手跡」、「鉱山跡」、「船着場跡」、「道路跡」に区別している。

4．本書の調査カードにおける時代区分は、「旧石器、先土器」、「縄文（早、前、中、後、晩）」、「弥生（中、後）」、「古墳（前、中、後）」、「奈良」、「平安」、「鎌倉」、「室町」、「江戸」、「中世」、「近世」、「近代」、「現代」とし、絶対年代はいくつかの問題もあるが、先土器時代と縄文時代の境をおよそ12,000年前、縄文時代と弥生時代の境をおよそ2,300 年前、弥生時代と古墳時代の境をおよそ1,700 年前においている。以下、歴史時代は政権の所在によった時代区分とし、鎌倉、室町時代を中世、江戸時代を近世、明治、大正時代を近代として包括、呼称している。

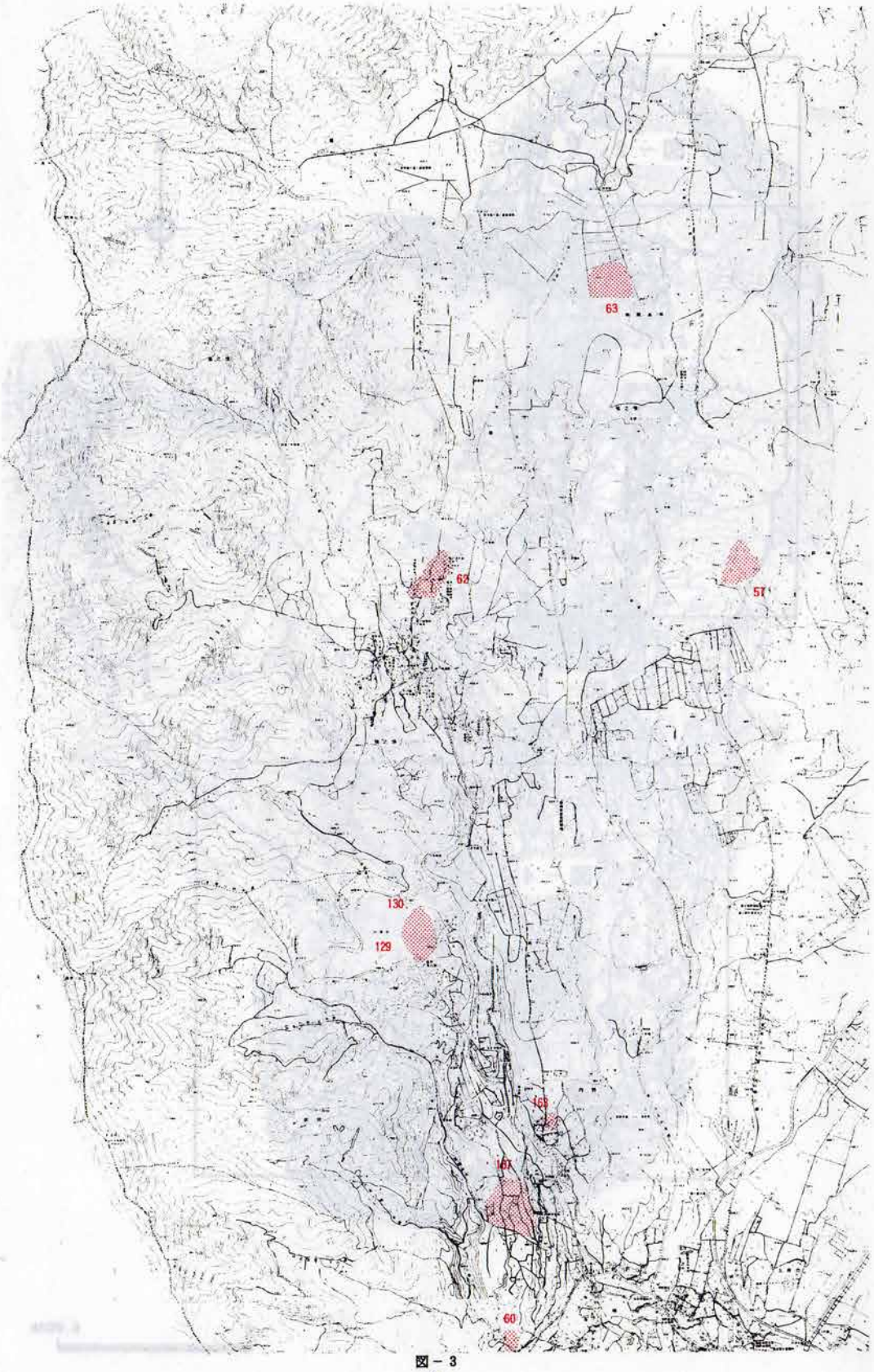
富士宮市遺跡分布図

富士宮市区割図



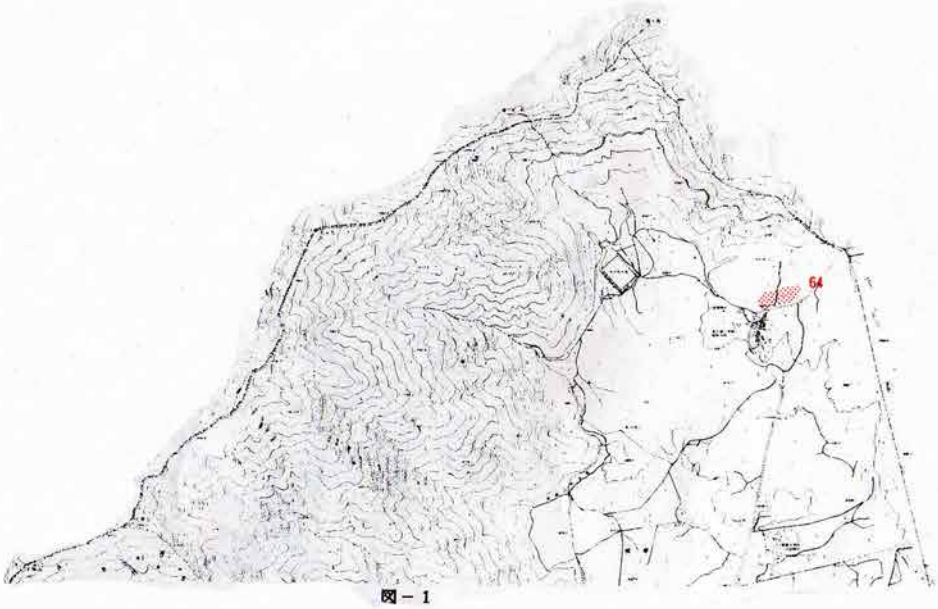
図－1

図－2



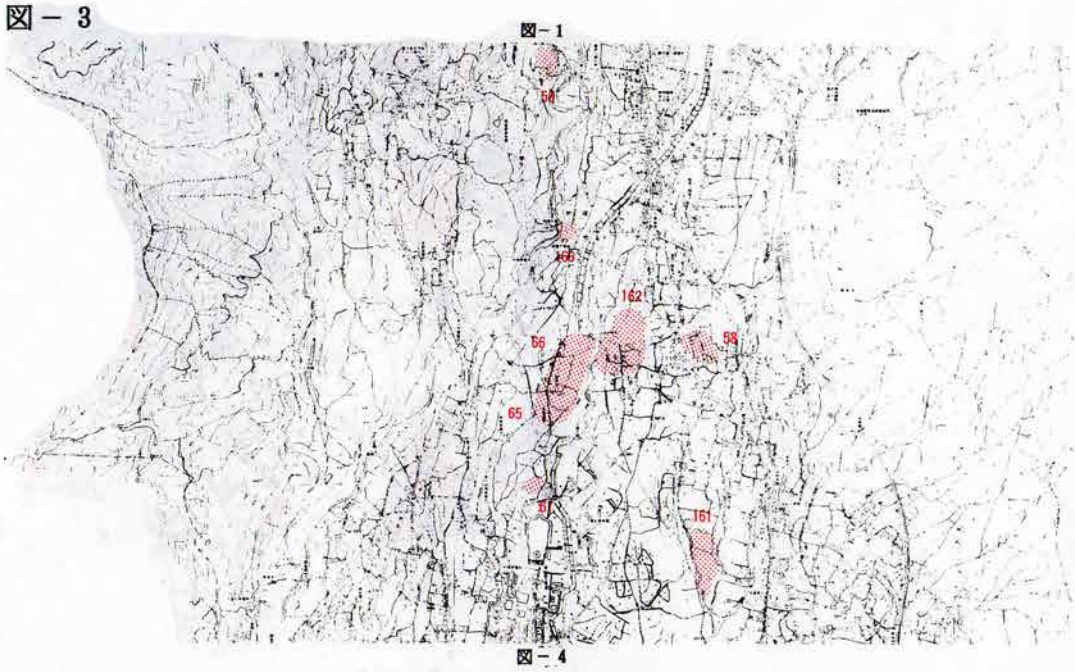
図－3

図－2



図－1

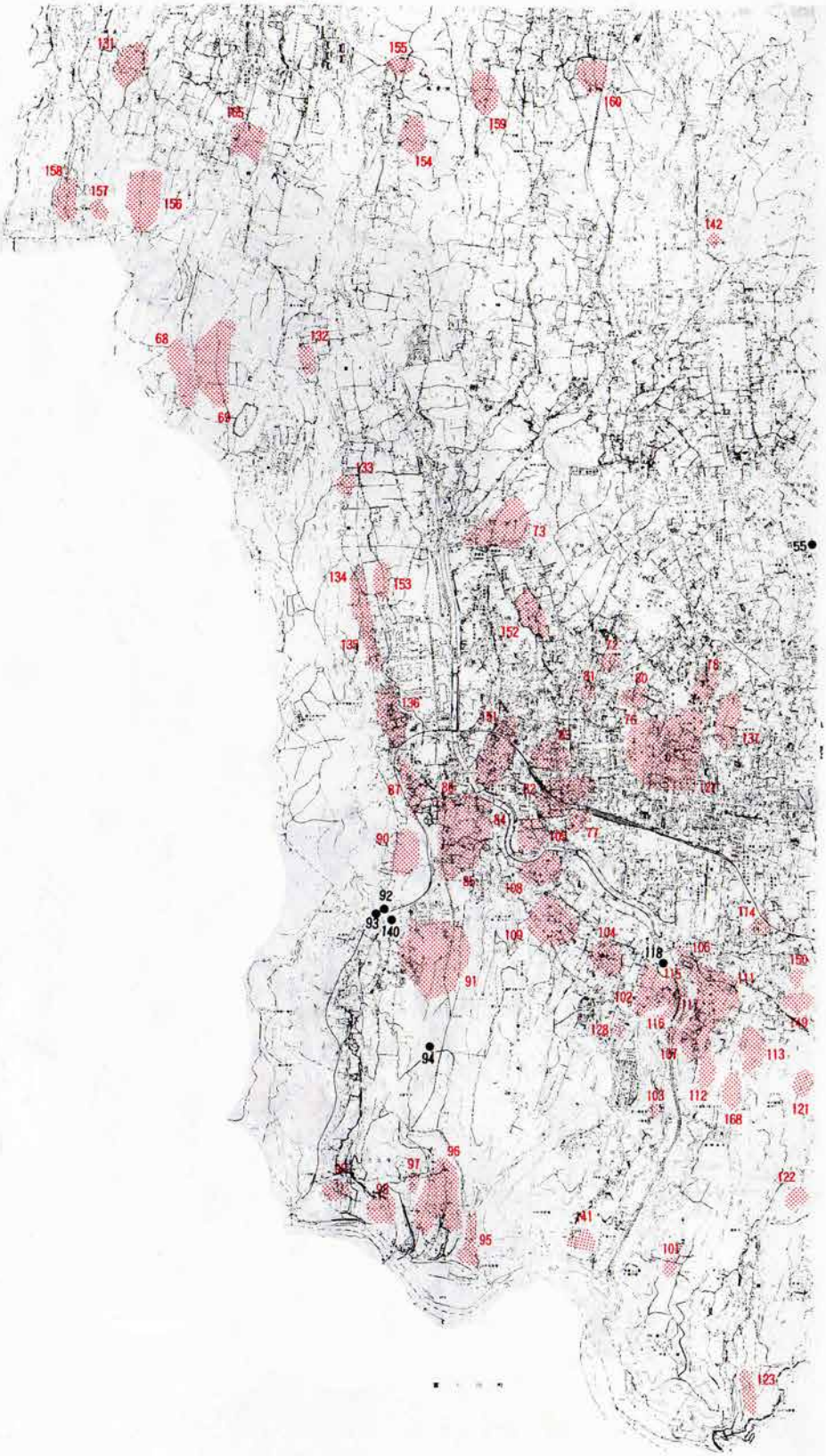
図－3



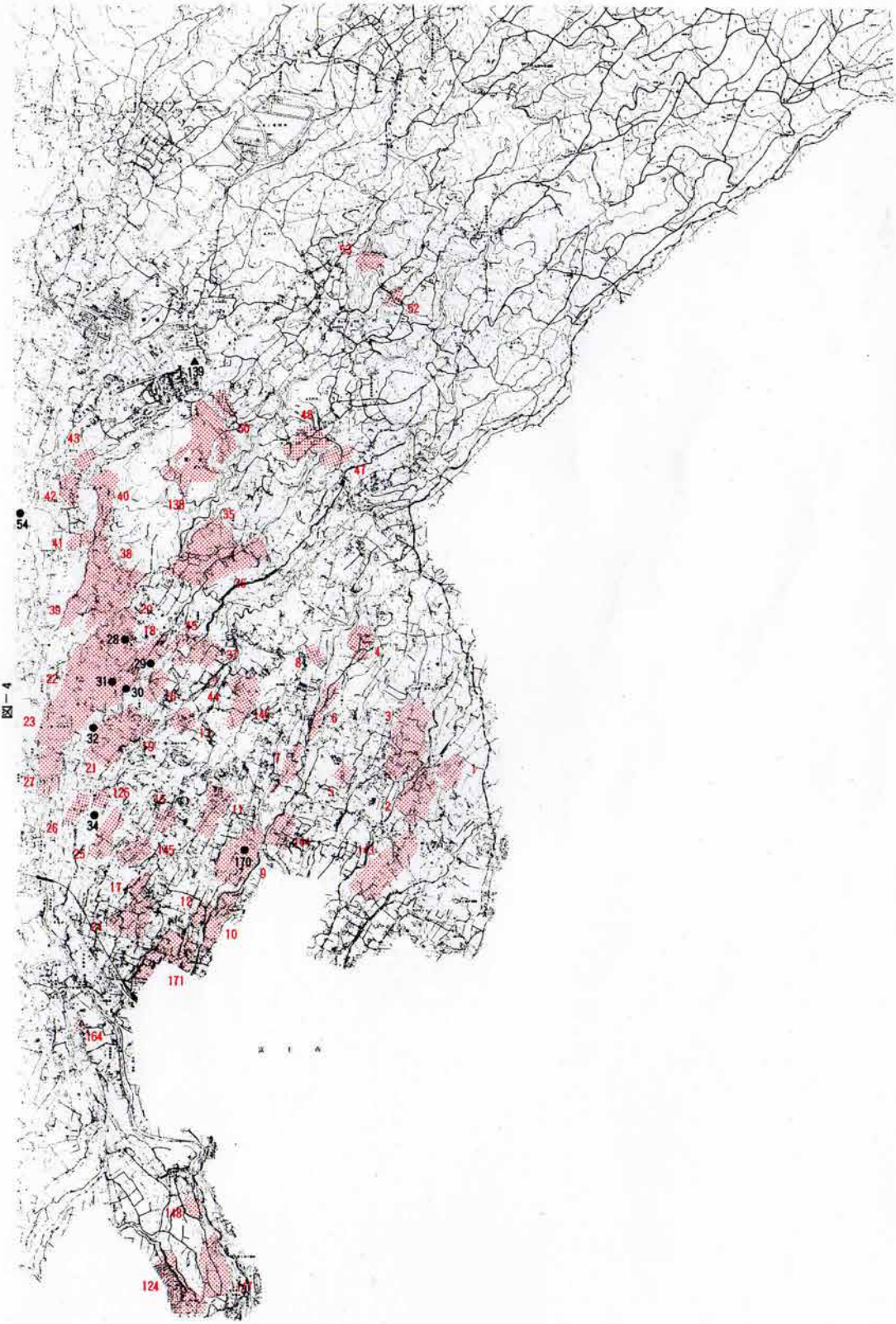
図－4

図－4

図－3


131
155
160
165
159
154
158
157
156
142
68
132
69
133
73
55
134
153
152
135
72
81
80
78
136
151
76
83
137
87
86
82
127
84
109
77
90
85
108
92
93
140
114
109
104
118
106
150
115
111
91
102
117
128
116
149
94
107
113
103
112
121
168
96
97
122
98
141
95
101
123

図－5



図－4

富士宮市遺跡調査カード

目　　次

＊地図番号は『富士宮市遺跡地図』に対応

遺跡番号	遺跡名		頁	図版	地図番号
1	焼畑	やっぱた	15	1	23
2	杉田中村	すぎたなかむら	15	1	23
3	滝ノ上	たきのうえ	16	1	19.23
4	田上原	でんじょうばら	16	1	19
5	丸塚	まるづか	17	1	23
6	新梨	しんなし	17	1	19
7	杉田西原	すぎたにしはら	18	1	19.23
8	大辻	おおつじ	18	1	19
9	若宮	わかみや	19	2	22
10	ジンゲン沢		19	2	22
11	代官屋敷	だいかんやしき	20	2	22
12	蟹入越	かにおこし	20	2	22
13	小泉向原	こいずみむかいばら	21	2	18
14	尾無沢	おなしざわ	21	-	地点不明
15	中ノ土手	なかのどて	22	2	22
16	寺ノ後	てらのうしろ	22	2	18
17	上宿	かみじゅく	23	2	22
18	神祖	かんぞ	23	3	18
19	寺内	じない	24	3	18
20	大室	おおむろ	24	3	18
21	小泉中村	こいずみなかむら	25	3	18.22
22	三ッ室	みつむろ	26	3	18
23	木ノ行寺	きのぎょうじ	25	3	18
24	権現	ごんげん	27	3	22
25	石敷	いっしき	27	3	22
26	向田	むかいだ	28	4.14	22
27	中沢	なかざわ	28	4	18.22
28	大室古墳	おおむろ	29	4	18
29	神祖山ノ神古墳	かんぞやまのかみ	30	4	18
30	神祖2号墳	かんぞ	31	4	18
31	神祖3号墳	かんぞ	32	-	18
32	寺内山ノ神古墳	じないやまのかみ	30	4	18
33	天神塚古墳	てんじんづか	33	-	22
34	虚空蔵社古墳	こくぞうしゃ	33	4.14	22
35	箕輪A	みのわ	34	4	18
36	箕輪B	みのわ	34	5	18
37	出水	いずりみず	35	5	18
38	峯石	みねいし	36	5	18
39	丸ヶ谷戸	まるがいと	35	5	18
40	辰野	たつの	37	5	18
41	時田	ときだ	37	5	18
42	宝田	ほうでん	38	5	18
43	峰ヶ谷戸	みねがいと	39	5	18
44	出水東	いずりみずひがし	39	6	18
45	出水西	いずりみずにし	40	6	18
46	石原	いしはら	40	-	地点不明
47	松葉	まつば	41	6	19
48	東谷戸	ひがしがいと	41	6	15.19
49	木伐山	ききりやま	42	-	地点不明
50	稲干場	いなほしば	42	6	15.18
51	元村山古墳	もとむらやま	43	-	地点不明
52	社領東	しゃりょうひがし	44	6	15
53	社領西	しゃりょうにし	44	6	15
54	舞々木1号墳	まいまいぎ	45	6	18
55	舞々木2号墳	まいまいぎ	45	7	17
56	行人塚古墳	ぎょうにんづか	46	-	17
57	姥穴	うばあな	46	7	4
58	桟敷	さじき	47	7	8

遺跡番号	遺跡名	頁	図版	地図番号
59	白糸の滝しらいとのたき	47	7	8
60	白糸佐折しらいとさおり	48	7	6
61	田貫湖草原たぬきこそうげん	48	-	地点不明
62	猪之頭養鶏場内 いのかしらようそんじょうない	49	7	3
63	富士丘 ふじおか	49	7	2
64	根原 ねばら	50	7	1
65	千居B せんご	50	8	8
66	千居A せんご	50	8	8
67	青蓮の滝せいれんのたき	51	8	10
68	丸山 まるやま	51	8	12
69	田尻 たじり	52	8	12
70	青木 あおき	52	-	地点不明
71	青見 あおみ	53	-	地点不明
72	琴平 ことひら	53	8	17
73	渋沢 しぶさわ	54	8	16
74	淀師 よどし	54	-	地点不明
75	神賀町 じんがちょう	55	-	地点不明
76	浅間大社せんげんたいしゃ	55	8	17
77	羽衣町 はごろもちょう	56	9	20.21
78	城山 しろやま	56	9	17
79	北神田 きたかんだ	57	-	17
80	二ノ宮 にのみや	57	9	17
81	福知神社ふくちじんじゃ	58	9	17
82	西町 にしまち	58	9	20
83	貴船町 きぶねちょう	59	9	16
84	甲石 かぶといし	59	9	16.20
85	福伝 ぶくでん	60	10	20
86	大中里坂下 おおなかざとさかした	60	10	16.20
87	大中里坂上 おおなかざとさかうえ	61	10	16.20
88	中里古墳 なかざと	62	-	地点不明
89	南原古墳 なんばら	61	-	地点不明
90	別所 べっしょ	63	10	20
91	上の原 うえのはら	63	10	49
92	別所1号墳べっしょ	64	-	20
93	別所稲荷塚古墳 べっしょいなりづか	65	10.16	20
94	摩利支天塚まりしてんづか	66	10	20
95	沼久保坂上ぬまくぼさかうえ	66	10	24
96	谷外 かいと	67	11	24
97	下田 しもだ	67	11	24
98	小松原B こまつばら	68	11	24
99	小松原A こまつばら	68	11	24
100	薮塚古墳 やぶづか	69	-	24
101	明星山 みょうじょうやま	69	11	25
102	坊地上 ぼうちうえ	70	11	21
103	倭文神社 しどりじんじゃ	70	11	21
104	野中中村 のなかなかむら	71	11	21
105	泉 いずみ	71	12.9	20
106	南部谷戸 なんぶがやと	72	12	21
107	月の輪平 つきのわだいら	72	12	21
108	滝戸 たきど	73	12	20
109	野中向原 のなかむかいはら	73	12	20
110	スギナクボ	74	-	地点不明
111	五反田 ごたんだ	74	12	21
112	月の輪上 つきのわうえ	75	12	21
113	奥山地 おくやまじ	75	12	21
114	田中 たなか	76	13	21
115	坊地下 ぼうちした	76	13	21
116	坊地南 ぼうちみなみ	77	13	21
117	月の輪下 つきのわした	77	13	21
118	塚本古墳 つかもと	78	13	21
119	月の輪法印塚古墳 つきのわほういんづか	79	-	21
120	王藤内の塚 おうとうないのつか	78	-	21
121	上高原 かみたかはら	80	13	21
122	出口 でぐち	80	13	25
123	初田 はつだ	81	13	25
124	光徳坊 こうとくぼう	81	14	26

遺跡番号	遺跡名		頁	図版	地図番号
125	高原愛宿山	たかはらあたごやま?	82	-	地点不明
126	上石敷	かみいっしき	83	14	22
127	大宮城跡	おおみやじょうあと	84	9.14	17
128	黒田向林	くろだむこうばやし	83	14	21
129	長者ヶ原A	ちょうじゃがはら	85	14	5
130	長者ヶ原B	ちょうじゃがはら	85	14	5
131	精進川神田	しょうじんがわかんだ	86	14	9
132	明善谷戸	みょうぜんがいと	86	15	13
133	東岳前	とうがくぜん	87	15	13.16
134	石畑	いしばたけ	87	15	16
135	牛ヶ沢	うしがざわ	88	15	16
136	根方	ねがた	88	15	16
137	若ノ宮	わかのみや	89	15	17
138	上ノ山	うえのやま	89	15	18
139	二殿村石経塚	ふたまたむらせっきょうづか	90	15	15
140	別所蛇塚古墳	べっしょへびづか	90	16	20
141	外谷戸	そとがいと	91	16	25
142	押出	おしだし	91	16	14
143	寺地	てらじ	92	16	23
144	大宝坊	だいほうぼう	92	16	23
145	荻間	おぎま	93	16	22
146	金井坂	かないざか	93	16	18
147	下ノ原	しものはら	94	16	26
148	山本船久保	やまもとふなくぼ	94	17	26
149	下ヶ谷戸	しもがいと	95	17	21
150	杉林	すぎばやし	95	17	21
151	東田	ひがしだ	96	17	16
152	上中村	かみなかむら	96	17	16
153	舞台	ぶたい	97	17	16
154	馬見塚新屋	うまみづかあらや	97	17	10.13
155	棚口	たなぐち	98	17	10
156	西ノ原	にしのはら	98	18	12
157	精進川小山	しょうじんがわこやま	99	18	12
158	北原	きたはら	99	18	12
159	貫間	ぬくま	100	18	10
160	東下組	ひがししもぐみ	100	18	11
161	御園	みその	101	18	10
162	辻	つじ	101	18	8
163	足形上	あしがたうえ	102	18	6
164	吉野屋敷跡	よしのやしきあと	102	19	22
165	南条館跡	なんじょうやかたあと	103	19	9.12
166	井出館	いでやかた	103	19	8
167	内野城跡	うつのじょうあと	104	19	6
168	高原城跡	たかはらじょうあと	104	19	21
169	南部谷戸古墳群	なんぶがやと	105	-	21
170	若宮古墳群	わかみや	106	-	22
171	川坂	かわさか	107	19	22
172	三島ヶ嶽経塚	みしまがたけきょうづか	107	19	7
173	猪土手	ししどて	108	19	27
174	麓金山堀間跡	ふもときんざんほりまあと	109	20	27
175	沼久保船着場跡	ぬまくぼふなつきばあと	110	20	27
176	星山船着場跡	ほしやまふなつきばあと	110	20	27
177	新大宮口登山道跡	しんおおみやぐちとざんどうあと	111	21	27
178	村山口登山道跡	むらやまぐちとざんどうあと	111	21	27
179	札打場の大ケヤキ	ふだうちば	112	21	27
180	中宮八幡堂跡	ちゅうぐうはちまんどうあと	112	21	27
181	人穴	ひとあな	113	20	27

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	焼畑遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	1
所在地	杉田字焼畑	時　代	縄文(早・中・後)		地図番号	23

遺跡の概要

焼畑遺跡は、昭和53年度実施の包蔵地調査において、杉田中村遺跡より北東側に一段高い、標高225mを測る広域な台地上に南北300m、東西300mの範囲で、縄文早・中～後期の包蔵が推定されたが、平成3年7月に遺跡東半分に申請された倉庫建設の事前確認調査によると、遺物包含層は薄く、著しい土地改良も手伝って数片の土器片を表土攪乱土層内に見るだけであり、遺跡の及んでいる可能性は極めて少ない状況にあった。従って、本遺跡は天間沢川沿いに滝ノ上遺跡や杉田中村遺跡を望む南北300m、東西200m程の範囲に修正されたい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	杉田中村遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	2
所在地	杉田字中村	時　代	縄文（中・後）		地図番号	23

遺跡の概要

杉田中村遺跡は、天間沢川が中流に至って浸食谷に深く抉られ、「滝ノ上」の名称の由来となった源頭部左岸に南北500m、東西250m程で広がり、標高200~180mまで下る緩斜面を占有している。その北東側には焼畑遺跡が占有する台地末端が比高20mの高さで壁のように取り巻き、絶好の「日溜まり」となって遺跡に好条件を与えている。

遺跡内容は、中央部南側より市指定文化財「安養寺の土偶(縄文後期)」の出土が伝えられたり、濃密な遺物の散布から、滝ノ上遺跡にも匹敵しようし、富士市天間沢遺跡を中心にして天間沢川流域を占有する遺跡の隆盛には目を見張るものがあったであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	滝ノ上遺跡	○存在　消滅	種　別	集・祭	遺跡番号	3
所在地	杉田字滝ノ上	時　代	縄文（前～後）		地図番号	19.23

遺跡の概要	
	滝ノ上遺跡は、天間沢川の中流右岸に沿って幅300m程下る小高い丘陵を標高240m～190m程まで、南北に650mの広域な分布をもって、岳南三大遺跡に劣ることのない規模をもつ。昭和55年に富士根畑総に伴う発掘調査では遺跡中央を幅7mで東西に走る幹線道路敷地内より、縄文中～後期の配石墓3基、配石遺構4基が発見され、土器も早(？)～前期の木島式土器を得るなどその内容の一端が知れた。詳細には中央を下る背の高い尾根と天間沢川沿いの低い丘陵、さらに滝西側の一段低い緩斜面に分けられ、遺跡の分割も可能であるが、そのそれぞれの中に形成されるであろう住居域や祭祀、墓域をもって一大遺跡圏が存在することは濃密な遺物の散布状況からしてもほぼ間違いなかろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	田上原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	4
所在地	杉田字田上原	時　代	縄文（中）		地図番号	19

遺跡の概要	
	田上原遺跡は、慈眼寺沢左岸の高台で、東側も深く抉ぐられて、細くなった尾根頂部の狭い平坦面で、標高245~265m間の南北250m、東西250mが包蔵を推定される。縄文中期を主体とするであろう遺物の散布が濃密に広く認められる。遺跡東側の一区画、つまり緩やかな円丘が削平されて菜園、器材置場として土地改良されている。この尾根を300m下った最末端には新梨遺跡もあって、その関連も注意されよう。なお、近年、市街化調整区域内の山林を土地改良をし、菜園、器材置場の名目で土地売買が横行しており、注意が必要である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	丸塚遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	5
所在地	杉田字丸塚	時　代	縄文（中）		地図番号	23

遺跡の概要	
	丸塚遺跡は、滝ノ上遺跡が占有される丘陵と、新梨遺跡が占有される丘陵の間の起伏のない丘陵の末端部に形成されるテラス状の小平坦に位置する。標高182~190m、南北150m、東西100mの狭い範囲である。南東面する緩斜面を下ると小河川が南流するが、当時の存在は不確かで、この幅の広い緩慢とした丘陵上には、本遺跡を除いて、遺跡を確認することなく、おそらく小規模な遺跡が縄文中期頃に営まれていたのであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	新梨遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	6
所在地	杉田字新梨	時　代	縄文（早～後）		地図番号	19

遺跡の概要	
	新梨遺跡は、慈眼寺沢中流の左岸に位置する。幅の狭い丘陵と東西両端が深く抉ぐられた景観は一種の独立丘陵となって他とは極端な差をもっている。そのもっとも急峻な丘陵の頂部平坦面と、地形的に連続するが、中央で段をもって下った比較的緩斜面な部分に分けられ、南北450m、東西は100mにも満たない細長い包蔵範囲が推定されている。低い部分が標高195m前後、高い部分が225m前後で30mの比高をもつ。その中央を富士根畑総の幹線道路が通り、その切り通し部分の断面より縄文早期から後期に至る各時代の土器片が万遍なく採集されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	杉田西原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	7
所在地	杉田字西原	時　代	縄文(早·中)·弥生·古墳		地図番号	19.23

遺跡の概要	
	杉田西原遺跡は、慈眼寺沢川中流の右岸高台で、一段下方には若宮遺跡が存在する。詳細には比高10m程で２段の細かい段で分かれて、南北450m、東西100m程の範囲を標高180m前後でその３分の２程を占める部分に縄文早期押型文土器から中期(？)が認められ、前面の標高170m前後を測る狭い平坦面が昭和63年度分布調査で弥生～土師器片(ハケ整形甕形土器)が確認されて範囲を追加された部分である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	大辻遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	8
所在地	小泉字大辻	時　代	縄文（中）		地図番号	１９

遺跡の概要	
	大辻遺跡は、東側を慈眼寺沢に深く抉ぐられ、北～西側を弱い傾斜で懐様に取り囲まれた南西向き緩斜面を包蔵地としており、標高220~230m、南北120m、東西220mの範囲が推定される。土地改良の際のマサ抜きで縄文中期と思われる土器片が、発見されているが散布は薄く、範囲も比較的不明瞭である。なお、遺跡中央は宿泊施設の建設、菜園への土地改良が計られるなど土地利用が著しく及んでいる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	若宮遺跡	○存在　消滅	種　別	集　落	遺跡番号	9
所在地	小泉字古宮	時　代	旧石器･縄文･弥生･古墳		地図番号	22

遺跡の概要

若宮遺跡の発見は昭和53年より3ヶ年にわたって、実施された西富士道路建設の事前発掘調査によるもので、縄文早期の押型文、撚糸文土器を主体として、多量の石器(特に石鏃)を伴った、24棟からなる大集落跡の発見は従来の常識をくつがえすに充分で、その名を全国に知らしめる結果ともなった。そこは慈眼寺沢川を東側に望む、標高150m程の南北100m、東西150mの南東面する高台で、そこから比高10m程で下る南面斜面には10数基の群集墳が占地されたらしいが(若宮古墳群参照)現在は全て破壊されている。

以来、それをもって若宮遺跡として把握してきたが、昭和63年度実施の分布調査では古墳群前面に広がる南北350m、東西250mの広い緩斜面に縄文中期土器片さらに弥生～土師器片も採集され、沢を隔てて対峙する天間沢遺跡や古墳群とも関連されるであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	ジンゲン沢遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	10
所在地	小泉字横道	時　代	縄文(早･中･後)･古墳		地図番号	22

遺跡の概要

ジンゲン沢遺跡は、富士市天間字堰戸を主体に存在するが、その北辺が本市横道地区に及んでいる。その東端は岳南三大遺跡と称される天間沢遺跡が並走するように存在し、その影響下にあることは確かで、表採される遺物も縄文早期～中期後半、さらに、古墳初頭と万遍ない。地形的には弱い谷で天間沢遺跡と区別され、北～西端を慈眼寺沢の蛇行によって区画されたなかを標高110~120m、南北450m、東西100mで占め、そのうちの北端6分の1程が富士宮市分である。沢に対峙して北側から若宮遺跡、蟹入越遺跡が存在している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	代官屋敷遺跡	○存在　消滅	種　別	散・集	遺跡番号	11
所在地	小泉字代官屋敷	時　代	縄文(早·前·中)·古墳		地図番号	22

遺跡の概要	
	代官屋敷遺跡は、昭和40年代より存在は知れて、さらに昭和53年より4ヶ年にわたって実施された西富士道路建設の事前発掘調査で、縄文早期の集落跡、前～中期の竪穴住居跡からなる生活跡が確認され、遺跡の内容の一端が知れている。占地は富士山より下る舌状台地の末端近くで比高20m程で小泉の沖積地を望む標高150~160mの間に南北に長く450m、東西に150mの範囲で広がる。なお、南半では土師器、須恵器片の散布もみられ、北半は縄文早期土器片の採集が以前より通報され、昭和63年度分布調査時には、やはり土師器、須恵器片もみて、拡張されたものである。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	蟹入越遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	12
所在地	小泉字蟹入越	時　代	縄文(中·後)·弥生·古墳		地図番号	22

遺跡の概要	
	蟹入越遺跡は、岳南三大遺跡に数えられる富士市天間沢遺跡を慈眼寺沢を挟んで西側から対峙するもので、標高100~110m間の南北200m、東西120mの緩やかな丘陵上を占有して、北側へ登っていくと若宮遺跡がある。遺跡の内容は縄文中～後期と弥生～土師器遺物がみられ、周辺の小泉地区遺跡群と同様の内容が想定されて、時代幅をもう少しもった可能性もあり、今後の観察が注意されよう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	小泉向原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	13
所在地	小泉字向原	時　代	縄文（中）		地図番号	18

遺跡の概要	小泉向原遺跡は、久遠寺川が中流で蛇行して左岸に弱い舌状地形を醸し出した標高160m前後の南北150m、東西250mを範囲とするが、地形的に独立した部分がなく不明瞭である。南端は市立富士根南中学校グランド建設で削取されている。現況は茶畑が多く、表面観察が不利で確認される遺物も少なく、おそらく、縄文中期頃を主体とした遺跡であろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	尾無沢遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	14
所在地	小泉字尾無沢	時　代	縄文		地図番号	地点不明

遺跡の概要	尾無沢遺跡は、『静岡県史第一巻』(1930)に砥石を出土する遺跡として紹介されて以来、古くよりその名称は知られていたものの、詳細は不明のままで、近年に実施される分布調査でも地点不明とされている。尾無沢とは荻間川支流の小河川を指すらしく、それは富士根南中学校東辺を源頭にしてバイパスを抜け富士根保育園東側を下り小泉４区区民館上で合流している。砥石の時代的な所属が不明のままであるが、その源頭部縁辺には縄文時代中期の小泉向原遺跡、荻間川合流地点の北辺には縄文と古墳時代の複合遺跡の中ノ土手遺跡がそれぞれ占地しており、現在では確認仕様はないが、その中流域に遺跡の可能性が全く無いとは言い難い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	中ノ土手遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	15
所在地	小泉字中ノ土手	時　代	縄文（前）·古墳（前）		地図番号	22

遺跡の概要

前田遺跡として登録されていた本遺跡は、昭和62年、遺跡北半に計画されたアパート建設に伴う確認調査で、遺跡の痕跡が全く無いことが判明し、翌年に実施された分布調査でも再検討され、南側部分に関しても、遺物の散布は希薄で範囲も確定しがたいが、その段階では一応、標高125~130mの丘陵上として、南北200m東西150m程の範囲を設定している。また、その名称であるが、対象地内の字名に「前田」が存在せず、遺跡との相関関係がつかめないため、字名をもって「中ノ土手」に変更されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	寺ノ後遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	16
所在地	小泉字寺ノ後	時　代	縄文（中）		地図番号	18

遺跡の概要

寺ノ後遺跡は、久遠寺の北側に広がる遺跡で、標高165~175m、南北230m、東西150mの範囲をもつ。詳細には久遠寺裏より弱い段によって区切られ、東側は弱く下り西側は急激に中沢川の河岸段丘状の地形をもって下り、弱いながらも一種の独立丘陵的な条件を備えている。そこに散布が薄いながらも縄文時代中期土器片が確認されるが、対岸の神祖遺跡や1～3（4?）号墳の存在などから弥生～古墳時代集落の存在の可能性も高い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	上宿遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	17
所在地	小泉字上宿	時　代	縄文(早・中~後)・弥生~古墳(初)		地図番号	22

遺跡の概要

上宿遺跡は、権現遺跡の北西側に接して位置し、弱い段をもって地形的に分離している。標高100~110mで南北250m、東西100m程の比較的狭い範囲の丘陵背の部分に縄文遺物の散布は希薄であるが、弥生～古墳時代初頭を主体とした土師器の散布は濃密で隣接の権現遺跡と連続した状況で認められる。

なお、縄文土器は早期と中期～後期が認められるが、尖頭器も表採されているから、早期も古い段階から先土器時代にも注意を払われたい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	神祖遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	18
所在地	小泉字神祖	時　代	縄文(早・中)・弥生～古墳		地図番号	18

遺跡の概要

神祖遺跡は、木ノ行寺遺跡の北辺に隣接して、中沢川西岸を幅(東西)200m程で延々と(南北)750mにわたって、標高150~185mまでの緩斜面に広く包蔵されている。西辺は大室、三ッ室の2遺跡が隣接していて、地形的な独立景観はなく、それぞれで「三ッ室遺跡群」を提唱されている。遺物の散布は範囲も広く、濃密で、縄文早期、中期土器片を主体に石器類の表採も比較的多い。さらに弥生～古墳時代にかけての土器片、特に土師器、須恵器も目立ち、遺跡内に存在する神祖1～3(4?)号墳の存在からも当該期の集落跡の存在も確かであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	寺内遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１９
所在地	小泉字寺内	時　代	縄文(前・中)･古墳		地図番号	１８

遺跡の概要	寺内遺跡は、富士五山である久遠寺の南側に、久遠寺川と中沢川によって作られる広域な南面緩斜面を全面にわたって占有し、南辺を小泉中村遺跡と接して、地形的には連続したものとなっている。また、両遺跡の間の西端には寺内山ノ神古墳が存在している。範囲は南北、東西とも300m、標高145~160m間で、凹凸のない特徴のない地形のなかに北側部分には縄文前～中期の遺物の散布が、東南部分の久遠寺川沿いには土師器の比較的集中する部分が認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	大室遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	２０
所在地	小泉字大室	時　代	縄文(早･中)･弥生～古墳		地図番号	１８

遺跡の概要	大室遺跡は、中沢川と大沢川に挟まれた広域な南西面する緩斜面に広く展開される「三ッ室遺跡群」の北西端を占め、南辺を三ッ室遺跡、東辺を神祖遺跡と接して、西辺は大沢川を挟んで対峙する峯石遺跡、さらにその向こう側には「前方後方型周溝墓」が発見された丸ヶ谷戸遺跡が存在している。標高165~190m弱、南北500m、東西350m程の範囲の全面に弥生～土師器の散布が認められ、特に集中する部分もある。また、遺跡中央には市指定史跡「大室古墳」も存在してその時期の集落跡の存在も示唆される。縄文遺物の分布は矢ノ下側に中期が、大室側に後期が多いことが注意される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	小泉中村遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	21
所在地	小泉字中村	時　代	縄文（後）·古墳（前）		地図番号	18·22

遺跡の概要	
	小泉中村遺跡は、木ノ行寺遺跡の東隣に中沢川を挟んで位置し、遺跡東辺を区画する久遠寺川とによって作られる広域な緩斜面の標高134~145m間、南北250m、東西250mの範囲をもってなる。遺跡南側のバイパス付近に縄文後期土器片の散布が認められ、北側に行くにしたがい、時期不明ではあるが土師器片の散布が薄いながら認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	木ノ行寺遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	23
所在地	小泉字木ノ行寺	時　代	縄文(中·後)·弥生～古墳		地図番号	18

遺跡の概要	
	木ノ行寺遺跡は、弓沢川下流域左岸に連立する遺跡群のうち、もっとも南側に位置する中沢遺跡の北隣に、東辺を中沢川に区画されて広域に展開されている。その範囲は南北450m、東西300mで標高は130~150mの南西向き緩斜面で、中央部分を県立富士宮東高校建設によって大きく破壊され、その惨劇は当時の考古学関係者を今もなお、嘆かせ、文化財行政の手薄な時期とは言え、今後あってはならない反省を促されている。弥生～土師器の散布が濃密でかなり有力な集落跡の存在は確かで、さらに縄文時代中～後期遺物も東西の河川沿いに散布が認められている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	三ッ室遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	２２
所在地	小泉字三ッ室	時　代	縄文(前)･弥生～古墳		地図番号	１８

遺跡の概要

三ッ室遺跡は、木ノ行寺遺跡の北辺に隣接し、大沢川東岸を神祖遺跡と背中合わせに位置して、南西面した広域な緩斜面を包蔵地とする。北辺には大室遺跡が隣接して、地形の連続性から「三ッ室遺跡群」が提唱されている。昭和63年度分布調査時(注参照)に旧来の分布域外の遠藤行夫氏水田より弥生～古墳初頭の台付甕の出土を知り、遺跡が拡張され、南北450m、東西270m、標高148~168m間の広域な包蔵範囲となった。内容は縄文前期の木島式土器も認められるが中～後期の包蔵も予想され、さらに弥生～土師器、須恵器の散布も認められる時代幅の大きい遺跡として捉えられる。

注・大室遺跡の東側部分と三ッ室遺跡の西側部分をそれぞれ拡張する。拡張する範囲は弥生時代末葉～古墳時代初頭を主体とする遺物の採取ができる地区であるが、現況ではその分布が希薄である。中沢、木ノ行寺、神祖、三ッ室、大室の各遺跡は同一の遺跡群として捉える。中沢川と大沢川に囲まれた標高115～180mを測る広い範囲は、濃淡の差はあるが、ほぼ類似する遺物の採取が認められ有機的な関連をもった遺跡群である可能性が高い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	権現遺跡	○存在　消滅	種　別	集　落	遺跡番号	２４
所在地	小泉字権現	時　代	縄文(中)弥生(後)古墳(初)奈良・平安		地図番号	２２

遺跡の概要

権現遺跡は、富士山より下る台地が潤井川の作る沖積湿地帯にせり出した末端に位置して、標高90~100m付近を南北300m、東西250mで占有している。現在も富士宮市街地に入る交通の要所であるように古墳時代から律令時代にかけての遺物も多く散見され、また、昭和57年に実施された発掘調査では６棟の竪穴住居跡、２棟の掘立柱建物跡をもつ古墳時代初頭集落も確認されるなど、その遺跡内容は無尽蔵といえるかも知れない。なお、この調査で検出された溝状遺構には縄文中期土器片も認められて、時代幅もさらに広がり、地理的に同様な条件をもつ富士市天間沢遺跡に匹敵するような歴代遺跡になる可能性は高い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	石敷遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	２５
所在地	小泉字石敷	時　代	弥生・古墳（前）		地図番号	２２

遺跡の概要

石敷遺跡は、上石敷遺跡を真中にして向田遺跡と両側を馬蹄形のようにして久遠寺川の作る沖積湿地帯を取り囲んで占地している。標高は110m前後で東側を荻間川に接した南北に長い微高地に450m、東西に150mの広い範囲に弥生～土師器片の散布が濃密で、耕作者より土師器甕形土器１個体も提供されている。耕地が水田であるため表採品も限られるが、近隣の遺跡状況からすれば縄文～歴史時代にわたる包蔵の可能性は非常に高いと言えよう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	向田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	２６
所在地	小泉字向田	時　代	古墳（前）		地図番号	２２

遺跡の概要	向田遺跡は、富士根地区の遺跡密集地帯の南西端に位置し、西側を弓沢川が南流して、遺跡の南方で潤井川に合流している。そして、そこで作られる沖積湿地帯を望んで本遺跡より南東に向かって、それぞれの台地末端に遺跡が形成されていく。しかし、本遺跡は昭和40年代の区画整理事業で調査されることなく破壊され、当時の工事請負業者の「焼土がいっぱいあった.壺や甕がざくざく出てきた」という証言しかない。それをまとめると、虚空蔵社古墳の西隣の標高115m付近、南北250m、東西100m程の範囲に古墳時代前期を中心とした集落が営まれていたらしい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	中沢遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	２７
所在地	小泉字中沢	時　代	縄文・古墳・古代		地図番号	18·22

遺跡の概要	中沢遺跡は、弓沢川によって区画される富士根地区遺跡密集地帯の最西部で、弓沢川左岸に形成される遺跡群の最南端にあたり、潤井川との合流地点にもっとも近い、標高120m付近の南北400m、東西200mを範囲としている。向田遺跡と同様に遺跡南半を小泉区画整理事業で破壊され、その際に、縄文、古墳初～後期、奈良時代、さらにそれ以降の土器片も採集されており、権現遺跡から北西にかけてならぶ富士山からの台地末端部の遺跡の隆盛が偲ばれよう。現状は宅地化が進んで、北半にわずかな自然地形が残るようである。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	大室古墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	２８
所在地	小泉字大室矢ノ下	時　代	古墳（後）		地図番号	１８

遺跡の概要

大室古墳は、本市内において最初の学術的調査(墳丘確認調査)が実施された古墳である。その存在は古くから知られ、『静岡県史第二巻』には小泉三室山神社古墳(佐野要吉報)、『富士宮市史上巻』には小泉三室古墳と称され記載されている。

『大室古墳墳丘実測調査報告』(昭和53年)ではそうした名称の混乱から本墳を大室古墳と命名し、字名三ッ室に従い、他古墳とともに三ッ室古墳群を設定している。それによると、「形状は円墳、基底径12～3m、高さ3mを測り墳頂には稲荷が祀られ、露出した天井石は、その段階的使用されている。」とされ、さらに、墳丘北側を佐藤角夫氏宅地造成のため、５分の１程を削取され保存処置の急務が訴えられている。このように本墳周辺は宅地化の波が押し寄せており、危機が叫ばれていたが、昭和54年に至って本墳東側の遠藤敏男氏が住宅新築を開始し、東側部分をも削取され、形状は10数年前と大きな変貌を遂げてしまった。本墳は市内唯一の調査実施古墳であるとともに、別所２号墳とともに残存する古墳のうち最良の古墳であることを理解すれば本墳の保存は急務である。

上記に記すような本墳の重要性の理解、ならびに、埋蔵文化財に対する保護、保存への意識のたかまりをもって、昭和60年３月より市指定史跡となっている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	神祖山ノ神古墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	２９
所在地	小泉字神祖	時　代	古墳（後）		地図番号	１８

遺跡の概要	神祖山ノ神古墳は、昭和48年１月７日に実施された富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、「基底径7~8m、高さ1.5m程の円墳でマウンドの東西裾部は削平されるものの、全体として保存状況は良好(三ッ室古墳群の一つ)、墳頂に山の神を祀る。須恵器片出土。」と記されている。現状は昭和48年当時と変化はなく、東西裾部は畑地開墾等によって削取され南北に長い状況で残存している。須恵器片を出土としてあるが、現在の所有地(者)は不明で時期把握はできない。しかし、本墳の状況を見るかぎりでは盗掘等は受けていないようであり保存状況は最良といえる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	寺内山ノ神古墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	３２
所在地	小泉字寺内	時　代	古墳（後）		地図番号	１８

遺跡の概要	寺内山ノ神古墳の発見は、昭和54年実施の富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査によるもので、発見時の状況は、古墳の南北側を民家の塀によって削取され、民家境に東西に長く残存している。墳頂には山の神が祀られており、石室を構成するであろう石塊が露出している。なお、塀を作るために削取された部分より須恵器片が出土とのことであるが、実存しておらず判断はつかない。残存する部分で検討すると墳丘幅６~７m、高さ１m弱で貧弱な感じを受けるが、本地域が古墳群の密集地域であり、古墳時代集落の存在を考えても古墳として間違いなかろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	神祖２号墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	３０
所在地	小泉字神祖	時　代	古墳（後）		地図番号	１８

遺跡の概要

富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査カード(昭和48年１月７日)によると、「マウンド破壊わずかに痕跡を残すのみであるが主体部は残存、周辺にも直刀、鉄鏃、須恵器などの出土地点があり、古墳群としての存在確実。」と記載されている。現状は宅地際に墳丘を削平されたわずかなマウンドが残存し、その頂部に柿の木が植えられ、その基には家神が祀られている。柿の木の周辺には石室の残存と思える1m弱の扁平礫が数個積まれ古墳の残影を感じさせる。出土遺物には、「直刀、鉄鏃、須恵器等がある。」とされるが、その所在は他古墳と同様に不明である。さらに本墳周辺にも同様の出土遺物があった事実は、前述されるように群集墳の可能性が大であり、周辺の大室、神祖１・３号墳等の存在はそれを裏付ける。この地域は宅地が密集するため、他古墳が存在の確認は認められないが、この地域が三ッ室と称される起因は、単に三つの室が存在していたとするより３という数字を多数の室と理解すれば古墳が密集していたことを物語り、周辺の古墳時代遺跡の密集は充分に多数の古墳を営むだけの生産力を伺うことができる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	神祖３号墳	存在○消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	３１
所在地	小泉字神祖	時　代	古墳（後）		地図番号	１８

遺跡の概要

神祖３号墳の発見は明治時代にさかのぼり、『静岡県史第二巻』によると富士根村神祖古墳として、記載され、明治40年頃発見され、発掘がなされたらしい。どのような発掘であったかは解らないが、計測値等の記載がないことから、それは多分に盗掘的な色彩が強かったであろう。出土遺物には土器、馬具類が記されている。以後、本墳はすでに破壊されていると理解が成されていたが、昭和54年に実施された富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査によると、「平地の畑を遠藤一枝氏が宅地を造成した際に、遺物が発見されたとある。」その遺物は、馬具、直刀であったという。これによれば本墳の石室底部が残存していたことになるが、前述宅地造成によって破壊、消滅された。

本墳周辺には神祖１・２号墳、大室古墳等、多くの古墳が存在しており、本墳を含めて、三ッ室古墳群を形成したと思われ、さらに多くの古墳が存在していたであろうが、文化財行政浸透以前に破壊消滅していたであろうことは推察に及ばない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	天神塚古墳	存在○消滅	種　別	誤認	遺跡番号	３３
所在地	小泉字石敷	時　代			地図番号	２２

遺跡の概要

天神塚古墳は、富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査(昭和54年)によって発見され、丘上に天神社を祀ることから天神塚古墳と命名された。調査カードによると「墳径５~６ｍ、墳丘は崩壊し、石室が露出、南側に虚空蔵社がある。」としている。ところが同年、本墳周辺を区画整理事業が行われ、本墳の確認を行わざるを得ない状況となった。その結果、本墳は積み石塚的様相を呈しており、近世陶器片が出土した。以上から、本墳は古墳ではなくして近世～近代にかけての塚という理解がされた。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	虚空蔵社古墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	３４
所在地	小泉字石敷	時　代	古墳（後）		地図番号	２２

遺跡の概要

虚空蔵社古墳の発見は比較的新しく、昭和50年代前半であった。そのきっかけとなったのは本墳周辺に計画された小泉区画整理事業であった。そうした事業の計画を知った野村氏は周辺を踏査した結果、昭和52年２月に本墳を発見した。さらに、本墳は植松氏(静岡県教育委員会指導主事)等の確認調査によって古墳の確認がなされた。なお、本墳は墳頂に虚空蔵社を祀るため虚空蔵社古墳と命名された。規模は墳径17~8m、高さ２mを測り、形状は円墳であるが、墳丘上部を削平され石室が露出している。墳丘上部には数本の大木が茂るため、一種の異様な感じを受ける。

上記のように、本墳は区画内に残存し保存される結果となったが、現在では周囲を宅地に取り囲まれてしまい、過去の面影は全くない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	箕輪A遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	35
所在地	大岩字箕輪	時　代	縄文(中·後)·弥生～古墳		地図番号	18

遺跡の概要	箕輪A遺跡は、サギ沢川を境にして東側に位置する箕輪B遺跡とともに、その豊富な土器、石器の出土は戦前より知られて、市内滝戸遺跡、富士市天間沢遺跡と並んで「岳南三大遺跡」にあげられている。箕輪A遺跡は西側を下る大沢川に挟まれた南東面する緩斜面と、その北西側を取り巻く弱い山陵部分からなり、前面の緩斜面中央より昭和62年畑耕作時に縄文後期、堀之内I式の竪穴住居跡1棟が検出され、また中期勝坂式土器数個体も得ている。その状況から大集落の存在は充分に予想され、弥生～土師器集落の存在も確実視されている。詳細には標高206~220m間の緩斜面とそこから急に240mまで上がってその頂部の緩斜面を250m程まで緩く上がる舌状丘陵の2面が看取され、それらを合わせて全長(南北)550m、東西300mの広大な分布範囲を誇っている。なお、遺跡中央には岳南考古学会の創始者の一人である故佐野要吉先生の生家が存在している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	箕輪B遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	36
所在地	大岩字箕輪	時　代	縄文(中·後)·弥生～古墳		地図番号	18

遺跡の概要	箕輪B遺跡は、同A遺跡とともに箕輪遺跡として「岳南三大遺跡」に数えられ、その豊富な遺物の出土は他を圧倒している。箕輪集落を馬蹄形に取り囲む山陵中央より流れ出るサギ沢川によって2分される東側の南西面する緩斜面がB遺跡で標高205~235m間、南北550m、東西180mの細長い分布範囲を持つ。弥生～土師器の散布も全面に濃密であるが、むしろ、縄文土器、石器の散布には目を見張るものがあり、祠に石棒が祀られていたりもする。平成2年夏の発掘調査では縄文前期清水の上式土器を有する竪穴住居跡1棟が検出されたり、縄文早期の集石土坑、おとし穴等もあり、中・後期はもとより縄文全般にわたる遺構、遺物が無尽蔵に眠っている可能性は高い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	出水遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	37
所在地	大岩字出水	時　代	縄文(前·中)·古墳		地図番号	18

遺跡の概要

出水遺跡は、出水八幡宮の前面に広がる緩斜面を東側は久遠寺川から西側を中沢川まで、さらに中沢川東岸を南側に延びた占地をなす。出水八幡宮の裏手は急峻な崖地形となって、その南側は絶好の日溜まりの地となっている。範囲は標高180~192m、南北200m、東西400m程の変形な分布を見せる。散布される土器は圧倒的に縄文前期木島式土器が多く、その点重要であり、また、西半には縄文中期土器の分布も見る。時期は不明であるが土師器も八幡宮前の水田付近を中心に分布が認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	丸ヶ谷戸遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	39
所在地	大岩字丸ヶ谷戸	時　代	縄文(中·後)·弥生(末)~古墳(初)		地図番号	18

遺跡の概要

丸ヶ谷戸遺跡は、滝沢川が弓沢川に合流する地点の少し上流から東岸を延々と延びる舌状地形を占有して、その南半は東側を南下する小河川によって完全に幅100m～150mの帯状となり、北半は峯石遺跡と地形を同一にして、北東側に急激に上がる山陵を背に大沢川との間に広域な遺跡圏を構成している。従って、本遺跡自体の範囲は標高160~190mの南北800m、幅(東西)100~150mの地形に応じた細長い状況で把握されているが、その遺跡内容が帯状であることはない。縄文中～後期土器片の一面にわたる濃密な散布を見る一方で、南半の帯状部分に発見された「前方後方型周溝墓」をはじめとする方形周溝墓や、竪穴住居跡群は弥生末～古墳初頭にかけてここに一大勢力の成立があったことを物語り、第一線級の重要遺跡である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	峯石遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	３８
所在地	大岩字峯石	時　代	縄文(前~後)・弥生(後)・古墳(前)		地図番号	１８

遺跡の概要

峯石遺跡は、大沢川中流域の西岸で、滝沢川東岸にへばり付くように占地する丸ヶ谷戸遺跡と背中合わせに位置するもので、地形的には連続した感もある。丸ヶ谷戸に発見された「前方後方型周溝墓」や過去に古墳時代初頭の有段口縁壺形土器の完形品の出土から当該期の集落跡の存在は確かであろうし、また、その墓域の存在や関連も広域な遺跡圏として捉えると、重要な遺跡となろう。縄文遺物は前期、木島式土器の散布が狭い範囲に限られるものの、中～後期の土器片や石器類は広く濃密に散布する。北東側に急激に上がる山陵をもって南西面した標高168~195m間の緩斜面に「注」に記されるような分布域をもっている。

注・平成２年度分布調査結果

小泉、大岩に展開する本市最大級の遺跡密集地の一角を占める峯石遺跡は、縄文時代～古墳時代まで見られる複合遺跡である。本遺跡では、過去に古墳時代初頭の有段口縁壺形完形品(沼津市加藤考古学研究所蔵)が出土したことで有名である。遺跡の範囲は、南北350m、東西350mを測るものであったが今回の調査において、南側部分が南北幅200mにわたって拡張することが確認された。拡張部分は、縄文時代中期～後期が主体であるようである。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	辰野遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	40
所在地	大岩字辰野	時　代	縄文(早・中・後~晩)・弥生(中)・古墳		地図番号	18

遺跡の概要

辰野遺跡は、滝沢川中流域左岸を丸ヶ谷戸遺跡の北側に連続して位置するもので、滝沢川が山間部から沖積緩斜面に出る開口部分に、その山陵が北～東方向へ大きく湾曲し、そこに南西面する「日溜まり」を作って絶好の遺跡占地を示している。範囲は滝沢川と山陵に挟まれた細長い地で、南北500m、東西120mを測り標高は193~210m間である。北側部分の土取り現場より多量の縄文後～晩期の土器や石器、特に石鏃の大量出土には目を見張る。焼土等の確認もあり、竪穴住居跡等生活跡の存在は確実であろうと言われ、また、弥生～土師器片の幅広い散布も確認されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	時田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	41
所在地	大岩字時田	時　代	縄文（中・後）・古墳		地図番号	18

遺跡の概要

時田遺跡は、滝沢川中流域左岸の自然堤防状地形に延々と占地される辰野遺跡と丸ヶ谷戸遺跡が接する対岸に位置する。両遺跡が川岸沿いに包蔵地を広げるのに反して、南北100m、東西250mと川岸から内陸に向かって広がる包蔵をみる。標高は190~195mを測る緩斜面で南辺より前面にむけて若干斜度を増すから、その低地の望む緩い「高台」となるか。遺物は辰野遺跡からの地形的連続関係から縄文中～後期を主体に、晩期もあるかどうか、また時期不明の土師器片の散布も認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	宝田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	42
所在地	大岩字宝田	時　代	縄文(中·後)·古墳·中世		地図番号	18

遺跡の概要

宝田遺跡は、滝沢川が山間部より沖積地に出た開口部の右岸微高地に占地する。標高205~220mの緩斜面を南北300m、東西150mの範囲で占有し、北側には峯ヶ谷戸遺跡が占有する舌状台地が急峻となって迫り、南東側には滝沢川の作る氾濫源が低湿地帯となって、その名の如く「宝田」らしい田園風景を醸し出している。この部分に流れ出た遺物によって、下記の如く、遺跡範囲の移動を見たのであるが、調査結果では河川敷内で遺構は及ばないと判断されている。遺物は縄文土器、石器の散布が濃密に認められ、特に石器が多い。土師器類の確実な採集はないが、「かわらけ」や中世陶器の出土があり、峯ヶ谷戸遺跡に土師器が採集されているから、そちら側に注意が必要であろう。

注・宝田遺跡の東側を滝沢川まで拡張する。南北350m、東西350mの範囲がそれに相当し、標高195~215mを測る。現状は(水田)が多く遺物の散布が認められる。　(昭和63年度遺跡分布調査－その成果と概要－)

注・昭和63年度に遺跡の範囲を拡張した部分を解除する。区画整理事業に伴う試掘調査によると、遺物の包含層は認められるものの遺構の造営が不可能な地形であることが確認されている。

(平成1年度富士宮市遺跡分布調査略報)

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	峰ヶ谷戸遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	43
所在地	大岩字峰ヶ谷戸	時　代	縄文（前·中）·古墳		地図番号	18

遺跡の概要	峰ヶ谷戸遺跡は、滝沢川が富士山から下る山間地を抜けて沖積扇状地に開口する右岸の高台に位置し、舌状となる台地端部から扇状地面(宝田遺跡)への比高は20mで、河川底までは40m弱で深く鋭く抉られ完全な独立丘陵として辰野から宝田遺跡を望んでいる。その上面の緩斜面の標高238~250m間、南北100m、東西200mの範囲に縄文前期～中期、勝坂式土器片が宅地造成工事に伴い採集されている。また、五領期と思われる土師器片も散布は薄いながら認められる。しかし、前述するように宅地造成が遺跡の大半に及んで、その損傷の度合いは非常に厳しいと言える。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	出水東遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	44
所在地	大岩字出水	時　代	古墳（前）		地図番号	18

遺跡の概要	出水東遺跡は、金井坂遺跡が占有する丘陵の西側懐部分に久遠寺川に挟まれて標高180~186m、南北とも100m程の範囲をもって確認されるが、表土層が厚い地点であり、表採品の数量も限られる。おそらく古墳時代初頭を主体とした遺跡と思われるが、久遠寺川を挟んだ西側緩斜面に対峙する出水遺跡や周辺の遺跡の状況を考えると、遺跡の規模の拡大は必至と思われる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	出水西遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	４５
所在地	大岩字出水	時　代	古墳（前）		地図番号	１８

遺跡の概要	
	出水西遺跡は、出水遺跡の西隣に中沢川を挟んで位置し、さらに西側には地形的に連続して神祖遺跡が存在している。比較的平坦面の少ない地形で、中央の背の部分は水田となって表採は比較的困難ではあるが、両端の傾斜地で五領期と思われる土師器片が採集され、神祖遺跡や神祖１号墳との関連が偲ばれる。標高は180～190m辺で、南北に300m、東西100m程の中沢川に沿った蛇行様の包蔵範囲が推定される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	石原遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	４６
所在地	村山字石原	時　代	縄文		地図番号	地点不明

遺跡の概要	
	石原遺跡は、昭和５年（1930）発行の『静岡県史第一巻』に縄文土器を出土して登場以後、まったく、その存在を現さない。字名に従えば石原は松葉遺跡の東端を下る立掘沢を約600m上った対岸の舌状に緩斜面を有するテラス状台地一帯を指す。富士根北部遺跡にありがちな、包含層までの土層堆積が厚いことで表採が容易でないことと、その反面、井戸の掘削時に一括資料を得たりする突発的な発見によるものであろうが、地形条件としては悪くない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	松葉遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	47
所在地	村山字松葉	時　代	縄文（前·中）		地図番号	19

遺跡の概要	松葉遺跡は、サギ沢川谷頭の左岸に位置し、対岸に東谷戸遺跡を見る。東南辺は立堀沢に抉られて、富士山より下る特有の南西方向に向いた細長い丘陵となりその中で背に弱い高まりをもって、その前面に広がる平坦に近い緩斜面が占有されている。その範囲は南北250m、東西150m程で、標高310~313mとほとんど比高がない。遺物は遺跡内の宅造の際、縄文前期諸磯式、中期勝坂式土器や石器も確認されて、その散布も多く認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	東谷戸遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	48
所在地	村山字東谷戸	時　代	縄文（中）·古墳（前）		地図番号	15·19

遺跡の概要	東谷戸遺跡は、箕輪遺跡を取り巻く山陵の頂部平坦面を内陸へ向けて約800m深く入った、いわゆる台地上に位置している。詳細にはすぐ東をサギ沢川が深く抉ぐり、西端も弱い谷地形が食い込んで幅広かった台地が縮まり、また、北東側に弱い高まりが迫り、南端も弱いながらも下って一種のテラス状地形を呈している。標高は303~320mを測るが平坦面に近い部分が多く南北350m、東西150mの範囲の特に東南斜面より多くの縄文中期加曽利E式土器の散布が見られ、また、遺跡内の金森久吉氏宅の井戸掘削の折、やはり多量の縄文土器を見ている。なお、土師器の分布もわずかながら認められる。 注・　昭和48年度植松、野村氏らによる静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カードでは昭和46年(1971)発行の『富士宮市史上巻』に記載されているワラビ平遺跡は本遺跡に改称されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	木伐山遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	49
所在地	村山字木伐山	時　代	縄文（中）		地図番号	地点不明

遺跡の概要

木伐山遺跡は、昭和40年(1965)発行の『静岡県埋蔵文化財地図』に縄文中期、勝坂、加曽利E式土器や石斧、石鏃の出土が記載されるが、使用地図の縮尺が大きいこともあって、地点がはっきりせずにいて、続く昭和48年の県分布調査、昭和54年の市分布調査では地点不明に至っている。このことは「木伐山」という名称が字名に存在せず、地域の俗称であったことによろうが、その地域のなかにはワラビ平、とか東谷戸等の字名にそった既存遺跡が存在しており、おそらく、木伐山公会堂の東側一帯、東谷戸遺跡を指すように思われる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	稲干場遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	50
所在地	村山字稲干場	時　代	縄文（早・中・後）		地図番号	15·18

遺跡の概要

稲干場遺跡は、滝沢川と村山沢川が稲干場地先で100m程に幅を狭め、そこから直角に振れて、南北600m、東西400mの広域な平坦面が作られた場所と、その対岸の南北100m、東西250mを包蔵範囲にしている。南端で標高270m、北端で290mであるから、山間部にあっていかに平坦であるか知れる。詳細には小谷によって3～4個所に地形分類することも出来、それぞれに営まれている時代があろうが、縄文早期～前、中、後期と万遍ない遺物の出土と表採はこの遺跡が予想以上に優勢なものであろうことがわかる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	元村山古墳	存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	51
所在地	村山字元村山？	時　代	古墳？		地図番号	地点不明

遺跡の概要

元村山古墳は、昭和5～11年に発刊された『静岡県史第二巻』に記載されており、その記述に従えば、「地点不明、五鈴鏡を出土、」としてある。本調査は元村山古墳の所在はいかに？を目的とした。まず、県史編さん時に、村山浅間神社宝物殿にて、五鈴鏡を確認したという佐野要吉氏(岳南考古学会)に生前の折、有無を確認したところ、五鈴鏡の出土地点は当時より不明であり、村山浅間神社に所蔵ということで付近より出土したであろうと考えた、ことが知れた。なお、五鈴鏡は戦後紛失し、現在の所在は全く不明であることも確認された。現村山浅間神社宮司鈴木勲氏は古墳、ならびに五鈴鏡については全く知らない、という。木伐山在住の渡辺志村氏は神成にある松葉遺跡内に所在する薬師堂より奉納されたであろうとし、若林淳之氏(静岡学園短大学長)は県西部地域よりもたらされた可能性があろう。というように、その所在については曖昧な点が多く、確かな事実を得るまでには至らなかった。

さらに、ここで考古学的見地より元村山古墳の所在について述べれば、

1．五鈴鏡を出土すべき古墳は、大規模な前～中期古墳（4～5世紀）に多く当地域で確認例はない。

2．古墳は、本来集落跡との関連の上に成り立つものであり、村山浅間神社付近より近隣遺跡まで2km前後の隔たりを考えると古墳成立の可能性は極端に薄い。

3．さらに周辺の地形条件からも古墳の成立しにくい地域である。というように、その所在については疑問が多い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	社領東遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	52
所在地	粟倉字社領	時　代	縄文（中）		地図番号	15

遺跡の概要	社領東遺跡は、社領西遺跡とともにもっとも富士山寄りの遺跡で、村山沢支流によって深く抉られて作られた舌状丘陵の先端部に位置し、その範囲は南北180m東西100mと比較的狭く、その中の遺物の散布もあまり目立たない。時期的には縄文中期が予想されており、標高390~415mの幾分斜度をもつ包蔵地形からキャンプサイト的な性格も伺える。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	社領西遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	53
所在地	粟倉字社領	時　代	縄文（中）		地図番号	15

遺跡の概要	社領西遺跡は、社領東遺跡とともにもっとも富士山寄りの遺跡で、滝沢川が大きく迂回して、そこに支流が抉り込んで独立した高台を作り、その尖端の標高400~410m、南北120m、東西150mの範囲が予想される。遺跡の発見のきっかけは山林を牧草地に改良した結果、縄文中期土器片が確認されたことによるもので、この地域の土層堆積幅の厚さを考えると、遺物の表面への浮上は不可能に近く、近隣に遺跡が眠っている可能性も高く、注意が必要となろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	舞々木1号墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	54
所在地	阿幸地字舞々木	時　代	古　墳		地図番号	18

遺跡の概要

舞々木1号墳は、市内阿幸地在住の渡井かね子様宅の裏に存在する。富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、「形態－円墳か？、遺構－石室？、特徴－露出する大小数個の石の上に石佛(シンノウさん)を祀る。」とされる。

上記のように本墳についての記載は曖昧な状況が多い。さらに本墳の占地は弓沢川を相対して、乏水地帯であり遺跡未発達地域である。従って本墳周辺には遺跡は存在していない。が、行人塚(宮原)古墳、舞々木2号墳等の例からすると、古墳の可能性もあり、若干の地形の盛り上がりを墳丘の残存と認め、露出する大小礫を石室の残存として理解しておきたい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	舞々木2号墳	存在○消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	55
所在地	阿幸地舞々木	時　代	古　墳		地図番号	17

遺跡の概要

舞々木2号墳は、富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査カードによると「舞々木1号墳の西約200m程したところに占地していたが畑地の開墾により消滅」とある。形態は円墳らしく、遺構としては石室が残存していたようであるが、遺物などの記載はない。従って時期把握はなされないが本地域の例からすれば後期古墳に属するものであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	行人塚古墳	存在○消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	56
所在地	宮原字行人塚	時　代	古　墳		地図番号	17

遺跡の概要

行人塚古墳は、『富士宮市史上巻』によれば、戦後、中野國男、植松章八、野村昭光、三氏によって発見された。と記されている。規模は発見当時には墳丘の高さ50～60cm、墳径5~6mの円墳であったというが、その後昭和40年前後に至って、佐藤精機工場建設工事により消滅してしまった。

本墳は、所在地の不明な元村山古墳を除けば、本地域最北端の古墳であるとともに、周辺に遺跡が存在しないという特徴を持つ。もっとも近い遺跡は南へ1Km程した琴平遺跡である。この遺跡は土師器(古墳時代土器)が確認されて、水利を主とした地形占地ではこの遺跡が限界と思える。このような市街地北辺遺跡によって営まれたであろう本墳は、その所在場所に特異性が感じられるが、内容が知れないまま破壊消滅したことは、地域の歴史上非常な損失であったといえよう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	姥穴遺跡	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	57
所在地	人穴	時　代	古　墳		地図番号	4

遺跡の概要

姥穴遺跡は、朝霧高原内に所在する洞穴(姥穴)内部、及び入口付近一帯に古墳時代初頭の生活痕が認められる遺跡で、標高750m、南北300m、東西300m程の三角形状の包蔵範囲が推定されている。富士山裾野に特有の凸凹のない緩斜面の植林地内で、東に500m程すると人穴区荻平集落を見、南西方向に4Km程して田貫湖畔の長者ヶ原A・B遺跡に至る。土師器を出土する遺跡としてはもっとも富士山に近く、標高も高い遺跡である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	桟敷遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	58
所在地	北山字桟敷	時　代	奈良·平安·歴史時代		地図番号	8

遺跡の概要

桟敷遺跡は、辻遺跡の東側300mの地点で、北～東側を馬蹄形に山陵で囲まれた、東西300m、南北200mの範囲を占有し、それはちょうど、標高400mの等高線で形作られている。昭和40年代に発見された遺跡で、土師器、須恵器の広域な散布が確認されており、それに平成3年の調査において、歴史時代遺物も見るから、辻遺跡同様に歴史時代の市内最北部に位置する遺跡として注目される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	白糸の滝遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	59
所在地	原字白糸	時　代	縄文（早・後）		地図番号	8

遺跡の概要

白糸の滝遺跡は、白糸の滝に右岸から「舌」状にせり出した標高480m前後を測る南面緩斜面に南北200m、東西120m程の範囲で確認されるものである。その発見は昭和30年代後半の白糸の滝レストセンター建設工事の際で、駐車場付近よりかなりの量の縄文早期ならびに後期の土器片が採集されたらしいが、その包蔵地内の大半を破壊され、遺物の所在も定かでない。それから昭和61年の分布調査時に南側に接続する小台地上にも縄文早期土器片が表採されて、上記の分布域が把握され、平成3年の調査に至るが、その範囲の変動は認められないものの、遺跡の保存状況は極めて悪い状況下にあると言える。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	白糸佐折遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	６０
所在地	佐折	時　代	縄文（中～後）		地図番号	6

遺跡の概要

白糸佐折遺跡は、昭和６年発行の『静岡県史第二巻』に石鏃の出土が記載され逸早くその存在を知らせるが、その包蔵範囲は昭和48年、同54年と相次ぐ分布調査においても不明でいて、平成３年の調査に至っても遺物を確認することができなかった。しかし、昭和63年11月26日、社会教育課伊藤学芸員の石物調査時に、集落中央で背面に山陵をひかえて南面する標高500mで、東西、南北50m程を測る狭い舌状のテラス面に占地する小祠(通称、薬師堂)の境内に掘られた「イモ穴」の掘削土中に縄文中～後期の土器片２点を確認しているので、この地をキャンプサイト的な小規模遺跡として、上記遺跡を認めておきたい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	田貫湖草原遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	６１
所在地	佐折	時　代	縄文（中）·古墳？		地図番号	地点不明

遺跡の概要

田貫湖草原遺跡が具体的な名称として登場するのはおそらく、昭和48年実施の静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カードからで、そこでは縄文中～(後)？の遺跡として登録され、それがそのまま『富士宮市遺跡地名表』(1979)に掲載されて、勾玉の出土の追加がある。これは『静岡県史第一巻』(1930)の「大宮町(現富士宮市街地)を距る北方約16.5Kmの上井出村猪之頭の狸沼より勾玉の出しことありと伝え」の確認からであろうが、もし、これが湖沼、湖岸からの出土であれば、現在では田貫湖底となり、長者ヶ原Ａ·Ｂ遺跡の範疇である。むしろ、この「草原」を探ると『静岡県史第二巻』(1931)の「白糸村佐折北草原の石鏃、黒曜石破片出土」という記述が発展されているようで、その調査時に、小田急花鳥山脈に向かう進入路の切り通し部分に竪穴状の落ち込みがあったとすれば、地点不明ながら田貫湖南側の草原に縄文遺跡を予想しておくのが妥当に思える。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	猪之頭養鱒場内遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	62
所在地	猪之頭	時　代	縄文		地図番号	3

遺跡の概要	
	猪之頭養鱒場内、つまり、湧水地縁辺より石器が出土しているとして、昭和46年発行の『富士宮市史上巻』、ならびに昭和48年実施の静岡県埋蔵文化財包蔵地調査で遺跡登録されている。おそらく、縄文中～後期が予想されるが、近年の分布調査では、養鱒池の整備（周辺のコンクリート化）の進展や縁辺地域の植林の徹底、また巨木化などが伴い再確認できないでいる。ここでは湧水地を中心に南西側に開けた日溜まりを中心にして南北400m、東西200mの範囲を想定しておき、標高はおよそ710mとなる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	富士丘遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	63
所在地	富士丘	時　代	縄文（中）		地図番号	2

遺跡の概要	
	富士丘遺跡は、朝霧高原の北西部、標高842m付近の緩やかに南面する舌状の丘陵上に南北300m、東西350m程の範囲で位置する。縄文中期の土器片が薄く散布して、その範囲も不明瞭であるが、一帯が新富士火山の火山灰を厚く堆積しておりまた、広域な牧草地帯であって地表が直接に眼にはさらされず、確認には困難が伴い、近年の分布調査では遺物が確認されていない。なお、近隣に遺跡はなく、もっとも近い縄文遺跡は南へ３Kmして猪之頭養鱒場内遺跡、北へ４Kmして根原遺跡がある。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	根原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	64
所在地	根原	時　代	縄文（中）		地図番号	1

遺跡の概要	根原遺跡は、朝霧高原の北端、根原集落の北側台地に包蔵を推定されている。北側から西側に向けて山陵がとりまき、それよりしみでる雨水が小河川を形成する源頭部にあたり、近隣してＡ沢貯水池を見る。そのＡ沢を望む標高960m、南北150m、東西300mの緩い独立丘的な部分を主体にした範囲に、縄文中、後期と思われる土器、石器が採集されているらしいが、猪之頭養鱒場内、富士丘、根原の北部３遺跡に特有の新富士スコリアの堆積幅の厚さと、土地利用の有り方で明確に確認出来ない状況にあることを付記しておく。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	千居遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	65.66
所在地	上条字千居	時　代	先土器・縄文（中）		地図番号	8

遺跡の概要	国指定である千居遺跡は、従来千居遺跡(Ａ)、千居遺跡(Ｂ)の２地点とされて来たが、平成３年の調査により遺物の分布が両地点を含めた広い範囲まで及ぶことが確認され同一のものであることが判明した。今後、千居遺跡(Ａ)、千居遺跡(Ｂ)を含めて千居遺跡と呼称する。しかし、国指定の場所の名称もあり、地名表では生かしておきたい。このことにより、千居遺跡は潤井川西岸にせり出して、それを蛇行させる標高415~390m、南北700m、東西250mの緩やかな丘陵全域が包蔵範囲となり、戦後の開拓で縄文中期土器を多量に出土したと伝えられるＡ遺跡から、昭和40年代中半に発掘調査されたＢ遺跡の20棟余りからなる馬蹄形集落、さらに広域な範囲に施される帯状、環状の配石の存在など、ほぼ単純な時期の遺跡景観がそのまま無尽蔵に包蔵されている可能性は高く、指定個所を含めた遺跡の保存と活用が今後、問題となってこよう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	青蓮の滝遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	67
所在地	上条	時　代	縄文（前）		地図番号	10

遺跡の概要	
	青蓮の滝遺跡は、千居遺跡の南方0.4Kmの地点に展開する遺跡であるが、地目のほとんどが現在山林のため、その範囲および時代などは確定できない現状にある。遺跡の範囲はその北側を中心にして拡大する可能性があり注意を要する。大石寺のゴミ焼却場側に露呈している削平面に焼土跡、および縄文時代前期の土器片がかつて、検出されているようである。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	丸山遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	68
所在地	下条字丸山	時　代	縄文(中･後)･弥生～古墳		地図番号	12

遺跡の概要	
	丸山遺跡は、上野台地南端の東向き緩斜面で標高265~275mの地点に占地しており、南北250m、東西150mの範囲を測る遺跡であったが、平成3年の調査で北側に拡張されることが確認され南北幅が500mとなって南北に長い広範囲の遺跡となった。散布の認められる遺物は、縄文時代中期～後期、弥生時代後期～古墳時代前期の土器片であるが弥生時代後期～古墳時代前期のものが主体を占める。東側の低地を挟んで対面に田尻遺跡が存在する。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	田尻遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	６９
所在地	下条字田尻	時　代	弥生～古墳		地図番号	１２

遺跡の概要	
	上野台地の南端に位置する田尻遺跡は、台地中央に窪む低地に営まれる水田耕作地を望む広い西向き緩斜面で、標高260m前後で、南北300m、東西250mの範囲に弥生時代後期～古墳時代前期の土器を濃密に散布することで知られていたが、平成３年の調査において更に南北へ拡張することが確認され、南北幅が700mとなって広域な遺跡となった。なお、対面には丸山遺跡が存在する。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	青木遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	７０
所在地	青木	時　代	縄文（中）		地図番号	地点不明

遺跡の概要	
	青木遺跡は、昭和５年（1930）発行の『静岡県史第一巻』に登場し、その後、中野國雄氏が昭和29年に著す『吉原周辺の原始時代』に確認されるが、昭和40~50年代と続く県及び、市の分布調査では地点が不明とされる。この原因は青木が大字名であって対象範囲が広く、確定に至るまでの資料の蓄積がなかったためであろうが、以後、昭和60年代～平成にかけた市教委の調査で青木地内の妙善寺境内前に明善谷戸遺跡が新発見されている。青木地内に他の遺跡が確認されないことや、その内容が縄文中期の同一資料も確認されていることから、この遺跡を指していた可能性が高い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	青見遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	71
所在地	大中里	時　代	縄文・古墳		地図番号	地点不明

遺跡の概要

青見遺跡は、青木遺跡同様に昭和5年(1930)発行の『静岡県史第一巻』以来昭和40年の『静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表』まで、その名称を確認できるが、それ以降は不明遺跡として扱われている。やはり青見の地名がその地域名であったため、対象が広範囲で特定できなかったためと思うが、昭和60年代～平成にかけた市教委の調査では、いわゆる青見と称される富士フイルム富士宮工場裏手の羽鮒丘陵東麓に、幅100m強で長さ1.5Kmにわたって遺跡が確認されたのである。字名に従い、南側から根方、牛ヶ沢、石畑の3遺跡が登録されたが、そのうちの牛ヶ沢遺跡にあたる可能性が、俗称オシガ沢という記載からすれば、高いと言えよう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	琴平遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	72
所在地	琴　平	時　代	古　墳		地図番号	17

遺跡の概要

琴平遺跡は、富士山麓末端に特徴の緩やかに南西する斜面上に位置し、それは凸凹のない土地条件のなかで、標高143mを中心に南北150m、東西120mの範囲に土師器の散布が薄く認められている。土師器の時期判定については不明とされるが、地形的にみると、一段下の丘陵には古墳時代前半の遺跡が営まれているのに対し本遺跡のように、それより一段上の広域な緩斜面を占有する遺跡は、若ノ宮遺跡等とともに少し時代が下がった生活圏の広がりが予想されるため、本遺跡もそうした水利を直接的に考慮しなくても良いような条件で営まれていたのであろう。現状では宅地化が進み再確認できない状況にある。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	渋沢遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	73
所在地	淀師字渋沢	時　代	縄文(晩)~弥生(中)・古墳・中~近世		地図番号	16
遺跡の概要	渋沢遺跡は、本地域を代表する弥生時代中期の遺跡で、市立富丘小学校校庭南側を中心に東西120m、南北100mの包蔵で「墓域」が設定されていたが、平成3年の調査で東側に拡張されることが確実となり、また、金之宮神社北側から物見山橋付近まで500×400m程の範囲で須恵器、中～近世陶器の散布が薄いながらも認められた。					

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	淀師遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	74
所在地	淀師	時　代	弥生～古墳		地図番号	地点不明
遺跡の概要	淀師遺跡は、昭和5年発行の『静岡県史第一巻』のなかで淀師一帯に土器の散布が多いことが報じられ、昭和40年発行の『静岡県埋蔵文化財地図』で弥生後～古墳初頭の遺跡として登録され、地点も記されるが、以後の分布調査では確認が不可能であったためか、地点不明で今日に至っている。平成3年の市教委による一連の調査では淀師区内に上中村遺跡が新発見されているが、前述の地図に記される地点はそれより若干南側を指しており、一致をみていない、ともあれ、遺跡内容も同様で同じ遺跡を指している可能性もあるが、淀師の名称自体が大字で、遺跡位置を明確に指せないから、小字名をもっておき、再度の踏査に期待しておきたい。					

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	神賀町遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	75
所在地	大宮町字神賀町	時　代	縄文（中）		地図番号	地点不明

遺跡の概要

神賀町遺跡は、昭和40年発行の『静岡県埋蔵文化財地図』に勝坂式土器を出土する縄文中期遺跡として登場するが、地図が大縮尺なうえに、記される地点も旧町内からズレていたため、以後の分布調査では地点不明とされていた。そこで所在を探ると、貴船町と淀師の間に位置する広域な緩斜面で、渋沢から下る湧水によって小河川も形成されて、あながち遺跡立地に不可能な条件はない。現在では極端な市街化によって探るべき術もないが、そこに本遺跡の予想範囲をおけば、富士火口から同心円状に同様の地形条件と標高をもって北側から、上中村遺跡、本遺跡、琴平遺跡、福知神社遺跡が並ぶことになる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	浅間大社遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	76
所在地	宮町	時　代	縄文(早)·古墳・古代		地図番号	17

遺跡の概要

浅間大社遺跡は、境内より湧き出る湧玉の池を中心に、それを取り巻く傾斜面と南に開ける平坦面(境内)を南北500m、東西200mの広域にわたって、包蔵範囲として、それより出土する多種多彩な遺物は昭和5年発行の『静岡県史第一巻』より知れ、それから東へ向けた現市街地も含めて古代～中世、近世と引き継がれた生活圏であることは間違いない。標高120mの等高線で区画される南西の平坦面からは縄文早期、粕畑式土器をみ、標高130m以上の舌状台地面では時代幅のある土師器片の散布が目を引くが、有孔石鏃の出土もあるなど、いずれにしても稀に見る複合遺跡であることは確かである。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	羽衣町遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	77
所在地	大宮字羽衣町	時　代	弥生(後)・古墳(前)		地図番号	20.21

遺跡の概要

羽衣町遺跡は、富士山裾野の末端と羽鮒星山丘陵の間に潤井川によって細長く形成される沖積湿地帯の北西側縁部を占有する。標高115m、東西120m、南北150m程の包蔵範囲のなかに、弥生後期～古墳時代にかけての壺や甕が出土したらしく、小野眞一著『静岡県東部古代文化総覧』(1957)に詳しいが、工場建設や宅地の進展、さらに、神田川町区画整理事業などで、大半が破壊されている。方辺川を挟んだ西側の自然堤防上には西町、泉の2遺跡が占有して、月の輪遺跡群に並ぶ集中度を見る。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	城山遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	78
所在地	大宮字城山	時　代	古墳(前～後)		地図番号	17

遺跡の概要

城山遺跡は、南西面して緩く下る富士山裾野斜面がその末端を向かえて急激に沖積地(現市街地)に潜り込もうとする肩の部分を占有する。それより南面にはその地形を自然の要害とした大宮城跡が築かれている。標高150m付近を中心として南北250m、東西150mの範囲に土師器の散布をみて、その発見も中野國雄著の『吉原周辺の原始時代』(1954)に記されるなど、古くより知られる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	北神田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	７９
所在地	大宮字城山、元城	時　代	弥生（後）		地図番号	１７

遺跡の概要

北神田遺跡の具体的な名称は、中野國雄著の『吉原周辺の原始時代』(1954)に弥生遺跡として登場して以来、その名称は県、市による地名表にも度々散見されるものの、地点については不明とされることが多く、特定されることがないままでいた。それは北神田という対称の大きい名称と、また、そこが現市街地で再確認できないこともあるが、『静岡県史第一巻』(1930)によれば、浅間大社の東側一帯を指しているから、そのあたりに遺跡の包蔵は確かであり、もしそれならばそこは大宮城遺跡のなかに包括されていることになる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	二ノ宮遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	８０
所在地	大宮字二ノ宮	時　代	古墳（前～後）		地図番号	１７

遺跡の概要

二ノ宮遺跡は、浅間大社を望む高台を占有する遺跡で、福知神社、城山、若ノ宮遺跡と続く、市街地より一段高い地形に占地される遺跡のひとつである。これらの遺跡の特徴は弥生後期より開始され、古墳～律令以降まで続く息の長いことで共通している。一段下の浅間大社遺跡で縄文の営みがあるのに対し、上部には全く無いのは生産体制の違いなのか興味深い占地形態がある。標高140mの等高線に縁取られた南北150m、東西200mの範囲が予想されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	福知神社遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	81
所在地	大宮字福知	時　代	弥生(後)·古墳(前)		地図番号	17

遺跡の概要

福知神社遺跡は、福知神社境内を中心に東西120m、南北100mの範囲で包蔵が予想され、それは南辺で急に下って、一種のテラス状の地形となって中央付近で標高138mを測る。北辺はそのまま緩い斜面で上って行き、変化はなく、東へ200m程すると同様の地形に占地する二ノ宮遺跡が存在する。それらの存在は古くより知られて、中野國雄著の『吉原周辺の原始時代』では弥生後～古墳時代と思われる刷毛目、無文の土器の出土が伝えられている。現状は宅地化が進んで表面からの確認は困難となっている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	西町遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	82
所在地	西町	時　代	弥生(後)·古墳(前)		地図番号	20

遺跡の概要

西町遺跡は、富士山から下る裾野末端が、潤井川低湿地帯に「八つ手」状となってせり出した微高地上に占地して、その先端に位置する泉遺跡とともに潤井川を大きく迂回させ、その背後(南辺)に後背湿地帯を形成させ、その縁辺には羽衣町遺跡が占有する。範囲は東西350m、南北300m程で中央部分で標高120mを測る。内容は弥生後期から古墳、さらには古代～中世以降まで広がる複合遺跡は確かであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	貴船町遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	83
所在地	西町	時　代	弥生(後)･古墳(前)		地図番号	16

遺跡の概要	
	貴船町遺跡の発見は古く、昭和5年『静岡県史第一巻』に弥生時代の遺跡として登場し、旧県地名表(昭和40年)に踏襲されていくが、昭和48年県分布調査時に遺物の発見はなかったため、貴船小学校敷地内に限定した包蔵が想定されて、その名称も「貴船小学校遺跡」に改定されて今日に至っていた。しかしこの間、昭和53年に校庭内より律令時代の甕破片の出土をみたり、昭和63年1月18日、校庭より東へ100m程した地点より、弥生後期～古墳初頭の竪穴住居跡の一辺も確認され範囲の拡張は確実となって、標記遺跡名を再登場させ、標高120m前後の東西300m南北150mの範囲を考えておきたい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	甲石遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	84
所在地	大中里字甲石	時　代	縄文(中・後)･古墳		地図番号	16.20

遺跡の概要	
	甲石遺跡は、潤井川と清水川の合流地点に形成される自然堤防上に占地され、緩やかに北面して下る斜面には上部(南側)に福伝遺跡、西側に大中里坂下遺跡が連続して、本来なら遺跡を区切るほどの地形的な条件の差はない。東側はよしま池の湧水池や潤井川河川敷で湿地帯が形成され、それを望む標高125m、南北200m東西250mの範囲に縄文遺物、ならびに弥生後（？）～古墳初頭遺物の目立った散布が認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	福伝遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	85
所在地	大中里字福伝	時　代	縄文(後)･弥生～古墳		地図番号	20

遺跡の概要

福伝遺跡は、星山丘陵が羽鮒丘陵に接する基の部分にあたる北向きの緩斜面で、西側の高台には別所遺跡が占地して、そこは羽鮒丘陵である。そのうちの標高160mの背の部分から130m付近まで南北450m、東西300m程の範囲に縄文後期と弥生～古墳初頭の遺物の散布が認められ、平成2年の水道タンク建設の際には堀之内式土器に伴うであろう付加条の縄文土器が検出されている。地形的に北側に連続して、大中里坂下、甲石の2遺跡が潤井川河岸まで及んで占有している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	大中里坂下遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	86
所在地	大中里字坂下	時　代	縄文(中･後)･弥生～古墳		地図番号	16.20

遺跡の概要

大中里坂下遺跡は、星山丘陵が羽鮒丘陵に横から接続する基部の北向きの斜面を占有して、西側に羽鮒丘陵の急峻な崖をひかえて、前面(北側)には清水川と潤井川の合流地点で湿地帯が形成されている。範囲は福伝遺跡に接して標高135~126mの清水川河岸まで、南北250m、東西170mを測る。遺物は縄文中・後期と弥生～古墳初頭の土器、石器が採集され、縄文後期では市内では数少ない後半の資料が散見されるらしい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	大中里坂上遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	87
所在地	大中里字坂下	時　代	縄文(中·後·晩)		地図番号	16.20

遺跡の概要

大中里坂上遺跡は、市の西域を下る羽鮒丘陵の麓部分に位置し、それは西側に急峻な山崖をひかえ、「テラス」状にせり出した東面する緩斜面を包蔵地として、東辺は清水川に区画され、それ以東はそれと潤井川の形成する湿地帯となる。範囲は南北450m、東西150mで、標高は中央で135mである。昭和5年発行の『静岡県史第一巻』からも土器、石器の出土が記され、一時期は大中里遺跡と称されていたが、昭和48年実施の静岡県埋蔵文化財包蔵地調査で、本遺跡名に改称され、さらに大中里坂下遺跡が追加登録されるに至った。遺跡の内容は縄文中、後期、さらに晩期をもって希少で、石剣の出土もある。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	南原古墳	存在　消滅	種　別	古墳	遺跡番号	89
所在地	大中里字南原	時　代	古墳		地図番号	地点不明

遺跡の概要

南原古墳の記述は、昭和48年当時に実施された静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カードが唯一の資料である。それによれば地点不詳円墳か？須恵器出土とされる。この記載からすれば、踏査中に口頭より得た資料の可能性が強く、須恵器の出土より古墳と判断したことがうかがわれる。いずれにしても、地点、年代とも不明であるが、南原という地名は、安居山境の富士フィルム社宅付近を指すらしく、その地点を推測するならば、これも地点不明であるが中里古墳、そして安居山の別所古墳群両者の中間地点にあたり、さらに周辺地域には甲石、大中里坂下、別所、上の原遺跡など、古墳時代遺物を出土する遺跡が密集しており周辺環境からすると古墳占地の可能性は充分な地域といえよう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	中里古墳	存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	８８
所在地	大中里	時　代	古墳		地図番号	地点不明

遺跡の概要

中里古墳は、昭和５年発行の『静岡県史第一巻』に記載されている。それによれば、富丘村中里古墳は昭和４年に、故佐野要吉氏(岳南考古学会)によって発掘調査がなされ、その結果、「形状は円墳で、金環、鉄鏃、直刀、馬具、須恵器等の出土があった.」とある。さらに『富士宮市史上巻』によると、佐野氏論文『富士南麓郷土史談』に「昭和初年の調査によって富丘中里古墳が確認できた。」と記述されている。しかし、本墳についての文献による記述はそれにとどまり、現在では出土遺物さえ、その行方は不明であり、県史においても地点(所在地)不明とされ、現在その痕跡は全くない。過去の文献より地点を推測してみれば、県道三沢富士宮線とＪＲ身延線が交差する地点、いわゆる富士フイルム富士宮工場南辺付近であったと思われ、とすれば周辺には古墳時代遺物（土師器）を出土する甲石、大中里坂下遺跡が存在し、さらに羽鮒丘陵を南下すれば安居山に別所古墳群が存在し、古墳立地に不利な条件はない。時期的にも不明な面が多いが、形状が円墳、出土遺物も後期的色彩が強いように感じられ、現在、市内に分布する古墳と同様の年代が与えられれば、後期古墳であったろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	別所遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	９０
所在地	安居山字別所	時　代	縄文(後)･弥生(中･後)･古墳		地図番号	２０

遺跡の概要

別所遺跡は、羽鮒丘陵が星山丘陵と接続する地点に形成される沼久保谷の源頭部近く(分水嶺)に、羽鮒丘陵側からテラス状にせり出した平坦面上を占有し、それは北東側に潤井川湿地帯を望むことにもなる。南北300m、東西200mの範囲の中に標高187mを測る小丘があり、それを標高180mの等高線で囲んでいる。散布は薄いながらも縄文後期の土器片が認められ、弥生中期が地点を狭くしながらも主体的で、弥生後期から古墳初頭遺物の散布は広く濃密で、集落の存在は確実視されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	上ノ原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	９１
所在地	安居山字上ノ原	時　代	縄文(中)･弥生･古墳		地図番号	４９

遺跡の概要

上ノ原遺跡は、星山丘陵の北端の広大な平坦面に位置し、北から西側を沼久保谷の源頭部が深く抉り込んで羽鮒丘陵と地形を区切り、東側を南北に白尾山の小峰が走っている。その縁辺が溝状に少し窪むが、背にあたる中央部分は標高の差はあまりなく、170~173m程で、南北550m、東西500mの範囲の全域に弥生土器、土師器片の濃密な散布が認められ、縄文中期土器片が西側斜面に少量認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	別所１号墳	存在○消滅	種　別	古墳	遺跡番号	９２
所在地	安居山字別所	時　代	古　墳		地図番号	２０

遺跡の概要

別所１号墳は、富士宮市内において唯一の内容が知れた古墳である。しかし、発掘者が未熟であったため、学術的な成果は残っていない、『静岡県史第一巻』『富士宮市史上巻』によれば、「大宮町字別所は、市街地区の西南およそ2.2Kmを隔てた丘陵地に属する部落で、大字安居山に属している。古墳のあった場所は明治６年頃まで樹木が茂っていた原野でその中に円周16.3m程の小石を集めたところがあった。それは昔この地に住した浪士が、出征に際して生還の期し嘆きを思い子孫のために宅地内に石室を作って、貴重品を埋蔵したものと伝えられていた。しかるに明治32年地目変更のためその土地を開墾した時、高さ60cmの石碑が現れた。それには「文政十年正月二十四日建立」と題されて現存している。以後この古墳は、明治35年に至り、遂にその子孫と称する人によって発掘された。石槨は長さ2.73m、高さ1.6m、幅91cm位の広さで、石材は60cm角位のものを使用されていたらしい。現在は畑地となり、奥壁の巨石が残っている。この遺物は莫大のもので刀身三口、金銅製双龍式環頭柄頭、鉄製銀象嵌の鐔、鐙をはじめ、馬具類、玉類、鉄鏃、金環等が出土したという。」と記されている。以上から本墳は全体としては群集墳の域を出るものではないが、それにしても金銅製柄頭や銀象嵌の鐔は一般的にも類例が少なく貴重な遺物であるとともに本墳の被葬者の優れた勢力を知るものである。さらに本墳周辺には多くの古墳が存在していたが、富士身延鉄道（現ＪＲ身延線）工事の行われた際に盛んに発掘(調査ではない)されたとの事である。従って現存する古墳は2～3基程でしかない。本墳の所在地は現在、水田であり、そこには石碑(前述石碑)が建てられている。出土遺物は国立東京博物館に保管され、昭和60年度より開始された県史編さん事業の際に実測され、『静岡県史資料編３考古三』(1992)に掲載される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	別所稲荷塚古墳	○存在　消滅	種　別	古墳	遺跡番号	９３
所在地	安居山字別所	時　代	古　墳		地図番号	２０

遺跡の概要

別所稲荷塚古墳の発見は、『静岡県史第一巻』（昭和５年）編さん以前より、別所１号墳とともに知られ、県史によれば、「別所１号墳の西南73mの地点に円墳があって、頂上に稲荷の小祠が建てられてある。これも既に手を付けられたものらしく、刀身等を出したようである。別所区内には、この外にも多くの古墳があったが、富士身延鉄道(現ＪＲ身延線)工事の行われた頃、盛んに発掘されたとのことである。」と記されている。さらに『富士宮市史上巻』においても、「本古墳は本古墳群中現存する唯一の例で、台地縁辺に立地し、裾の一部を身延線によって破壊されてはいるが、市内の現存古墳中最大のもので、基底径十数メートルを有する優れた古墳である。これもかつて刀身を出したと伝えられているので盗掘を受けてはいようが、今後の保存と調査を望みたい。」としており、本墳の重要性を解いている。

上記のような重要性と保護、保存を目的として、市教委では昭和61年３月に墳丘の実測調査を実施している。その結果は『富士宮市古墳実測調査報告書』(1987)に詳しいが、要約すれば、基底径16～17mの円墳で富士根の大室古墳に優るとも劣らない規模が報告されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	摩利支天塚	○存在　消滅	種　別	墓・祭	遺跡番号	94
所在地	安居山字上ノ原	時　代	江　戸		地図番号	20

遺跡の概要	
	摩利支天塚は、上ノ原遺跡より南へ続く台地が幅を狭めて、舌状となった先端部の標高165mの地点に築かれている。江戸時代に建立された積石塚で、明治35年小松原在住の佐野幸左衛門という人によって建立された。この塚の由来を刻む石碑が立っている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	沼久保坂上遺跡	○存在　消滅	種　別	集　落	遺跡番号	95
所在地	沼久保字坂上	時　代	旧石器·縄文·弥生		地図番号	24

遺跡の概要	
	沼久保坂上遺跡は、富士川に南向きにせり出した舌状の台地で、両端を鋭く切り込まれた独立感のある台地上を南北350m、東西100m程の範囲で占有している。標高は基部が87m、先端で71mを測り、詳細には中央を通る道路を境にして2段の平坦面をもっている。かつて、その道路沿いにガソリンスタンド建設の際、先土器時代のフレイクや、縄文早期土器片等が多量に出土して、有名になり、昭和59年には東電の鉄塔建設工事の事前調査で、その一端を見せた。縄文早期を主体に中期も散見され、時期不明ながら土師器も散布が狭いながら認められる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	谷外遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	96
所在地	沼久保字谷外	時　代	縄文(中·後)·古墳		地図番号	24

遺跡の概要

谷外遺跡は、沼久保谷が富士川に開口する直前に左岸に段丘が大きく抉られて広大な緩斜面が形成されるなかの北側から東側にかけて広範囲に包蔵されるもので、南北600m、東西300mを測る。標高は60m付近から80m強まで差をもつが、斜面を含むこともあって、視覚的にはなだらかである。縄文中、後期の遺物がその斜面側に広く分布していき、それから西半に特に濃密な分布をみる。土師器片の散布も認められるが目立つものではない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	下田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	97
所在地	沼久保字下田	時　代	縄文(中)·古墳(前)		地図番号	24

遺跡の概要

下田遺跡は、沼久保谷が富士川に開口する左岸の段丘上に位置する。その段丘は河口左岸に大きく抉り込まれて、広大な緩斜面が形成され、その中央西側を小河川が南流している。この小河川から西側で弱い山陵を背にした、舌状の小台地に縄文中期、ならびに土師器(時期不明)が採集される。標高は60m強で、南北200m、東西60m程の三角形状の包蔵範囲が推定される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	小松原Ｂ遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	９８
所在地	沼久保字小松原	時　代	縄文（中）		地図番号	２４

遺跡の概要	
	小松原Ｂ遺跡は、小松原Ａ遺跡の占地する、富士川に並行して東から南東に走る細長い丘陵の先端部に位置し、眼下にはすぐ沼久保谷が作る沖積湿地をみる。範囲は南北、東西とも200m程で、その標高は90~60mまで比較的比高をもって斜面もきついなかに、縄文中期土器片の薄い散布があり、規模も大きいとは思えず、「キャンプサイト」的な遺跡か。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	小松原Ａ遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	９９
所在地	沼久保字小松原	時　代	縄文（早･後）		地図番号	２４

遺跡の概要	
	小松原Ａ遺跡は、富士川と沼久保谷に南北縁を浸食されて、東西に細長く延びる河岸段丘上の山側縁部にあたり、それは絶崖にちかく立ち上がって、自然の風防となり、南東面する「懐」の地となっている。懐部で標高125mを測り、東側に徐々に下って115m程の弱い舌状地形を東西230m、南北120mの包蔵範囲が推定されている。ＪＲ身延線寄り（懐部にちかい場所）を昭和62年に発掘調査がされ、縄文早期の遺物が発見され、さらに先端斜面西側では後期の遺物も散見されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	薮塚古墳	存在○消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	１００
所在地	沼久保字船場	時　代	古墳（後）		地図番号	２４

遺跡の概要	
	薮塚古墳の記述は富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査カード（昭和54年）からである。従ってそれ以前の調査（47.8年）では確認されていなかった新発見古墳であるが、発見時にすでに破壊され、内容も知れないまま消滅していた。調査カードでは、「蓬来橋の東辺に位置し、墳丘周辺はすでに削除され、高さ1.5m、墳径8～10mはあったであろう、石室の壁のみ残っていたが、昭和49年８月の宅造により破壊。」とある。この調査時に野村氏の採集した土師器坏２個体は６～７世紀の所産であり、他にサビが付着し原形の知れない鉄片も得ている。このことから本墳は別所古墳群と同時期に造営された後期古墳の可能性はたかく、周辺の沼久保坂上、谷外、下田等古墳時代遺跡の密集は、充分に古墳造営の可能性はあり、他古墳より遠く離れるという特異性はあるが、本墳を古墳と理解するには充分である。破壊以前に発掘調査が実施されなかったことが惜しまれる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	明星山遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１０１
所在地	星山字明星山	時　代	縄文（中）		地図番号	２５

遺跡の概要	
	明星山遺跡は、古潤井川(星山放水路)によって広く深く開析されて、羽鮒丘陵と星山丘陵に分断された星山丘陵側の肩部に位置する。その沖積低地よりの比高は100m以上を測り、断崖絶壁上で、弱いマウンド(標高172.8m)を中心に南北150m東西130mの範囲が想定されるが、遺物の散布は極めて少ない。その内容も縄文中期らしいことが知れるだけで、「キャンプサイト」的な性格が予想されるが、原野で土壌の動きも少なく不明な部分が多すぎる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	坊地上遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１０２
所在地	星山字坊地	時　代	縄文(早･中)･弥生～古墳		地図番号	２１

遺跡の概要	
	坊地上遺跡は、黒田向林遺跡の立地する丘陵が下がって、潤井川湿地帯から古潤井川(現星山放水路)に大きくせり出して迂回させる舌状の広い台地先端部に坊地下、坊地南の２遺跡を従えて坊地遺跡群を形成する。標高122~144m間の北面する緩斜面に南北350m、東西250mの広い範囲に遺物の散布をみて、最上部から傾斜地にかけて縄文中期、勝坂式土器を主体に、それより下面にかけては弥生～古墳初頭土器片を主体にして、縄文早期土器片も散見される。遺跡上部に縄文早期の黒田向林遺跡、下部の斜面上には塚本古墳から南部谷戸古墳群が見られる等、遺跡内容は表採資料より幅を持つことは充分に予想される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	倭文神社遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１０３
所在地	星山倭文神社境内	時　代	縄文(早)･古墳(前)		地図番号	２１

遺跡の概要	
	倭文神社遺跡は、月の輪遺跡群や坊地遺跡群が望む古潤井川湿地帯（現星山放水路）を南へ500m程下がった、やはり湿地帯に右岸からせり出した小規模な舌状台地上に占地する。西側には急峻な山崖がせまる標高97m、南東80m、東西90mの狭い範囲に縄文早期土器が確認されているらしい。背後に壁をひかえた狭いテラスを生活の場とすることは、本地域の縄文早期遺跡に特徴であるから（小松原Ａ、黒田向林遺跡等）、同様の遺跡の存在は充分に予想される。また、月の輪遺跡群に近い諸条件から、土師器片も散見されるが、同神社が平安時代の駿河国富士郡式内三社のひとつでもあるため、その関係(時代)の土師器(かわらけ等)も含まれているかも知れない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	野中中村遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１０４
所在地	黒田字中村	時　代	縄文(中)・古墳(前)		地図番号	２１

遺跡の概要

野中中村遺跡は、潤井川湿地帯に面する星山丘陵の北辺の北向き緩斜面に位置するもので、その標高は132~122mで100m程行ったところから斜面を増して沖積地に沈む。範囲は南北250m、東西300mが予想されるが、宅地化の進展で確認できる範囲が限られるため、不明な部分も多い。確認される遺物は縄文中期土器片と五領式と思われる土師器片であるが、周辺の遺跡の状況を考えるともう少し時期幅も広がる可能性がたかい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	泉遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１０５
所在地	黒田字泉	時　代	縄文(後)・弥生(後)・古墳~平安		地図番号	２０

遺跡の概要

泉遺跡は、富士山より南西方向に「八つ手」状に下る裾野末端部が、羽鮒、星山丘陵にもっともせり出して「ダム」状に潤井川をせき止めた「堤防」状の微高地に占地する。それは潤井川を大きく迂回させた内部の東西、南北とも250mを測る円形の微高地となり、その頂部で標高125.3mである。縄文時代後期、弥生時代後期、古墳～平安時代の幅広い遺物の包蔵があり、昭和59年、63年の調査では古墳初頭から律令時代にかけての集落跡が確認されている。なお、昭和63年の調査では西町遺跡として実施されているが、その後の検討で泉遺跡と連続するものと判断され、西町遺跡は、方辺川以東とされている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	南部谷戸遺跡	○存在　消滅	種　別	集・墓	遺跡番号	１０６
所在地	黒田字南部谷戸	時　代	旧石器・縄文・古墳		地図番号	２１

遺跡の概要

南部谷戸遺跡は、月の輪遺跡群の北西の一画を占め、潤井川湿地帯に緩やかに北面する縁部にあたり、標高は110~115m、範囲は塚本古墳の占地する丘陵の下端から東西150~200m、南北400mと細長い包蔵をみる。遺跡北西隅を昭和45～47年に星山放水路建設に伴う発掘調査が実施され、古墳時代初頭の竪穴住居跡12棟、方形周溝墓４基が検出されている。そして、その溝内から有舌尖頭器が検出され、縄文早、前、中期の包蔵も知れている。また、塚本古墳から坊地下遺跡までの斜面下端には南部谷戸古墳群が占地していたらしいが、明治以後の開墾及び星山放水路の建設、宅地の造成等により破壊消滅しているらしい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	月の輪平遺跡	存在○消滅	種　別	集　落	遺跡番号	１０７
所在地	星山字月の輪	時　代	旧石器・縄文・古墳		地図番号	２１

遺跡の概要

月の輪平遺跡は、月の輪遺跡群の南西側で、古潤井川(星山放水路)に「舌」状となって大きくせり出す丘陵の上面、標高125m、南北130m、東西120mの範囲を占有するもので、昭和44～47年に実施された星山放水路建設に伴う発掘調査で86棟の竪穴住居跡と２棟？の高床倉庫が、続く昭和56年には砂利採集に伴う発掘調査で31棟の竪穴住居跡が検出されて、117棟から成る古墳時代初頭の、１集落の全容が明らかとなった。それによれば「5～6棟から成る数グループが5～6期の変遷をしている様子が伺える。」とされ、また、地域の土器編年にも資料を上積みするなど、古墳時代研究に果たした功績は大きい。この発掘調査が当市の本格的な発掘調査の先駆けとなったのであるが、その反面、当市最初の発掘調査による消滅遺跡ともなったのである。なお、有舌尖頭器が竪穴住居の埋土から、さらに縄文早期、中期（？）土器片も認められ、南部谷戸遺跡同様の内容が知れている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	滝戸遺跡	○存在　消滅	種　別	集・祭	遺跡番号	108
所在地	黒田字滝戸	時　代	縄文(早~後)・弥生～古墳		地図番号	20

遺跡の概要	滝戸遺跡は、市の南西域を走る羽鮒、星山丘陵が、その接点で「く」の字状に屈曲するため、自ずから潤井川の流路が曲がるその場所に「舌」状となってせり出して「堤防」状となる台地上に占地する。そのため対岸の泉遺跡との間は「樋」状の急流となって「滝戸渓谷」として景勝の地ともなっていた（昭和57年河川改修工事にによって消滅)。その北向きの南北350m、東西200m、中央付近で標高130mの「舌」状台地の全面に遺跡は包蔵され、その豊富な遺物の出土は昭和５年発行の『静岡県史第一巻』にも紹介され、さらに戦後の校舎建設時の大量の遺物の出土は語り草となっている。その後、昭和52年より始めた校舎の改築によって数次にわたって発掘調査が実施され、縄文早期から弥生～古墳と続く集落跡、墓域跡などが徐々に明らかになっている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	野中向原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	109
所在地	黒田字向原	時　代	縄文(中・後)・弥生～古墳		地図番号	20

遺跡の概要	野中向原遺跡は、星山丘陵の北辺にそびえる白尾山を背にした北向きの緩斜面を包蔵地として、前面はすぐ潤井川湿地帯で、北隣には滝戸遺跡がある。地形的には独立感のない斜面を標高160~120m程まで、南北、東西とも350m程の範囲が予想されている。縄文中期～後期遺物の主体が山寄りにあり、他は全面に弥生～土師器の散布が濃密に認められる。市指定有形文化財考古資料「三連Ｓ字状口縁甕形土器」（昭和55年１月11日）は遺跡中央付近より出土が伝えられるが、一度も調査の手が入らず不明のままでいて、また、小規模な開発が相次ぎ危機が叫ばれている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	スギナクボ遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	110
所在地	黒田字杉ノ窪	時　代	縄文（中）		地図番号	地点不明

遺跡の概要

スギナクボ遺跡は、『静岡県史第一巻』(1930)に縄文時代の遺跡として登場するが、昭和40年代に至る分布調査では地名不明とされる。黒田に存在したことは知れているから、字名を探ると杉ノ窪が浮かび、富士宮ゴルフ場東側の広域な台地を指す。ゴルフ場建設が文化財保護行政の浸透以前であったこともあり、いまその台地を確認仕様もないが、周囲を取り巻く通路の切り通し部分に焼土跡や、落とし穴状落ち込み、または住宅地内より石斧が出土したりする事実もあり、遺跡の可能性の高い地域とも言える。杉ノ窪の地は眼下に富士川に注ぐ小河川の源頭部が形成され、水利を得て立地条件は最良である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	五反田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	111
所在地	黒田字五反田	時　代	縄文(中)･弥生～古墳		地図番号	21

遺跡の概要

五反田遺跡は、月の輪遺跡群の北東辺に位置し、南部谷戸遺跡と地形的に連続して、緩やかに北面しながら潤井川湿地帯の縁部にまで及ぶ。標高は115~110mで南北250m、東西200mの範囲に縄文中期土器の狭い散布が認められるが、弥生～土師器は散布も広く濃密で、内容も南部谷戸遺跡をはじめとする月の輪遺跡群に準じたものとなろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	月の輪上遺跡	○存在　消滅	種　別	散・集	遺跡番号	112
所在地	星山字月の輪	時　代	縄文・弥生・古墳		地図番号	21

遺跡の概要	月の輪上遺跡は、月の輪遺跡群の中央から南側一帯を占め、同群を形作る主要遺跡で、丘陵の上部平坦面を全面に南北700m、東西200mにわたって包蔵範囲とし、北半分に弥生～古墳時代、南半分に縄文時代を主体とした分布が認められる。標高は南端部が高く130mで、それから北側に緩やかに傾斜していき北端部では115mとなる。縄文時代の包蔵は早、前、中期が認められて、同群一円のあり方に同調するが、未だかつて遺構の存在を確認することなく、その状況は不明にちかい。弥生後期～古墳時代初頭の遺構については昭和 52.55.56.62.63.平成元年と度重なる発掘調査で、弥生時代後期の環濠集落の存在が明らかになり、それ以後、古墳時代初頭までかなり大規模で集落が継続され、また、中央にそびえる小峰には方形周溝墓群の存在も確認されるなど、貴重な資料が未曾有に包蔵される最優秀遺跡である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	奥山地遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	113
所在地	黒田字奥山地	時　代	縄文(早・前)・弥生～古墳		地図番号	21

遺跡の概要	奥山地遺跡は、月の輪上遺跡の南東側に谷を挟んで対峙しており、標高145~120mまで北向きに緩やかに下る斜面に、南北300m、東西200mの範囲で包蔵される。東側へは同様の地形条件で延びて断絶感はないが、北側は徐々に傾斜を強めて、地形的な独立感はする。分布状況は上下2面からなっていて、上部(南側山寄り)の斜面の比較的きつい側に縄文早期を主体とした分布が、下面に向けて若干の縄文前期を含みながら、弥生～土師器を主体とした分布が認められる。昭和40年代後半に創価学会によって中央部分を植林されたため、遺跡破壊が著しいが、それで出土した縄文早期の資料からすると、市内でも有数の遺跡であることはほぼ間違いない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	田中遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	114
所在地	黒田字田中	時　代	弥生（後）		地図番号	21

遺跡の概要	
	田中遺跡は、潤井川湿地帯内の微高地上(標高109m前後)に占地する。詳細には富士山側からの斜面の延長が弱いながらも湿地帯内に延びた先端部で、範囲は南北130m、東西160mと狭い。その中の宅造によって弥生後期土器が多量に出土したらしいが、その後の宅造の進展によって消滅の危険性も叫ばれている。現状ではその資料も明確ではないが、おそらく泉遺跡などに準じたもので、対岸の月の輪遺跡群とは内容に差をもとう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	坊地下遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	115
所在地	星山字坊地	時　代	古墳（前）		地図番号	21

遺跡の概要	
	坊地下遺跡は、坊地上遺跡の東端に一段下りながら隣接して、古潤井川(現星山放水路)にもっとも舌状となってせり出した部分で、標高110m付近の南北130m、東西80mの狭い範囲ではあるが、その有り方は対岸の月の輪平遺跡に似て、古墳初頭を主体とした集落の存在は表採される土器の量と開発時に確認された焼土によって充分に予想されたが、現在では先端が星山放水路によって削取され、その基部は宅地造成されて完全に消滅している、本市における弥生～古墳への変遷過程のなかで、月の輪遺跡群とともにその実体が探れる遺跡群であるだけに調査のないまま消滅したのは残念である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	坊地南遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	116
所在地	星山字坊地	時　代	古墳（前）		地図番号	21

遺跡の概要	
	坊地南遺跡は、坊地上遺跡の占有する台地から東側斜面を急激に20m程下った個所から、南北120m、東西70m程の完全な「舌」状に古潤井川(現星山放水路)にせり出した平坦面(標高125m)を範囲とするもので、その北側には一段下って坊地下遺跡が同様の地形条件で隣接している。表採される遺物は古墳時代初頭の土師器片が主体となって対岸の月の輪平遺跡に類似するものであろう。そして、平成2年に実施した確認調査によれば、舌状台地全面に月の輪平遺跡に匹敵すべき竪穴住居跡群の黒色土の落ち込みが確認されて、最良の保存状況が知られている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	月の輪下遺跡	○存在　消滅	種　別	集　落	遺跡番号	117
所在地	星山字月の輪	時　代	古墳（前）		地図番号	21

遺跡の概要	
	月の輪下遺跡は、月の輪遺跡群のうちもっとも低面に占地する遺跡で、古潤井川(現星山放水路)左岸の河岸段丘上に東西60m、南北150mの範囲をもつ。標高は110m前後で、周囲を湿地帯で囲まれる。遺跡の大半は昭和45～47年の星山放水路建設に伴う事前調査で発掘調査が実施され、山沿いに若干の包蔵地が残存するだけとなっている。調査では古墳時代初頭の竪穴住居4棟、円形土壙、集石遺構等が検出されている。なお、この竪穴住居の柱穴は6本に限定されていて特異で、集石、焼土跡の有り方等から祭祀的な位置付けも予想されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	塚本古墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	１１８
所在地	黒田字実手田	時　代	古　墳		地図番号	２１

遺跡の概要

塚本古墳は、『富士宮市史上巻』によると、戦後、中野國雄、植松章八、野村昭光、三氏によって発見されたとし、昭和48年１月に実施した富士宮市包蔵地調査カードでは、「塩川近氏宅裏山にあってマウンド周辺は削除されてすでに原形をとどめていない。稲荷を祀る。」とある。

上記のように本墳は墳丘裾部を削除され、積石によって保たれている。現状での計測値は残存幅5～6m、高さ1.5～2m程である。積石は周辺より採収したものであるならば、裾石等の残存か、形状は円墳である。遺物の出土は現在まで確認されていない。とすると保存は良好である可能性が強い。

本墳周辺には古墳が多く密集し、星山谷の対岸には南部谷戸古墳群、月の輪法印塚古墳などが存在するが、本墳側には現在本墳以外に確認例は無い。しかし、古墳時代遺跡が野中中村、坊地等と密集しており、本墳の存在に違和感はない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	王藤内の塚	存在○消滅	種　別	墓　地	遺跡番号	１２０
所在地	星山字月の輪	時　代	近　世		地図番号	２１

遺跡の概要

墓跡で、星山放水路の建設に伴い、昭和47年に発掘調査を実施している。王藤内とは曽我兄弟の仇討ちの際、巻き添えにあって殺害されたとされる人物で、その墓地には標識として白椿が植えられたという伝承から、その場所の地主によって代々、供養がされてきた。塚は径4.5m程の円形盛土がなされ、その下部には敷石に覆われて４基の方形土壙が穿たれていた。しかし、それからは人骨、寛永通宝等の遺物を得るが、中世に下る遺物は確認されず、また、石碑の寛文、寛永の銘は江戸時代の建立を示しており、近世塚であろうとされる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	月の輪法印塚古墳	存在○消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	１１９
所在地	星山字月の輪	時　代	古　墳		地図番号	２１

遺跡の概要

月の輪法印塚古墳が、文献に登場するのは佐野要吉氏(岳南考古学会)著『富士南麓郷土史談』ならびに昭和５年発刊の『静岡県史第一巻』である。県史によれば「黒田区は市街の南1.25Kmを隔て潤井川の右岸にある。その小学校内に小円墳が２基存すれども、未発掘らしい。」と記載されている。以後、本墳は発掘調査が実施されること無く、黒田小学校校庭造成工事により破壊消滅したらしい。従って現在地点を把握すべき資料は皆無であり、古墳の内容も定かでない。本墳が所在したであろう黒田小学校校庭は月の輪上遺跡内に位置している。月の輪上遺跡は昭和45～47年に発掘調査された月の輪平遺跡の延長にあたり、昭和52年に一部ではあるが発掘調査が実施されている。それによれば弥生時代末期～古墳時代初頭の住居跡が４棟検出され、それが本墳より若干距離の隔たりと時間幅があるにしても、本墳周辺に当該期の集落跡の存在は充分に肯定されよう。さらに、前面には南部谷戸遺跡、五反田遺跡等、古墳時代集落と推測される遺跡群が密集しており、黒田小学校校庭に古墳が存在することに違和はなく、過去の資料に従い小円墳が２基存在していた事を認めてもよかろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	上高原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１２１
所在地	山本字高原	時　代	縄文（中）		地図番号	２１

遺跡の概要

上高原遺跡は、「高原」と称される星山丘陵の延長の、幅のひろい広大の丘陵の中央部に位置して、沖積地帯より遠く奥まった分水嶺上にある特異の遺跡である。詳細には東西に延びる丘陵も南北に小谷が200~400mおき位に開析されておりその源頭部にあたり、東辺が小谷によって地形を止切らしている。標高130m前後で緩やかに北面し、西北側から見ると独立感のない東西120m、南北150mの範囲に縄文中期土器片が薄く狭い範囲で確認されるが、茶畑が多く範囲を明確にするには条件が弱い。なお、時期不明の土師器も散見されるらしい。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	出口遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１２２
所在地	貫戸字出口	時　代	縄文（中）·古墳（前）		地図番号	２５

遺跡の概要

出口遺跡は、市の南西側を東西に走る星山丘陵が、細かくは南北に無数の小谷が刻まれるなかの奥深い段丘上に位置する。それは星山谷に次ぐ規模の貫戸谷に左岸から大きくせり出して、舌状を呈するもので、その先端の南北160m、東西130mの範囲に包蔵が認められ、標高は122m前後である。比高10m程で低面に至り、中央を小河川が南流する地形条件を備えている。縄文中期遺物が遺跡の西側を走る道路沿いに散布が濃密で目立つ。また、土師器(初頭？)片も確認される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	初田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１２３
所在地	貫戸字初田	時　代	弥生（中）		地図番号	２５

遺跡の概要	
	初田遺跡は、大小の小谷に開析される星山丘陵の、星山谷に次ぐ規模をもつ貫戸谷が富士川に開口する細長い左岸の段丘上を主体にして谷底にまで及ぶ南北350m、東西70mの範囲で包蔵が推定される。段丘上の標高は45～50m程で、谷底までは4～6m程で、あまり地形的な差は見いだせない。若干量の土器片の採集もあるが時期は不明で、かつて環状石斧の破片を出土したとして、弥生中期頃の時代設定がされている。また、縄文早期の遺跡である可能性も指摘されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	光徳坊遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１２４
所在地	山本字光徳坊	時　代	縄文(早)･弥生～古墳		地図番号	２６

遺跡の概要	
	光徳坊遺跡は、星山丘陵の南東端部に形成される規模の大きい開析谷を全面にわたって包蔵範囲とする。前面の潤井川と富士川が合流して展開される広大な沖積湿地帯を比高50mで望む、南北700m、東西300mの範囲の扇状地内（標高60~80m）に、弥生末～古墳初頭、さらに古墳中期にまで至る豊富な散布がみられ、前面の富士市滝戸原古墳群との関連も偲ばれる。他に縄文早期、茅山式土器の採集もある。なお、本遺跡の大半は富士市域に存在し、富士宮市分は窪地の東側斜面を幅30～50m程で、長さ500mにわたる細長い範囲である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	高原愛宿山遺跡	存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１２５
所在地	山本字高原	時　代	縄文（中）		地図番号	地点不明

遺跡の概要

高原愛宿山遺跡が具体的な遺跡名称として登場するのは、昭和48年に実施された静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カードで、そこで地点不明とされて以来、度重なる分布調査でもその実態が把握されないでいる。この原因は愛宿山の存在が知れないことによるが、最終的な手段として、それに似た語呂を探ると、愛宕山という名称が『静岡県史第一巻』(1930)に散見できる。それに従えば「なほ、同区(野中区を指す)のスギナクボ、及び愛宕山中腹にも土器や石鏃が散布している。」とある。さらにそれを参照して小野眞一著による『静岡県東部古代文化総覧』(1957)では「野中部落背後の丘陵斜面より勝坂式土器や石鏃が散布している。」とより詳しく野中に所在する愛宕山遺跡の説明が成されている。この記述に従えば、その位置は現在の野中向原遺跡の西端の斜面から富士宮ゴルフ場クラブハウス付近を指し、それから南側に回り込んだ地点がスギナクボであるから県史における記載の仕方には納得される。ところが表記の遺跡名に化したのはおそらく、中野國雄著による『吉原週辺の原始時代第２報』(1954)によるであろうことが、その遺跡地名表から予想されるのである。そこには愛宿山と高原が並んで記され、しかもその途中の罫線が途切れて、あたかも同一の遺跡のような印象を与えており地理的な近隣関係の並列が偶発的な出来事によって、上記を生んだものと思われる。地名を考えるにも「愛宕」が一般的で「愛宿」は誤植と考えるほうが妥当であろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	上石敷遺跡	存在○消滅	種　別	集　落	遺跡番号	１２６
所在地	小泉字石敷	時　代	旧石器･縄文･古墳		地図番号	２２

遺跡の概要	
	上石敷遺跡は、昭和56年６月､西小泉区画整理事業の途中で発見された遺跡で、既に遺跡中央付近は破壊されていたが、その踏査で有舌尖頭器が採集されたり、残存部分で縄文中期、古墳初頭～古墳後期の集落跡や、縄文早、中期の配石跡が確認されるなど、市内でも有数の歴代遺跡であることが知れた。占地は向田遺跡と久遠寺沢川を挟んで対峙する標高120m付近で、南北150m、東西100m程の微高地が遺跡範囲として想定され、前方には虚空蔵社古墳が位置している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	黒田向林遺跡	○存在　消滅	種　別	集　落	遺跡番号	１２８
所在地	黒田字向林	時　代	縄文（早）		地図番号	２１

遺跡の概要	
	黒田向林遺跡は、昭和60年１月造成工事の事前踏査の際に発見された遺跡で、星山丘陵の内陸深く、もはや分水嶺に近い標高155m付近で小渓谷の右岸の東面する緩斜面の極狭い範囲（南北100m、東西50m）に包蔵が予想され、その内の400m²が対象となった本調査では縄文早期後半の沈線文系土器群と押型文系土器群が相まって発見され、縄文早期遺跡の背後に壁をもった極狭いテラス状の平坦面に生活を営む、ある一種のあり方が証明された。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	大宮城跡	存在○消滅	種　別	城　跡	遺跡番号	１２７
所在地	大宮字城山、元城	時　代	室　町		地図番号	１７

遺跡の概要

大宮城は、静岡県教育委員会『静岡県の中世城館跡』(1981)によると「大宮城跡の築城年代などは定かでないが、『駿国雑誌』などによれば、在地勢力であった富士浅間宮の富士大宮司の築城とみられ、後に今川氏に従ったが、今川氏の滅亡した永録12年(1569)から武田氏に属するようになったわけであるが、しかし、天正10年(1582)の織田、徳川軍の甲州に進出するに及んで焼失したという。」とある。その位置は浅間大社東側の小高い丘陵末端の肩部（通称城山）を一ノ曲輪（近世城郭でいう本丸）とし、そこから急激に下った地を神田曲輪として、自然の要害を利用した連郭式の城で、昭和59年に実施された大宮小学校体育館建設に伴う発掘調査では倉庫跡など、神田曲輪の一部が調査された。それによれば12世紀頃から、まず、軍事的拠点よりは生活の場として営みが開始され有事の際の一ノ曲輪の存在が伺えた。また、神田曲輪跡一帯の下層には『静岡県史第一巻』（1930）にも知られるように弥生～土師器、須恵器の万遍のない包蔵が認められ、それを北神田遺跡として呼称して、本遺跡に包括している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	長者ヶ原遺跡	○存在　消滅	種　別	散・集	遺跡番号	129·130
所在地	猪之頭字長者ヶ原	時　代	縄文・古墳(初)		地図番号	5

遺跡の概要

長者ヶ原遺跡は、昭和61年に実施された分布調査によって発見された新遺跡で、田貫湖南側の小島、及び、東側の半島先端に土師器片を得て、前者がＡ遺跡、後者がＢ遺跡と命名された。そのきっかけは護岸工事中であった田貫湖の減水によるものであるが、その際、湖底より出現した竪穴住居群のうち、２棟が発掘調査され、翌62年にはサイクリング道路建設の事前調査で溝状遺構、陥し穴等が確認されている。また、その時に石鏃が、昭和64年には凹み石が範囲の北辺より表採され、小範囲の縄文時代の分布も認められよう。なお、発見当初に設定されたＡＢ両遺跡は地形的景観及び時代的にも積極的に分割する根拠に欠け、平成３年の調査において標高660m前後で、南北600m、東西350m程の湖底中央に向かう西向き緩斜面を本遺跡の範囲とし、Ａ、Ｂは大略的な地点別の呼称としておくことにした。また、昭和５年発行『静岡県史第一巻』で田貫湖草原遺跡、土器、勾玉の出土の記載があるが、これが、本遺跡を指すかは判断されないが、とにかくかなりの勢力が弥生末から古墳初頭にかけて築かれていたことは間違いなく、当地方における当該期の隆盛が偲ばれる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	精進川神田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	131
所在地	精進川字神田	時　代	縄文（中）		地図番号	9

遺跡の概要	
	精進川神田遺跡は、芝川左岸に展開する標高290~300m程の舌状の河岸段丘の先端部に位置する。遺跡の占地する地点は、南側に向かって徐々に傾斜する地形を示し、その周辺より一段高い台地を形成している。従来は、非常に狭い範囲で遺跡が理解されていたが、平成3年の調査で、南北350m、東西200mを測る広範囲のものであることが確認された。遺物は縄文時代中期のものが主体で、本遺跡より北東2.5Kmに位置する千居遺跡との関連が考えられ注目される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	明善谷戸遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	132
所在地	青木字明善谷戸	時　代	縄文（早～中）		地図番号	13

遺跡の概要	
	青木の明善寺の北側に広がる明善谷戸遺跡は、羽鮒丘陵の根方部分に位置し、標高195m、南北200m、東西100mの範囲を測る。現在、本遺跡内の地目は水田、宅地が多く、遺物の分布が希薄でその時代および、性格などの詳細は不明である。また、本遺跡の周辺に当該期の遺跡が存在しない点も注意を要する。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	東岳前遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	133
所在地	大中里字東岳前	時　代	縄文·弥生(後)~古墳(前)		地図番号	13.16

遺跡の概要	
	東岳前遺跡は、市西部を南北に走る羽鮒丘陵の東面する根方部に潤井川の湿地帯を望んで形成される遺跡のひとつで、石畑遺跡の北方600mの標高170m、南北150m、東西120mの範囲に包蔵が認められるものである。弥生～土師器の破片の薄い散布がみられるが、山麓変換部分より出土したといわれる「定角式磨製石斧」を遺跡内の牧場主が保有し、また、山麓斜面に存在する「テラス」様平坦地において石鏃の出土が伝えられるなど、遺跡としては特異な部類に属する。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	石畑遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	134
所在地	大中里字石畑	時　代	弥生(後)~古墳(前)·中~近世		地図番号	16

遺跡の概要	
	石畑遺跡は、牛ヶ沢遺跡の北側に300m程で並ぶ内容も同様の古墳時代の遺跡で、やはり昭和60～61年の分布調査で発見されたものであるが、平成3年の調査では先照寺山門付近から墓地、畑へと南側に広がることが確認され、牛ヶ沢遺跡と接触するまで南北300m、東西100mの範囲となる。表採遺物には中～近世陶器片などもみられている。なお、標高は先照寺境内で150mを測り、丘陵根方部分を南北に160mの等高線で区別されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	牛ヶ沢遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１３５
所在地	大中里字牛ヶ沢	時　代	縄文･弥生~古墳(前)･中~近世		地図番号	１６

遺跡の概要	
	牛ヶ沢遺跡は、富士写真フィルム富士宮工場裏の山麓根方部分に昭和60～61年の分布調査で発見され、古墳時代の遺跡に登録されているが、平成３年の調査で先照寺南側道路まで分布が認められ、また、黒曜石、糸切り底を持つ「かわらけ」等の確認もあり、時代幅も縄文時代～中、近世あたりまで広がろう。したがって南北400m、東西100mの範囲となり、石畑遺跡と同様に160mの等高線で丘陵根方部分、140mの等高線で沖積地と区別されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	根方遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１３６
所在地	大中里字根方	時　代	弥生(後)～古墳(前)		地図番号	１６

遺跡の概要	
	根方遺跡は、近接する牛ヶ沢遺跡同様富士写真フィルム富士宮工場裏の丘陵根方部分に位置している。潤井川の支流である清水川沿いを南北に長く分布範囲を示しているが、平成３年の調査で丘陵側に幅30m程度その範囲が拡張することが確認された。遺跡内は、現在宅地がその大半を占め保存状態はあまり良好とは言えないが、丘陵側での遺物の分布が顕著に見られる。遺跡の範囲は南北450m、東西150mを測る。標高130~160m地点に占地している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	若ノ宮遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	137
所在地	大宮字若ノ宮	時　代	古墳(前~後)・中世		地図番号	17

遺跡の概要	
	若ノ宮遺跡は、西隣に位置する城山遺跡と同様に、緩やかに南西面してきた富士山の裾野斜面が、末端に至って急激に沖積地(現市街地)に下ろうとする肩部を南北450m、東西150mにわたって占有する。南辺に段を持つ以外は地形的な断絶のない広域な地で、その中央部分で標高140mを測る。土師器、須恵器から陶器類までが広く散布して時代幅をもった遺跡で、現市街地を北側から望む遺跡(琴平、二ノ宮遺跡等)と同様の特徴をもつ。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	上ノ山遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	138
所在地	大岩字上ノ山	時　代	縄文(早・中・後)		地図番号	18

遺跡の概要	
	上ノ山遺跡は、稲干場遺跡を源頭にもつ滝沢川支流の小河川が防災ダムによって堰ぎ止められた通称「丸堤」を望む両側丘陵がその範囲に予想されている。しかし、東側丘陵は稲干場遺跡の拡張区と地形的な断絶はなく、西側丘陵は舌状を呈して丸堤にせり出してはいるものの、頂部を成形されて舌状平坦面を作り出した土地改良痕が著しく、縄文遺物(土器、石器)採集者も不安視するように稲干場遺跡が関連、つまり、「土の移動」があったことを念頭において、現状では一応丸堤を中心にした標高265m付近、東西200m、南北100m程の範囲を想定しておきたいと思う。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	二股村石経塚	○存在　消滅	種　別	経　塚	遺跡番号	１３９
所在地	粟倉字二又	時　代	近　世		地図番号	１５

遺跡の概要	
	二股村石経塚は、追善供養や現世利益を願って扁平な小石１個に一字ずつ経文を書き写して埋納し、その上に碑を造立した「一字一石経塚」である。この習俗は鎌倉時代末期に始まり、特に江戸時代にかけて広く盛んに行われ、本経塚は富士山宝永の大噴火(1707)後の、宝永6・7年(1709.1710)に造立され、その下部には６万に及ぶ写経石が埋納されていた。その位置は通称「道者みち」と呼ばれる村山口登山道の二又村の切り通し部分（市営舟久保町団地北側山林内）にあたり、このことから、おそらく富士山大噴火に関わりをもった造立が予想されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	別所蛇塚古墳	○存在　消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	１４０
所在地	安居山字別所	時　代	古　墳		地図番号	２０

遺跡の概要	
	別所蛇塚古墳は、昭和54年度古墳確認調査によって発見された古墳である。本墳は別所１号墳の南約70~80m先に位置し、宅地境に小高いマウンドをもって、その墳頂に「ほこら」を祀る。この塚は地元では、蛇が出る。ということで蛇塚と呼んでおり、そうした呼称に従い蛇塚古墳と命名した。遺物等の出土は全く無く断定はされないが、位置的には別所古墳群としての把握のなかに納まり、６~７mの円形に近い形状は円墳を思わせ、高さは２m強を測り、外観からは古墳と認めて差し支えないように思える。今後の調査が望まれる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	外谷戸遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	141
所在地	星山字外谷戸	時　代	先土器～縄文(早)		地図番号	25

遺跡の概要	
	外谷戸遺跡は、富士川と星山放水路(古潤井川)が合流する地点の標高90~95mを測る河岸段丘上に立地している。分布範囲は南北150m、東西220mを測る。確認している遺物は、打製石斧、頁岩の石核、頁岩片、黒曜石片、縄文土器(早期押型文等)などで台地の縁辺部分ほどその分布が濃密になる。周辺の当該期の遺跡は、富士川上流に位置する小松原A遺跡、沼久保坂上遺跡、下流に位置する初田遺跡等があげられ、共に富士川東岸に展開する遺跡群として小泉の若宮遺跡等とはまた異なった集団を形成していたものと考えられる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	押出遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	142
所在地	外神字押出	時　代	弥生（中）		地図番号	14

遺跡の概要	
	押出遺跡は、万野風穴入口付近を中心にして、標高250m、東西、南北100m程の範囲に弥生時代中期前半の墓域が築かれるもので、遺跡の東辺を南西流して潤井川に注ぐ風祭川の出口部分に築かれる渋沢遺跡と同様の内容を呈している。平成2年に実施された工場増設に伴う遺跡予備調査では土器を内蔵する大型土壙をはじめ、大小の土壙群が検出され、また風穴内部より同時期の土器片も採集されている。遺跡の大半は公園内に位置してそれなりの保存を見るが、南西部分に工場の進出が著しい。なお、前述の発掘調査のきっかけとなった工場建設は企業者の理解のもとに設計変更がされ、遺跡部分は緑地として保存されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	寺地遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１４３
所在地	杉田字寺地	時　代	縄文(前･中)		地図番号	２３

遺跡の概要	
	寺地遺跡は、杉田中村遺跡の南側に広がる緩やかな丘陵上に位置し、天間沢左岸を標高150~170m、南北700m、東西250mで細長く包蔵範囲をもつ。遺物は五領ヶ台式土器を主体に縄文前、中期の土器片の散布をみるが、非常に希薄で、遺跡の性格など不明な部分が多い。これは本遺跡内の地目のほとんどが茶畑であることに起因するが、流域には滝ノ上遺跡、天間沢遺跡など縄文時代の有力遺跡が立地しており、それらの遺跡のほぼ中央付近に位置する本遺跡が包蔵する内容は表面観察以上のものであろうことが予想される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	大宝坊遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１４４
所在地	杉田字大宝坊	時　代	縄文（中）		地図番号	２３

遺跡の概要	
	大宝坊遺跡は、慈眼寺沢の左岸の起伏のない丘陵上に位置している。遺跡中央に位置している墓地より縄文時代中期後半の土器を採集している。遺跡の推定範囲は、南北270m、東西200m程を測り、丘陵中央部分で標高150m程度を測り、南に向かって緩やかに傾斜している。また慈眼寺沢を挟んだ丘陵斜面のテラス上には若宮遺跡が立地している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	荻間遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１４５
所在地	小泉字荻間	時　代	弥生(後)・古墳(前)		地図番号	２２

遺跡の概要	
	昭和63年度、遺跡分布調査で発見された荻間遺跡は、荻間沢の右岸標高108～120mの小高い丘陵上に位置している。範囲は南北270m、東西170m程が想定される。遺跡の性格は同一丘陵を占有する上宿遺跡や権現遺跡や、同一レベルで荻間沢の対岸に位置する石敷遺跡などと類似した、弥生後期～古墳初頭が主体と考えられるが、上宿、権現遺跡に認められる縄文や、この一帯に認められる律令以降の生活圏にも入っているから、時代幅は広がる可能性が高い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	金井坂遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１４６
所在地	小泉字金井坂	時　代	縄文(中)		地図番号	１８

遺跡の概要	
	金井坂遺跡は、久遠寺川中流左岸に位置する出水遺跡の東方100m程を南北に下る幅広い丘陵上に位置する。その屋根の東側も小河川が南流するから、前方よりとらえると小高い独立丘陵として写る。範囲は南北400m、東西250m程で、詳細には標高195m一帯と200m一帯で弱い段で区切られている。上部はそれ以上、テラス状の平坦面もなく遺跡の確認もない。縄文土器、打製石斧を表採している情報を得ているが、不明な部分が多い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	下ノ原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１４７
所在地	山本字下ノ原	時　代	弥生(後)･古墳(前･後)		地図番号	２６
遺跡の概要	下ノ原遺跡は、星山丘陵南東端の標高60~80mを測る、東側に向かって緩やかに傾斜している丘陵上に位置している。遺物の分布範囲は、南北500m、東西250mを測る。主体となる遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期の土器でその分布量は極めて多い。また、少量ではあるが内面に青海波文のタタキを施した須恵器の破片がみられる。遺跡の性格としては、本遺跡の眼下にあって、潤井川の下流の低湿地に広がる富士市沢東遺跡に類似する点が多い。また、近接する富士市滝戸原古古墳群との関連を考えると、その立地の上で非常に興味深い場所に位置していると言える。					

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	山本船久保遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１４８
所在地	山本字船久保	時　代	縄文･弥生(後)･古墳(前)		地図番号	２６
遺跡の概要	山本船久保遺跡は、潤井川右岸に展開している星山丘陵の河岸段丘が丘陵側に入り込んで東向きの馬蹄形の窪地をつくる標高70~80m、南北200m、東西100mの範囲に認められる。遺物の散布は希薄で、不明な部分が多いが、黒曜石片、土器片(弥生時代後期～古墳時代前期)などが採集されている。					

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	下ヶ谷戸遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１４９
所在地	黒田字下ヶ谷戸	時　代	弥生(後)～古墳(前)		地図番号	２１

遺跡の概要

下ヶ谷戸遺跡は、潤井川右岸に広がる河岸段丘上、標高95~110m程の地点に位置し、川に向かって緩やかに傾斜する丘陵上に位置している。範囲は、南北170m、東西230mを測る。遺跡の分布は、遺跡の範囲内で濃淡の差がやや強く認められるものの単一の時期(弥生時代後期～古墳時代前期)の物に限られる。遺跡の性格は隣接する五反田遺跡に類似しており、黒田地区に展開する月の輪遺跡群と有機的な関係をもっていたものと考えられる。黒田地区に見られる同時代の遺跡では潤井川の最も下流に位置しており、同時代の遺跡群としてその広がりを規定している。現状は、畑地であるが各々の畑、田の水平を保つための造成が進んでおり遺跡に対して悪影響を及ぼしているものと思われる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	杉林遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１５０
所在地	源道寺字杉林	時　代	弥生(後)～古墳(前)		地図番号	２１

遺跡の概要

杉林遺跡は、潤井川湿地帯の自然堤防上に位置し、それは標高100mの等高線でふたつの円丘に描かれるが、本来は同一の台地であったものと考えられて、南北150m、東西100mの範囲が示される。遺物の散布は希薄で、単一の時期（弥生時代～古墳時代前期）のものに限られるが、潤井川を挟んで対岸に位置する下ヶ谷戸遺跡をはじめ、当該期の黒田地区の遺跡の広がりを考えると興味深い場所に立地している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	東田遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	151
所在地	大中里字東田	時　代	弥生·古墳·奈良·平安		地図番号	16
遺跡の概要	東田遺跡は、貴船小学校より西に200m程行った一段と高い台地で、富士山側からの扇状地形が「舌」状に潤井川にせり出して流路を蛇行させている部分の標高130mで、南北550m、東西220mの範囲に弥生土器、土師器、須恵器の散布が著しい。潤井川を挟んで対峙する大中里坂下遺跡や甲石遺跡とともに自然堤防となり、市街地から流路を遠ざけて後背湿地も形成する地形条件に恵まれて、「子持ち勾玉」の出土の一報もある。					

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	上中村遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	152
所在地	淀師字上中村	時　代	弥生～古墳(前)		地図番号	16
遺跡の概要	上中村遺跡は、渋沢遺跡の占地する台地の一段下面で、富士山からの扇状地形末端部が、渋沢湧水源と潤井川が作る低湿地に接しようとする肩部にあたり、標高140mで、南北350m、東西150mの範囲を占める。表採遺物には弥生時代後期から古墳時代前期の壺、甕の破片が認められ、その扇状地末端肩部を南へ500m程して続く福知神社遺跡、琴平遺跡と同様の遺跡内容が予想されよう。従って、今後、富士山側から潤井川湿地帯に望む部分にも注目が必要となり、富士宮北高校北側の行人塚古墳や宮原古墳の名称もあながち「まぼろし」とも言えないであろう。					

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	舞台遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	153
所在地	青木字舞台	時　代	中～近世		地図番号	16

遺跡の概要	
	舞台遺跡は、青木石畑遺跡の前面(東側)に広がる潤井川氾濫源のなかに残る、標高150mに縁取られる南北250m、東西100m程の楕円形の自然堤防上に立地する。湿田を隔てて100mで接する石畑遺跡には古墳時代の遺物の包蔵も予想されているから、その関連もあろうが、現時点で表採される遺物は中～近世土器、陶器でその散布も薄い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	馬見塚新屋遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	154
所在地	馬見塚字新屋	時　代	縄文		地図番号	10.13

遺跡の概要	
	馬見塚新屋遺跡は、潤井川中流の左岸に展開するやや幅の狭い「舌」状の台地上に、南北300m、東西200mの範囲を測り、標高235~260mの地点に立地している。希薄であるが、土器の散布もみられる。採集された土器は全て縄文土器であるが、文様などの特徴に乏しいものが多く型式的な位置付けが不可能で、遺跡の年代は不明である。本遺跡の北方(上流)2.5m程の地点に千居遺跡が位置しており、潤井川を媒介とした関連が想定される。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	棚口遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１５５
所在地	馬見塚字棚口	時　代	弥生(後)～古墳(前)		地図番号	１０

遺跡の概要

棚口遺跡は、大石寺の位置する台地の東裾を南流する潤井川を境に対峙する台地の標高250m付近の南面端部に、東西200m、南北100mの範囲で確認される。表採遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器片数点であるが、一段上部の丘陵上には国指定史跡の千居遺跡、また、一段下にはやはり縄文時代の新発見遺跡（馬見塚新屋遺跡）などがあって、縄文時代の包含の可能性も高い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	西ノ原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１５６
所在地	下条字西ノ原	時　代	縄文(中～後)		地図番号	１２

遺跡の概要

西ノ原遺跡は、芝川を西側に望む標高270~290m程の台地上に立地し、南北450m、東西250mの範囲を測る。現状は、山林及び水田部分が多く詳細は不明であるが縄文時代中期～後期の土器片が少量採集される。本遺跡は、上野地区の微高地に展開する同時期の遺跡(千居遺跡、精進川神田遺跡)との関連の中で興味深い。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	精進川小山遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１５７
所在地	精進川字小山	時　代	縄文		地図番号	１２

遺跡の概要	
	精進川小山遺跡は、平成３年度の調査で新発見された西ノ原遺跡から緩やかに芝川に向かって傾斜する斜面にみられる。標高260~265mの地点で、南北150m、東西150mの範囲を測る。遺物の分布は非常に希薄で注意を要するが、上方に位置する西ノ原遺跡との相関関係は充分考えられる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	北原遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１５８
所在地	精進川字北原	時　代	弥生(後)～弥生(前)		地図番号	１２

遺跡の概要	
	北原遺跡は、芝川のつくる沖積氾濫源を望む南北300m、東西150mの西面する舌状台地に立地し、南側はすぐ芝川町境である。表採遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器片に限られるが、尾根づたいに南へ400m程すると縄文時代に比定される芝川町猫沢遺跡があり、また、尾根頂部の平成３年度新発見遺跡西ノ原遺跡にも縄文時代の資料がみられることから、その可能性も捨てがたい地形的条件にある。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	貫間遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１５９
所在地	北山字貫間	時　代	縄文		地図番号	１０

遺跡の概要	
	貫間遺跡は、足取川中流の左岸に展開する遺跡で、標高270m付近の南面する緩斜面を南北350m、東西200mの範囲で包蔵が予想される。南北に長く、地形的な断絶感もなく、遺物の散布も希薄であるため、不確定要素も多いが、上流の御園遺跡の存在や、東側台地の東下組遺跡、対岸の馬見塚遺跡群などの有り方を考えれば、遺跡として肯定しても良いと思われる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	東下組遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１６０
所在地	北山字東下組	時　代	弥生(後)～古墳		地図番号	１１

遺跡の概要	
	東下組遺跡は、北山本門寺前に「舌」状に広がる台地上に立地している。遺物の分布は、非常に希薄で、面的な広がりが見られるものの、その範囲などの決定には情報が極めて少なく困難な面が多い、現状では、標高300~310m程度を測る平坦地のおよそ南北250m、東西250mの範囲を想定している。なお、遺跡の位置は富士山側に内陸深く寄っており、特徴的で注意される。おそらく猪之頭長者ヶ原遺跡に見られるような古墳時代初頭期の遺跡(集落)の爆発的な増加に同調したものと思われ、当該期に比定されるものであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	御園遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１６１
所在地	北山字御園	時　代	縄文(中)･中～近世		地図番号	１０

遺跡の概要

御園遺跡は、足取川と本妙寺沢に囲まれた丘陵の先端部分に位置している。標高315~340m程度を測る南向きの緩斜面に立地しており、南北450m、東西150mの範囲を測る。表採遺物は、縄文土器、中～近世のカワラケ等であるがその分布は希薄である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	辻遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１６２
所在地	北山字辻	時　代	縄文･弥生(後)~古墳･平安(後)		地図番号	８

遺跡の概要

辻遺跡は、桟敷遺跡の西側300mの南面する緩斜面とその前庭部に東西300m、南北400mの範囲が予想される。標高は400m前後を測り、西端を潤井川に接し、対峙して千居遺跡をみる。縄文時代の遺物の分布は希薄で、若干の弥生時代～古墳時代から平安時代後期が主体となって、桟敷遺跡に類似したものになろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	足形上遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	163
所在地	内野字足形	時　代	縄文(中～後)		地図番号	6

遺跡の概要	足形上遺跡は、芝川上流の白糸足形地区の集落北限にあたり、その芝川にせり出した弱い「舌」状の台地上に南北100m、東西100m程の狭い範囲で縄文時代中期後半～後期前半の土器の分布を見る。標高570mの高地にあって隣接遺跡（白糸佐折遺跡、長者ヶ原遺跡）より2Km弱の距離関係を持って中部高地に向ける「キャンプサイト」的な性格が伺え、遺跡中央部に1×2m程の「三角錐」状の巨石が存在している。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	吉野屋敷跡	○存在　消滅	種　別	城　館	遺跡番号	164
所在地	山本字高原	時　代	中・近世		地図番号	22

遺跡の概要	吉野氏は、南北朝時代より、この地に居住し、室町・戦国期には今川・武田氏に属し、さらに徳川氏に従属し、江戸時代には、代官職についた家である。 屋敷は、山を背にして三方に土塁と堀を巡らした形態を持っている。現在、土塁もかなり削平され、堀も埋没している。屋敷内は、二段からなっている。 『静岡県の中世城館跡』(1981) 星山丘陵が潤井川沖積地に没する縁部に形成される幅の狭い段丘、あるいは扇状地が適当か、に南北70m、東西20m程の範囲をもってなり、屋敷内の標高は75m前後で、前面の低湿地とは数mの段差をもつ。背後は40～50mの比高をもって急峻な山崖が迫っていて、自然の要害となっている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	南条館跡	○存在　消滅	種　別	城　館	遺跡番号	165
所在地	下条字堀之内	時　代	鎌　倉		地図番号	9.12

遺跡の概要

鎌倉時代、駿河国富士郡上方上野郷地頭、南条七郎次郎時光の居館であった南条館は、正中元年(1324)、時光の妻妙蓮尼の一周忌にあたり、その居館を廃し、跡地に妙蓮寺を建立した。居館がそのまま寺の境内となった結果、居館跡の遺構が残ることになり、現在でも土塁や外側の堀跡を見ることができる。特に土塁は境内北半分での残存状況が良好である。居館跡の形状は不整形の方形で、東西126m、南北137mを測り、標高285～290mを測る、北側が高い二段の構成になっている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	井出館跡	○存在　消滅	種　別	城　館	遺跡番号	166
所在地	狩宿字井出	時　代	鎌倉		地図番号	8

遺跡の概要

建久4年(1193)、源頼朝は有名な富士の巻き狩りを富士山麓で繰り広げるが、この時宿舎となったと伝えられる「富士野旅館」は、現在の狩宿井出氏邸より東北寄りであったと伝えられ、西側の微高地を背にした台地上に占地していたとされる。西側の微高地の裏は、芝川の渓谷で比高差30mを測り、居館跡の東側は、潤井川が流れ、さながら天然の要害を形成している。また、南側には源頼朝が馬をつないだ桜の枝が活着したものだという国指定特別天然記念物「狩宿の下馬ザクラ」が富士の巻き狩りの名残りを伝えている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	内野城跡	○存在　消滅	種　別	城　館	遺跡番号	１６７
所在地	内野	時　代	中世以降		地図番号	6

遺跡の概要

内野城は、静岡県教育委員会によって、昭和56年に発行される『静岡県の中世城館跡』に記載される。その名称の掲示はあるものの内容は不明でその出典、位置も定かでない。破線表示される範囲は白糸内野集落の西側を南北に走る丘陵の緩く高まる「瘤」状の地であり、東西の壁は急峻で自然の要害に適する地であるが、それに関した遺構の追求は開墾、植林等で不可能に近く、依然として不明のままである。なお、その西側肩部を「猪土手」が走る。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	高原城跡	○存在　消滅	種　別	城　館	遺跡番号	１６８
所在地	山本字高原	時　代	中世		地図番号	２１

遺跡の概要

今川分限帳に、鷲巣駿河守食邑一万石、高原城主とあり、これを大宮町史ではここに当てているが遺構など明らかでない。富士宮市黒田高原にあり、高原山の山頂を中心とするようであるが、範囲は明確でない。なお、鍛ヶ窪なる地名も残るが、今は畑地となりそれらしき遺構もない。ここは駿河から甲州への入口にあたり、西方後背地には富士川及び自然の山谷の要害が広がっている。

『静岡県の中世城館跡』(1981)

として不明要素も多いが、それによれば星陵高校の北隣の小丘があてられている。標高174.4mを最頂部として15~30mの比高をもち、遠望の地であることは確かで、「のろし台」的な設定は無理を感じさせない。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	南部谷戸古墳群	存在○消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	169
所在地	黒田字南部谷戸	時　代	古　墳		地図番号	21

遺跡の概要

南部谷戸古墳群は、『富士宮市史上巻』(1971)に中野國雄、植松章八、野村昭光の三氏によって戦後発見されたと記されている。記述によれば、「南部谷戸古墳群は、明治以後の開墾でその墳頂を削平され、石室かと思われる礫の配置と地主の採集品によって古墳群であると判るに過ぎない。その採集品には蛇紋岩製の勾玉が2個あるが、それは中期後葉のものかと思われる特徴をもって、市内では唯一の中期古墳の存在を示唆する遺物と言える。いま、石室の残存かと思われる配礫は地表から観察できるものが数個所あり、時期はもちろん石室の残存そのものが今後の調査を待つしかないが、そこに中期古墳の存在する可能性は大きいといってよい。」とある。そして、富士宮市埋蔵文化財包蔵地調査カード（1979)に至って、「台地の上、端部に立地し、形態は円墳、遺構として石室、特徴として小台地の南側に位置し、盗掘により石室が露出していたが、本古墳群は調査が実施されることなく星山放水路工事により破壊、消滅された。」と、消滅の事実が付け加えられる。上記のように本古墳群が、古墳時代中期の所産であったならば本地域の初源的古墳であることは間違いなく、貴重な資料の消滅は残念である。想像すれば、本古墳群を包括する南部谷戸遺跡は、弥生時代後期より集落と方形周溝墓（墓地）が営まれ、周辺の月の輪平、同下遺跡に代表されるような古墳時代前期集落の存在などから当該期の有力地域であったことは充分に知れ、中期古墳の築造の可能性もなくはないが、南部谷戸遺跡も同様にして本地域の古墳時代中期集落の存在は今一つ不透明であり、その実証が先決と思われる。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	若宮古墳群	存在○消滅	種　別	古　墳	遺跡番号	１７０
所在地	小泉字古宮	時　代	古　墳		地図番号	２２

遺跡の概要

若宮古墳群の確認は昭和初年に活躍された佐野要吉氏(岳南考古学会)等によるもので、佐野氏論文『富士南麓郷土史談』によれば、「円墳が10数基群集している。」とされ、昭和5~11年に発刊された『静岡県史第一巻』では、「字若宮及び古宮の南向きの丘には数基の小円墳が存在する。大宮町の東に接する富士根村小字小泉には古墳が群集しているところがある。即ち若宮及び古宮のほとりで、丘上には円墳の完全のものが数基見え、付近から須恵器の破片が多く出る。」と記されている。過去の文献によれば10数基の群集墳が存在していたことは間違いないであろうが、現在ではその痕跡は全くない。戦後に至って本古墳群の残存を確認したのは野村氏である。昭和34~5年のことであるが、古墳群はすでに畑地改良事業、宅地造成事業等によってその大半を破壊されており、わずかに１基が田村英一氏宅北側に残存していたが、それも宅地造成のため破壊寸前であった。その後野村氏は本古墳南側傾斜地で須恵器を確認している。

上記から、若宮古墳群の存在（過去）は間違いないものであろうが、文化財行政の浸透のない時期に破壊されてしまったことは本地域における古墳時代考察に大きな痛手となっており、可能な推察を行うならば、微細な資料と過去の文献より後期古墳群(7～8世紀)と思われ、全面に広がる古墳時代遺跡と相まってかなり優勢な古墳群を形成していたであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	川坂遺跡	○存在　消滅	種　別	散布地	遺跡番号	１７１
所在地	富士市天間字川坂	時　代	奈良～平安		地図番号	２２

遺跡の概要

川坂遺跡は、富士市天間川坂一帯を中心に南北500m、東西350mの広い範囲で奈良～平安時代の土師器、須恵器が目立って包蔵される遺跡で、同伝法の東平遺跡と同様に、この時代ひろく営まれた計画村落的な色彩が濃いことで予想されている。東側を慈眼寺沢で区画され、対峙して岳南三大遺跡の富士市天間沢遺跡が、西側は小河川を挟んで権現遺跡が存在し、両遺跡とも古くより優良な遺跡として知られている。南側は潤井川沖積湿地帯に接し、北側は富士山麓特有の断絶のない緩やかな傾斜が上って、蟹入越遺跡に至っている。本遺跡の富士宮市分はその北東隅の100m四方程を占め、標高は80mである。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	三島ヶ獄経塚	○存在　消滅	種　別	経　塚	遺跡番号	１７２
所在地	富士山頂	時　代	鎌　倉		地図番号	７

遺跡の概要

富士山頂に経文を埋めて国家の安泰を祈ったり、個人の極楽往生を願った事実は平安時代末期頃より知られて、本経塚より出土した経巻には承久（1219~21)の年号があり、その思想がずっと引き継がれていたことが知れる。それは昭和５年に三島ヶ獄東麓のコノシロ池の南岸に発見されたが、その時すでに作為的な塚丘はなく、大小の石で押し潰された３本の経筒の中の約50巻の経巻は、コノシロ池の湖水を含んで破損が著しかった。そのうち何本かは浅間大社に所蔵されているらしい。なお、明治初年頃にはそこには堂祠や石仏が造立されており、古来より仏跡であった事が知れている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	猪土手	○存在　消滅	種　別	土　手	遺跡番号	173
所在地	佐折、内野、上井出、北山	時　代	中世？～近世		地図番号	27

遺跡の概要

「猪土手」と地元で称されている。幅1～2m、高さ50m程で残存しており、断面「台形」の土塁状遺構が、白糸佐折の白山神社裏手山陵から、その西側肩部を、田貫湖南側の花鳥山脈入口、静岡県畜産試験場南側から、三谷牧場裏手まで連続する。さらに、通称「平山」を横断し、まかいの牧場東側で猪之窪川に没する。ここから大沢砂防ダムまでの上井出見返地区では、その形跡をたどれないものの江戸時代享保年間の上井出村古文書(絵図)には「新土手」として描かれている。それより以東は等高線(標高560m前後)に沿って、貿易研修センター敷地内（現大原学園研修センター）を横切り、北山角木沢まで及んでいる。ほとんどの個所においては、土を固めたものであるが、なかには人頭大の溶岩礫の使用個所もあるなど、かなりはっきり残存して、それは白糸の滝北側の天神山付近を中心に馬蹄形に総延長9.5Kmを測るものである。地元では富士の巻き狩り(1193年）の際、獲物を追い込むためにつくられたと伝えられているが、こうした遺構は、中、近世の狩猟及び防御施設あるいは放牧施設に類した性格をあてられるはずであろう。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	麓金山堀間跡	○存在　消滅	種　別	鉱山跡	遺跡番号	１７４
所在地	麓	時　代	中世～現代		地図番号	２７

遺跡の概要

毛無山地と天子山地が交わる付近に、戦国時代から近世初頭にかけて、金の採掘が行われていた堀間がかなりの数存在した。地元では、金山(かねやま)とよぶが、「麓金山」あるいは「富士金山」ともよばれていた。金山確保に力を注いだ武田信玄による「中山金山」とは、地下において鉱脈がつながっていた。

この金山の経営の先駆は、今川氏であったことが指摘されているが、今川氏が衰退すると、この金山は武田氏によって経営されていた。その直接の経営責任者穴山信君(梅雪)により積極経営がなされたが、最盛期を迎えるのは、この地が徳川家康の支配下におかれてからのようで、慶長７年の記録によれば、いくつかにわかれた縄張り(鉱区)のうちのひとつに、16もの堀間が数えられたが、元禄の頃までに掘り尽くされたことが、麓で、金山衆とよばれる採金師たちの代表としてこの金山に深く関わりのあった竹川家の文書類により知れる。

昭和初期には、近代設備により一時期操業されたが、間もなく廃鉱となった。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	沼久保船着場跡	○存在　消滅	種　別	船着場	遺跡番号	１７５
所在地	沼久保	時　代	近～現代		地図番号	２７

遺跡の概要

明治23年4月に操業を開始した、沼久保 ― 北松野間の渡船は、「船戸渡船」または「船戸渡し」ともよばれ、昭和34年に現在の蓬来橋が完成するまでこの地域における重要な交通として多くの人々に利用された。船着場のあった場所は、現在の蓬来橋の上流150m程のところにあり、両岸に待合小屋が立てられていた。渡船のしくみは、両岸から鉄線を張り渡して、滑車を取りつけ、それに船を接続して、水流を利用して舵を取りながら直進するものであった。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	星山船着場跡	存在○消滅	種　別	船着場	遺跡番号	１７６
所在地	星山	時　代	近～現代		地図番号	２７

遺跡の概要

星山 ― 南松野間の渡船は、鉄線渡船で明治の頃から操業されたという。船着場は、現在の星山放水路放水口西側付近にあったといわれている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	新大宮口登山道跡	○存在　消滅	種　別	道路跡	遺跡番号	１７７
所在地	粟倉～新五合目	時　代	近代～現代		地図番号	２７

遺跡の概要	
	現在の富士山富士宮口登山道の前身にあたるもので、明治39年に、それまで使用されていた村山口登山道に代わって開さくされたもので、通称カケスバタ口ともいった。大宮町と北山村は、大正２年から同５年にかけ県費の補助を受けて、大宮町から山宮を経て懸巣畑（カケスバタ）に至る間の大改修を行い、新大宮口を完成させた。昭和２年には、二合目までのバス道路が開通した。戦後、一合目から二合目まで国有林の林道が開設され（現在の二合目林道）、登山道もこれを利用し、昭和39年には、三合五勺（現在の新五合目）までバス道路が開設された現在の富士山スカイライン登山区間が開業したのは昭和45年である。旧道跡沿いには、富士山スカイラインの標高1,000m付近に一合目、さらに登山道跡の標高1,800m付近に２合目の小屋跡がある。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	村山口登山道跡	○存在　消滅	種　別	道路跡	遺跡番号	１７８
所在地	粟倉～新六合目	時　代	中世～近代		地図番号	２７

遺跡の概要	
	村山口登山道跡は、村山浅間神社を起点とする登山道の跡である。明治39年に新道（新大宮口・カケスバタ口）が開設されるまで、表口登山道として栄えた道である。また、同時にこの道は、村山に本拠をおいた本山派修験の修行の道として古い歴史をもつ。現在、登山道跡沿いには、建物跡や石造物が10数ケ所確認されている。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	札打場の大ケヤキ	○存在　消滅	種　別		遺跡番号	１７９
所在地	粟倉(富士山中)	時　代	近世～近代		地図番号	２７

遺跡の概要

村山口登山道跡沿いの標高約800m付近にある。村山に本拠をおいた修験者（山伏）が入峰修行の際に、札を打った木である。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	中宮八幡堂跡	○存在　消滅	種　別		遺跡番号	１８０
所在地	粟倉（富士山中）	時　代	中世～近代		地図番号	２７

遺跡の概要

中宮八幡堂跡は、村山口登山道の重要な位置を締めていた中宮八幡堂があった所である。中宮八幡堂は、村山浅間神社に伝わるところによると、今川氏輝建立という。八幡堂は馬返しともいい、登山に馬を使えるのはここまでで、これから上は八幡堂で配る金剛杖を片手に登山した。そのため、中宮八幡堂の社殿のほか、宿泊施設が設けられていた。現在は、石垣と建物の礎石が残り、境内に文化14年(1817)建立の地蔵と、「太郎坊権現　妙法蓮華経」と刻まれた天保４年(1833)建立の石塔がある。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名	人穴	○存在　消滅	種　別		遺跡番号	１８１
所在地	人穴	時　代	中世～現代		地図番号	２７

遺跡の概要

人穴は、富士講の開祖角行が、天正年間に通称人穴(溶岩洞窟)にこもって修行を行ったと伝えられる所である。富士山の寄生火山である犬涼み山が噴出した溶岩流の中に形成された溶岩洞窟で、標高約700mの所にある。この北側にある新穴も富士講の信仰する所となっている。富士講が隆盛する江戸時代中期以降は、富士講の聖地とし信仰を集め、周辺には信者の記念碑や墓が建てられている。その数は約200基で、関東地域の信者の物がほとんどである。また、人穴は駿河と甲州を結ぶ駿州中道往環沿いにあり、江戸時代には人穴詣での信者を泊める宿屋もあり、白糸滝とともに富士西麓の名所として知られ、富士登山の際に足を運ぶ者も多かった。

富士宮市遺跡調査カード

遺跡名		存在　消滅	種　別		遺跡番号	
所在地		時　代			地図番号	

遺跡の概要

富士宮市の遺跡と文化

—分布調査と発掘調査で何がわかったか—

植松章八

富士宮市の遺跡と文化　－分布調査と発掘調査で何が分かったか－

1　新『富士宮市遺跡地図』の意味するもの

（1）新遺跡地図の刊行

今回の『富士宮市遺跡地図』（富士宮市教育委員会、平成4年3月）は、埋蔵文化財の保護及び保存の目的で作成されたものであり、遺跡地図及び遺跡地名表から構成されている。それは、前回の『富士宮市遺跡地名表　付富士宮市遺跡分布図』（富士宮市教育委員会、昭和54年3月）を継承した補正改訂版であり、昭和63年度から平成2年度までの3か年間に実施した分布調査の成果を盛り込んだ富士宮市遺跡地図（第2刷）である。

本書をみて、まず第一に気付くことは、遺跡地図が1万分の1の地形図を用い、それぞれの遺跡範囲を明瞭に示すとともに、遺跡数が181 遺跡に増加したことである。

新遺跡地図については、前回が2万5千分の1の地形図に範囲を記入していたことに比べ、驚くほど明瞭なものとなった。遺跡の範囲が、道路や地境線又は河川等とどのような関係にあるか、確実にそれを知ることができるようになった。

一般に、遺跡の存在やその範囲を誰にでも分かるように遺跡地図で示すことは文化財保護行政の責任であるが、実はそのことは行政にとって大変に難しく、勇気の要ることでもある。遺跡が地中に埋没しているという特性をもち、行政は恒常的な人出不足から調査が不十分であるという止むを得ない事情もあるが、現実には、文化財保護行政に、特に開発とのかかわりでどうしても必要な施策となってきたことも周知のとおりである。

このような課題に富士宮市教育委員会が初めて答えることができたのは、以上のような事情を乗り超えるほどに遺跡地図の作成に自信をもった結果であろうと思う。前回の遺跡地図刊行以降の十数年間に及ぶ検証の結果及び本事業における徹底した現地調査に裏付けられた成果であるといえよう。

ちなみに、県内でも、こうした大縮尺の遺跡地図の刊行は例が少なく、74市町村のうち9例にすぎない。

（2）遺跡発見の努力と遺跡数の増加

次に、遺跡数の増加についてみよう。前回の遺跡地図では125 遺跡、今回では181 遺跡であるから、56遺跡が増加したことになる。この内訳を前回遺跡数と比較すると表－1のとおりである。

これによると、弥生時代と歴史時代における遺跡数の増加が目立っている。弥生時代の遺跡数の

表－1 新『富士宮市遺跡地図』による遺跡数の増加

時　代	1992年 遺跡地図	1979年 遺跡地図	増　減
先土器	7	4	3
縄　文	99	80	19
弥　生	27	4	23
古　墳	84	62	22
高塚古墳	20	17	3
歴　史	31	4	27
計	181	125	56

各時代の遺跡数には重複がある。

増加については、弥生時代後期と古墳時代前期の時期区分が難しいため、この地域で特に多い古墳時代前期の遺跡や遺物の調査が進むと、弥生時代後期のものが混在して発見されるという例が多いことによるものである。注目しておきたいのは、歴史時代遺跡の増加である。4遺跡から31遺跡に増加しているのであるから、約8倍の増加ということになる。奈良、平安時代の集落が増えたことも重要であるが、むしろ、中世、近世及び近代の経塚、城館跡、猪土手、金山採掘跡、船着場、旧登山道、富士講関係遺跡等の登録を評価しておきたい。なかでも、金山採掘跡や旧登山道等については、いわば存在そのものは周知の事柄であるが、それらを地形図に記載し、保護施策の対象として文化財に登録するためには多大な基礎調査を要するからである。すなわち、今回の遺跡地図の背景には膨大な調査データーが蓄積されているといいたいのである。

換言すれば、登録されるべきもので現在欠けているものも多いと思われる。確実に中世や近世の集落跡といえる遺跡は、発見されていない。富士宮市の市街地は、浅間大社を中心に、平安時代から中世、近世にわたって盛えたとされるが、それらにかかわる遺跡では大宮城跡以外の登録はみられない。浅間神社は、社伝によれば平安時代前期の大同元年(806)に坂上田村麻呂によって現在地に遷されたとし、正史では文徳天皇実録の仁寿3年(851)に浅間名神とされるのが初出である。このような浅間神社の成立に関係する遺跡は、今回の遺跡地図には登録されていない。富士宮市や富士山にかかわり、我々の郷土に深く根を降ろす事柄が、考古学的な遺跡としてその存在を確認できない事例はほかにも多い。遺跡地図は今回が最終版ではない。今後も遺跡の発見と追加の努力は必要であり、それによって重要な事実が明らかになるのである。

2　富士宮の遺跡とその調査・研究

(1) 遺跡からみた富士宮

富士宮市の遺跡の特徴をみるため、表－2を作成した。これを時代別にみると、次のようにまとめることができる。

① 縄文時代早期の遺跡が、比較的多い。

② 縄文時代中期から後期（前葉）までの遺跡が、約80遺跡を数えて圧倒的に多い。後期（中葉）から晩期の遺跡がほとんどない。

③ 弥生時代中期の遺跡が、少数であるが存在する。弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が、約50遺跡を数えて爆発的に増加する。

④ 古墳時代中・後期の遺跡は、極めて少ない。表で高塚古墳としたものは、後期の小古墳であり、群集墳とみてよいものである。ここでは20古墳と数えたが、中には既に破壊され、文献から「十数基」存在したことが分かる例も「1」として含めた。現状では、市内で、前・中期の古墳は、確認も推定もできない。後期の群集墳も極

表－2　富士宮市の地区別・時代別遺跡数

時代／地区	先土器	縄文						弥生			古墳					歴史						計
		早期	前期	中期	後期	晩期	小計	中期	後期	小計	前期	中期	後期	小計	高塚古墳	古代	中世	近世	近代	城館	小計	
富士根	2	11	14	38	17	1	45	1	2	3	10			29	8	2	4	4	4		8	66
大宮	4	8	1	14	6	1	27	2	11	15	19	4	5	34	9	2	1	4	2	3	11	62
富丘		1		5	4	1	8	2	1	5	5			11	3	1	1	1			2	20
上野	1			6	4		8		2	4	4			4						1	1	12
北山				1			3		2	2				2		2	1	1			3	5
白糸		1		2	3		3										1	1		2	3	6
上井出				3			5				3			4			1	2	1		2	9
富士山頂																	1				1	1
計	7	21	15	69	34	3	99	5	18	29	41	4	5	84	20	7	9	13	7	6	31	181

各時代の遺跡数には重複や時期不詳がある。

めて少ない。

⑤　歴史時代遺跡の発見は最近の成果であり、各種の遺跡がみられ、調査されていることは既に述べた。

（2）戦前から続く遺跡研究

ところで、富士宮市内において、遺跡や遺物に対する関心がもたれ、考古学的な調査や研究が始められたのは、大正末年ごろと思われる。佐野武勇、佐野要吉等が「岳南考古学会」を創立し、富士南麓における遺跡や遺物の発見に努めたのは大正15年（1926年）であった。彼等の活動の成果は、昭和５年（1930）刊行の『静岡県史』第一巻に提供され、県史の記述の中でその功績をたたえられている。この当時は郷土研究・郷土教育の高揚期であり、岳南考古学会の活動も第二次世界大戦の激化まで続いたようである。

戦後の考古学研究を刺激したものは、昭和24年（1949）に始まる市立第三中学校の建設工事であった。戦前から知られた滝戸遺跡の傾斜地が、大きく２段の平坦面に造成される工事で、膨大な遺物類が出土したのである。富士高校の郷土研究部を初め県内の高校生が滝戸に集まり、その土器・石器類を持ち返った。滝戸遺跡の膨大な遺物類は広く散逸することになったが、この地域の考古学研究は再びよみがえった。中野國雄、小野眞一、塩川正男、野村昭光等が、昭和40年から50年代まで活動を継続し、富士宮市の遺跡にかかわる情報を蓄積していったのである。

富士宮市における最初の学術的な発掘調査は、昭和44年冬に始められた星山の月の輪平遺跡であった。調査の中心になったのは植松章八で、古墳時代前期の大集落をほぼ完掘する端初となった。次に、昭和45年夏に、小野眞一による上野の史跡千居遺跡の第１次調査があり、縄文時代中期の大規模な配石遺構が発掘され、史跡指定されていくことになった。この両調査はその後数年間にわたって継続し、富士宮市を代表する遺跡の内容を明らかに

するのである。戦前からこの時期までの市内の考古学的な知見をまとめた『富士宮市史』上巻（若林淳之監修）が刊行されたのは、昭和46年（1971）11月であった。

さらに、滝戸遺跡の発掘等もあるが、大きな意義をもったのは、昭和53年(1978) 6月に始まる西富士道路工事に伴う発掘調査であった。小泉の代官屋敷遺跡と若宮遺跡を屋内作業を含めて昭和57年まで継続調査し、縄文時代早•前期を中心とする大遺跡を報告したが、ここでは専門調査員3名が市職員として調査を担当し、行政機関が遺跡の保護に責任をもつ体制が実現されたのである。

富士宮市における昭和44年度から平成4年度までの発掘調査件数は68件であり、その面積は約5.9 ヘクタールに達し、出土遺物はコンテナで約600 個を数える。これらの調査報告書は32冊、その厚さは約35センチメートルを測るという。ここ20年間に及ぶ発掘調査の成果が物語る知見は、富士宮市の原始・古代から現代までの歴史敍述を大きく変えることになった。本稿では、『富士宮市史』上巻で紹介された諸遺跡は原則として除外し、それ以降の発掘調査で分かったことのうち、いくつかの特徴的な事柄を述べてみたいと思う。

3　若宮遺跡と狩猟文化の成立

（1）若宮遺跡の発見

若宮遺跡は富士宮市小泉字古宮にあり、西富士道路工事のため、昭和53年度から56年度にかけて発掘調査され、縄文時代早期前半における集落跡が全国最大規模で発見された。現在の位置は、西富士道路小泉料金所の北西約百数十メートルの道路敷内に当たる。この遺跡から北西約300 メートルに代官屋敷遺跡があり、やはり同工事のため、併行して発掘調査され、富士宮の縄文時代早•前期を代表する遺跡となった。

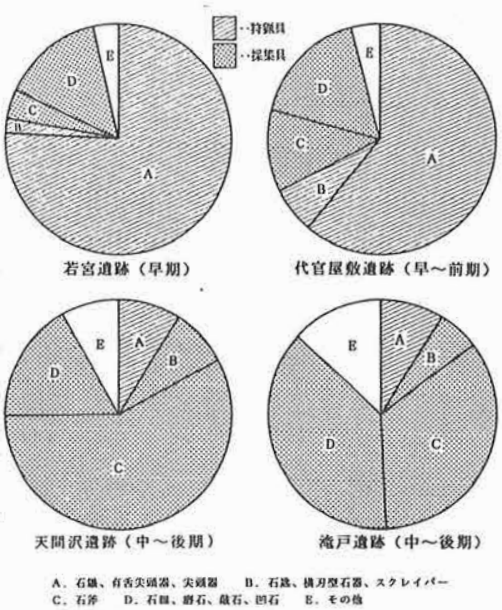
若宮遺跡は、地形からみると、富士山麓末端部に発達する鳥跡状の舌状台地の先端部に位置する。遺跡の中心部、すなわち、集落の範囲は、台地先端部の崖状の傾斜面の中段に形成されたテラス状平坦面といえる。詳しくみると、北側と西側（西側は、既に削平されていた。)を高さ5メートルほどの小丘で囲まれ、南北約120 メートル、東西約100 メートルの範囲をもつテラス状平坦面があり、その前方は高さ10メートルから15メートルほどの崖面となって沖積地に接するのである。その平坦面は、海抜150 メートルから160 メートルまでの傾斜をもち、北から南へ向かって約10メートル近くも低くなる状況で、加えて中央部が浸食による浅い凹地形をつくるため、東西両側は中央部と南側に向かって低くなる傾斜面となっている。縄文時代早期の集落のほぼ全体を発掘した貴重な遺跡であるが、道路敷外の東北方向に遺跡の一部が残存すると思われる。

発見された遺構は、総数118基であり、竪穴住居跡28基、炉穴跡60基、集石土坑跡13基、集石跡5基及び土坑跡12基となる。竪穴住居跡の平面形は、多く隅丸長方形か楕円形とされるが、歪みが目立つ例が多く、不整形な形状が特徴的である。規模は、1辺が4メート

ルを超すものから、2メートルに満たない例もある。平均値は、3.17×2.61メートル、床面積8.6平方メートルとなる。炉穴跡と集石土坑は、住居跡外に設けられたいわゆる屋外炉であり、上屋の貧弱さから屋外に置かれたことは確かであるが、集落における家族の構成や在り方、食料の獲得と分配・消費にかかわる問題を提起しているものでもある。

（2）石器から分かる狩猟文化

遺物では、石器から述べよう。石器は、人々が食料その他の生活物資を獲得するための道具、すなわち、人々が自然に働きかけ、生産するための道具である。したがって、石器の内容を検討することは、当時の人々の食料獲得の方法に迫ることになるのである。



図―1　縄文時代の石器構成

若宮遺跡では、石器は、2,713 点が出土している。縄文時代早期前半の石器群としては、驚くべき数量であり、尖頭器13点、石鏃1,908 点、石皿35点、磨石・敲石・凹石328 点、石斧101 点、石匙5点、横刃型石器27点、スクレイパー類20点等が主な内容である。

ここで注目しておきたいのは、石器の機能からみて想定される生産の方法、換言すれば食料獲得の方法である。一般的に、尖頭器は、石槍や投槍の刃先であり、狩猟の道具とされる。石鏃は、狩猟具の代表で79.9パーセント、約8割の出土量となる。石鏃、すなわち、弓矢の発明が、縄文時代の幕開けとされる。石皿や磨石等は、果実等の製粉用であり、縄文時代早・前期には伴わないものとされてきたが、本遺跡例には認められ、植物採集に伴う道具とされる。石斧には磨製と打製があり、磨製は木材の加工や伐採に、打製は木材伐採や土掘り具とされる。注目しておきたいのは、土掘り具としての機能で、植物の根茎等の採集に用いたと考えられている。

このような観点から分類すると、狩猟具には尖頭器、石鏃、石匙、横刃型石器及びスクレイパー類があり、植物採集具には石皿、磨石、敲石、凹石、石斧及び石匙（狩猟具にもある。）があることになる。このような傾向の変遷を知るために、代官屋敷遺跡（早・前期）、滝戸遺跡（中・後期）に富士市天間沢遺跡（中・後期）を加えて図－1を作成してみた。若宮遺跡と代官屋敷遺跡では圧倒的に石鏃を初めとする狩猟具が多く、滝戸遺跡と天間沢遺跡では同様に石斧を中心とする植物採集具が多いのである。

滝戸遺跡では、5回の発掘調査により、多量の石器類が発見されている。ここでは第Ⅱ次調査の縄文時代中期後半から後期前葉までの時期で、配石遺構（土壙、すなわち、墓地）

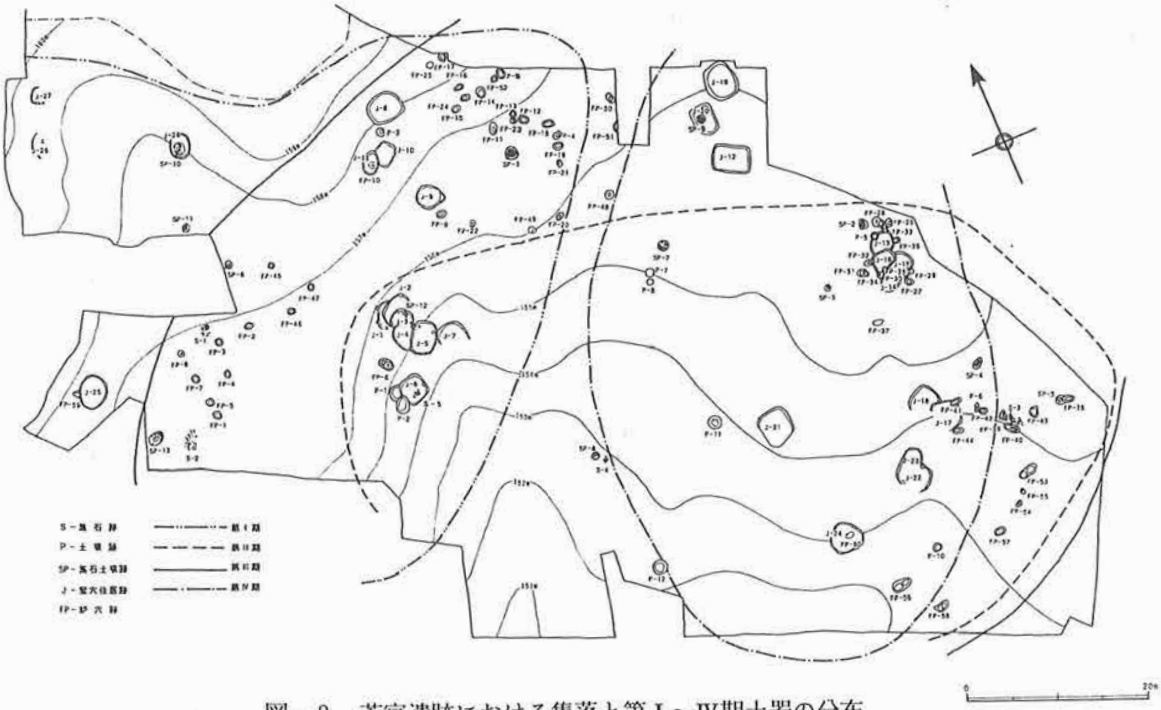
に伴う石器類159 点を分類し、図示した。配石遺構に伴う石器が生産手段としての石器の構成をどこまで反映するか、問題は残るのであるが、より良好な資料として富士市天間の天間沢遺跡例を併せて図示した。天間沢遺跡は、若宮遺跡の南方1.5 キロメートルほどにあり、縄文時代中・後期の竪穴住居跡14基のほか配石遺構等から出土した石器類668点を分類整理したものである。当時の人々が、自然に働きかけた道具をより生活状況に近い姿で反映するとみられる。

以上のとおり、縄文時代の石器構成は、早・前期と中・後期で大きく変化することが明らかとなった。縄文時代の食料獲得法の主体が、早・前期の狩猟から中・後期の植物採集に変遷したことが分かるのである。縄文早・前期の狩猟文化、中・後期の採集文化と考えたいのである。

（3）土器と遺構から分かるムラの変遷

土器片はおよそ15,000点が出土したが、この数量は早期の遺跡では驚異的なものであった。年代順には、古い方から表裏縄文土器→縄文土器→撚糸文土器→押型文（山形、格子目、楕円等）土器が主体であるが、これらを分析して第Ⅰ期〜第Ⅳ期に区分した。

この4期に区分される土器の分布範囲を遺構群と重ねたものが、図－2である。同一テラス内における遺構群の時期的移動をみることができる。各期の範囲は、基本的には各土器の出土状況によるが、遺構内出土土器等に配慮しながら、時期と遺構との関係を整理す



図－2　若宮遺跡における集落と第Ⅰ〜Ⅳ期土器の分布

ると次のとおりである。

第Ⅰ期　第25•26•27•28 号竪穴住居跡、集石土坑跡

第Ⅱ期　炉穴跡

第Ⅲ期　第12•19•20号竪穴住居跡、炉穴跡、集石土坑跡

第Ⅳ期　集石土坑跡

竪穴住居跡は、第Ⅰ期の４基と第Ⅲ期の３基が時期を特定でき、21基は難しかったようである。問題は、各期を通して同時に共存を推定できる集落の規模と構成であり、その継続的な定住性を認め得るかどうかである。

一般的にいえば、竪穴住居跡の重複は建て替えによる継続性を意味するものとされ、本集落でも同様の傾向は全域において指摘できるようである。第Ⅰ期から第Ⅳ期までの全時期か、あるいはその部分であるかはともかく、本集落が継続的な定住性をもつことは認められてよいであろう。

また、土器の分布範囲が時期によって異なることはすでに述べたが、今意識して竪穴住居跡４基が特定された第Ⅰ期土器の分布範囲をみると、それは調査区の北西側の約半分ほどの範囲を占め、北西部にやや高い平坦面があってその縁辺部に竪穴住居跡が並び、その前方部の南東側には先に述べた中央凹地があることになる。土器の分布は、竪穴住居跡付近と南東端部の中央凹地付近で濃密な傾向があり、その間に狭い空白部をみせる。この空白部には、時期を特定できない集石土坑跡や炉穴跡が集中しているから、土器をもつ竪穴住居跡群－土器をもたない集石土坑跡や炉穴跡群－土器をもつ中央凹地(無遺構空間)に三分することができる。単純に図式化すれば、生活場所としての竪穴住居跡群と広場（調理場を含む。)、廃棄場所としての中央凹地帯となるのである。

このような状況は、第Ⅲ期でも指摘できるようである。特定された竪穴住居跡群は一定量の土器をもち、中央凹地帯は極めて濃密な状況にあり、その間にある集石土坑跡と炉穴跡群付近は竪穴住居跡群よりやや希薄な様相をみせるようである。すると、縄文時代中・後期における集落の基本構造とされる環状（馬蹄形）集落は、本遺跡において縄文時代早期前半に既に成立していたことになるのである。そして、そこにみられた集落は、数軒の竪穴住居跡と広場（調理場とその施設）及びゴミ捨場となるようである。

ところで、この縄文時代早期前半というのは、約8.000 年ほど前に始まり、ほぼ1.000年かせいぜい2.000 年の間継続したものとみられる。一般に、縄文時代早期は移動生活を基本とし、前期になって定住性が芽生えるとされてきたが、それは本集落によって一挙にさかのぼることになった。ただし、本集落の定住性が、年間の四季とどうかかわったのか、先述の第Ⅰ～第Ⅳ期を通してどのような具体的な姿をみせたのか、早期前半の長い時期に断絶はないのか等については今後の課題である。

4　滝戸遺跡と採集文化への転換

（1）滝戸遺跡の発掘調査

滝戸遺跡は、富士宮市黒田字滝戸にあり、市立第三中学校の敷地内を中心とする。発見は戦前の岳南考古学会によるが、昭和24年（1949）に始まる校地造成によって広く知られるようになったことは既に述べた。ここでは、膨大な土器・石器類とともに、竪穴住居跡の発見もあったとされる。

昭和51年から、遺跡の東端部で4回に及ぶ発掘調査が行われ、縄文時代前期、同中期前・中葉及び中期後葉の配石遺構が発見された。中期前・中葉の配石遺構は、小石組が集合した状況で、ケルン状、石囲い炉状、環状列石等種々の形状があり、土壙や埋甕も伴っており、明らかに配石墓と認められた。また、中期後葉の配石遺構は、径30メートルほどと推定できる大円形配石と幅数メートルほどの帯状列石とから構成されるものとみられた。この大円形配石及び帯状列石は、共に小石組が集合したものであり、土壙や埋甕を伴う配石墓が集合した結果として形成されたものといえるようであった。

ここで、住居跡発見場所も考慮しながら、滝戸遺跡を復元してみると、西から東に向かって低くなる傾斜面の西側には竪穴住居跡群があり、東側には墓地としての配石遺構が設けられており、こうした基本構造は縄文時代中期前・中葉に成立したようである。富士山の噴火は比較的活発な時期で火山灰の降下があり、東側の低地に設けられた配石遺構の地点には水による運搬作用で特に厚く堆積し、遺構の埋没を進めた。中期後葉になり、新しい配石遺構が形成され始めるが、そこでは大円形配石に葬られる人と外側の帯状列石に葬られる人の区別が生じていた。採集文化の発展は、少なくとも墓地において一定の区別をする必要がある社会をつくり出したといえるようである。このころ、上野の千居遺跡や杉田の滝ノ上遺跡でも広大な配石遺構が造られていた。

（2）採集社会の繁栄と衰退

石器からみた狩猟文化と採集文化については、既に述べた。ここでは、採集文化の発展がもたらした縄文社会の変化についてみたいと思う。

縄文時代中期から後期にかけての遺跡は、数でいえば、市内の全遺跡の約半数を占める。やや詳しくみると、縄文時代中期初頭の遺跡は少ないが、中期前半から中葉になると遺跡が増え始め、中期後半にはそれこそ爆発的といえる増加状況をみせ、こうした様相は後期前葉まで継続するのである。土器型式からみると、中期では中部山岳地方の藤内式期（関東では勝坂式期）から増え始め、同様に曽利式期（加曽利E式期）に爆発的に増大し、後期前葉の関東地方の堀之内Ⅰ式期まで継続するのである。そして、後期中葉、土器型式では堀之内Ⅱ式期以降、市内の遺跡は一斉にその姿を消し、晩期も含めてわずかな土器片が混在して発見されるに過ぎない状況になるのである。

こうした縄文時代中・後期における遺跡の在り方は、中部山岳地方から南関東地方や伊豆半島地方にまで共通する特徴であり、採集文化が生み出した社会状況を反映するものとされる。それに続く縄文時代後・晩期の遺跡は、遠州灘以西や相模湾以東の海岸部に大貝塚を築いて大きく漁撈に依存する社会に転換するのである。

富士宮市内の遺跡は、縄文時代中期から後・晩期における縄文文化の大きな転換の中で、中期的な採集文化に、その隆盛を誇り、後・晩期的な漁撈文化は形成されなかったのである。市内の遺跡は、縄文社会の大きな変化に適応しながら、少なくとも富士南麓地域では富士山の噴火に大きく影響されたことも認められるようである。

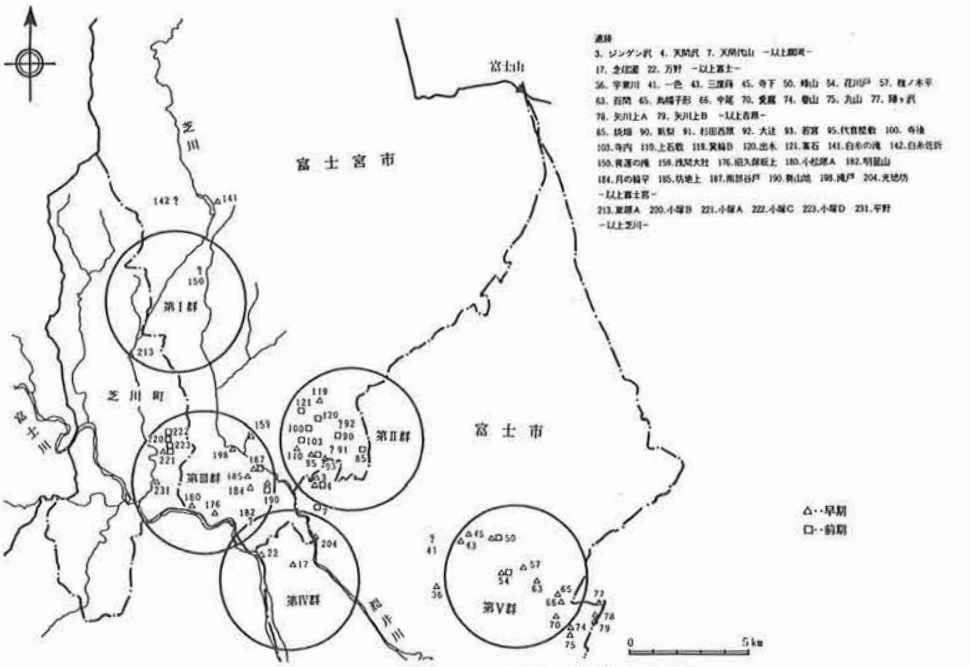
この地域では、現在の表土層となる黒色土の下に、俗に富士マサと呼ばれる火山灰層がある。この層は、黄褐色から灰褐色を呈し、硬質で水を通さない特徴をもち、大沢ラピリ層と呼ばれて富士山西南麓に広く分布する。年代は諸資料からB.P2.700 年（^{14}C年代で1950年を基準とする。）とされるが、調査所見によると、弥生時代中期初頭の遺構はこの層を切り込み、縄文時代後期前葉の遺構はこの層の下部に位置することが確実である。問題は後期中葉から晩期の遺構や遺物との関係であるが、現状でそれを確認できるデーターはない。この地域における後期中葉以降の遺跡の急激な減少は、富士山噴火による厚い火山灰の降下が採集社会の存続を不可能とするほどの自然破壊をもたらした結果とみてよいようである。

（3）縄文時代生活圏の発展

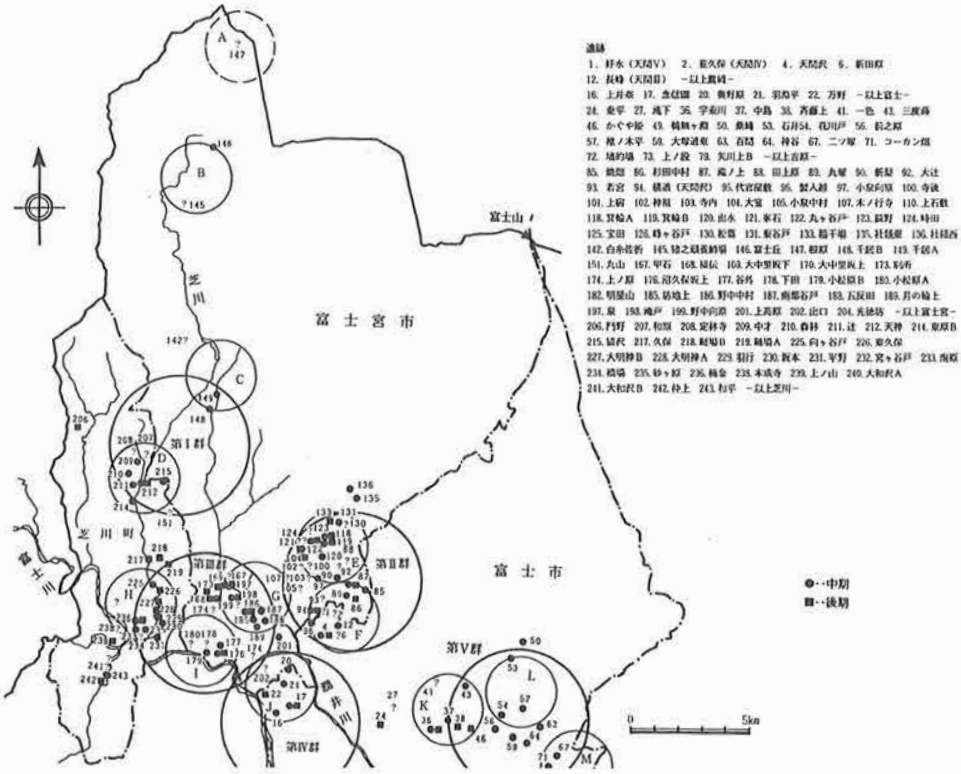
遺跡は、一つで単独で存在することはない。いくつかが、まとまりをもって群をつくり、自然に働きかけるのである。このような遺跡のまとまりを遺跡群といい、それを縄文人のテリトリー、生活圏と呼ぶことにする。

富士宮市を含む岳南地域における生活圏を検討してみると、早・前期遺跡では半径３キロメートル、中・後期では半径1.5 キロメートルほどの範囲としてとらえることができた。図－３に早・前期の生活圏を第Ⅰ群～第Ⅴ群とし、図－４に中・後期の生活圏をＡ～Ｍ（グループと呼ぶ。）として示した。後者の図中に早・前期の５群を記入したのは、中・後期の生活圏がその延長上に成立したとみたいからである。

各群及び各グループは、長期間継続して規模も大きく、それぞれの中核となる遺跡とその周辺で、ある時期に、多くは一斉に形成され、土器型式で１～２型式ほどに収まる遺跡とに区別される。市内を中心に代表的な中核遺跡をみると、早・前期には第Ⅱ群の若宮・代官屋敷遺跡及び第Ⅲ群の奥山地遺跡が、中・後期にはＥグループの箕輪遺跡、Ｆグループの富士市天間沢遺跡及びＧグループの滝戸遺跡が認められる。そのような中核遺跡相互の距離は、早・前期には約６キロメートル、中・後期には約３キロメートルを測るという共通点を持つのである。以上のように図式化してみた縄文時代の生活圏は、狩猟と採集の文化に基づく縄文社会における何を反映したものであろうか。今後の大きな課題である。



図－3　富士山南麓地域における縄文時代早・前期の遺跡と生活圏



図－4　富士山南麓地域における縄文時代中・後期の遺跡と生活圏

5　弥生文化から古墳文化へ

（1）渋沢遺跡と弥生人の移動

渋沢遺跡は、潤井川と風祭川の合流点の東側、富丘小学校の東隣にある。昭和37年（1962）に、荻精吾氏の採集品が、小野眞一ほかによって資料紹介されて以来、弥生時代中期初頭の貴重な遺跡として広く知られてきた。

この遺跡の一部が道路工事のため、昭和57～58年に発掘調査され、土器棺墓２基と土壙９基が発見された。土器棺墓及び土壙は、弥生時代中期初頭を中心に、三河以東の東日本に広く分布し、特に前者は県中東部の初例であった。土器棺とは、壺や甕に人骨を納めて棺として用いるものであり、容量から人体が納まるはずがないから、一度埋葬して白骨化したものを再び葬ったものとし、再葬墓と呼んでいる。

渋沢遺跡には多くの採集土器があり、それらの性格を考える上で、再葬墓の確認は重要な意味をもつ。発見された２基の土器棺墓は壺と甕の組合わせ及び甕単独の２種であったが、一般に、中期初頭になり、農耕文化が定着してくると、貯蔵形態である壺が多用されるようであり、本遺跡にみられる甕の使用は後進性を示すものと考えられている。いずれにしても、本遺跡の出土土器のうち完形にちかいものは、再葬墓として使用されたことになる。

石器では、石鏃とされる大型打製石斧や不定形石器が主力で、縄文時代の伝統を濃厚に残す。遺跡の立地をみても、この時期の遺跡は大きな台地から突き出す小さな舌状台地の先端にあり、背景には採集のための台地を、前方には水田のための低湿地を併せ有するものである。新しい要素として磨製石包丁があるが、東海地方ではなく、中部山岳地方に分布するものと同類であった。また、この磨製石包丁は、よく研ぎ込んで幅が狭くなっており、前東北大学山田しょうの分析によると、稲刈りに実用した痕跡はみられないという。その使用法などは、今後の検討課題となろう。

ところで、近隣で渋沢遺跡と同時期の遺跡をみると、富士川町の山王遺跡、富士宮市の別所遺跡及び押出遺跡がある。山王遺跡は、縄文時代晩期の遺跡で弥生時代前期の土器を併せもつことが知られており、今回の渋沢遺跡の調査により、一部同類の土器の存在が確認された。別所遺跡は、前回の遺跡地名表調査において、初めて弥生中期初頭の土器破片が地表面採集され、渋沢遺跡と同時期に出発した遺跡であることが判明した。押出遺跡は万野風穴付近で昭和63年に発見されて平成３年に発掘調査を受け、渋沢遺跡の最盛期に共通する内容を持つことが確認された。これにより、山王遺跡の最盛期が別所遺跡及び渋沢遺跡の出発の時期に、渋沢遺跡の最盛期が押出遺跡に共通することが明らかになった。

各遺跡の位置をみると、山王遺跡は、渋沢遺跡の南10キロメートル弱で富士川右岸にある。別所遺跡は、渋沢遺跡の南３キロメートル弱で、富士川の支流潤井川の左岸にあり、

その支流風祭川との合流地点の東隣に位置する。押出遺跡は、渋沢遺跡の北東3キロメートル弱で、風祭川の右岸に存する。

この地域における最初の弥生文化は、駿河湾から富士川をさかのぼった山王遺跡で始まり、次に同水系の潤井川をさかのぼって別所遺跡と渋沢遺跡を形成して弥生中期初頭の最盛期をもたらし、更にその支流風祭川をさかのぼって押出遺跡を経営したものと考えらるのである。

弥生文化は、新しい米作りの技術を持つ弥生人が船で海を渡り、河川へ入り、細流(せせらぎ)の音を聞きながら尾根をさかのぼって運んだものという。富士宮の弥生文化も、このような情景を思わせるに十分である。

（2）台地に登る遺跡と古墳社会

弥生時代中期初頭の遺跡が台地縁辺から突き出す小舌状台地の先端に占地し、低地での水田耕作を営みながらも縄文的な採集にも力点を置いたことは既に述べた。ところで、中期前半以降の遺跡は一般に台地縁辺から降り、低地での水田耕作に大きく依存するが、この時期の遺跡は富士宮市内では発見されていない。遺跡は、吉原方面の低地に進出し、広大な水田を形成するものと思われる。

そうした傾向は後期に入っても基本的には変化しないが、富士宮市内にも、遺跡が再びみられるようになる。市内ではこうした遺跡として、黒田の田中遺跡、泉遺跡及び大宮の羽衣町遺跡がある。その位置は、弓沢川の運搬した土砂が潤井川をせき止め、現市街地南側の潤井川沿い一帯に形成された湖沼地（仮に「古大宮湖」と呼ぶ。）周辺の低湿地らしいということになる。田中遺跡は北から南へ走る微高地上にあり、泉遺跡は潤井川の形成した自然堤防上を占め、羽衣町遺跡は台地末端部が低湿地と接する位置にあるから、富士宮で最初の後期弥生人は古大宮湖周辺の低湿地内で、その微高地を選んで定着したとみられるのである。

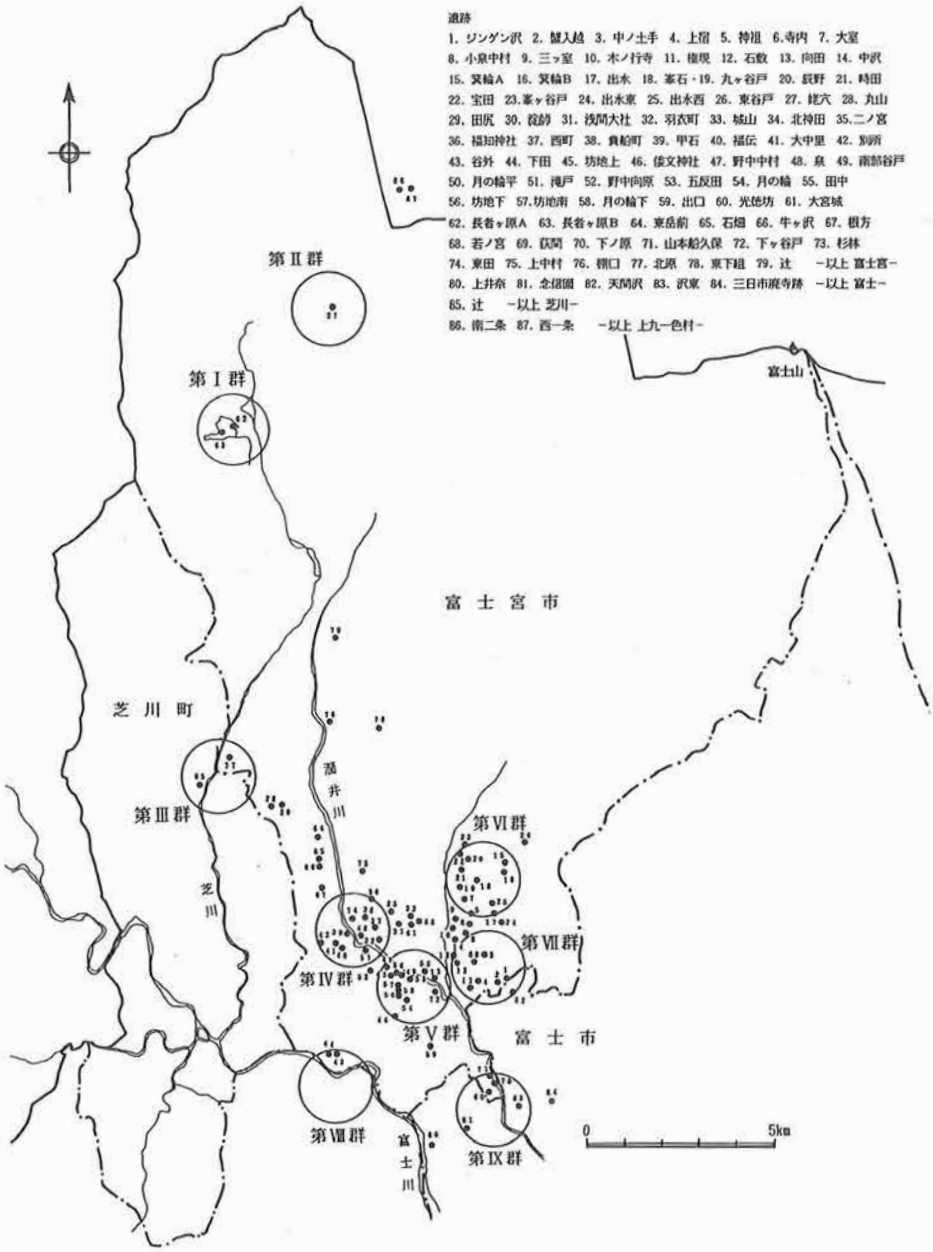
もっとも、古大宮湖が、確実に弥生時代後期に存在したという直接的な証拠はないが、現海抜で110 ～114 メートルに各遺跡が立地するから、ほぼその付近までが古大宮湖の範囲ということになる。

ところで、富士宮市における弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡数は、51遺跡を数え、全遺跡の28パーセントとなる。こうした爆発的な遺跡の増加は、社会が激動し、新しい古墳時代をつくり上げる社会の状況を物語るものと解してよい。いま、一部市外の遺跡も含めながら、この時期における生活圏を検討してみると、9群に分けることができた。群とは遺跡のまとまりであり、その範囲、すなわち、テリトリーは半径1キロメートルの正円で表すことができた（図－5）。

第Ⅳ群の泉遺跡、第Ⅴ群の田中遺跡、第Ⅵ群の丸ヶ谷戸遺跡及び第Ⅶ群の天間沢遺跡（富士市）が相互にほぼ2キロメートルの距離を測り、各群の初出遺跡として共通してい

ることに注目できる。このような各群と各遺跡の相互関係をみるため、比較的内容が明らかな群について表－３を作成してみた。

富士宮の弥生時代後期の遺跡は、前半期に古大宮湖の周辺で第Ⅳ・Ⅴ群をつくり、後半期にはそれらが台地上に進出し、古墳時代に入ると第Ⅳ・Ⅴ群における遺跡数の爆発的増加と第Ⅵ・Ⅶ群の新たな独立がみられるのであった。すなわち、Ⅳ・Ⅴ群で始まり、Ⅵ群へ、更にⅦ群へと拡大した状況がわかる。同様のことは、Ⅰ・Ⅱ群でも指摘できそうであり、



図－５　富士山南麓地域における弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡と生活圏

表－3　弥生時代後期～古墳時代前期〈生活圏〉の発展

時期		第Ⅳ群 沖積地	第Ⅳ群 台地縁	第Ⅳ群 台地上	第Ⅴ群 沖積地	第Ⅴ群 台地縁	第Ⅴ群 台地上	第Ⅵ群 沖積地	第Ⅵ群 台地縁	第Ⅵ群 台地上
弥生時代後期	前半	[泉]→ 羽衣町			田中					
	後半	羽衣町→		[滝戸]		五反田	[月の輪上]			
古墳時代前期	前半	[泉]	坂下 甲石	別所		[南部谷戸] 坂地下	[月の輪平] 坂地上 坂地南 [月の輪上]		[権現]→ [上石敷]→	[丸ヶ谷戸]
	後半			野中向原		[月の輪下]			石敷	[天間沢]（第Ⅶ群）→

[　] は発掘調査が実施された遺跡

Ⅰ群の長者ヶ原遺跡は弥生時代後期後半に始まり、Ⅱ群の姥穴遺跡は確実に古墳時代のものといえる。長者ヶ原遺跡は現在の田貫湖のほとりにあるが、その田貫湖は昭和10年代に田貫沼湿原をせき止めて人造湖としたものであるから、長者ヶ原遺跡の立地条件は先のⅣ・Ⅴ群に共通するものといえる。

いずれにしても社会がその活力を噴出させ、その秩序を変革し、新しい時代を創出する具体的な姿を、ここでは遺跡群の成立と発展、新遺跡群の創出にみてとることができる。

ここで、当時の集落、ムラをみておこう。表－4によると、竪穴住居跡が最も多く発見されたのは、古墳時代前期前半から後半に及ぶ月の輪平遺跡の117基である。やや詳しくみると、117基の竪穴住居跡のうち、規模を測り得るものは104基であり、これを床面積で区分すると、大型住居跡（45平方メートル以上）7基、一般住居跡85基及び小竪穴遺構（9平方メートル以下）12基という。

もちろん、住居跡は、重複が多く、117基が同時に存在したものではない。検討の結果によると、本集落は6期に分けられ、1時期には5～6基の住居跡グループが2～3単位ほどで10数基程度となり、この時期ごとに1基の大型住居跡が含まれていたようである。すると、月の輪平集落は、大型住居跡にかかわる強力なリーダーが存在し、その下に2～3グループの住居跡を率いていたことになる。こうした集落が6～7期継続するのであるが、その最末期にどうも大型住居跡を失ってしまうらしい点に注目しておきたい。大型住

居跡に象徴される強力なリーダーが集落の成立時から継続し、その最終段階において存在する意味を失ったとすると、集落内で各グループの自立化が進み、より広範な、より強力な統制力が本集落を覆った結果かと思われる。そして、月の輪平集落は断絶を迎える。こうした状況が、少なくとも、月の輪平遺跡にみる古墳時代前期前半から後半までに認められる社会的変化といえるようである。

表－4　弥生時代後期～古墳時代前期の集落

地区	遺跡名	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	溝状遺構	方形周溝墓
富士宮	権現	6基	2基		基
	上石敷	8(1)		有	
	月の輪平	117(7)	2		
	南部谷戸	12	1		4
	月の輪上	34(1)	7	有	
	月の輪下	4			
	滝戸	35	2	有	19
	泉	21		有	
富士	天間沢	11(1)	1	有	
	三新田	34			
計		282(10)	15		23

竪穴住居跡の（　）は大型住居跡

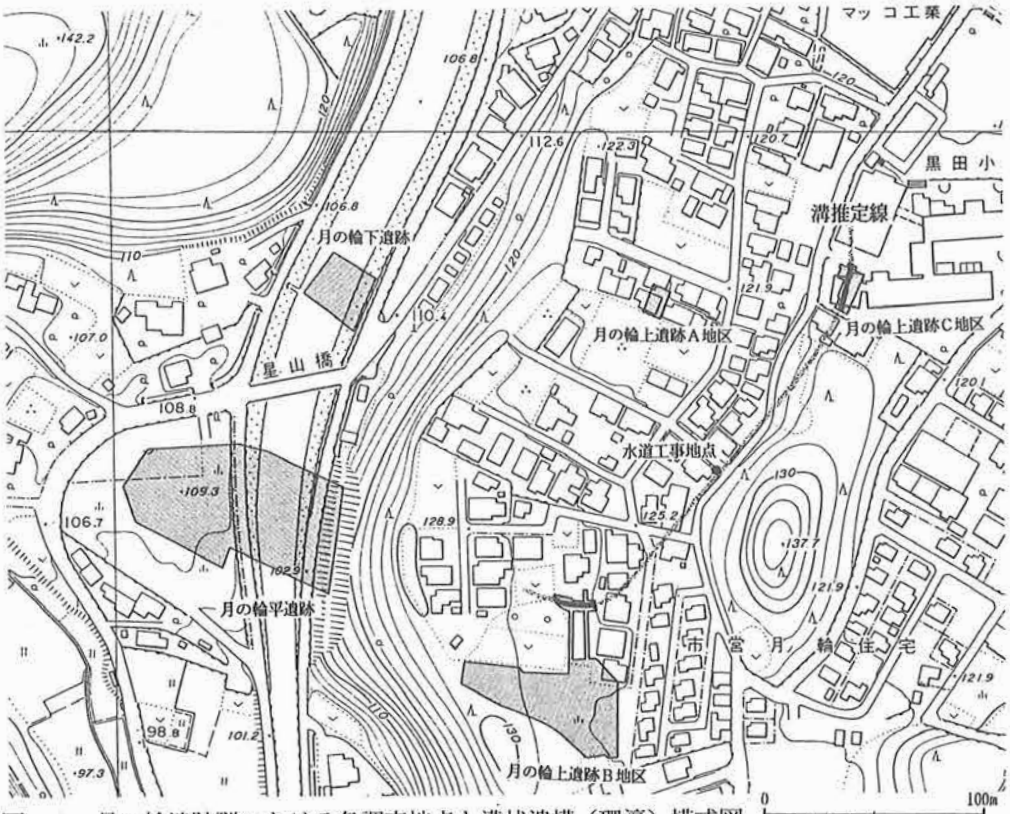
（3）台地にみる溝と戦争

月の輪上遺跡は、富士宮市星山字月の輪にあり、黒田小学校から南側一帯の台地を占めている。過去には、3回の発掘調査と1回の水道工事による土器採収が、知られている。ここで注目しておきたいのは、B・C地区において発見された弥生時代後期後半の溝である。B地区の溝は、幅1.0 ～1.1 メートル、深さ0.8 メートルほどで、その断面は側面が直線状の傾斜面で底面が狭い、いわゆるV字溝であり、長さ20メートルほどが発掘された。その溝の平面形は南側にやや張り出す孤状であり、特に東端部の形状は北側に曲がるコーナーを推定させた。C地区では、幅1.0 ～1.7 メートル、深さ0.8 ～1.0 メートルほどで、やや保存状況がよく、直線状で南北方向に長さ21メートルが発掘された（図－6）。

この両溝は、土器の出土状況や溝内埋土の在り方もよく共通し、連続する同一の溝と判断できるものであった。また、こうした条件は水道工事地点においても同様であり、溝の延長は確実であろうと思われた。これにより、月の輪上遺跡の溝は、遺跡の中央を南北方向に走り、台地中央に残る小丘の西裾部を通って西側に曲がっていたものと推定できる。

ところで、こうしたV字溝を伴う集落は、一般に環濠集落と呼ばれる。環濠集落とは、幅広く、深いV字溝で集落内の遺構をとり囲んだものであるが、弥生時代前期から後期まで、北九州から北関東にまで及び、県内では浜松市伊場遺跡の三重の溝や南伊豆町日詰遺跡の例が有名である。排水の機能を担う例もあるとされるが、基本的には集落防衛のための設備と解されている。月の輪上遺跡では、A・B地区とも竪穴住居跡を有し、A地区では溝より西側に、B地区では溝より南側に占地しているから、溝の内側の集落を推定することは難しい。しかし、先に触れた台地中央の小丘が溝の東側にあることを考慮すると、集落は溝より東と南側に存在した可能性が認められてよいと思われる。

表－4によると、溝は5遺跡にあり、別に上井出の長者ヶ原遺跡でも発見されているが、そのうち小泉の上石敷遺跡と天間沢遺跡の例が古墳時代であり、ほかは弥生時代後期に属する。この地域では、溝は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて存在するのである。



図－6　月の輪遺跡群における各調査地点と溝状遺構（環濠）模式図

また、遺構の保存状況からみると、泉遺跡例と上石敷遺跡例が良好であり、天間沢遺跡が最も悪い。

さて、日本歴史の上で、人々が濠を巡らして自らの力で防衛するのは、この時代と戦国時代のみである。当地方の弥生時代から古墳時代前期も、そうした戦乱の時代と考えられるのである。いわゆる魏志倭人伝によると、2世紀の中ごろから後半にかけて倭国は大いに乱れ、3世紀中ごろ（243 ）には邪馬台国の女王卑弥呼が狗奴国と戦って魏に援助を求めたという。

環濠集落は、少なくともこうした政治的不安定の中で成立するものであり、当地方における環濠集落の出現は、年代的には邪馬台国と狗奴国の戦争に合致するものといえるようである。月の輪上遺跡のV字溝が、こうした状況の社会的影響を受けた結果であることは認められるであろう。あわせて、前述した台地上への集落の進出も、基本的にはこうした戦争下にあってつくられた集落と考えられるのである。それらの遺跡も、高地性集落と呼ばれる近畿地方の遺跡に類似する状況にあったといえよう。

（4）墓と戦争の指導者

人々が、集落を濠で囲み、台地上に移してもそれだけでは戦争はできない。

丸ヶ谷戸遺跡は、富士宮市大岩字丸ヶ谷戸にあり、平成２年度の発掘調査において、県内初例の前方後方型周溝墓が発見され、一躍広く知られるようになった。ここでは、富士山麓末端部に発達する舌状台地の先端、幅100 メートルほどの東側70メートルに、東から前方後方型周溝墓、大型竪穴住居跡及び方形周溝墓（やや古い竪穴住居跡に重複）が横列していた。

一般に、方形周溝墓とは、弥生時代から古墳時代までにみられる墓制であり、多くは溝を方形に巡らし、その内側に１基から数基ほどの土壙を設けて遺骸を埋葬する。当地方では、弥生中期後半から古墳時代前期までに特に多い。市内では、滝戸遺跡が弥生時代後期、黒田の南部谷戸遺跡が古墳時代前期であり、各ムラの長（オサ）クラスの墓とされる。

前方後方型周溝墓は、こうした方形周溝墓群に混在して発見される例が多く、その墓域内での特別な状況も指摘されていないようであるが、発見例は極めて少なく、全国でも数十例に過ぎないと思われる。関東地方に多く発見されており、畿内やその周辺にも及び、東海地方では例が増えつつある。

丸ヶ谷戸遺跡例は、時期は古墳時代前期前半であり、規模は全長26.2メートル、後方部長さ17.8メートル、同幅16.3メートル、前方部長さ8.4 メートル、同幅6.5 メートルを測り、これに幅1.3 ～4.0 メートル、深さ0.7 ～1.2 メートルほどの周溝が巡っている。本例は、やや小型で、前方部が小さく、周溝が全周するタイプであり、方形周溝墓に混在する在り方も普遍的である。

丸ヶ谷戸遺跡では、前方後方型周溝墓のほか、竪穴住居跡２基、方形周溝墓１基が調査されたことは、既に述べた。竪穴住居跡01は、胴張りの隅丸長方形で平面形からみればやや古いタイプであり、調査所見でも、重複する方形周溝墓より古いとされるが、遺物の出土はほとんどない。同02は、方形プランでより新しく、方形周溝墓及び前方後方型周溝墓と土器の接合関係を有する。規模は8.81×8.23メートルで、この数値は市内では最大であり、県東部地域においても２番目の大きさとなる。また、位置関係からすると、本住居跡は、前方後方型周溝墓とは共存できても、方形周溝墓とは共存できない。常識的には、両周溝墓が共存して墓域を形成するのだから、少なくとも、その極めて直前まで存在したことになる。

これらの遺構群の土器を簡単にみると、外来系土器、すなわち、伊勢湾地方及び北陸地方の土器と同類のものが認められ、そうした土器類の比率が極めて高いことを特徴としている。

すると、丸ヶ谷戸遺跡は、前方後方型周溝墓及び超大型の竪穴住居跡02とともに、量質共に高い外来土器の受容という特徴が指摘できるようである。古墳時代前期前半になり、古大宮湖の近隣（前述の遺跡圏Ⅳ・Ⅴ群）から初めて離れ、大岩字丸ヶ谷戸（同Ⅳ群）に人々が移動した。そこでは、外来土器の受容に象徴される新しい文化や技術の発展があり、

社会は飛躍の段階を迎えた。あるいは、その人々が外来である可能性もあり、新しいタイプの前方後方型周溝墓を築く力は、旧来の集落やグループにも一定の影響力を行使できる存在であったと考えたいのである。戦乱の中で、外からの強力な統制力がこの地域に及び、時代を変革していく具体像がこの丸ヶ谷戸遺跡に現れたのである。すなわち、今までの外来土器に北陸系土器を新たに加えて波及させ得るような新しい社会的力が、こうした特殊な周溝墓をもたらしたといってよいのである。やや乱暴な言い方をすれば、それから半世紀ほど後には、吉原地域に大型の前方後方墳を築く豪族が出現するのである。

表－5　富士宮市内の古墳

地区	古墳群	基数	主な古墳	内容等
村山	元村山	1		五鈴鏡、地点不詳
小泉	三室神祖	4	大室	円墳、径15m 高さ2m 周濠幅2m深さ0.5m、横穴式石室
	寺内石敷	2	神祖山の神(1号) 虚空蔵社 寺内山の神	円墳
	若宮	10数(群)		破壊
阿幸地	舞々木	2	舞々木(1・2号)	2号破壊
淀師		1	行人塚	破壊
大中里	中里	1		円墳、金環・鉄鏃・直刀・馬具 須恵器、地点不詳
	南原	1		地点不詳
安居山	別所	3ヵ所(群)	別所1号	横穴式石室、頭椎大刀・ 銀象嵌鐔・馬具・鉄鏃・玉類・ 耳環ほか、破壊
			別所稲荷塚(2号)	円墳
			蛇塚(3号)	石室
沼久保	藪塚	1		破壊
黒田	月の輪	3	塚本	
			月の輪法印塚	破壊

6　別所古墳と大化の改新

（1）市内の古墳

古墳とは、高い盛土をもつ古い墓であり、高塚ともいう。歴史学では、弥生時代と奈良時代の間が、古墳時代であり、前期（4世紀）、中期（5世紀）、後期（6・7世紀）と分け、前・中期には大型古墳が、後期には小型古墳が集まった群集墳が盛行する。

富士宮市内には、前・中期の古墳はなく、今後の追加も見込めない。表－5に市内の古墳を集成したが、いずれも後期の小型古墳である。

表によると、市内には、10古墳群で、29基プラスαが数えられたようである。一般に、富士山南麓地域における古墳は、群として扱うことが難しく、ここではかなり無理に“まとまり”をつくってみた。別所（べっしょ）、三室神祖（みつむろかんぞ）古墳群や破壊された若宮古墳群などは、良好な群集墳を形成していたとみられる。

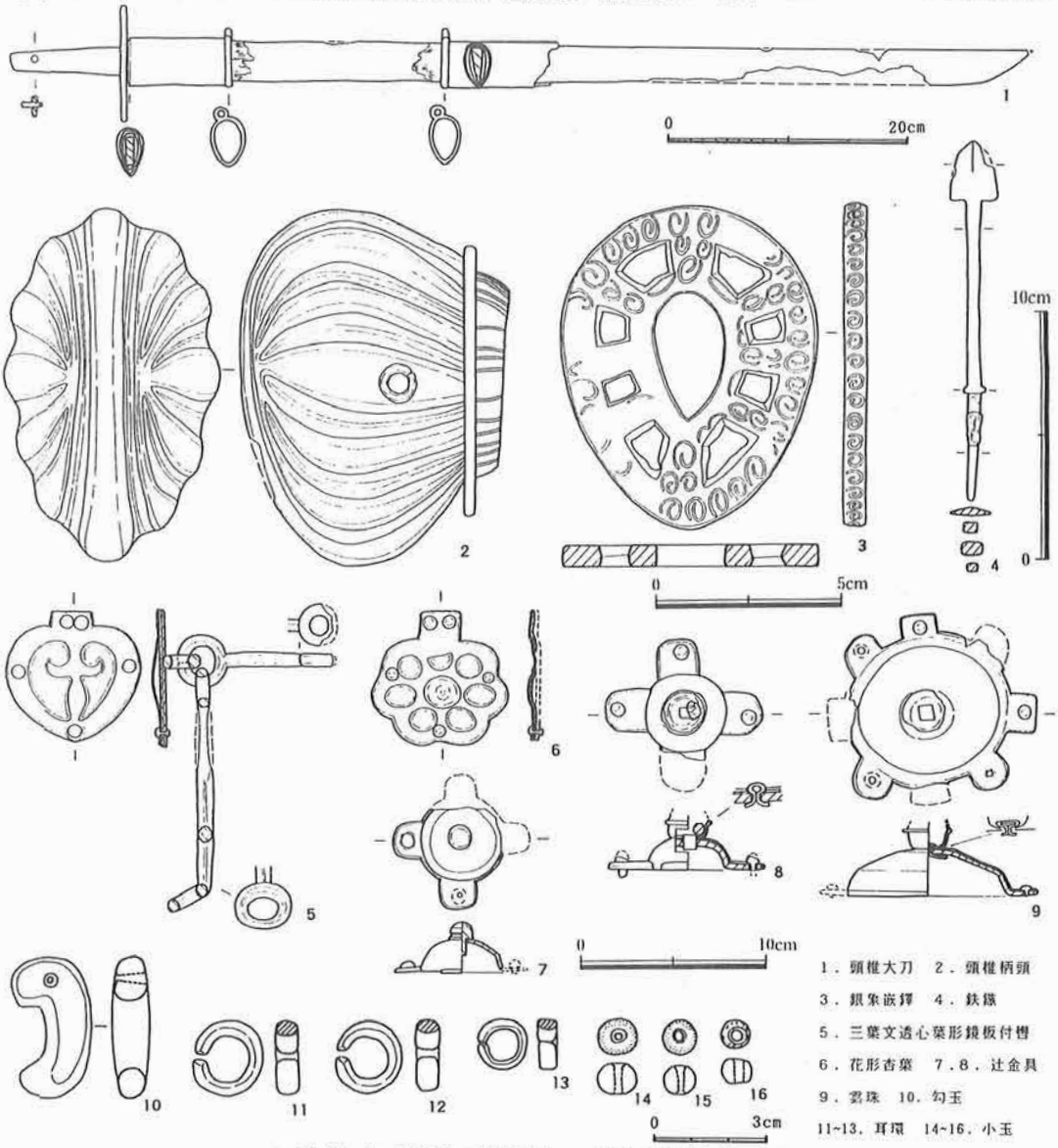
現存する古墳のうち、墳丘、石室又はその一部が残存するといえるものは、わずか9基のみである。大室、神祖山の神（1号）、虚空蔵社（こくぞうしゃ）、寺内（じない）山の神、舞々木（まいまいぎ）（1・2号）、別所稲荷塚（2号）、蛇塚（別所3号）及び塚本の各古墳である。なかでも、大室、神祖山の神及び別所稲荷塚古墳の3基が、保存良好であり、市内では、貴重な古墳といえる。

（2）“別所古墳”の副葬品と泉遺跡第2地点

昭和5年(1930)発行の『静岡県史』第1巻に「大宮町字別所の古墳」及び「余説」の項があり、別所1号墳についての記述や副葬品の紹介がある。その記述に基づき、『富士宮

市史』上巻などが古墳の内容、特に遺物について記述しているが、昭和59、62年に市・県教育委員会により、東京国立博物館の所蔵品調査が実施され、表－６の内容が明らかになった。

それによると、大刀３点（頭椎大刀１、大刀身２）、刀装具（鉄製銀象嵌鐔を含む。）、馬具、鉄鏃、装身具などがあり、総数を48点と数えてみた。この作業のなかで、旧県史の記載する環頭（双竜式）柄頭は頭椎柄頭の誤りで、清水市梅谷出土品であり、鉄製銀象嵌鐔とされた写真は長野県北佐久郡五郎兵衛新田発掘品であることが確認された。よく調べてみると、正確に記載された文献もあり、旧県史の記述及び写真の誤りをそのまま継承し



図－７　別所古墳（１号墳）の副葬品　－東京国立博物館所蔵品－

『静岡県史』資料編３考古三(1992)から転載補筆

た『富士宮市史』上巻の内容を訂正しておきたい。

ところで、今回の副葬品調査で明らかになった特徴点について述べておく。

頭椎大刀は、拵（つくり）をほぼ知ることができ、わずかに部品を欠くのみの優品である。

鉄鏃のうち１塊としたものは、長さ16センチメートル幅13センチメートルほどの大きさに鉄鏃が銹着したものである。現況で50～55本ほどが数えられるが、その断面形をみると、現況で22本ほどの分量を鉄の薄板でほぼ半円形に包んでいるようである。胡籙（腰に下げる矢筒）と思われ、一束は45本程度ということになる。

年代は、頭椎大刀や馬具類の構造から、古墳時代後期でも新しい時期であり、７世紀代に入るものといえる。

表－6　別所古墳（１号墳）の副葬品

名称		点数	備考
大刀 №01	頭椎柄頭	1	
	切羽	1	銹着
	縁金具	1	銹着
	縁金具	1	銹着
	鐔	1	
	刀身	1	装着
	鞘金具	2	装着（鋲付き）
	足金具	2	装着
	鎺	1	装着
大刀 №02	大刀身	1	
大刀 №03	大刀身	1	
刀装具	鐔	1	鉄製銀象嵌
	鞘金具	1	
鏃	鉄鏃	3	
	鉄鏃	1(塊)	50～55本を数える
馬具	雲珠	4	
	杏葉	5	
	鏡板	2	セット
	轡	2	セット
身体装飾品	小玉	5	
	勾玉	1	
	切子玉	2	
	耳環	8	
計		48	

以上により、別所古墳に葬られた豪族の姿を復元してみると、彼は村の長クラスの一族であり、金銅製の馬具で飾られた飾馬や金銅製の飾大刀を盛装に用い、多くの玉類や耳環（耳飾り）で身を飾り、多量の武具類を持ってムラ人を支配する武人であったといえる。

別所稲荷塚、大室、神祖山の神、虚空蔵社などの各古墳の被葬者も、基本的には、別所１号墳の豪族と同様の立場をもち、年代的にもその前後となろう。

次に泉遺跡第２地点にふれよう。昭和63年５月、わずか265 平方メートルほどの発掘調査で、竪穴住居跡24基ほかの濃密な遺構群が発見された。位置は、南流する潤井川が富士宮市大中里で大きく東方に曲折する付近の左岸側の微高地上にある。竪穴住居跡のなかには、古墳時代後期～奈良時代が６基、平安時代が４基あり、うち、第５号住居跡は古墳時代後期の良好な須恵器や土師器をもち、年代は７世紀中ごろと思われた。市内における初例であり、大中里や安居山地区の古墳群、特に別所１号墳の年代に一致する集落跡として注目に値する。

（３）スルガノクニと大生部多

富士宮市の南西部、潤井川右岸地域において、別所１号墳の豪族が権勢を誇り、泉遺跡に集落が経営されたころ、広くこの岳南地方にかかわる文字資料が現れる。『先代旧事本紀』の珠流河国造の条と『日本書紀』の皇極天皇３年(644) ７月の条とである。

前者は成務天皇のとき、「珠流河」国造が設置されたという記事であり、その領域は富士川以東黄瀬川付近までとされるから現在の富士市及び沼津市を中心とするものとなる。問題はその時期であるが、『先代旧事本紀』というのは平安時代初期に各地の古伝承を集めたものだから、国造制の成立はたぶん６世紀中葉前後というのが一般的な解釈である。

後者は、東国の不尽河の辺の人大生部多が虫を祭ることを村人に勧め、「此は、常世の

神なり。此の神を祭る者(ひと)は、富(とみ)と寿(いのち)とを致す」と教えたので、朝廷では秦造 河勝(はたのみやつこかわかち)を遣わしてこれを討ったという記事である。これは、富士川付近の地方豪族大生部多が中央豪族によって征服され、その政治的影響力を打ち破られてその支配域が中央の政治体制に組み込まれていく様相を伝えるものと解されるのである。

すると、6世紀中葉前後に成立した珠流河という地方勢力は少なくともその勢力下の一部について7世紀中ごろに中央政権による“統一”を受けたことになり、その直後に中央では大化改新が来るのである。大生部多事件は、大化改新前夜において、地方にみる新興勢力の台頭とそこに生ずる混乱を旧地方勢力－ここでは珠流河国造－が押さえきれず、中央政府が強圧する在り方として注目されるのである。

こうした在地勢力と中央政権の緊張関係の存在する時期が別所古墳の時期に一致するが、その7世紀中葉ごろに群集墳も大きな画期を迎える。厳密にいえば、県内でも遠江と駿河の群集墳では大きな相違が見られるようになる。遠江では、6世紀に築成を開始した群集墳が7世紀中葉をもって築成を中止し、追葬と墓前祭のみの段階に移るが、この変化は極めて斉一性が高く、強い社会的規制の結果をみてとることができる。駿河では、6世紀以来の群集墳は引き続いて築成を継続し、新しい群集墳も形成されて遠江にみられる社会的規制を読みとることはできない。ところが、7世紀後半になると、駿河でも、遠江でも、「五十戸(さと)」と表記する木簡の発見に象徴される律令制の進展が認められる点で共通する状況がみられるようになるのである。

別所古墳のころ、大化改新と律令制がもたらす地方における大きな変化は、すぐ間近まで立ち現れていたのである。

7　上石敷遺跡と律令時代

（1）上石敷、泉遺跡第2地点の集落

律令時代、すなわち、奈良、平安時代の遺跡が市内で発見されたのは、ここ10年ほどのことである。

上石敷遺跡は、富士宮市小泉字石敷にあり、その位置はＪＡ富士宮富士根支所の南側一帯を占め、富士山麓の裾野を形成する台地の末端部で、南隣は潤井川がつくる低地、西隣は弓沢川となる。ここで、昭和56年度に、8世紀後半の竪穴住居跡3基が発見された。泉遺跡第2地点については前述したが、古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡6基のうち第1・3・4号住居跡が奈良時代とみられ、平安時代4基もある。

ところで、泉遺跡第2地点は、弥生時代の竪穴住居跡を初め24基が重複しており、詳細な検討はやや難しいようである。上石敷遺跡は、竪穴数は少ないが一時期の遺構群であり、状況は良好であった。R－1 ～R－3 号住居跡と呼ばれ、その位置関係から、3基がほぼ南北方向に並んで各竪穴の南側に設けられた入口を通路で結んでいるか、又は3基いはが弧

状を呈して広場的空間を設けるかのいずれかとみることができるものであった。

竪穴住居跡の規模は、3メートル代でほぼ等しく、やや小規模なタイプとみてよい。一般的には、床面に柱を建てるための柱穴4本を設けるが、本竪穴住居跡にはそれがなく、簡略な屋根組みであったことがわかる。保存状況のよい2基にはカマドが設けられているから、各竪穴住居跡はそれぞれが独立した生活を営む単位、多分単婚家族から成立していると思われる。

竪穴住居跡間の距離は10メートルと15メートルを測るが、実はこの距離は近隣の同時代の集落のうち、富士市の天間代山遺跡の在り方に共通し、同東平遺跡のそれと大いに異なる様相をみせる。天間代山遺跡は、上石敷遺跡から東南2.5 キロメートルで8世紀代の竪穴住居跡9基が確認され、散在する集落の在り方が特徴的であった。東平遺跡は、天間代山遺跡から東南へ更に4キロメートル進み、竪穴住居跡235基、掘立柱建物58棟ほかが極めて密集した在り方を示した。こうした相違は、後者が公権力によって計画的に、例えば官衙や寺院の建設などのため、造営された集落（計画村落）であるのに対し、前者は各竪穴住居跡が周辺に園宅地を伴い、自然に成立した集落（自然村落）であることによると考えられるのである。すると、自然村落としての上石敷遺跡では、各竪穴がいわば個人経営の畑地を所有して自立化していることになり、密集する計画村落における隷属民とは異なる農業経営の段階にあることになる。

泉遺跡第2地点には、平安時代中期の竪穴住居跡4基がある。この時期の竪穴住居跡は柱穴もなく、小型化する傾向が目立つようであり、一般的には、律令制下における農村の疲幣を物語るものと解されるのである。今後の詳細な検討と資料増加を期したい。

（2）倭名類聚抄と郷名

律令国家の地方組織では、国・郡の下部組織として50戸を単位に里を置いた。この里制は霊亀元年(715) に郷に改名され、その下に郷戸内房戸を構成単位とする里を置いて郷里制に改編し、更に天平12年(740) に下部の里を廃して以後郷制が展開された。

こうした郷名を記録したものとして平安時代中期に成立した倭名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）という本がある。倭名抄と呼ばれ、いわば今日の百科事典のようなものであり、9世紀前半ごろの状況を良く示しているとされる。これによると、駿河国には、西から志太（しだ）、益頭（ましず）、有度（うど）、安倍（あべ）、廬（いほ）

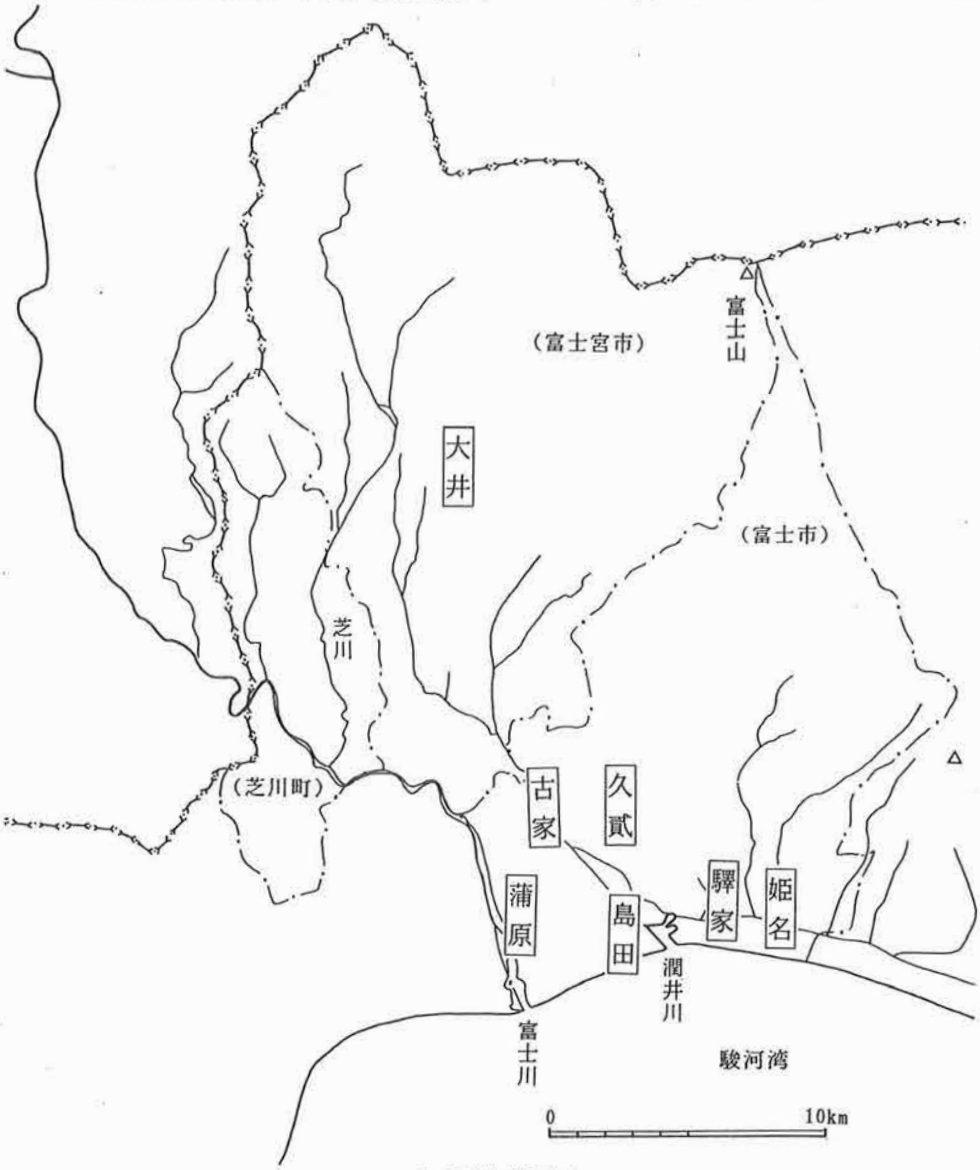
表－7　富士郡の郷名

刊本		高山寺本	
郷名	訓	郷名	訓
嶌田（シマダ）	之萬多	鳥田	
小坂（ヲサカ）	乎佐加	刊本に一致	乎佐加
古家（フルイヘ）	布留伊倍	刊本に一致	
蒲原（カムハラ）		なし	
驛家（エキイエ）		なし	
大井（ヲイ）	於保井	なし	
久貳（クニ）	久尒	刊本に一致	
姫名（ヒナ）	比奈	姫名	刊本に一致
神戸（カムヘ）		なし	

原、富士、駿河の７郡がある。うち、富士郡には９郷があり、表－７に示した。

この郷名の比定、すなわち、現在のどの辺りに当たるのかであるが、富士郡はそれが大変に難しい郡である。かなり無理な推定を重ねて強引に比定してみると、図－８のようになるが、それでも２郷は不可能であった。比較的確かとされるのが、久貳と姫名郷であり、前者は中近世までの久爾、後者は現在までの比奈という地名の残存を根拠とするのである。最近では、各地で木簡や墨書土器の出土により、比定根拠が確実になっているが、富士郡ではまだそうした資料はない。

郷は50戸構成ということから、郷域を確定していないが、従来の自然村落を２、３か所



図－８　富士郡古代要図

合わせて無理なく編成されたとみるのが妥当と思われる。里制では、郡を単位に50戸に分けられ、その最後の割き余りの編戸を余戸（あまるべ）としたりしている。また、当時の戸籍に残る戸（郷戸）は20人前後からなる例が多いことから、戸は班田と徴税の単位として法的に“擬制”されたものとする有力な考え方もある。いずれにしても、戸は竪穴一基ではなく、数基からつくられたものと考えてよいようである。

出土遺物のなかでは、鉄器に注目しておきたい。R－2 号住居跡から刀子１点が出土したのみであるが、当時、鉄器はかなり広く使用されたというのが最近の考え方である。官吏に鉄製農具が与えられることは広く知られているが、鋤鍬、鎌、刀子、手斧などはどの集落でもどの竪穴でも使われるというのである。鏃もよく出土するが、令によると兵役には自分で武器の一部を用意するのであるから、鉄器の普及はかなり高かったといえよう。

8　富士山三島岳経塚や大宮城跡

（１）三島岳経塚の遺物

昭和５年(1930)10月発行の『考古学雑誌』20－10 に、佐野武勇による「富士山頂三島ヶ嶽の経塚」という報告がある。続いて足立鍬太郎による経筒や経巻についての報告もあり、それらを総合すると、ほぼ次のとおりである。

昭和５年８月13日「頂上奥宮の参籠所建設の人夫等が建築用の砂礫採収のために、三島ヶ嶽の麓を削った所、埋経の故地らしき木槨、経巻軸、銅器、土器等を発見し」、さらに、８月16日「それより、更に精密なる発掘を命じたるに、三箇の経筒、多数の経巻及び土器等を発見した」という。

出土した銅製経筒及び壷形土器類は東京国立博物館の蔵品となっているが、経筒は破片で３本分あり、うち径28.2センチメートルを測る大型経筒の底には「承久」の文字が墨書されている。筒身のなかには、紙本経の残塊50巻分が遺存し、うち３巻が墨書で残りが朱書であり、紙片には「末代聖人」などと記すものもあった。それらの一部は写真で残存するが、いずれも存否は明らかでない。この末代聖人の名を記す遺物の発見は、『本朝世紀』などにみえる末代書写の一切経が富士山頂に埋納されたことを実証できる資料として貴重であり、その散逸が惜しまれる。

以上により、本経塚は、鎌倉時代初期の承久年間、13世紀初めごろ、富士山頂に埋経したものと考えられる。願主については判明しないが、富士山頂への埋経という大掛りな在り方から、かなりな有力者とみてよいであろう。

ところで、こうした書写経を埋納する経塚は、平安時代中期から鎌倉時代初期にかけてみられるもので、本来は末法思想の反映であるが、追善供養や現世利益を願う個人的動機のものも多い。いうまでもなく、中央の上層階級を初め地方における有力豪族による行為である。

（２）宝永噴火と二股村石経塚

経塚は、鎌倉時代末ごろになると、廻国する六十六部聖による経塚築成に移行し、室町時代まで続く。さらに、室町時代後半ごろから広まり、江戸時代に盛行する経塚が、一字一石経である。一石に一字から数文字の経文を墨書又は朱書し、一度に多数の庶民が結縁し、追善供養や現世利益を願うものである。

二股村石経塚は、市内粟倉字久保谷戸にあり、昭和60年に発見され、調査された。道路拡幅のため、釈迦如来立像と同座像の石仏２基を移転したところ、その下部から一字一石経が発見され、実に52,830個が出土したのである。

こうした一字一石経の発見はことさらめずらしいことではないが、本経塚は共存した石仏の銘文により、その年代や願意が明らかにされた貴重な例である。それによると、釈迦如来立像は若林喜兵衛が施主となって建立したが、それは「奉書写大乗妙典　石経成就宝永六巳丑年八月」と記されるから、僧宥伝が願主となって大乗妙典を書写して石経塚を成就（完成）させたことを記念し、宝永６年(1709)８月に建てたというのである。この建立には、「助願　若林甚兵衛　曽比奈　渡辺半左衛門」とあるから、曽比奈（富士市大渕）の人々までが助願、援助していることが分かる。こうして二股村や曽比奈村の人々が協力し、経塚を築成した願意は、宝永４年における富士山の大爆発（宝永噴火）にかかわるものと考えられ、被害の甚大さと人々の石経塚へ寄せる願いが読みとられるのである。

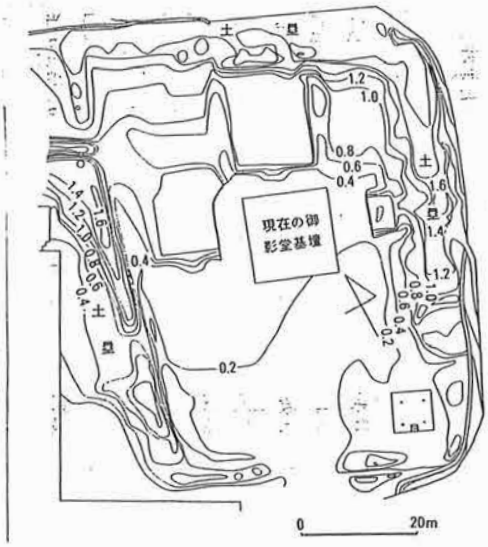
（３）大宮城跡や南条館跡

市内の中世城館跡としては、内野城跡（内野）、井出館（狩宿）、南条館跡（下条）、大宮城跡（大宮）、高原城跡（山本）及び吉野屋敷（山本）の３城跡、３館跡が知られている。

南条館跡は、下条字堀ノ内にあり、南条時光の居館を現在の妙連寺としたとされる。土塁と堀が良く残り、曲輪（くるわ）は不整形な方形で２段につくられている。小野眞一によると、規模は137×126メートルという（図-８）

大宮城は、築城年代が不明であるが、今川氏領有の築城で富士大宮司家がこれを維持した。城跡は、現在の市営球場を一ノ曲輪（近世城郭でいう本丸に当たる。）とし、その麓に居館である神田曲輪を置いて二ノ曲輪とし、背後の字棒杭（ぼうぐい）、現富士宮警察署付近に逆茂木（さかもぎ）を設けて北端とする連郭式の山城と推定される。

昭和59年(1984)に発掘調査された大宮小学校付近が、神田曲輪跡とされる。石塁、暗渠（あんきょ）、開渠（かいきょ）などによる排水路が、Ｌ・Ｔ字状の区画をつくり、その内部には縁石や礎石を配し、粘土を固めた土間造りの建物跡や堀立柱建物跡が発見された。遺物は12世紀から16世紀にわたり、平安時代末にはその経営が認められた。遺物のなかには、舶載陶磁器、漆器、北宋銭などもみられ、甲州街道の要所であり、富士浅間宮の門前町（神田市）としての繁栄を伺わせるものであった。富士大宮司家の居館跡として注目しておきたい。



図－8　南条館跡－昭和50年小野眞一氏実測－

9　村山口登山道や富士講碑群

（4）富士山村山口（大宮口）登山道　村山口登山道は、　おそらく室町時代に開らかれ、昭和39年(1964)に大宮口新道(カケスバタ口)が開さくされるまでの大宮口登山道であり、表口とも呼ばれていた。村山口登山道は、浅間大社→舞々木→大岩→二又→粟倉→村山→山中を経由するものである。村山は、室町・戦国時代には富士山法興寺が勢力を誇り、江戸時代には村山三坊があって特に関西方面からの登山者が多かったが、宝永4年(1704)の宝永噴火による被害が大きく、その後急速に衰退することになった。

村山口登山道は、現在の新六合目（旧四合目）で大宮口新道と合流するので、この間の調査を平成3、4年度の2か年にわたり、富士宮市教育委員会と富士宮市郷土史同好会が当たった。その結果、村山浅間神社から新六合目までの約13キロメートルのうち、二合目林道付近から約2キロメートルを除いたルートを確認し、13か所の建物跡等を発見した。　それらの施設を文政11年（1824）の『富嶽行記』ほかの諸記録と照合すると札打木、中宮八幡宮、高八太郎房、瀧本及び室大日堂・木戸室・茶屋室の5か所が確認できたとする。文献からはすべてで24施設を挙げることができるから、11施設が未発見、8施設が未比定、5施設が確認済ということになる。

村山口登山道の調査は始まったばかりであり、今後に残された補充調査、保存、活用などの課題は大きい。富士宮市としては特徴ある遺跡調査といえるが、そうした過程において施設や建物跡の測量、発掘調査など考古学的手法は極めて有効な役割を果せるものと思う。

（2）人穴の富士講碑群

江戸時代に入ると長谷川角行を開祖とする富士講が隆盛し、特に江戸を中心に関東地方で大きな勢力となる。角行が、富士講の基礎を開いたのは天正年間のこととされ、人穴にこもって修業を続けたとされる。これにより、人穴は、富士講の信者にとればいわゆる聖地となり、富士講の御師や先達が来訪し、修業に努める場となったのである。また、富士講分裂後は、村山光清派の統制下に置かれた。

人穴の入口付近に、現在200基余の石碑群があり、開祖角行や光清派の供養碑がみられる。あたかも墓石群であるが、各講や先達たちの記念碑とでもみるべきものと思われ、最近まで建碑が続けられている。地名では武蔵が約8割を超え、年代では享保、文化、文政、天保及び明治が多い。江戸庶民の富士講信仰を物語る貴重な遺跡である。

富士宮市遺跡調査報告

富士宮市遺跡調査報告

目　　次

1．NO. 85 福伝遺跡 ……146
2．NO. 35 箕輪Ａ遺跡 ……148
3．NO. 96 谷外遺跡 ……154
4．NO. 36 箕輪Ｂ遺跡 ……156
5．NO. 40 辰野遺跡 ……164
6．NO.142 押出遺跡 ……171
7．NO.105 泉 遺跡 ……174
8．NO. 24 権現遺跡 ……181
9．NO.130 長者ヶ原遺跡 ……184
10. 遺跡分布調査関連遺物実測図 ……226
§　付編
弥生時代Ⅳ－３様式について……227

凡　　例

1．弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類に使用している型式名は、月の輪遺跡群のそれに準じている。

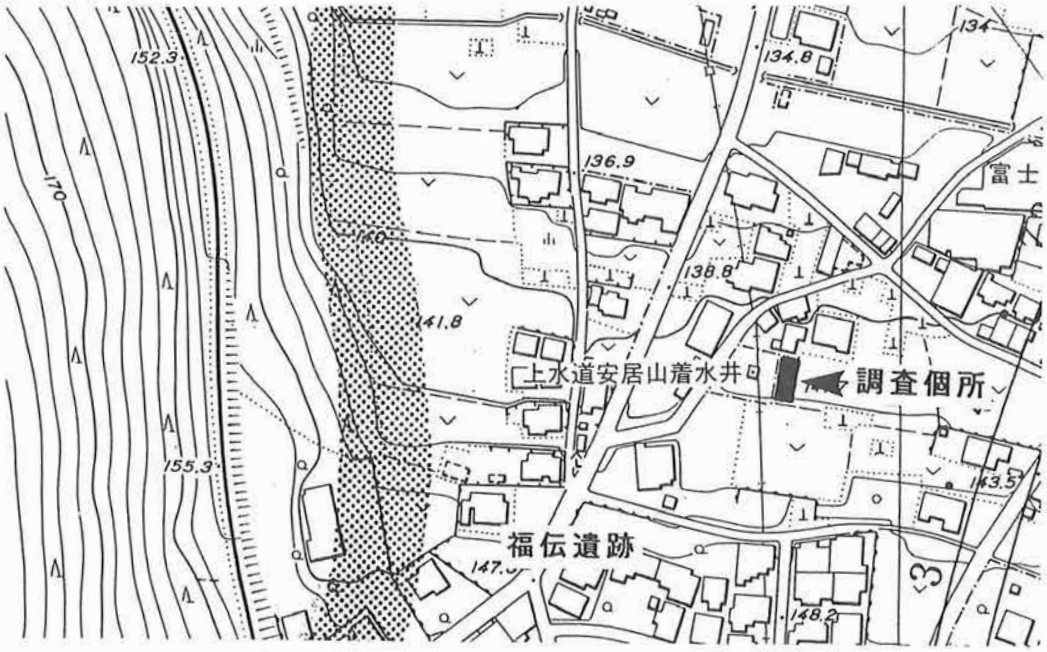
2．挿図の中で用いているスクリーン・トーンは、次の通りである。

▒・・・遺跡の範囲　　◍・・・焼土範囲

◍・・・粘土範囲

1　福伝(ぶくでん)遺跡

所在地　　富士宮市大中里字出口1079-6
調査目的　　大中里第２着水井築造工事に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査
調査期間　　平成２年４月９日から平成２年５月11日まで
調査面積　　８５㎡
調査主体　　富士宮市教育委員会
発掘担当者　馬飼野行雄



福伝遺跡位置図

遺跡の位置と環境

福伝遺跡は市域の南西を走る羽鮒、星山丘陵の接点の北向き緩斜面を南北500m、東西350mの範囲で包蔵され、遺跡中央付近の標高は140mである。眼下には潤井川が南東流し、さらによしま池等の湧水池にも恵まれ、遺跡の密集地帯であり、斜面伝いに南東側へ300m程すると岳南三大遺跡に称される滝戸遺跡が存在する。

調査の概要と結果

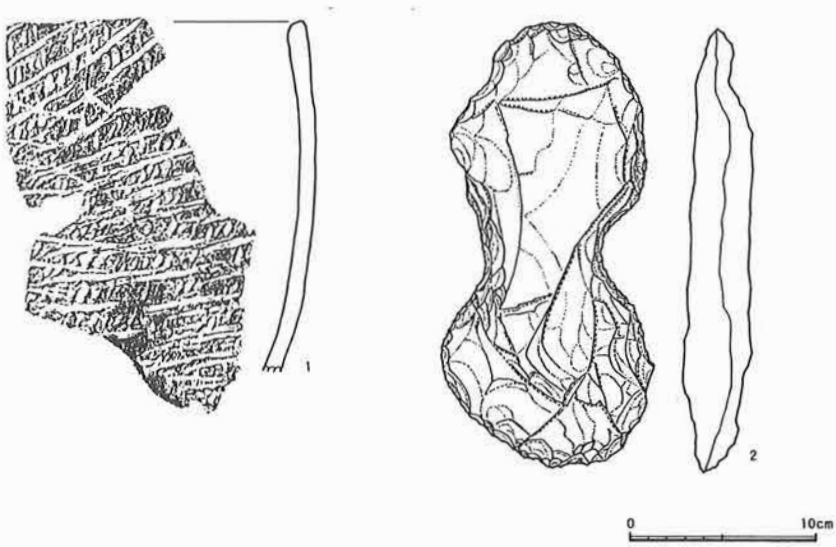
調査対象地は遺跡の中央部分に当るが、過去より精力的な畑作の実施で緩い斜面も段々に整形され、南半の包含層の大半はすでに削除されていた。また残る包含層内も８°に及ぶ傾斜地で人頭大～拳大の礫の流入が著しく、遺構は確認されず、下記の土器片が礫間に

万遍無く散らばって出土したに過ぎなかった。なお、打製石斧は予備調査時に礫層間より得たものである。

発見された遺物　－単位ｃｍ、ｇ（　）推定－

番号	名　称	形式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文　様	胎　土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	－	包含層	－	35	8	－	0.8	附加条縄文LR+R	石英、長石、粗砂	良	赤褐色	－

番号	名　称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備　考
2	分銅形石斧	包含層	安山岩	23.2	11.3	3.3	885.0	刃部に線状痕有り



福伝遺跡遺物実測図

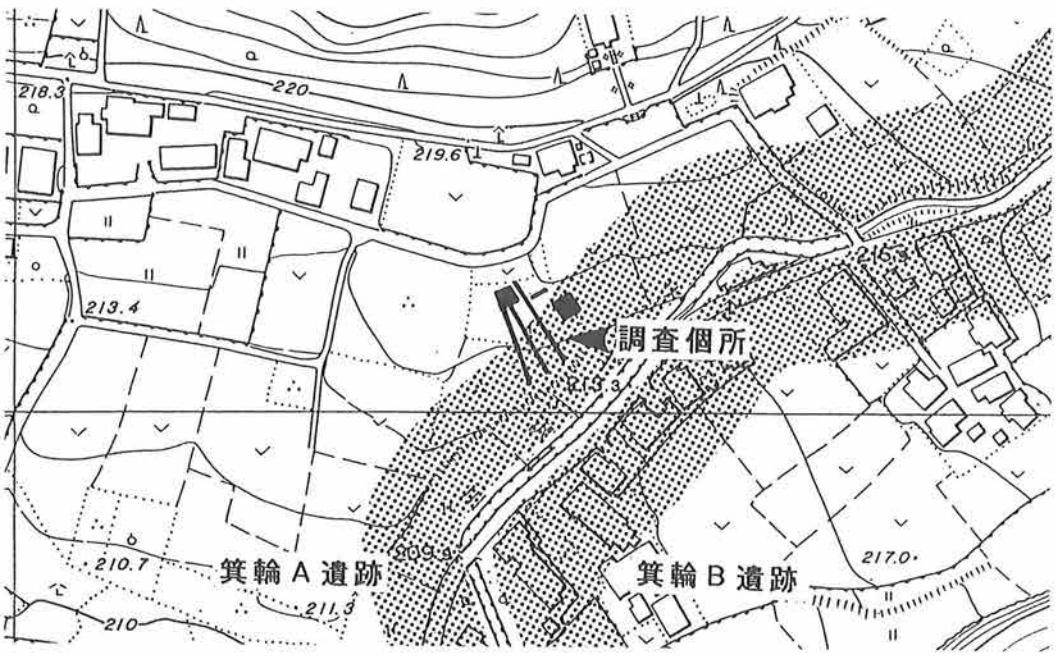
附加条縄文の施される土器の帰属については、近年、修善寺大塚遺跡（小野他1982）、三島市北山遺跡（鈴木他1986）等で、堀之内Ⅱ式土器を主体にした共伴が認められ、従来より言われてきた縄文中期末から加曽利Ｂ式期までの時間幅も比較的限定されてきたようである（瀬川1990）。また、分布についても伊豆半島から神奈川県西部が主体地域とされてきたが、富士市原田中島遺跡、本市の滝戸遺跡でも目立ち、富士川を越えて富士川町浅間林遺跡（佐野1981）、中野遺跡（稲垣1984）にも確認され、その西域もかなり拡大されてきている。　（馬飼野行雄）

小野真一他　1982『修善寺大塚』修善寺町教育委員会

鈴木敏中他　1986『北山遺跡』　三島市教育委員会
瀬川裕市郎　1990「縄文土器－東海地方－」『考古学ジャーナル328』
ニュー・サイエンス社
佐野五十三他 1981『浅間林遺跡発掘調査概報』静岡県静岡東土木事務所
富士川町教育委員会
稲垣甲子男　1984『中野遺跡』静岡県企業局　富士川町教育委員会

2.　箕輪(みのわ)A遺跡

所在地　富士宮市大岩字箕輪1305番地他
調査目的　茶木改殖に伴う埋蔵文化財の確認調査
調査期間　昭和62年３月16日～昭和62年３月30日
調査面積　１６０㎡
調査主体　富士宮市教育委員会
発掘担当者　馬飼野行雄



箕輪Ａ遺跡位置図

遺跡の位置と環境

富士山の南西麓に樹根状の低丘陵を発達させる富士根地区はその豊富な湧水とも相まって、稀有の遺跡密集地帯を形成している。なかでも箕輪A遺跡の占有する、標高220mの等高線で馬蹄形に描ける山間は南西面する絶好の日溜まりで、南北600m、東西300mのひろい包蔵範囲のなかからは戦前より豊富な遺物の出土が伝えられていた。特に、「岳南考古学会」の創始の一人でもある故佐野要吉先生が遺跡内に居住していたこともあり、その存在は早くから中央学会にも知られ（佐野1931）、現在もなお、本市滝戸遺跡、富士市天間沢遺跡とともに「岳南三大遺跡」として、市史、県史を始め、郷土史に貴重な資料を提供している。

調査の概要と結果

茶木の改殖予定地は、遺跡の東端を南流するサギ沢の湿地帯（水田）にせり出す南東向緩斜面で、その縁部を底辺にして台形状（東西50m、南北30m）に奥くまった区画で、傾斜にそった試掘溝４本で遺構の有無を追求した。その結果、北辺に勝坂式および曽利式土器の集中出土区が認められるものの、それ以南には及ばないことが判断された。そして、この時、起因者（富士宮市大岩1310－3佐野正躬氏)によって隣畑で掘られていた根菜貯蔵杭の坑底より堀之内Ⅰ式期の竪穴住居の一部が露呈したため、協議の上この部分の拡張発掘と、上述の土器集中区の保存をご好意の上、ご快諾をいただき、調査を継続して、重複する２棟の竪穴住居を検出した。

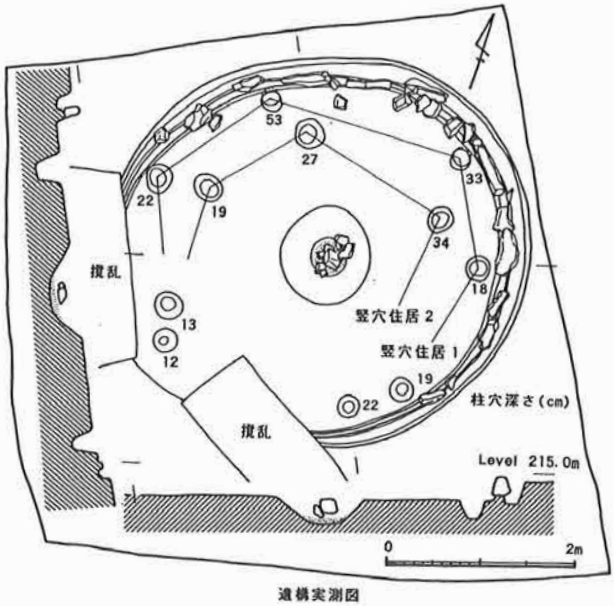
発見された遺構　－単位ｍ、（　）推定－

名称	形状	規模	長軸方向	残存状況	柱穴	炉	その他	重複	備考
竪穴住居1	略円形	4.5×4.1	N-30°-E	床面欠	(6)	－	－	2より古	－
竪穴住居2	略円形	4.2×3.8	N-30°-E	南西壁欠	(5)	地床炉	縁石	1の建て替え?	被火災?

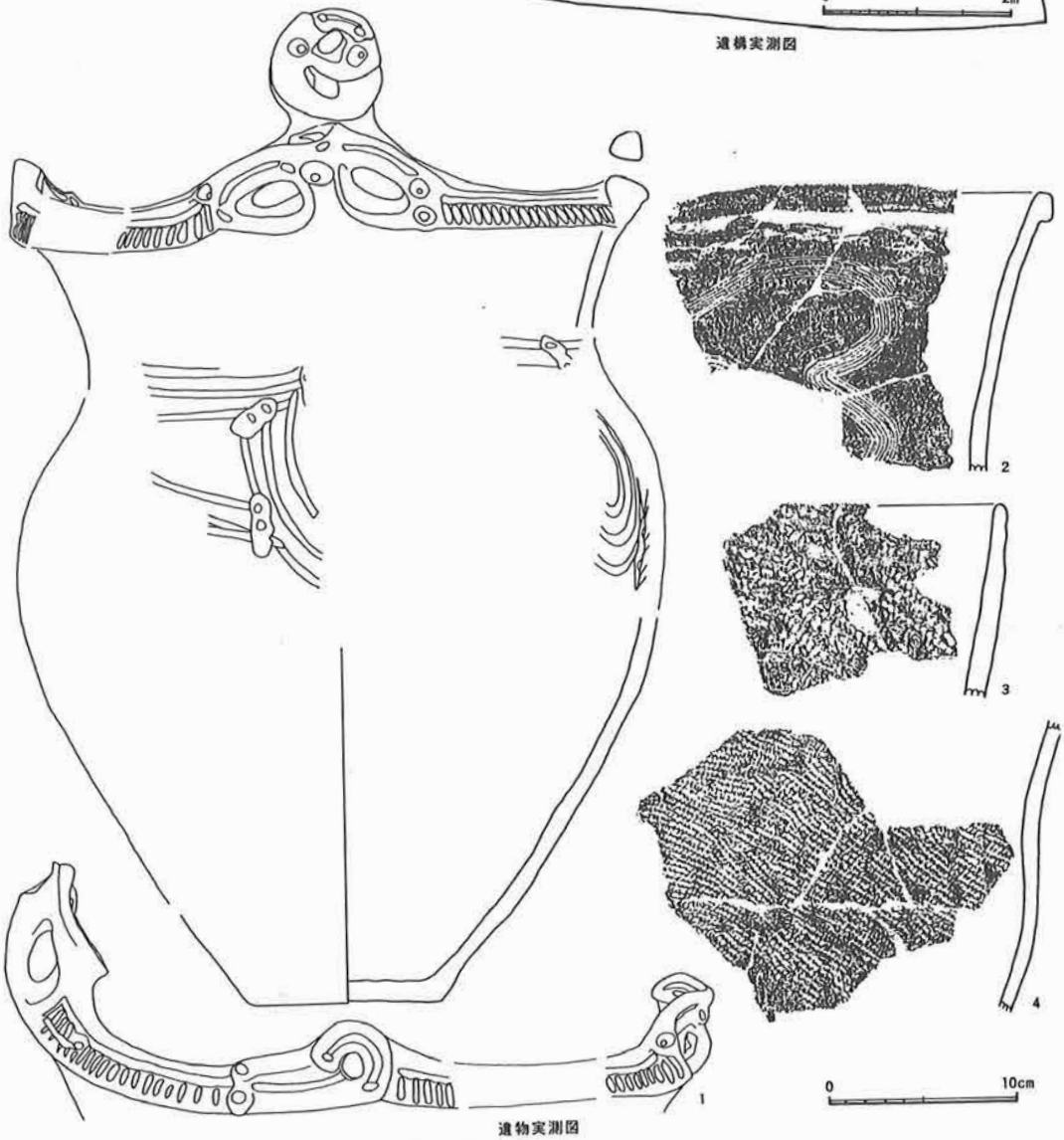
発見された遺物　－単位ｃｍ、ｇ、（　）推定－

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	堀之内Ⅰ	竪穴住居2床面	52.8	34.2	10.4	34.8 胴部	0.9	単沈線	石英、長石多	良	赤褐色～淡黄褐色	円顔様把手
2	深鉢形土器	－	竪穴住居2床面	－	(27.0)	－	－	0.9	沈線（ハケ状）	石英、長石多量	良	赤褐色～淡黄褐色	1に胎土、色調焼成、類似
3	深鉢形土器	－	竪穴住居2床面 炉	－	(30.0)	－	－	1.2	縄文RL	石英、長石、砂多、粗	やや不良	(外)暗褐色 (内)にぶい赤褐色	―

地形図

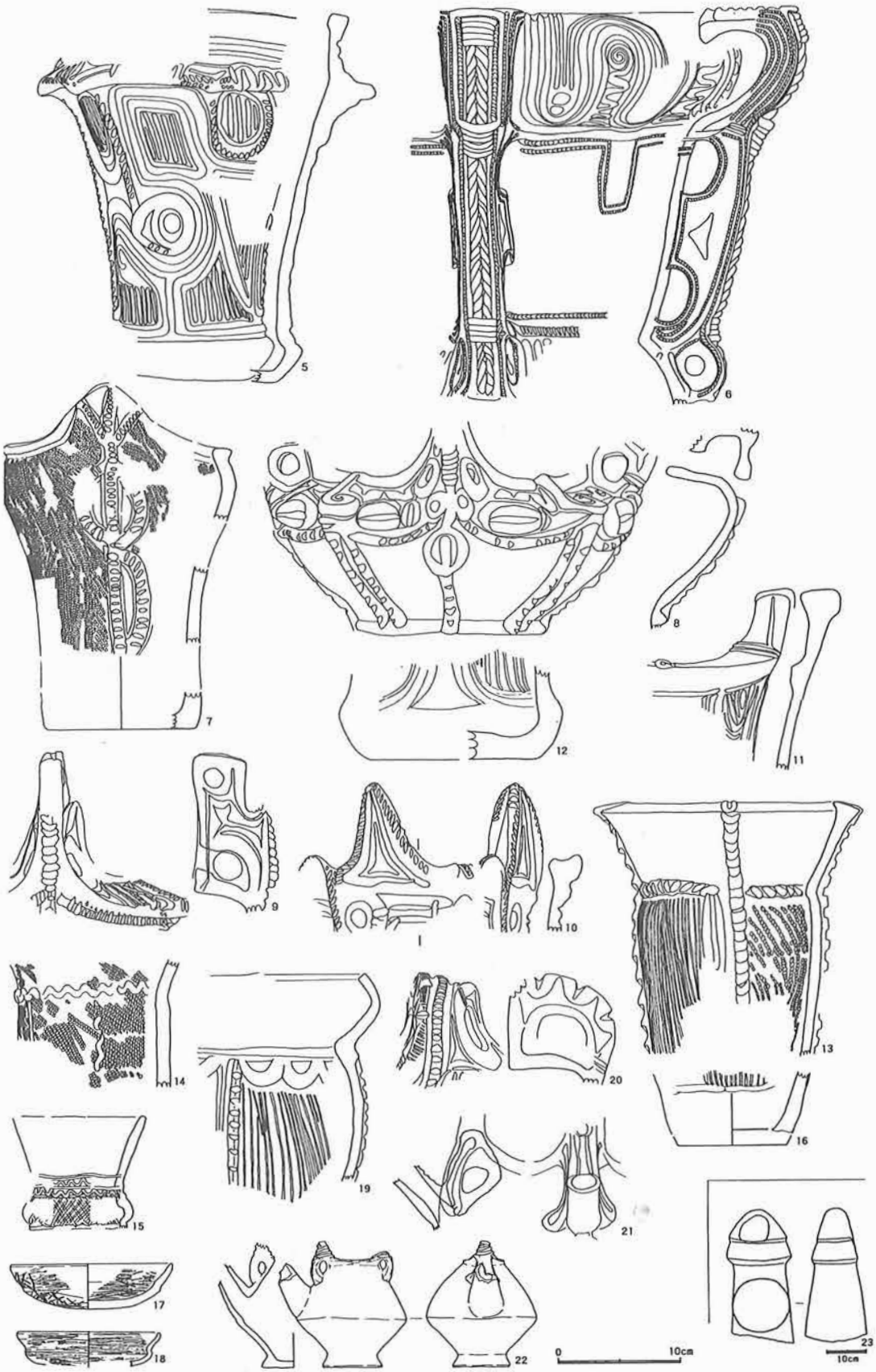


遺構実測図



遺物実測図

箕輪A遺跡竪穴住居、及び出土土器実測図



箕輪A遺跡出土土器実測図

箕輪A遺跡出土石器実測図

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
4	深鉢形土器	－	竪穴住居2床面	－	－	－	(30)	0.8	縄文LR	粗砂、長石	良	(外)暗赤褐色	
5	深鉢形土器	勝坂Ⅲ土器集中区		30.7	(21.0)	9.3	22.1 鍔部	1.0	隆帯、沈線	長石、かんらん石 石英、金雲母多	良	赤褐色～ 暗灰褐色	―
6	深鉢形土器	勝坂Ⅲ土器集中区		－	(35.0)	－	(50.0) 口縁部	0.9	隆帯、 押し引き沈線	粗砂多	良	にぶい黄褐色	―
7	深鉢形土器	勝坂Ⅲ土器集中区		(28.5)	18.8	(12.4)	19.5 肩部	1.1	隆帯、 縄文ＲＬ	石英、長石、雲母 金雲母	良	赤褐色～ 黒褐色	―
8	深鉢形土器	勝坂Ⅲ土器集中区		－	22.3	－	31.5 口縁部	0.8	隆帯、把手	長石、粗砂多	良	灰褐色～ 赤褐色	13と並列出土
9	深鉢形土器	勝坂Ⅲ土器集中区		－	(15.0)	－	(27.0) 口縁部	0.8	隆帯、沈線、 把手	大長石、砂多	良	黒褐色～ 灰赤褐色	―
10	深鉢形土器	勝坂Ⅲ土器集中区		－	(24.0)	－	口縁部	1.1	隆帯、沈線、 把手	多粗砂、長石 少雲母	良	暗灰褐色～ 灰赤褐色	―
11	深鉢形土器	勝坂Ⅲ土器集中区		－	(26.0)	－	口縁部	0.9	隆帯、沈線、 把手	多粗砂	やや 不良	灰褐色	―
12	深鉢形土器	勝坂　土器集中区		－	－	(14.5)	－	2.0	隆帯、沈線	大石英、砂 多含雲母	良	赤褐色～ 茶褐色	―
13	深鉢形土器	曽利Ⅰ土器集中区		－	22.2	－	口縁部	0.9	隆帯、沈線、 縄文RL	石英、長石、 細砂	良	灰褐色～ 灰赤褐色	8と並列出土
14	深鉢形土器	曽利Ⅱ土器集中区		－	－	－	20.5 胴部	1.1	隆帯、 縄文RL	大砂	やや 不良	暗赤褐色～ 黄褐色	―
15	深鉢形土器	曽利Ⅰ～Ⅱ土器集中区		－	(11.0)	－	口縁部	0.7	隆帯、沈線	石英、長石、 砂粒精選	良	暗褐色	籠目文
16	深鉢形土器	曽利　土器集中区		－	－	(9.0)	－	1.2	沈線	砂	やや不良	橙色～暗褐色	―

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
17	坏	鬼高	土器集中区	3.7	(13.0)	−	口縁部	0.7	ヘラケズリ、ミガキ	少砂精選	良	(外)褐色 (内)黒褐色	1/3存
18	坏	鬼高	表採	(3.0)	(11.5)	−	口縁部	0.4	ヘラケズリ、ミガキ	少砂精選	良	褐色〜赤褐色	黒色処理 1/6存

その他の土器　縄文式土器(木島式、諸磯C式、五領ヶ台式、加曽利B式、称名寺式) 土師器、須恵器

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備考
1	横形石匙	包含層	頁岩	6.6	4.3	1.2	21	長さは刃幅
2	縦形石匙	竪穴住居2床面	頁岩	6.4	3.9	0.6	12	
3	撥形石斧	包含層	頁岩	8.2	4.7	1.7	64	
4	短冊形石斧	土器集中区	砂岩	8.6	4.3	1.2	44	円刃
5	短冊形石斧	土器集中区	安山岩	10.3	4.6	1.7	75	極円刃
6	短冊形石斧	包含層	砂岩	11.8	5.1	1.8	108	

曽利式土器は勝坂式土器（井戸尻式）を源として変化し、その最終段階、とくに末期には大木式土器から生成した加曽利E式土器と共伴することが知られている。この両者の併行関係がそれぞれで論じられて(鈴木1981)、本地域でも富士市天間沢遺跡で編年対照表が示されている（平林1985)。それによれば、曽利系土器の出現する直前の勝坂系土器群の段階的な変化が捉えられたとして、曽利Ⅰ式土器を勝坂Ⅲ式土器の新段階に併行させ、さらに曽利Ⅲ式土器と加曽利Ｅ２式土器の住居跡伴出例をもって、曽利式土器を従来より半歩から１歩先行させている。これについては相対すべき加曽利Ｅ式土器編年の混乱もあり、将来に検討を残しているが、本遺跡における曽利Ⅰ式土器（13）と、いわゆる「多喜窪重文タイプ」とされる終末期の勝坂式の土器（８）の並列出土例はその発生段階を支援している。

（馬飼野行雄）

故佐野要吉氏表採資料　－単位ｃｍ、ｇ（　）推定－

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
19	深鉢形土器	曽利Ⅰ	−	−	(22.0)	−	(24.0) 口縁部	0.8	隆帯、沈線	大石英、長石、砂	良	(外)暗褐色 (内)赤灰褐色	──
20	深鉢形土器	勝坂Ⅲ	−	−	−	−	−	1.0	隆帯、沈線	長石、石英、細砂多	やや不良	黒褐色〜灰〜赤褐色	把手

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
21	注口土器	堀之内Ⅰ	－	－	－	－	－	0.8	沈線、ミガキ	石英、長石、砂多精選	良	赤灰色～乳灰褐色	大形品
22	注口土器	堀之内Ⅱ	－	(10.5)	3.2	5.0	9.2	0.5	ミガキ	砂多	良	にぶい橙色	把手、注口一部欠

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重(g)	備考
23	石棒	－	安山岩	40.0	16.0	15.0	－	単頭

佐野要吉　1931「富士南麓史談」

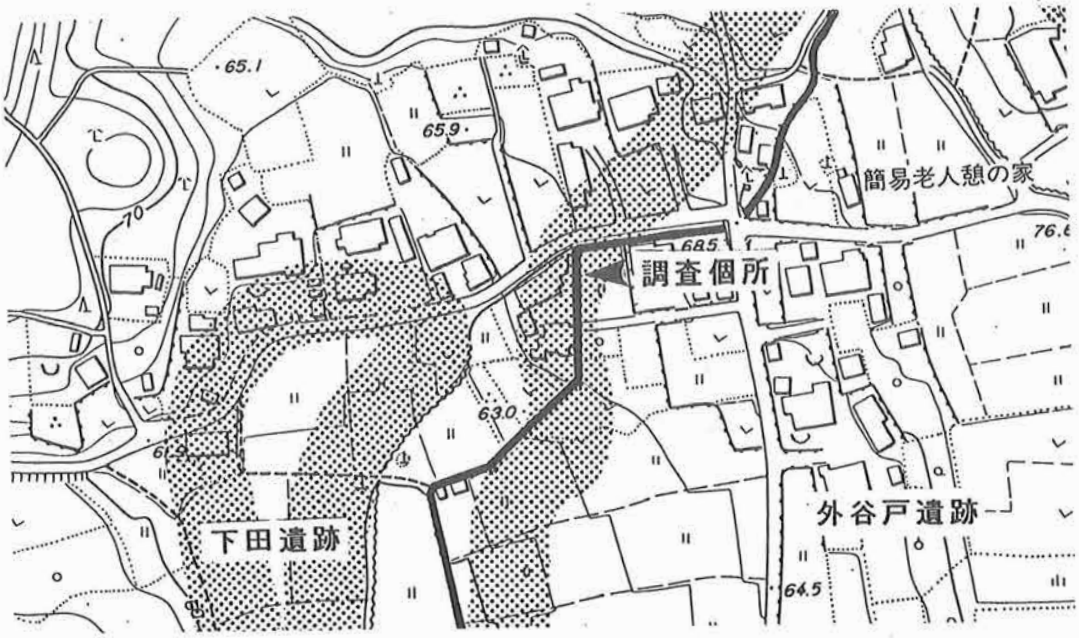
鈴木保彦　1981『縄文土器大成』第２巻中期　講談社

平林将信他　1984『天間沢遺跡Ⅰ』富士市教育委員会

1985『天間沢遺跡Ⅱ』富士市教育委員会

植松章八他　1979『天間沢遺跡第７次(Ｆ地区)発掘調査概報』富士市教育委員会

３．谷外(かいと)遺跡



谷外遺跡位置図

所在地　　富士宮市沼久保675番地地先
調査目的　　既設水路の改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘(予備)調査
調査期間　　平成元年1月13日から平成元年4月28日まで
調査面積　　297㎡
調査主体　　富士宮市教育委員会
発掘担当者　馬飼野行雄

遺跡の位置と環境

谷外遺跡は市域の南西を下る富士川に南西面して開口する沼久保谷が、左岸に大きく段丘を展開させ、その緩斜面に南北600m、東西300mの広域な範囲で包蔵をみる。標高は60m～80mと差をもつが、斜面を含むこともあって視感的には緩やかである。縄文中、後期を主体とした遺跡で、対岸には同じ内容で下田、小松原Bの両遺跡をみる。また、それぞれの上部の段丘には縄文早期の沼久保坂上遺跡や、小松原A遺跡が占有して、富士川沿岸では唯一の遺跡密集地になっている。

調査の概要と結果

本調査は工事内容が、既設水路のコンクリート三面舗装であることから、法面部分の断面観察が主となった。工事に並行して観察調査を進めると、対象河川の南辺3分の2は沖積層が厚く堆積して、河床も包含層まで達していない状況にあり、わずかに北端より下る急流が緩やかになった20m程の間に包含層を認めるだけであった。しかし、これも既設水路による影響、つまり、流水による浸食によって土層自体がひび割れを起こしており、唯一埋設状況にあった深鉢形土器(1)の土層観察も不可能であった。従って、これらの状況から断面に露出する土器片、石器片を採集して、調査を終了した。

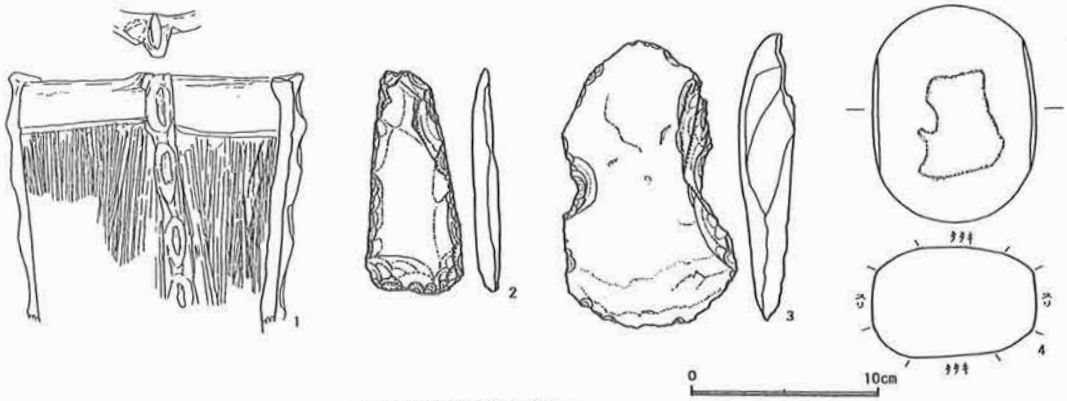
発見された遺物　－単位cm、g（　）推定－

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	勝坂Ⅲ	包含層	－	14.9	－	口縁部	1.0	隆帯、沈線	粗砂	やや不良	褐色	－

その他の土器　縄文式土器(曽利式、加曽利E式)

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備考
2	短冊形石斧	表採	砂岩	11.6	5.1	1.2	86.0	－
3	分銅形石斧	表採	砂岩	14.9	8.9	2.7	412.0	－
4	磨石類	表採	安山岩	11.6	8.8	5.7	885.0	石鹸様形状

その他の石器　台石、敲石破片



谷外遺跡遺物実測図

普通、磨石は敲く、押し潰す、磨るという一連の作業に使用されるため、その痕跡も複数となり、従来より言われる凹石、敲石等の特定された機能もあわせて、「磨石類」が提唱されたことがあり（鈴木次1977）、ここではそれに従う。つまり、手頃な円礫が石皿、台石等と果たす機能、用途は多岐、多様であり（鈴木道1981）、それを限定せずに使用された石器の痕跡を表現しようとするもので、A－表面、裏面の敲打による凹みの有無、B－周縁の敲打痕の有無、C－表面および裏面の磨痕の有無、D－側面の面取りしたような顕著な磨痕の有無、の観察項目から、本遺跡の磨石類４は「ＡＤ」に特徴をもち、「敲き、押し潰す」を主体的な機能としたことが表現される。　（馬飼野行雄）

鈴木　次郎　1977 『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告13
鈴木道之助　1981 『石器の基礎知識』柏書房

４．箕輪（みのわ）Ｂ遺跡

所在地　　富士宮市大岩字ミノワ1424-1.2.3
調査目的　　開発行為（宅地造成）に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査
調査期間　　平成２年８月21日から平成２年10月22日まで
調査面積　　３９０㎡
調査主体　　富士宮市教育委員会
発掘担当者　馬飼野行雄

箕輪Ｂ遺跡位置図

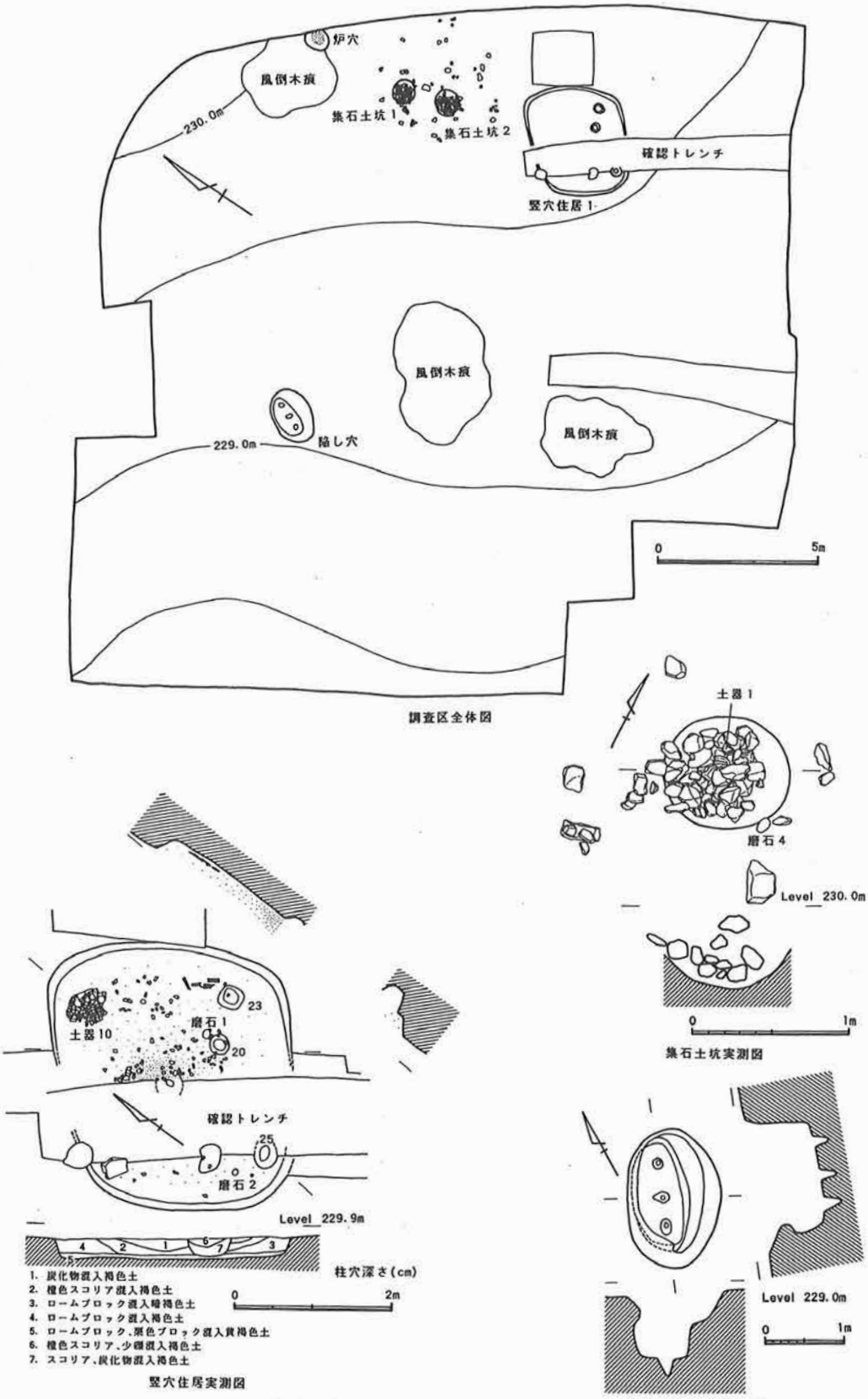
遺跡の位置と環境

箕輪Ｂ遺跡は、前述の箕輪Ａ遺跡とともに箕輪遺跡として、本市の滝戸遺跡と富士市天間沢遺跡（富士市教育委員会1979.1984.1985）とともに「岳南三大遺跡」に数えられ、その豊富な遺物の出土は他を圧倒している。地形内容は前述の「２．箕輪Ａ遺跡」で詳しいからここでは省くが、箕輪集落を馬蹄形に取り囲む山陵中央より流れ出るサギ沢によって２分される、東側の南西面する緩斜面が本遺跡で、標高205～235m間、南北550m、東西180mの細長い分布域を持っている。弥生～土師器の散布も濃密であるが、むしろ、箕輪Ａ遺跡と同様に縄文土器、石器の散布に目を見張るものがあり、石棒や石皿が畑地境の祠に祀られている光景は、遺跡を身近に感じて圧巻である。

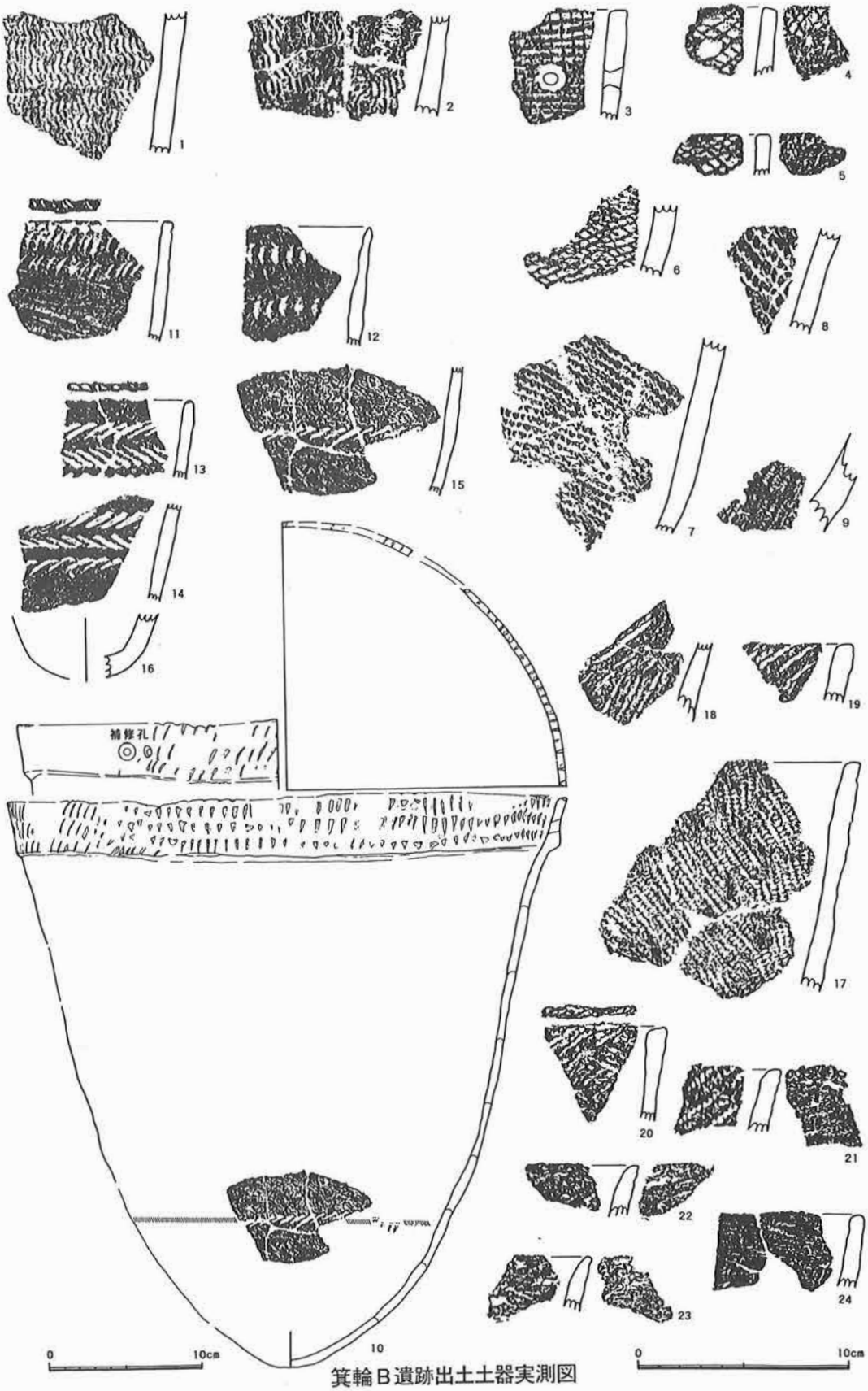
調査の概要と結果

調査対象地は遺跡北東隅の山陵側に近い部分で、一見、平坦地として捉えられるが、旧地形は中央部を境にして急激に下る谷地形で、山陵側急斜面には遺物の包蔵が認められないため、それに対峙する南西向き緩斜面を20×20mの範囲で全面発掘した。

その結果、傾斜面を覆う包含層より、加曽利Ｂ式を上限とした土器、石器を得るが、遺構の確認はなく、最下層に至って、愛知県知多郡清水の上Ⅱ式土器（磯部他1976）を伴う竪穴住居１、山形押型文土器を伴う集石土壙１、同２、さらにそれと大きな時間差をもたないであろう炉穴１、陥し穴１を検出した。この陥し穴の検出は弥生時代末に上井出長者ヶ原遺跡で例があるが、縄文時代例は本市にとって初例となる。なお、弥生～古墳時代の遺物の出土はなかった。



箕輪B遺跡調査区全体図、及び遺構実測図



箕輪B遺跡出土土器実測図

発見された遺構 －単位m、（　）－

名称	形状	規模	長軸方向	残存状況	柱穴	炉	その他	重複	備考
竪穴住居1	歪楕円形	3.35×3.00	N-43°-E	中央欠	(4)	?	焼土	無	被火災
集石土坑1	円形、椀状	0.8×0.7	N-61°-E	完形	－	－	拳大礫53個	無	礫加熱痕有
集石土坑2	円形、椀状	0.8×0.75	N-50°-E	完形	－	－	拳大礫120個	無	礫加熱痕有
炉穴1	略円形、椀状	0.75×(0.7)	N-6°-E	西壁欠	－	－	焼土厚	風倒木痕	集石土坑12に隣接
陥し穴	長円形	1.75×1.1	N-23°-E	完形	ピット3	－	－	無	変形袋状

その他の遺構　小坑3 風倒木痕3ヶ所

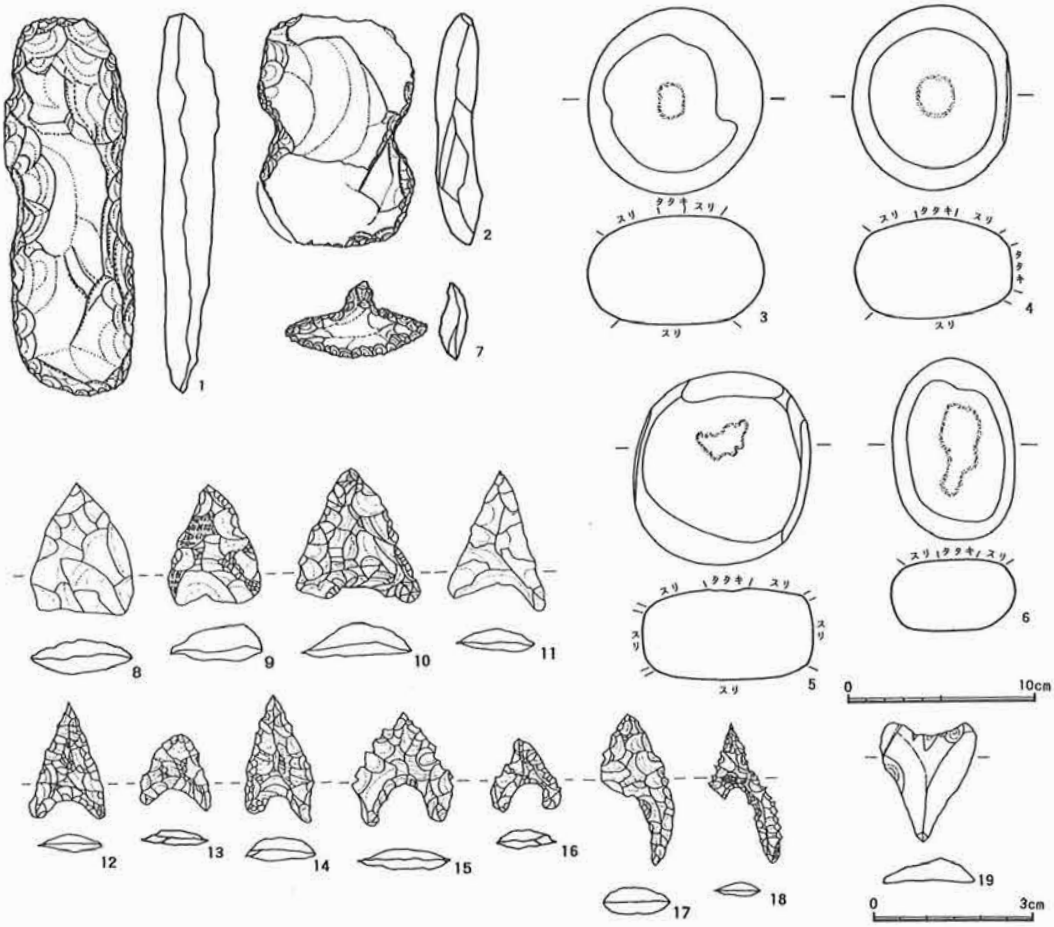
発見された遺構 －単位cm、g　（　）推定－

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	－	集石土壙1	－	－	－	－	1.0	山形押型文	粗礫多	やや不良	灰褐色	－
2	深鉢形土器	－	集石土壙2 包含層	－	－	－	－	0.9	山形押型文	粗礫多	不良	にぶい褐色	－
3	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	0.8	格子目押型文	粗礫多	やや不良	(外)褐灰色 (内)灰赤色	径0.6cm補修孔
4	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	0.7	格子目押型文	粗砂多	やや不良	黄褐色	口縁部裏面施文
5	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	0.6	格子目押型文	粗砂多	不良	にぶい橙色	口縁部裏面施文
6	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	1.0	格子目押型文	粗礫多	やや不良	灰褐色	－
7	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	1.1	撚糸文L	粗礫多	やや不良	にぶい橙色～ 褐色	－
8	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	0.8	撚糸文L	粗礫多	やや不良	にぶい褐色	－
9	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	1.1	縄文RL	粗砂多	不良	にぶい橙色	－
10	深鉢形土器	清水ノ上II	竪穴住居1	37.3	37.0	尖底	口縁	0.6	爪形文	長石、細砂	やや不良	にぶい黄橙色	補修孔
11	深鉢形土器	清水ノ上II	竪穴住居1	－	－	－	－	0.55	爪形文	長石、細砂多	良	(外)灰褐色 (内)明褐色	－
12	深鉢形土器	清水ノ上II	竪穴住居1	－	－	－	－	0.5	爪形文	長石、細砂	良	(外)黒褐色 (内)褐色	－
13	深鉢形土器	清水ノ上II	竪穴住居1	－	－	－	－	0.6	爪形文	粗砂多	やや不良	にぶい黄橙色	－
14	深鉢形土器	清水ノ上II	竪穴住居1	－	－	－	－	0.6	爪形文	粗砂多	良	(外)暗褐色(内)明褐色	－
15	深鉢形土器	清水ノ上II	竪穴住居1	－	－	－	－	0.6	爪形文	長石、砂	やや不良	灰褐色	－
16	深鉢形土器	清水ノ上II?	包含層	－	－	尖底	－	0.8	無	粗砂多	やや不良	にぶい黄橙色	13の底部?

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
17	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	竪穴住居1	—	—	—	—	0.8	縄文LR	粗砂多、繊維	やや不良	褐色	復元口径30cm
18	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	竪穴住居1	—	—	—	—	0.8	縄文R	粗礫多、繊維少	不良	(外)黒褐色 (内)にぶい赤褐色	
19	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	竪穴住居1	—	—	—	—	0.8	縄文R	石英、長石、砂	良	(外)にぶい橙色 (内)黒褐色	—
20	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	竪穴住居1	—	—	—	—	0.7	縄文L	砂、繊維	やや不良	(外)黒褐色 (内)橙色	口端施文
21	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	竪穴住居1	—	—	—	—	0.7	縄文LR	石英、長石、粗砂	良	黒褐色	口端施文
22	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	竪穴住居1	—	—	—	—	0.7	縄文L	粗砂、繊維	良	黒褐色	口端施文
23	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	包含層	—	—	—	—	0.7	縄文L	粗砂、繊維	やや不良	暗褐色	口端施文
24	深鉢形土器	清水ノ上Ⅱ併行?	包含層	—	—	—	—	0.7	無文	粗砂	良	(外)褐色 (内)にぶい橙色	—

その他の土器　縄文土器(木島式、諸磯B式、十三菩提、加曽利E式、曽利式、加曽利B式、附加条縄文土器、繊維含有無文土器)

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備考
1	短冊形石斧	包含層	砂岩	19.9	6.4	3.0	431.0	
2	分銅形石斧	包含層	安山岩	12.2	8.4	2.2	294.0	刃部片側欠損
3	磨石類	竪穴住居1	砂岩	9.8	9.2	5.7	658.0	磨石1
4	磨石類	竪穴住居1	安山岩	9.8	8.4	5.2	636.0	磨石2
5	磨石類	竪穴住居1	礫岩	10.4	9.4	4.9	779.0	予備調査時出土
6	磨石類	集石土坑1	礫岩	9.5	6.5	3.7	297.0	
7	横形石匙	包含層	頁岩	7.5	4.1	1.4	25.9	
8	平基石鏃	包含層	頁岩	22.9	18.4	6.6	3.1	以下mm
9	凹基石鏃	包含層	黒曜石	21.4	16.7	6.0	2.1	
10	凹基石鏃	包含層	黒曜石	22.2	22.1	6.8	2.5	
11	凹基石鏃	包含層	頁岩	23.6	17.7	3.4	1.3	
12	凹基石鏃	包含層	黒曜石	20.5	13.6	3.1	0.6	
13	凹基石鏃	包含層	黒曜石	12.7	12.1	2.3	0.4	
14	凹基石鏃	包含層	黒曜石	22.9	12.2	3.9	0.9	
15	凹基石鏃	包含層	黒曜石	19.1	17.9	3.2	0.8	
16	凹基石鏃	包含層	黒曜石	13.7	12.0	2.8	0.4	



箕輪B遺跡出土石器実測図

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備考
17	凹基石鏃	包含層	黒曜石	26.8	12.8	4.2	0.9	長脚
18	凹基石鏃	包含層	黒曜石	25.3	13.1	2.0	0.3	長脚
19	石錘	包含層	頁岩	20.6	16.5	3.7	1.0	

その他の石器　石鏃片13(黒曜石製12、頁岩製1、内平基式黒曜石製1)、磨石類片7 敲石片4

昭和53年、市内小泉に所在する若宮遺跡の発掘調査以来（富士宮市教育委員会1983）、本地域の縄文時代早期前半の資料も次第に蓄積され（富士宮市教育委員会1989）、手探りにちかかったその様相も徐々に明らかになりつつある。まず、表裏縄文土器が多縄文系土

器群の終末期に対応され、そのうち、一部の口縁部裏面施文例が井草Ⅱ式併行期まで下る可能性も説かれ（山形1991a)、さらに縄文、撚糸文だけで構成される一群を挟んで（関野1988、1992）、もっとも早くは稲荷台式古段階から押型文土器を登場させ（山形1991b）、稲荷原、大浦山式併行期には大勢がそれを肯定している。

関東地方に至ると稲荷台式新段階には押型文土器の伴出は通例となり(原田1991)、一部には夏島式土器と山形押型文土器の共伴（可児1967）の可能性も捨てられないでいるが、本地域では、若宮遺跡をはじめとして夏島式土器とその周辺が不鮮明で、そこまで遡れないでいるのは前述のとおりである。押型文土器が表裏縄文系土器群を母体として撚糸文系土器群との接触から成立したと考え（宮崎、金子1990）、その接触時が稲荷台式期を遡れないとするなら、表裏縄文土器から押型文土器へと一貫として続く口縁部裏面施文の伝統の断絶を解決せねばならず、また、その断絶を埋める如く、一部の表裏縄文土器を細久保式段階まで共伴させようとする宮下説は、樋沢式、あるいは沢式土器を押型文土器の最古式とする「立場」に表裏縄文土器がそれに共伴しないとして一蹴されている（戸田1988)。しかし、若宮遺跡の異方向帯状施文山形押型文土器は密接施文押型文土器群に明らかに後出している。

このように学史を飾るべき夏島式、樋沢式土器の外隔地域での不鮮明のなか、近畿から東海地方西部では表裏縄文土器から最古の押型文とする大鼻式土器の発生、それから大川式土器を挟んで神宮寺式土器に、ここで信州立野式土器に関連させたり（山田1988）、関東地方に遠隔なだけ、編年に固定感もなく自由に動いている。

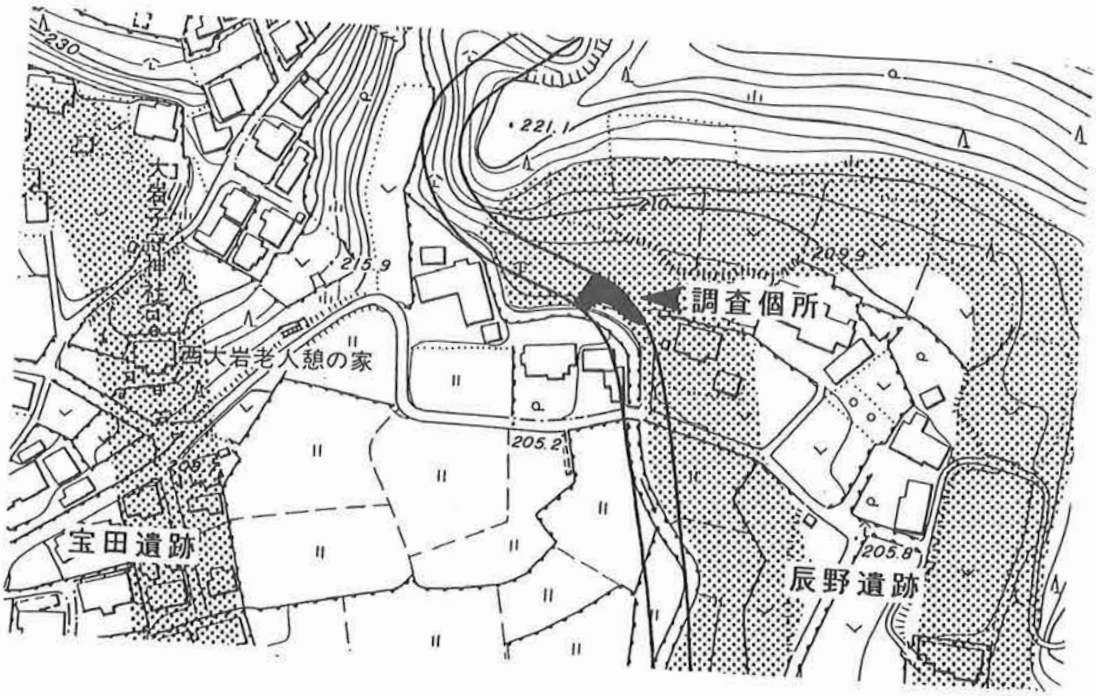
ともあれ、本調査で得た押型文土器37片（格子目19片、山形18片）、撚糸文土器９片、縄文土器片１片は従来から言われる立野式土器群の構成が伺え、若宮遺跡の内容には表裏縄文、縄文、撚糸文土器で構成される小松原Ａ遺跡と、この箕輪Ｂ遺跡の２段階が含まれていることが確かとなり、その後者は撚糸文土器（７）の胴部下半を整然と深くはっきりと斜走する軌跡から大浦山式段階にちかい併行関係が示唆されるのである。(馬飼野行雄)

富士宮市教育委員会　1983『若宮遺跡』
1989『小松原Ａ遺跡』
山形真理子　1991a「多縄紋土器編年に関する一考察」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第10号（下）
関野哲夫　1988「東海地方における押型紋段階の様相」『縄文早期を考える』帝塚山考古学研究所
1992『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
原田昌幸　1991『撚糸文系土器様式』考古学ライブラリー61 ニューサイエンス社

山形真理子 1991b 『三の原遺跡』 立教学院三の原遺跡調査団
可児通宏 1967 「NO.269遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅳ多摩ニュータウン遺跡調査会
宮崎朝雄・金子直行 1990 「撚糸文系土器群と押型文系土器群の関係（素描）」『縄文時代』Ⅰ縄文時代文化研究会
戸田哲也 1988 「表裏縄文土器論」『大和のあけぼの』Ⅱ大和市教育委員会
山田 猛 1988 「三重県から見た前半期の押型文土器」『縄文早期を考える』帝塚山考古学研究所

5. 辰野(たつの)遺跡

所在地　富士宮市大岩字辰野625番地先
調査目的　平成3年度富士山滝沢川流路工、及び宝田橋架替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
調査期間　平成3年12月19日から平成3年12月27日
調査面積　100㎡
調査主体　富士宮市教育委員会
発掘担当者　馬飼野行雄



辰野遺跡位置図

遺跡の位置と環境

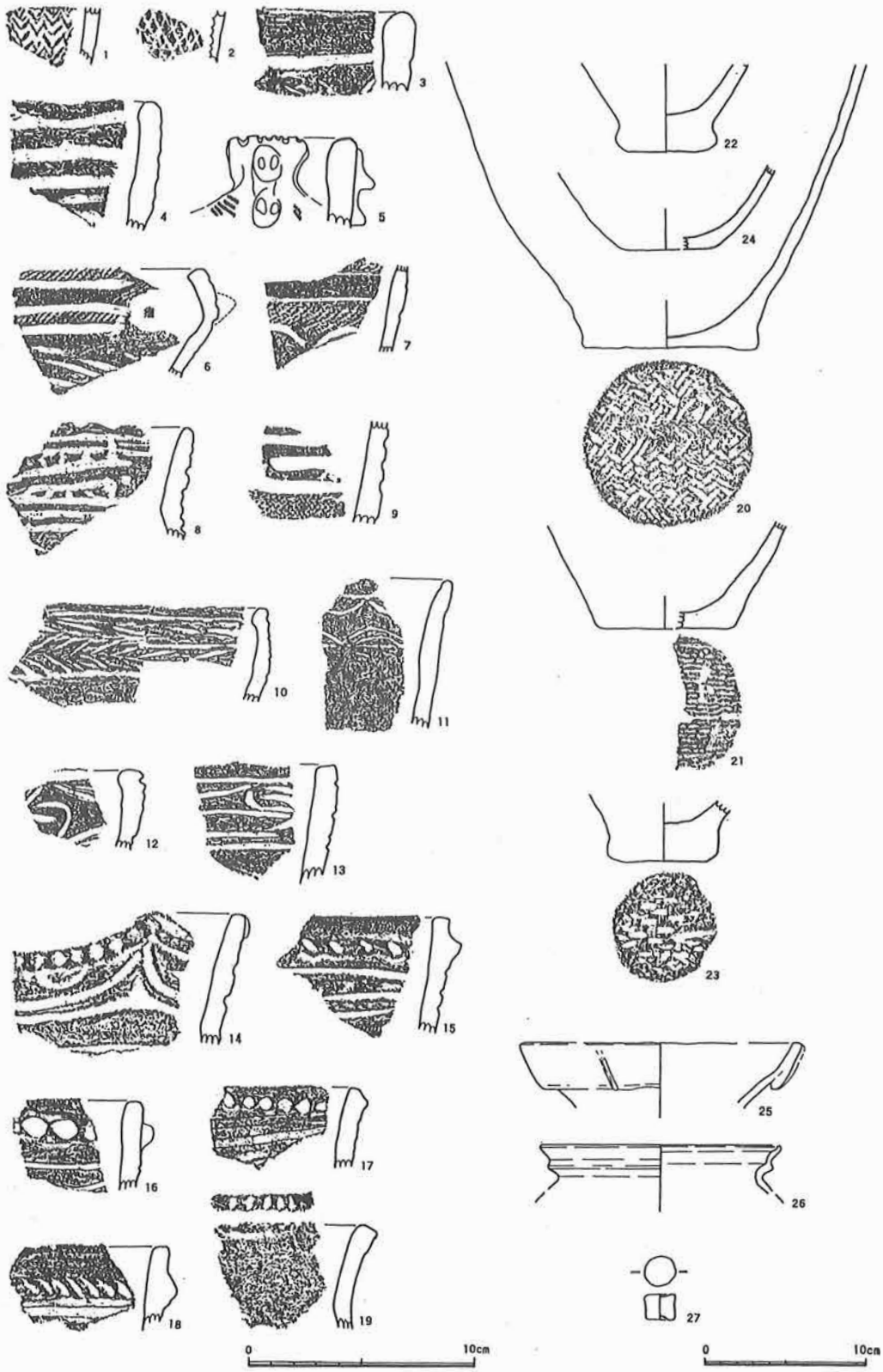
辰野遺跡は、箕輪遺跡や滝ノ上遺跡などと並ぶ、富士根地区を代表する遺跡のひとつで、それらを含めた多くの遺跡と同様に富士山麓に樹根状に発達する低丘陵の南面する裾に立地する。それは富士野渓に端を発する滝沢川の扇状地左岸を南北500m、東西120mで細長く包蔵され、標高は193〜210mと比較的傾斜をもっている。以前からとくに傾斜のきつい北側の斜面は雨後などに採集が容易で、大量の石鏃をはじめ、縄文後〜晩期、さらに弥生後期から古墳時代土器片等の幅広い包蔵が知られている。対岸の丘陵上に峰ヶ谷戸遺跡、その裾に宝田遺跡が立地して沖積地を馬蹄形に囲むが、それ以西は万野原で遺跡の不毛の地となる。

調査の概要と結果

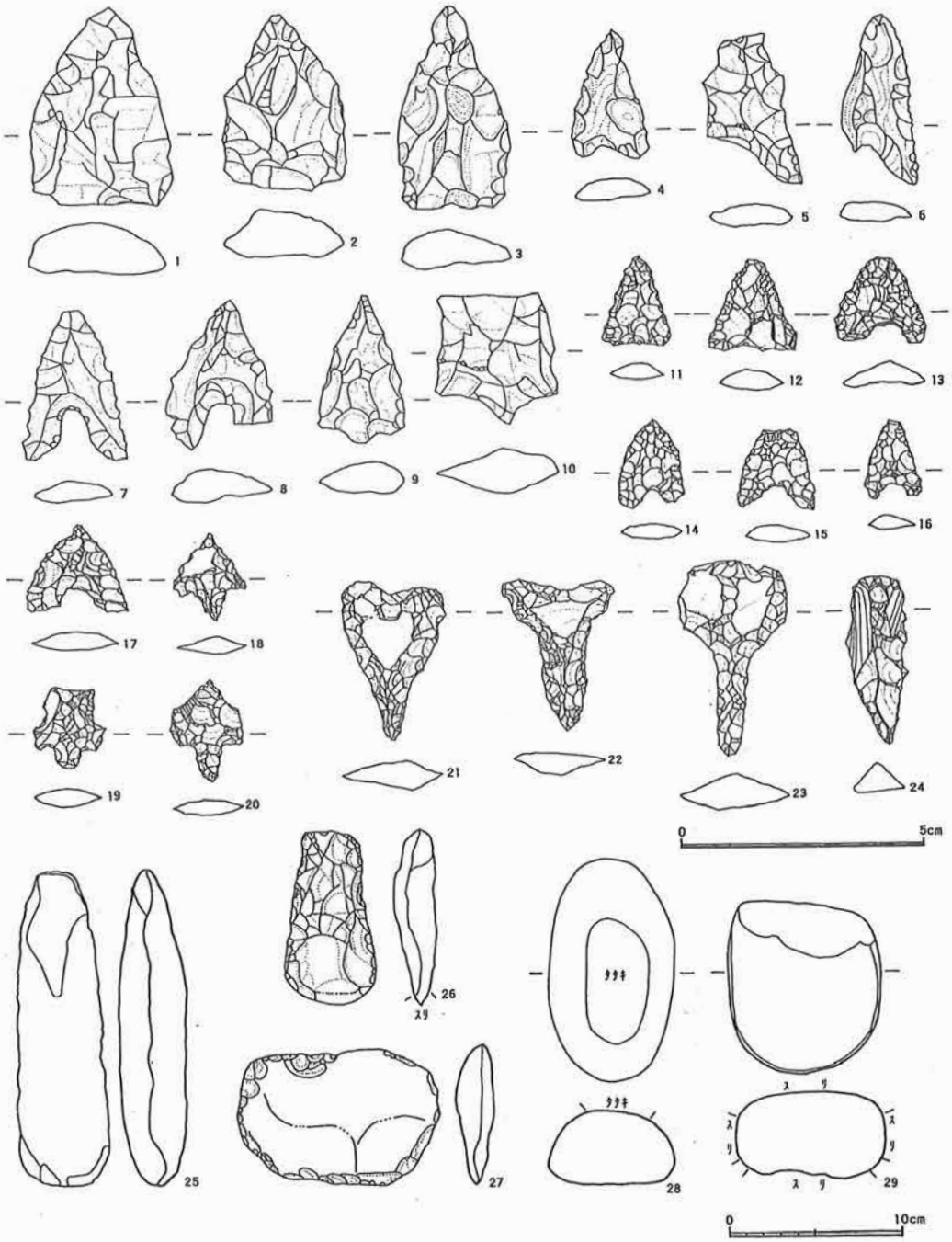
調査の対象となったのは遺跡北辺の、滝沢川が開口してすぐに流路を東に転じてできた後背地で、南面する斜面から流出する土砂とあいまみえ、澱みながら舌状の平坦地となって流路を押し出した先端部分である。従って、河川沿いは数mの幅をもって扇状地堆積物と腐食土が互層をなし、内側に残る包含層も2700年の噴出とされる大沢ラピリ層をもとに土層の逆転現象が顕著で、事実、弥生時代後期の所産である複合口縁壺(25)の破片が最下層ちかくより出土するなど、遺物はまったくの浮遊の状況にあった。このことから調査は遺物採集に終始する結果となったが、わずか100㎡弱の面積から得たポリコンテナ3箱分の遺物量は他を圧倒し、容易な表面採集もうなずけた。

発見された遺物　－単位cm、g(　)推定－

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	0.5	山形押型文	砂、金雲母	良	にぶい赤褐色	
2	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	－	撚糸文R	粗砂	良	にぶい橙色	格子目撚糸
3	深鉢形土器	加曽利EIV	包含層	－	－	－	－	1.2	沈線	長石、石英、細砂	良	にぶい赤褐色	口縁部(平)
4	深鉢形土器	元住吉山II?	包含層	－	－	－	－	0.8	沈線	細砂、長石多	良	(外)黒褐色	
		宮滝？										(内)灰褐色	口縁部(平)
5	深鉢形土器	安行IIIa	包含層	－	－	－	－	0.8	縄文RL、刻目、貼付文	粗砂多	良	にぶい黄橙色	口縁部(波状把手)
6	浅鉢形土器	安行IIIa	包含層	－	－	－	－	0.6	縄文LR 沈線、瘤	粗砂多	良	にぶい橙色	口縁部(平、把手有り?)
7	深鉢形土器	安行IIIa	包含層	－	－	－	－	0.6	帯縄文LR、	細砂多	良	黒褐色	胴部、精製土器
8	台付鉢形土器?	大洞B-C	包含層	－	(16)	－	口縁部	0.8	羊歯状文	粗砂多(退化)	不良	(外)黒褐色 (内)暗赤褐色	口縁部(小波状)
9	深鉢形土器	大洞C?	包含層	－	－	－	－	0.8	沈線(鍵手) 縄文LR	粗砂	不良	(外)黒褐色 (内)暗赤褐色	胴部



辰野遺跡出土土器実測図



辰野遺跡出土石器実測図

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
10	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.5	沈線(矢羽)	細砂、金雲母	良	(外)黒褐色 (内)にぶい黄橙色	口縁

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
11	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.8	沈線(孤線)	粗砂、金雲母	良	灰褐色	口縁(平)
12	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.9	沈線(孤線S状)	粗砂、雲母	良	にぶい赤褐色	口縁(平)
13	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.9	沈線(入組文)	粗砂多、金雲母	良	黒褐色	口縁(平)
14	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、沈線	粗砂多	良	(外)灰褐色 (内)にぶい褐色	口縁(波状)
15	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、沈線	粗砂多	良	褐色	口縁(平)
16	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、沈線	砂、長石	良	(外)黒褐色 (内)暗赤褐色	口縁(平)
17	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、沈線	粗砂、金雲母	良	(外)灰黄褐色 (内)にぶい赤褐色	口縁(波状)
18	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、沈線	粗砂、長石		(外)にぶい赤褐色 (内)黒褐色	口縁(平)
19	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.6	無	粗砂多	やや不良	橙色	口縁(平刻目)
20	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	10.9	－	0.6	無	粗砂多	やや不良	にぶい黄橙色	底部(網代痕)
21	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	(8.4)	－	0.8	無	粗砂多	やや不良	褐灰色	底部(網代痕)
22	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	(6.2)	－	0.8	無	砂多	良	(外)灰赤色 (内)黒褐色	底部
23	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	6.8	－	1.0	無	粗砂多	不良	灰褐色	底部(網代痕)
24	壺形土器? 浅鉢形土器?	天王山併行?	包含層	－	－	(5.4)	－	0.5	無	細砂、精選	良	(外)にぶい赤褐色 (内)黒褐色	底部
25	壺形土器	弥生後～古墳前	包含層	－	(17.5)	－	－	0.4	－	砂多	やや不良	にぶい黄橙色	複合口縁(棒状貼付文)
26	甕形土器	大廓	表採	－	(14.8)	－	－	0.4	ハケ目	石英、長石、金雲母	良	(外)黄橙色 (内)黒褐色	S字状口縁
27	耳栓	天王山併行	包含層	長 1.6	径 1.9				無	砂	良	にぶい橙色	粗製、滑車型

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備考
1	平基石鏃	包含層	頁岩	4.03	2.85	0.96	11.8	

遺跡の位置と環境

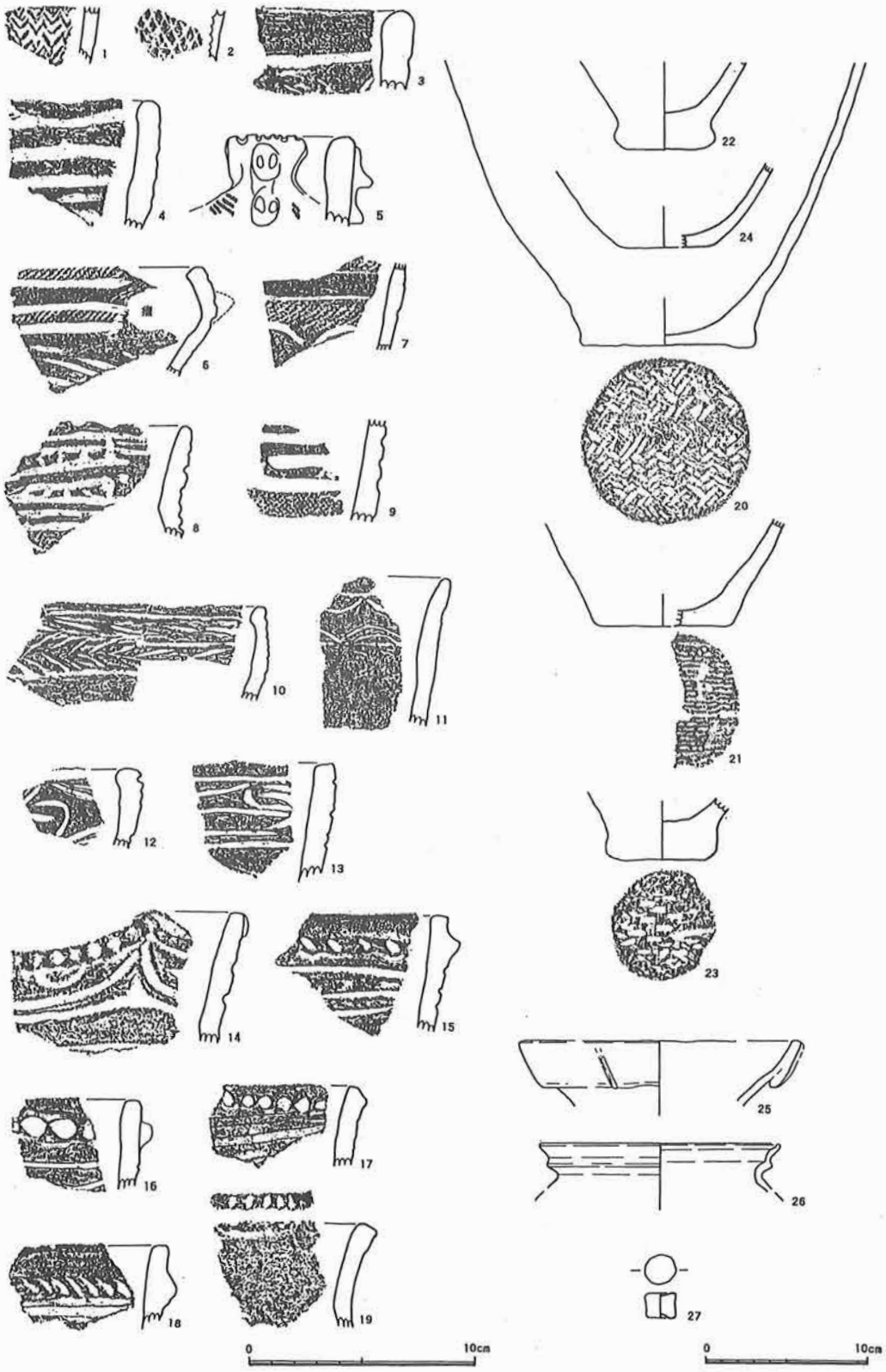
辰野遺跡は、箕輪遺跡や滝ノ上遺跡などと並ぶ、富士根地区を代表する遺跡のひとつで、それらを含めた多くの遺跡と同様に富士山麓に樹根状に発達する低丘陵の南面する裾に立地する。それは富士野渓に端を発する滝沢川の扇状地左岸を南北500m、東西120mで細長く包蔵され、標高は193〜210mと比較的傾斜をもっている。以前からとくに傾斜のきつい北側の斜面は雨後などに採集が容易で、大量の石鏃をはじめ、縄文後〜晩期、さらに弥生後期から古墳時代土器片等の幅広い包蔵が知られている。対岸の丘陵上に峰ヶ谷戸遺跡、その裾に宝田遺跡が立地して沖積地を馬蹄形に囲むが、それ以西は万野原で遺跡の不毛の地となる。

調査の概要と結果

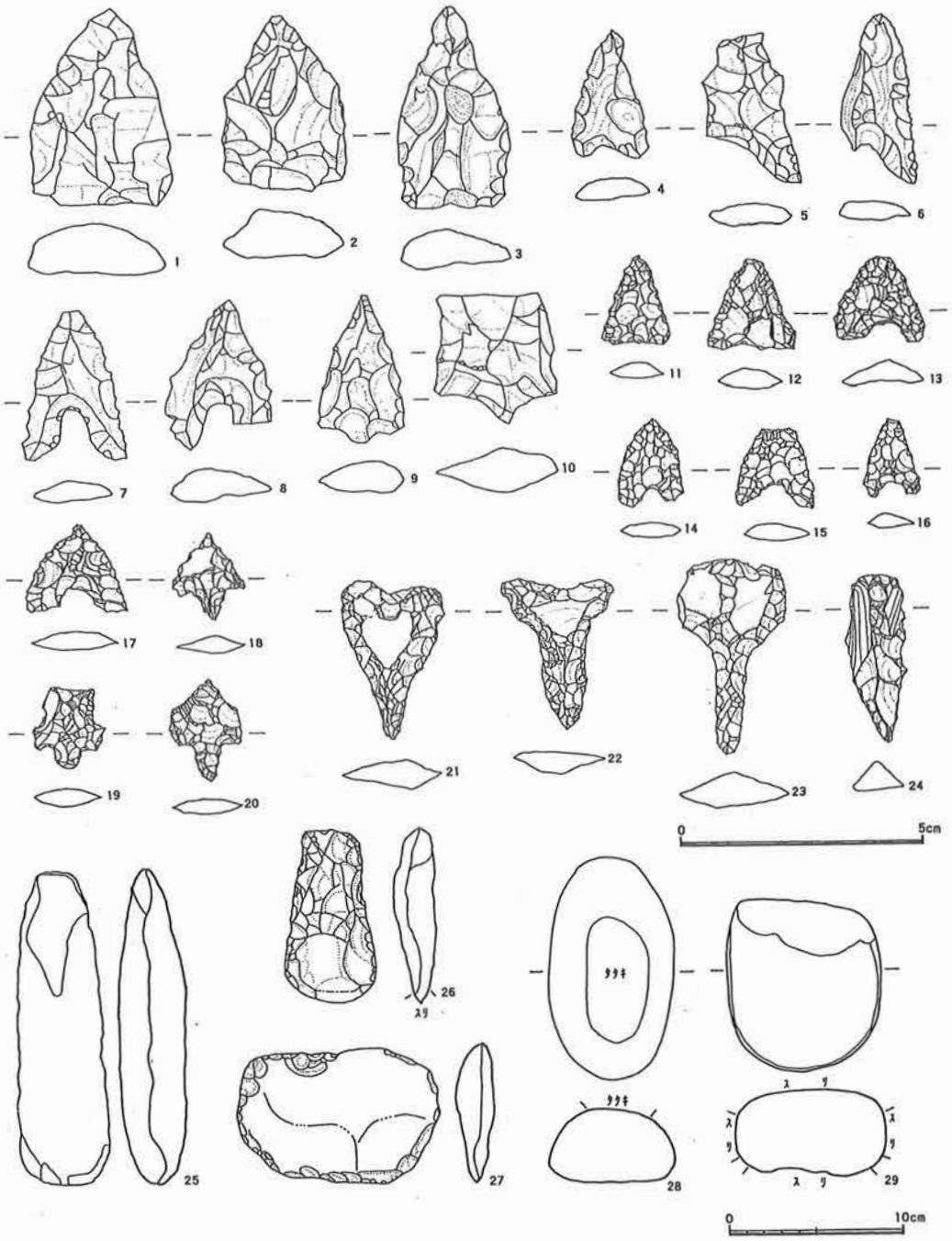
調査の対象となったのは遺跡北辺の、滝沢川が開口してすぐに流路を東に転じてできた後背地で、南面する斜面から流出する土砂とあいまみえ、澱みながら舌状の平坦地となって流路を押し出した先端部分である。従って、河川沿いは数mの幅をもって扇状地堆積物と腐食土が互層をなし、内側に残る包含層も2700年の噴出とされる大沢ラピリ層をもとに土層の逆転現象が顕著で、事実、弥生時代後期の所産である複合口縁壺(25)の破片が最下層ちかくより出土するなど、遺物はまったくの浮遊の状況にあった。このことから調査は遺物採集に終始する結果となったが、わずか100㎡弱の面積から得たポリコンテナ3箱分の遺物量は他を圧倒し、容易な表面採集もうなずけた。

発見された遺物　－単位cm、g(　)推定－

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	0.5	山形押型文	砂、金雲母	良	にぶい赤褐色	
2	深鉢形土器	－	包含層	－	－	－	－	－	撚糸文R	粗砂	良	にぶい橙色	格子目撚糸
3	深鉢形土器	加曽利EⅣ	包含層	－	－	－	－	1.2	沈線	長石、石英、細砂	良	にぶい赤褐色	口縁部(平)
4	深鉢形土器	元住吉山Ⅱ?	包含層	－	－	－	－	0.8	沈線	細砂、長石多	良	(外)黒褐色	
		宮滝？										(内)灰褐色	口縁部(平)
5	深鉢形土器	安行Ⅲa	包含層	－	－	－	－	0.8	縄文RL、刻目、貼付文	粗砂多	良	にぶい黄橙色	口縁部(波状把手)
6	浅鉢形土器	安行Ⅲa	包含層	－	－	－	－	0.6	縄文LR 沈線、瘤	粗砂多	良	にぶい橙色	口縁部(平、把手有り?)
7	深鉢形土器	安行Ⅲa	包含層	－	－	－	－	0.6	帯縄文LR、	細砂多	良	黒褐色	胴部、精製土器
8	台付鉢形土器?	大洞B-C	包含層	－	(16)	－	口縁部	0.8	羊歯状文	粗砂多(退化)	不良	(外)黒褐色(内)暗赤褐色	口縁部(小波状)
9	深鉢形土器	大洞C?	包含層	－	－	－	－	0.8	沈線(鍵手) 縄文LR	粗砂	不良	(外)黒褐色(内)暗赤褐色	胴部



辰野遺跡出土土器実測図



辰野遺跡出土石器実測図

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
10	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.5	沈線(矢羽)	細砂、金雲母	良	(外)黒褐色 (内)にぶい黄橙色	口縁

番号	名称	型式名	出土状況	器高	口径	底径	最大径	器厚	文様	胎土	焼成	色調	備考
11	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.8	沈線(孤線)	粗砂、金雲母	良	灰褐色	口縁(平)
12	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.9	沈線 (孤線S状)	粗砂、雲母	良	にぶい赤褐色	口縁(平)
13	深鉢形土器	天王山	包含層	－	－	－	－	0.9	沈線 (入組文)	粗砂多、 金雲母	良	黒褐色	口縁(平)
14	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、 沈線	粗砂多	良	(外)灰褐色 (内)にぶい褐色	口縁(波状)
15	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、 沈線	粗砂多	良	褐色	口縁(平)
16	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、 沈線	砂、長石	良	(外)黒褐色 (内)暗赤褐色	口縁(平)
17	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、 沈線	粗砂、金雲母	良	(外)灰黄褐色 (内)にぶい赤褐色	口縁(波状)
18	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.8	有刻隆帯、 沈線	粗砂、長石		(外)にぶい赤褐色 (内)黒褐色	口縁(平)
19	深鉢形土器	天王山併行	包含層	－	－	－	－	0.6	無	粗砂多	やや不良	橙色	口縁(平刻目)
20	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	10.9	－	0.6	無	粗砂多	やや不良	にぶい黄橙色	底部(網代痕)
21	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	(8.4)	－	0.8	無	粗砂多	やや不良	褐灰色	底部(網代痕)
22	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	(6.2)	－	0.8	無	砂多	良	(外)灰赤色 (内)黒褐色	底部
23	深鉢形土器	天王山併行?	包含層	－	－	6.8	－	1.0	無	粗砂多	不良	灰褐色	底部(網代痕)
24	壺形土器? 浅鉢形土器?	天王山併行?	包含層	－	－	(5.4)	－	0.5	無	細砂、精選	良	(外)にぶい赤褐色 (内)黒褐色	底部
25	壺形土器	弥生後～ 古墳前	包含層	－	(17.5)	－	－	0.4	－	砂多	やや不良	にぶい黄橙色	複合口縁 (棒状貼付文)
26	甕形土器	大廓	表採	－	(14.8)	－	－	0.4	ハケ目	石英、長石、 金雲母	良	(外)黄橙色 (内)黒褐色	S字状口縁
27	耳栓	天王山併行	包含層	長 1.6	径	1.9			無	砂	良	にぶい橙色	粗製、滑車型

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備考
1	平基石鏃	包含層	頁岩	4.03	2.85	0.96	11.8	

番号	名称	出土状況	石材	長	幅	厚	重	備考
2	平基石鏃	包含層	頁岩	3.60	2.52	0.87	7.6	
3	平基石鏃	包含層	頁岩	4.10	2.20	0.80	7.3	
4	凹基石鏃	包含層	頁岩	2.56	1.54	0.53	1.9	
5	凹基石鏃	包含層	頁岩	(3.10)	(2.02)	0.43	(2.2)	側縁有稜(五角形鏃)
6	凹基石鏃	包含層	チャート	(3.28)	(1.65)	0.35	(1.8)	鋸歯状側縁
7	凹基石鏃	包含層	チャート	(3.03)	2.10	0.34	(2.0)	鋸歯状側縁
8	凹基石鏃	包含層	頁岩	3.30	2.95	0.55	(2.9)	
9	凹基有茎石鏃	包含層	頁岩	(2.97)	1.79	0.64	(3.3)	
10	有茎石鏃	包含層	頁岩	(2.62)	2.53	0.89	(5.4)	
11	平基石鏃	包含層	黒曜石	1.76	1.40	0.31	0.6	
12	凹基石鏃	包含層	黒曜石	(2.04)	(1.79)	0.35	(1.0)	
13	凹基石鏃	包含層	黒曜石	1.68	1.81	0.52	1.1	
14	凹基石鏃	包含層	黒曜石	1.65	(1.30)	0.30	(0.6)	
15	凹基石鏃	包含層	黒曜石	(1.75)	1.61	0.35	(0.7)	
16	凹基石鏃	包含層	黒曜石	(1.58)	(1.13)	0.25	(0.3)	
17	凹基石鏃	包含層	黒曜石	1.70	2.00	0.33	0.8	
18	凹基有茎石鏃	包含層	黒曜石	1.70	1.43	0.31	0.4	
19	有茎石鏃	包含層	黒曜石	(1.15)	(1.56)	0.40	(0.7)	飛行機鏃
20	有茎石鏃	包含層	黒曜石	(1.98)	(1.43)	0.42	(0.8)	
21	石錐	包含層	頁岩	3.28	2.15	0.75	3.9	つまみ
22	石錐	包含層	頁岩	2.97	2.30	0.53	2.3	つまみ
23	石錐	包含層	頁岩	3.95	2.76	0.77	4.5	つまみ
24	石錐	包含層	黒曜石	3.32	1.28	0.67	2.1	棒状
25	石斧	包含層	安山岩	18.0	5.1	3.90	475	乳棒状
26	石斧	包含層	頁岩	10.1	3.4	2.5	125	刃部磨製
27	横刃形石器	包含層	硬砂岩	7.9	11.7	2.1	225	
28	台石	包含層	礫岩	12.6	7.3	4.2	529	
29	磨石	包含層	安山岩	(9.8)	8.7	5.2	685	石鹸状

従前より知られるように、採集された土器の大半は縄文後〜晩期の粗製の無文土器片で、確認される部位で平口縁138片、波状口縁6片、底部42片を数えた。それに磨かれた、いわゆる精製土器の無文部破片が次ぐが、その比率は5分の1にも満たないでいる。当該期の土

器組成が、精粗に明確な差をもち、粗製の比率が徐々にたかくなっていくことが東北から関東地方で知られるが(林1981)、それより比率が上まわることは、西日本に向かうにしたがい、装飾意匠が希薄化することと、主体を占める在地の清水天王山式土器(清水天王山遺跡調査委員会編1960.1975) に磨き仕上げが顕著でないことなどが考えられよう。

この清水天王山式土器については、およそ併行関係が不備のまま、名称の一人歩きが注意され、2段階細分案の提唱や(戸田1980)、近年では隣接の山梨県都留市中谷遺跡 (都留市教育委員会1981)で 良好な資料を得たのをきっかけに、3段階細分案 (奈良1986.1989) と4段階細分案(小野1971.1986)が相対して説かれ、それぞれ大洞B式からB－C式、C式と安行Ⅲa～c式土器に対応が試みられている。いずれも大略的な相違はなく、対峙する弧線文(11)から、その間を「S」字状に連鎖していく入組文(12.13)、さらに三叉文、入組三叉文と発展していく過程を認めたうえでの小画期が同調しないことによるが、ここではそれを云々するだけの資料を持ち合わせないことと、浅学故に大略的なとらえをしておけば、本遺跡例は古式段階が主体で、それは大洞C式、安行Ⅲc式土器をみないことでもうかがい知れる。

さらに、沈線の施される土器の一群には、後期後葉に近畿地方に主体をおく宮滝式土器などに特有の幅広く浅い沈線が口縁下部を3～4条巡るもの(4)があり、これについては沈線を巻貝で施した後、指頭でなでられるものを元住吉山 Ⅱ式土器に対比しようとするむきもある(向坂1985)。従来、宮滝式新古の古式としてとらえられ、県東部でも比較的散見されているから、断片的ながら、加曽利B式以降停滞した文化の後に西日本文化圏の浸透が知れる。しかし、それも馴染むことなく、本地域では晩期前半に本遺跡と滝戸、大中里坂上の3遺跡を最後に、弥生時代中期まで遺跡を失う。その断絶期、つまり、2700年前頃に新富士の活発な火山活動があったことを付記しておく。 (馬飼野行雄)

林　謙作　1981 『縄文土器大成4－晩期』　講談社

清水天王山遺跡調査委員会 1960 『清水天王山遺跡第1次～第3次発掘報告』

1975 『清水天王山遺跡第4次発掘報告』

戸田哲也　1980 「清水天王山式土器と晩期縄文土器の形成」『丘陵』8

都留市教育委員会、日本道路公団東京第二建設局　1981 『中谷・宮脇遺跡』

奈良泰史　1986 「清水天王山式土器の基礎的研究」『山梨考古学論集』Ⅰ

1989 「清水天王山式土器形成期の様相」『山梨考古学論集』Ⅱ

小野正文　1979 「清水天王山式土器について」『丘陵』1－3．4

1989 「再び清水天王山式土器について」『山梨考古学論集』Ⅱ

向坂鋼二　1985 「蜆塚遺跡Ⅴ．Ⅵ」　浜松市教育委員会

6．押出（おしだし）遺跡

所在地　　富士宮市外神字押出
調査目的　　工場造成工事に伴う埋蔵文化財の事前発掘予備調査
調査期間　　平成３年６月26、27日
調査面積　　94㎡（ 調査対象面積 1,824.06㎡）
調査主体　　富士宮市教育委員会
発掘担当者　馬飼野行雄

遺跡の位置と環境（図－１）

国指定の天然記念物である万野風穴の開口部を中心として東西120m、南北120m程の比較的狭い範囲に広がる押出遺跡は、潤井川の支流である風祭川右岸の標高245～250mを測る富士山西南麓緩斜面に占有している。この遺跡の位置する万野～外神地区は富士宮溶岩流、万野風穴溶岩流、北山溶岩流などを地質的な基盤としている地域で、湧水地などの水源は認められず、非常に水の便の悪い場所であるとともに富士山の火山活動の影響を直接受ける地域でもあり、周辺に遺跡の分布がほとんど確認されていない地区である。

押出遺跡と同時代の著名な渋沢遺跡（渡井他1989）は、この遺跡の南方３kmの風祭川が潤井川と合流する風祭川左岸に位置している。この遺跡は、富士山西南麓緩斜面の末端の所謂舌状台地上にあり、前面には淀師、大中里湧水群を内包する潤井川沖積地を見下ろす標高150 ～160mの地点に占地している。

調査の概要と結果（図－１、９）

調査は、調査対象地内に幅１m のトレンチを北側より第１号、第２号‥‥の順で４箇所設定し、遺物包含層の有無および遺構の有無を確認し、遺跡の性格把握をその主目的として実施した。遺構は、第１、２号トレンチにおいて土坑（壙）状の落ち込みが５箇所確認されている。第１号トレンチにおいては、その中央で径150cm を測る大形のもの、またその西端で最大径110cmの円形のものが見られる。第２号トレンチにおいては西より径120cm不整形、径70cm楕円形、径100cm 円形のものが３箇所それぞれ確認されている。これらの落ち込みは、第１号トレンチ東側から第４トレンチにむかって傾斜する大沢ラピリ層上内の狭小な平坦面に構築されており、万野風穴に近い部分のみに認めら、渋沢遺跡に見られる土壙群に類似する規模、平面形態を示すもので、土器棺墓を含む土壙墓群としての墓域を形成していた可能性が伺えるものである。また、その占有区域も比較的限定された範囲で捉えることができそうで、風穴と何らかの関連を有していた葬送儀礼、祭祀を伴う墓域あるいは祭祀の場の存在が想定される。このように考えると、遺跡の空白地帯で、

この弥生時代中期初頭に忽然と出現し短時間に消滅するこの遺跡の消長や生産性の弱い場所への進出など、その性格の一端が理解されるものと思われる。調査は、遺構に関して平面でのデータしか採集していないため、その具体相までは把握していない。そのため前述の内容はあくまでも推論の域を脱しえないが、風穴（溶岩洞窟）に直接関係した立地を示す非常に特異な遺跡として、市内人穴に所在する姥穴周辺に展開する№57 姥穴遺跡とともに注意を要する遺跡である。

遺物は、244 点の土器片と黒燿石のチップ 6 片が見られた。土器は、渋沢遺跡第Ⅲ期のもので占められ、条痕文土器が主体となる。図－ 9 の土器拓影図は、244 点の内図化可能なものを掲載しているが、全体の器形の知られる良好な資料はない。以下各々の資料について渋沢遺跡の分類に則して解説を行う（山上1989）。

1 ～9 は口縁部破片であるが、1 、2 、9 が壺、3 ～8 が甕かと思われる。1 は、壺口縁Ⅰa の範疇で捉えられるものと考えられるが、凸帯の幅が薄く、口唇部外面凸帯（折り返し部）の刺突文がその下位から凸帯部外にかけて施されるもので、渋沢遺跡には見られない型式である。2 は、壺口縁Ⅰb の小破片である。9 は、口縁部に 2 条の横線が見られ更にその直下に文様を施すもので、純粋な条痕文土器には見られない型式で、縄文系の土器の型式属性の中で捉えられるものと考えている。そのため加飾性の強い壺あるいは鉢に形式分類される。また、これは胎土の面でも特徴的で、ややきめが粗く石英、長石の目立つもので、後述する31、32の資料と類似している。

甕はその口縁部破片で 4 型式が認められ、渋沢遺跡分類の甕口縁Ⅰ、Ⅱ Ⅲにそれぞれ対応する。3 は、口唇端部を面取りする単口縁のもので甕口縁Ⅱである。4 は、小破片のため不確実ではあるが、ヘラ状工具による口唇部の削ぎ取りや指頭によるヨコナデで尖った口縁を作る甕口縁Ⅲとしたもので、中部高地の氷Ⅰ式土器の影響が伺われるものである。5 、6 は、甕口縁Ⅰ-2であり渋沢遺跡において最も主体的な出土が知られている甕である。7 、8 は、甕口縁Ⅰ-1であり口唇部に押捺文を施し、口唇部内面を肥厚させる型式である。渋沢遺跡において甕口縁Ⅰ-1は、非常にその出土数が少なく客体的な様相を示している。

10～14、21は、壺の胴部破片と思われるもので、櫛状工具？による深い条痕が調整および文様として採用されている。文様は複数の沈線構成による山形文および横線文と思われるもので、中部高地～関東地方の条痕文土器に多く見られるものである（愛知考古学談話会1985）。15～17は、縦位または斜位の条痕を横位の条痕あるいは横線で区画して文様とするもので、渋沢遺跡においても顕著な出土を見ている。これらは、渋沢遺跡の諸例で知られるように壺、甕の両形式が見られるもので、小破片での器種の判別はしにくい。ただ 3 点ともその外面に煤が付着している点は注意を要するもので、甕としての煮沸機能を有していた可能性を指摘しておきたい。 18は壺肩部破片である。 19、20の外面には横位、斜位の浅い条痕が見られる。21は壺の胴部下位（底部）の破片で斜位の浅い条痕が施され

る。23〜26は甕の胴部破片と思われるものを一括した。4点とも外面に煤が付着しているもので灰褐色系の色調を示している。23〜25は、斜位の櫛状工具による浅い条痕が見られ、渋沢遺跡の一般的な調整方法が確認される。26は条間の幅が不揃いで、細く浅い条線（溝）の条痕が横位に施される。

27〜31は、大洞A´式系の変形工字文、摩消縄文をその祖型とする文様が見られるものである。27〜29は、調整を条痕でおこない指頭あるいはヘラ（棒）状工具による曲線とそれにより区画されたLRの縄文により文様が構成されている。30は、縦位の羽状文あるいは山形文の一部と思われるものが見られる。31は、28、29と同様にLRの縄文を沈線で区画するものである。胎土の面では9 、30、31が類似しており、それが同一個体とまでは言えないもののそれぞれの文様が相関的な関係を持つようで、 縄文系（大洞A′式系）の施文原理の複雑さと多様性を垣間見せている。

32、33は、平底の底部の破片で、両者とも網代痕が見られる。32は、底径5.3cm を測り、直線的に外傾する胴部が付く。33は、底径7.0cm の底部から緩やかに外反して胴部へと展開する。

このように押出遺跡の出土土器を概観してみたが、出土点数の少ない割にその内容は渋沢遺跡の土器群同様多彩な色彩を帯びていることがわかる。出土土器の主体は、条痕文系土器で渋沢遺跡第Ⅲ期丸子式土器併行段階のもので占められ、弥生時代中期初頭段階に本地域（東駿河地方）が三河、遠江地方を中心とした条痕文系土器文化圏に属していたことは容易に理解される内容を示しているが、4 や10、12の文様に見られる中部高地の影響や9 、 27〜31の関東、東北の大洞A′式系の影響が伺えるものなど系譜の異なる内容も看取され、一元的な土器型式ではなく重層的な型式内容をも示している。本地域の初頭期の弥生時代を考える場合、この系統差を明確にするとともに、それぞれの搬出先と認められる地方の土器の型式的属性が在地において、いかに受容あるいは変容がなされたか検討することが必要であろう。佐藤由紀男氏の指摘のとおり渋沢遺跡の土器は、所謂丸子式土器の主体的な分布範囲には含まれず独自の文化圏を構成しているようである（佐藤1987）。

（渡井英誉）

引用参考文献

渡井一信他 1989 『渋沢遺跡』富士宮市教育委員会
山上英誉 1989 「Ⅳ　遺物　1　土器」『渋沢遺跡』富士宮市教育委員会
愛知考古学談話会 1985 『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』
佐藤由紀男 1987 「静岡市丸子セイゾウ山・佐渡遺跡出土土器の再検討」
『研究紀要』第10号　静岡県博物館協会

7．泉(いずみ)遺跡　　第１・２地点

所在地　　富士宮市黒田字泉

調査目的　　第１地点　　市道滝戸・泉線改良舗装工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

　　第２地点　　共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査

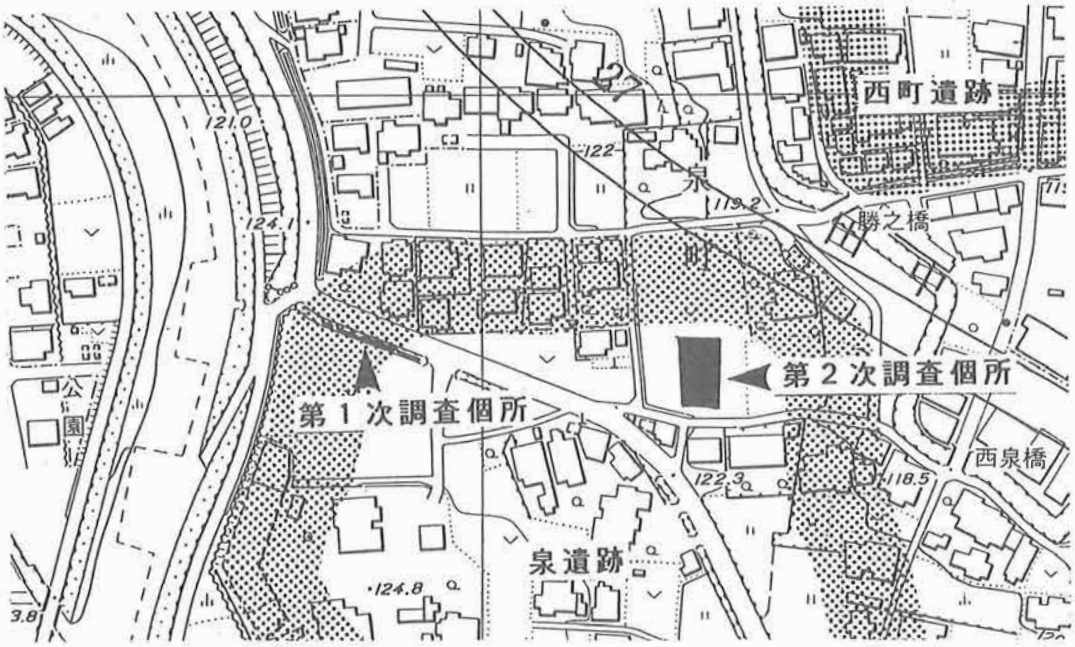
調査期間　　第１地点　　昭和59年10月15日～11月８日

　　第２地点　　昭和63年５月10日～５月31日

調査面積　　第１地点　　24.5㎡　　第２地点　　265.0㎡

調査主体　　富士宮市教育委員会

発掘担当者　第１地点　　渡井　一信　　第２地点　　馬飼野行雄



泉遺跡位置図

遺跡の位置と環境

泉遺跡は、南西方向に緩やかに傾斜する富士山西南麓と独立丘陵を形成する羽鮒丘陵との間を南下する潤井川の中流域に展開する沖積地内の自然堤防上に立地し、東西200m・南北250mの範囲を有する。この沖積地内には本遺跡を始めとして西町遺跡、羽衣町遺跡、東田遺跡、田中遺跡などの弥生時代後期（第Ⅳ様式）（山上1991）～古墳時代前期（大廓式新段階）（加納1981）の遺跡が、その微高地に占地している。

弥生時代の生業を考えた場合、沖積地に展開するこれらの遺跡群の出現は、一つの転換

点として捉えられる。この沖積地を取り囲む丘陵上に立地している渋沢遺跡、別所遺跡などの弥生時代中期初頭に比定される遺跡において、まだ安定した生産体制が期待できないため本格的な水稲農耕に対する依存度は弱く、水稲農耕がこの段階に生業として成り立っていなかったとするのが大方の意見（植松1971）であり、畑作農耕や脈々と縄文時代から続く狩猟、採集といった初源的な経済活動を打破するのは、この潤井川中流域の沖積地内の遺跡群の出現を待たなければならない。

明らかに水稲農耕を意識して、その開発場所をこれらの遺跡群は選定している。現状では、その生活面が現地表面より想像以上深く、これまで水田といった直接的な遺構として発見されていないため、その具体相は不明であるものの、同時期で海岸部の沖積地に展開する富士市沖田遺跡での田下駄、堅杵、矢板の出土や、清水市長崎遺跡、静岡市瀬名遺跡、登呂遺跡などの水田跡の発見は、厳密には地形を異にするといえども弥生時代後期の活発な水田開発および水稲農耕に対する依存度の増大に伴う新たな経済活動が具象化されているものとみなされる。その動きは、水田開発の適地を求める動きとして各河川の中流域の狭小な沖積地でもみられ、潤井川中流域に出現した上記の遺跡群も、その動きを的確に表している。

本遺跡についてその存在が最も重要になるのは、潤井川と対峙して位置する羽鮒丘陵（星山丘陵）上の滝戸遺跡である。滝戸遺跡は、弥生時代後期・Ⅳ－３様式から古墳時代前期・大廓式新段階の良好な資料の出土を見ている遺跡であるが、その生活域、墓域、生産域について本遺跡と直接的な関係を有していたことがこれまでの調査の積み上げで解明されつつある。

滝戸遺跡第Ⅳ次調査地点は、泉遺跡から直接見上げる潤井川対岸の丘陵上であるが、泉遺跡では確認されていない弥生時代Ⅳ－３様式～Ⅳ－５様式段階の方形周溝墓が10基発見されている。この段階の周溝墓の検出例は東駿河地域で極めて少なく、「コ」字形あるいはそのコーナーが２箇所掘り残される未発達のもので占められている。この墓域と相関関係を有していた集落は、同じ丘陵の標高のやや高い中央～東部分に展開しているようで、その第Ⅴ次調査として実施された富士宮第三中学校の敷地内の調査で、その一部が確認されている。滝戸遺跡は、潤井川中流域で弥生時代第Ⅳ様式後半段階に拠点をなす集落を形成している遺跡として捉えられるが、対岸に位置する泉遺跡とは互いに存続期間を第Ⅳ様式の前半と後半とで違えている。その集落の造営は、集団の違いまで想定させるものであり、川を挟んだ頻繁な集落単位の移動があったことが理解されるものであるが、沖積地と丘陵と言った立地の差を十分考慮し、その要因については今後の検討課題としなければならない。

調査の概要と結果

第１地点（図－２）

第１地点では、狭小なトレンチ調査にもかかわらず竪穴住居跡と思われる掘り込み（以下住居と呼称する。）が７軒以上確認されている。各々が折り重なるように検出されている住居は、その形態、規模など正確な数値は不明であり、付属すると考えられる各施設（炉、柱穴等）の帰属など、第４号住居址内のピットなどを除いて特定出来ない。時代としては、古墳時代後期（第１面）に比定される第７号住居址と弥生時代後期～古墳時代前期（第２面）に比定される第１号～第６号住居址の２時期が見られ、複合する遺跡であることが解明された。

各住居のトレンチ内で確認できる計測値は、図－２の表のとおりであり、第２面において方形状の第５号住居址、円形状の第７号住居址がそれぞれ確認されている。また、この面において最大規模を測る第２号住居址ではその覆土中に焼土塊が３箇所検出されている。第４住居址より西側に展開する第１，２トレンチでは、炉として焼土を含む土坑が２基、ピットが４個、それぞれ見られ、２軒以上の住居址の存在が想定されるが、調査上の諸条件によりその具体相までは追求されていない。

第１面においては、上記の時期の典型である方形の平面形のコーナー部分が確認されいる第７号住居址が存在する。この住居内では人頭大～拳大の石が、その西側部分を中心に散乱して検出されている。

第２地点（図－３）

第１地点の西側100mにあたる第２地点では、265m²の調査面積ながら竪穴住居24軒、南側に彎曲する溝１条、土坑など豊富な資料が検出された。同一の確認面ながら第１地点同様弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期の２時期とさらに平安時代の遺構が新たに検出されている。

第２地点は、泉地区で大きく蛇行する潤井川左岸に舌状に展開する沖積地内の微高地に占地しているが、地表下最深部 1.5 mにある黄褐色で砂質のスコリア層（大沢ラピリ相当層）を弥生時代以後の時代の確認面としている。また、このスコリア層より下位の層序は、砂層と粘土層が地表下３ｍほどに見られる礫層まで互層をなし、典型的な沖積地の様相を示す。当該期のベースとなるスコリア層は、富士山西麓に広く分布するもので、B.P 約2,700 年前とされる堆積年代が与えられており（増島1978）、遺構確認の鍵層となっている。この沖積地においてもその堆積は、スコリアがやや疎らながら顕著に認められ、驚異的な火山活動の大きさが想定できるとともに、その堆積以後居住区域として安定した地形を形成した事も理解されるのである。

発見されている遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居15軒・溝１条、古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居６軒、平安時代の竪穴住居４軒とその他に時期不明の土坑、ピットなどである。竪穴住居は、時代的な複合が著しいため、その軒数は多いが、各住居の出土遺物の絶対量は少ない。そのため各住居の時代は、その形態以外明確に限定できな

い部分が多く、上記の時代区分による遺構の帰属も誤認しているものがあると考えている。しかし、生業に係わる弥生時代以降の特徴的な遺跡の立地場所の選択を考え合わせながらも、巨視的に観れば、この遺跡が、弥生時代Ⅳ－１様式あるいはⅣ－２様式段階から連綿として営まれていた拠点的な集落を形成していたのは極めて重要である。

以下ではこの地点で検出された遺構のうち特徴的なものについて解説を行う。

第５号住居址（図－４）

第５号住居址は、第２地点の南側中央部において第４号住居址により切られ、第13, 18号住居址を切る状況で検出されている。この内、古墳時代後期に比定される第５,13,18住居址は、第５号住居址を最新のものとして３軒による重複関係を示す。

この住居址は、主軸方位をＮ－43°－Ｗに持つ長方形のもので448 ×482cm の規模を測る。床面積は21.0㎡で、時間的に前出の第13号住居址よりやや小さくなり、軸方向をより西側に振る。壁は、竈を有する北西側で20cm、北東側で15cmを測り、やや良好な残存状況を示すものの、南西側は深さ６cm程度で、その状況は悪くなる。掘り方は、床面より深さ８cm～15cmを有し、南西側に向かって緩やかな傾斜を示し南西壁側で最深部を持つ。掘り方の形状は、その構築方法に時代的な相違が十分考慮され、同一の原理では理解されないものと考えられるが、古墳時代前期の遺跡である月の輪遺跡群掘り方分類ではＣ類（植松1981）として認識される。床面は、竈の前面を中心として「貼り床」が住居の中央から南西寄りの範囲に確認される。また、北東壁際の北西半分には所謂「周溝」が見られ、幅20cm、床面より深さ12cm程度の規模で住居の北コーナーで終結して掘り込まれている。

この住居址内では、ピットが４個見られるが、それぞれの計測値は図－４の表のようになる。それぞれのピットの内、Ｐ－２，３以外は積極的に柱穴として認定できない。Ｐ－２はその位置関係より第18号住居址のそれとしての相関関係が想定される。また、Ｐ－３は、深さ50cmを測り、掘り方の形状が略方形を呈するものであり、柱穴としては十分な要素を備えているが、これもその位置関係から第13号住居址との関連が想定される。このように、第５号住居址に伴う柱穴は確認されておらず、この住居が本来無柱穴のものであったと捉えられた。遺物は、直接関係あるものとして、北コーナーの床面直上から出土している５個の拳大の川原石が上げられる。

竈

竈は、北西壁中央やや南西側に設置されている。掘り方部分を含めた全長は、煙道部分の長さ12cmの張り出し箇所を含めて113cmを測り、幅も同様に掘り方部分を含め118cm を測る。この竈は、深さ７cm程を有する黒色土を含む掘り方に溶岩の角礫を芯として黄褐色粘土により構築されている。竈の前面は完全に崩落しているものの、煙道、天井、掛け口、袖のそれぞれ一部が良好に残っている。特に袖部は、掘り方に埋め込まれた角礫の立石が右に３個、左に１個それぞれ見られ、それを芯として堅固に構築されている。また、

煙道は、地山を階段状に削りだすことによって張り出し部を作り出し、その機能を持たせている。燃焼部は、その火床が住居の床面より12cm程下がっており、焼土、炭化物が薄く堆積している。燃焼部からは、竈の構造上は直接的な関係を有しない坏の破片（図－16の127 ）が、その中位から出土している。

第１号溝（図－５）

調査区の北側を東西に横断する状況で検出された。第１、２号住居址、第３、４号土坑などと重複関係を持つが、いずれよりも古い。平面的な形状は、潤井川の流路に対して対称を成すかのように南側に向かってゆるやかな弧状を描く。規模は、西側で上場幅80cm、下場幅16cm、東側で上場幅80cm、下場幅15cmをそれぞれ測り、検出された部分でほぼ均等な規模を有する。壁面は、かなりの傾斜をもって直線的にしっかり掘り込まれ、遺構検出面より深さ65～70cmを測る。断面形は「Ｖ」字状を呈し、溝底は、各地点でその標高がほぼ同一で水平を保っている。

遺物はすべて土器であるが、それらは溝の南壁から中央にかけて溝底より30～50cm浮いた状態で検出されている。これらは、弥生時代Ⅳ－５様式に比定される月の輪上遺跡溝状遺構01,20 、大廓式（古）段階（山上他1991 ）に比定される上石敷遺跡Ｍ－１溝状遺構などと同様に溝の中層を中心に無造作に廃棄された状況を示す。

遺物（図－10～20）

第１地点、第２地点ともにその調査面積に比して、土器を中心に豊富な遺物の出土を見ている。第１地点は、弥生時代後期～古墳時代前期のものを主体に、古墳時代後期の資料が少量見られる状況であるが、弥生時代後期～古墳時代前期の資料は内容的にも多種多様で、豊富な情報を新たに提供している。

第１地点では、その中で最も広い範囲が調査、確認された第２号住居址において良好な資料が出土している。第２号住居址では３の台付甕Ｃと台付甕Ｄｂ 及び小破片ながら1の受口系口縁甕の共伴例が確認され、台付甕Ｃを含む良好な組成を新たに提示している。これらの内、台付甕Ｄｂ 類は口唇部に刺突文のある4 、それがなく平縁の5 、大形品と思われる7など型式的なバラエティーが看取される。

また、この地点の土器群はその係累の違う形式が多く多元的な様相を示す。

駿河と隣接する東遠江の菊川様式のものは、弥生時代第Ⅳ－３様式の段階にその搬入が顕在化するが、この地点では、37、40の壺と61の形骸化した鍔状口縁高坏がみられる。大廓式（古）段階にその流入が明らかになる淵源地を伊勢湾沿岸地方に求められる所謂東海西部系のものは、台付甕Ａの15などのＳ字甕が普遍的に見られるのをはじめとして、１ の受口系口縁甕や17、69などの高坏Ａが確認されている。畿内系のものは、凹み底で器厚を薄く仕上げる47や62の大和型庄内甕の搬入品（註１）や73の器台、凹み底の78などがみら

れる。更に、小破片であるため拓影図で掲載しているが北陸系と思われる口唇部を立ち上がらせる119 が異系統の形式として確認されている。

第２地点は、その検出された遺構の数に比べて、明らかに所属の理解される遺物は少ない。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物は、第１地点と同じ様相を示し、両地点の有機的な関連が容易に想定させる。特にこの段階のもので注意されるものは、第1地点で検出された62の甕と同様に199 のタタキ甕が上げられる。これは、外面に右下がりのタタキとタテハケメが施され、内面を横方向にヘラケズリし器厚を薄く仕上げている大和型庄内甕で、東国では非常に希有な搬入品である（註１）。また、第22号住居址から出土している銅鏃(204)は、古墳時代前期の月の輪平遺跡第110 号住居跡出土の柳葉形のもの（渡井1982）以来、当市においては２例目の出土で、有茎三角形式で断面が菱形を呈すると思われるものであるが、縁辺が脆く腐食が進んでおり残存状態は非常に悪い。今回新たに検出されたこれは、中央に円孔が１ヶ所穿たれ、身の中央に幅0.1cm 程度の突帯で茎から続くとみられる脊が通るものである。また、逆刺が発達したものらしく円孔の後方にみられる表裏４ヵ所の抉りは、茎に直接関係しているとともに逆刺をも形作っているようである。

第２地点では、上記の段階の遺物のほか、当市でその出土例が、まだ極めて少ない古墳時代後期の遺物とそれの属する竪穴住居址や直接遺構から出土した奈良～平安時代の遺物が検出されている。特に、10世紀代に比定される第３号住居址にみられる123、124の甕の例のように、甲斐型土器の坏、甕が多く検出されているのを大きな特徴とする。

この他、この第２地点では遺構確認面から鉄滓が検出されているが、関連する遺構などは確認していない。

第５号住居址出土遺物

第５号住居址からは、前述のように、当市において初例といえる古墳時代後期の遺物の出土を見ているが、古墳以外のこの段階の遺構として、初めてその存在が確認された。土器は、竈左袖の左側床面から128 の土師器坏、130 の須恵器蓋が、竈内から126、127、129の土師器坏がそれぞれ出土している。また、特筆されるものとして、竈の前面および竈と北コーナーの間の北西壁際にそれぞれ検出された同一個体と思われる用途不明の筒状の青銅製品があげられる。

126 ～129の土師器坏は、すべて黒色処理、ヘラミガキ調整されたもので、体部と口縁部の間に稜を有する126が推定口径13.1cm、128が推定口径12.9cmを測り、丸底形態の127が口径13.0cm、器高4.2cm 、129 が推定口径12.5cm、器高4.2cm をそれぞれ測る。また、須恵器蓋の130 が口径10.0cm、器高3.4cmを測るもので、底部に「同心円形」の箆削りがみられる型式であり、湖西古窯跡群編年(後藤1989)では七世紀第２四半世紀ものに比定される。

第１号溝出土遺物

第１号溝では、その遺構の性格上厳密な一括性を追えないが、弥生時代Ⅳ－３様式段階の良好な資料が得られている。この遺構の土器群は、2系統のものが認められ、この段階の特徴を的確に表している。折り返し口縁壺（壺Ｄ）で折り返し部断面が「△」を呈する158 、口唇部を特異な技法で斜方向に面取りする単純口縁壺（壺Ｅ）の159 は、それぞれ菊川様式中段階（中嶋1991）の影響を直接受けたもので、第Ⅳ様式の中で土器の動きが顕在化する指標的な資料と言える。また、164 、165 にみられる台付甕には、前段階に見られなかった非常に目の粗いハケ状工具によるハケメ調整がみられるが、これも菊川様式で盛行する技法であり、上記の壺などとともに搬入してきたものとして捉えられる。

この段階は、西遠江、中部高地からの影響も明らかになるもののその主体はあくまでも駿河湾を直接媒介とする東遠江であり、その搬入の度合いに各段階で強弱があったりオリジナルのものからは変容が随分すすんだものがみられたりするものの、この段階以後在来の要素と融合する状態でその動きが明らかになる。（渡井英誉）

註１　奥田尚氏の胎土観察によれば、図－13の62が流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とした砂礫構成を示し、図－20の199 が花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主としており、どちらの砂礫も富士山西麓の本地域においては採取できないものである事が確認されている。62が播磨平野、199 が奈良盆地東南部あるいは伊勢北部や矢作川流域などにそれぞれ産地をもつようであり、搬入品である可能性が極めて高い（奥田1992）。

引用参考文献

植松章八 1971 『富士宮市史』上巻第Ｉ章　富士宮市

植松章八 1981 「住居址床面の二重構造について」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会

加納俊介 1981 「出土土器の編年的位置（１）－月の輪新について－」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会

中嶋郁夫 1991 「東遠江における後期弥生土器編年と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第Ｉ分冊　東海埋蔵文化財研究会

増島　淳 1978 「滝戸遺跡の土層について」『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅱ次）概報』富士宮市教育委員会

山上英誉 1991 「静岡県（駿河）」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第Ⅱ分冊　東海埋蔵文化財研究会

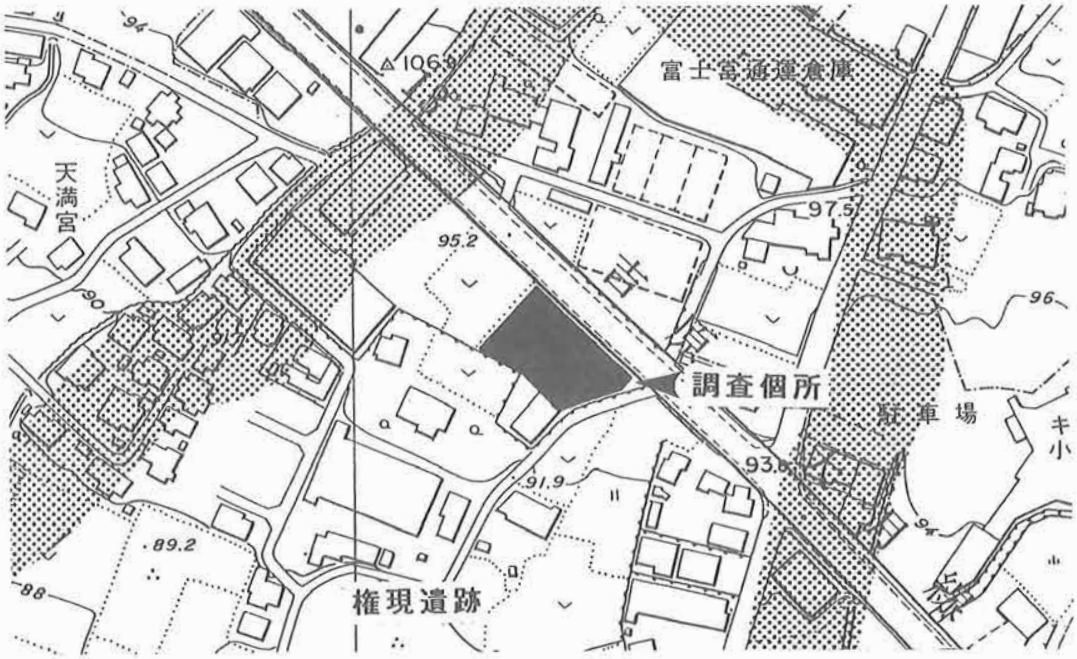
山上英誉他 1991 『丸ヶ谷戸遺跡』富士宮市教育委員会

渡井一信 1982 「２.銅鏃について」『月の輪遺跡群Ⅲ』富士宮市教育委員会

後藤建一 1989 「付載1　湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡　本文編』静岡県教育委員会
奥田尚 1992 「大和型庄内甕の砂礫種構成とその移動」『庄内式土器研究Ⅲ』

8．権現（ごんげん）遺跡

所在地　　富士宮市小泉字権現
調査目的　　自動車販売会社社屋建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査
調査期間　　昭和57年4月27日～5月7日
調査面積　　約400㎡
調査主体　　富士宮市教育委員会
発掘担当者　渡井　一信



権現遺跡位置図

遺跡の位置と環境

市内小泉地区は、数多くの湧水地を抱え市内有数の富水地帯を形成し、中沢川以東の富士山南西麓斜面に展開する樹根状の各丘陵上を中心として、活発な遺跡の造営活動が観察され、遺跡の密集地のひとつとして時代的に複合する遺跡が多くみられる地区である。

地形的には富士山西南麓に数多く分布する洪積世末期の古富士火山の噴出した集塊質泥流を基盤として、新富士火山の噴出物である火山性砂礫層がその上部を被って丘陵地帯を形成している。この火山性砂礫層は極めて透水性に富むため、この地区の湧水地の形成の要因にもなっている。また、この古富士火山集塊質泥流は、当市の西端を南下する富士川岸まで達しており、市内の中央を南下する潤井川を境に本遺跡の立地する富士山麓と対峙する権現遺跡と同時期の滝戸遺跡、月の輪遺跡群を抱える星山丘陵、羽鮒丘陵の基盤をも形成している。

権現遺跡は、上記の小泉地区に所在する遺跡で標高80～100mを測る富士山から連なる裾野斜面の末端の丘陵上にあり、前面に潤井川とその支流である弓沢川を見下ろす場所に位置している。遺跡は、近年の市街化に伴う開発の波が急激に押し寄せている地域にあり、あまり良好な保存状態を保っていないが南北、東西それぞれ300mを測るやや広範囲の面積を有している。調査地点は、遺跡のほぼ中央部に当たる。なお、権現遺跡と同様の性格を有する富士山麓斜面内の丘陵上に占地している上石敷遺跡（馬飼野1985）は、北北西１km程に位置し、同時代の遺跡で前方後方型周溝墓が検出されている丸ヶ谷戸遺跡（馬飼野1991）は、同方向2.4km に位置している。

調査の概要と結果（図－６）

この調査において確認された遺構は、古墳時代初頭（大廓式（古)段階）のものと奈良時代に比定される大溝（溝状遺構）１条である。古墳時代初頭に比定されるものは、竪穴住居跡６軒と相互に関連を有していたと思われる掘立柱建物跡２棟である。

権現遺跡は、前述のようになだらかに傾斜する富士山裾野斜面の末端部に位置するものの、他の富士根地区に占地する遺跡と同じ土層の堆積状況を示しており、地表下20～30cmで遺構確認面となる大沢ラピリ層がみられる。以下、古富士泥流上扇状地堆積物上部層まで黒褐色土→茶褐色（縄文中期包含層）→富士黒土→橙色土→黄褐色粘土質土→暗黄褐色砂質土となり標準的な層序を示す。

確認された遺構についての詳細は、1982年富士宮市教育委員会発行の『権現遺跡発掘調査概報』（渡井1982）に詳しいので本文では省略するが、遺物の良好な出土をみている第１号住居跡について以下に再録する。

第１号住居跡

第１号住居跡は、調査区域内ほぼ中央に位置する。規模は、350 ×300cm を測り、形状は隅丸長方形である。長軸方位は、N－15° －Eを示す。炉は中央部と東北部のほぼ中間に位置し、炉石１個を使用し、若干の掘り方をもっている。柱穴は１基だけが確認された。径50cm, 深さ20cmを測る。掘り方はC型（「月の輪遺跡群Ｉ」1981富士宮市教育委員会　参照）である。遺物は床面上に小型壺、台

付甕脚部、高坏脚部、壺口縁部破片など、10個体以上が検出されている。

（渡井一信 1982 『権現遺跡発掘調査概報』富士宮市教育委員会より抜粋）

このように第１号住居跡については記述されているが、この中で柱穴として捉えられているピットは、住居の南東コーナーに位置する所謂「貯蔵穴」と考えられるもので訂正を必要とする。第１号住居跡においては、前記の炉とピット以外その付属施設になりうるものは確認されてあらず、典型的な住居内に柱穴をもたない竪穴住居の一例として捉えられるものである。

遺物（図－21、22）

遺物は、普通サイズのコンテナに２箱程の量で、発見されている遺構の数に比してその数は多くない。その内容は、古墳時代初頭（大廓式土器（古）段階）のものが、遺構の数に相対して多く、その他奈良時代のものがやや目立ち、少量ではあるが縄文時代の土器が見られる。

縄文時代は、土器のみが13点確認されているが、全て五領ヶ台式土器である。

奈良時代は、図示した５点の須恵器の他、図化不能な須恵器破片や所謂「駿東型甕」（瀬川1981）と称される甕の破片が目立つ。この段階の遺構は、調査区を東西に走る大型の溝状遺構だけであり、直接的な生活域としての建物などは、検出されていない。そのためその遺物の量や種類など相対的に少なく、遺跡の立地や遺構の機能に伴う流れ込みによると思われる小破片が多く確認されている。

この調査区では、遺物の80％以上が古墳時代初頭のものである。良好な一括資料がみられる第１号住居跡の遺物の出土状況やその内容については後述するが、検出された土器群を巨視的に見ると、明らかに伊勢湾地方を中心とした外来系のものがあり、土器の交流としての新たな動きを示す土器形式の存在が、その絶対量は少ないものの顕在化する大きな特徴が看取される。221 、224 、232 ～234 の破片など、それらの地域からの土器の移動を表出している好例で、弥生時代後期の土器組成とは一線を画す組成を示す一要素として捉えられる。

第１号住居跡出土遺物

第１号住居跡からは、217 、218 の高坏、209 の小型壺がそれぞれ住居の中央北壁寄りの床面直上にやや集中して検出されている。また、南東コーナーにある貯蔵穴の周辺から、210 の小型壺がその床面直上から出土している。更に東壁中央の壁際からは、径20cm、幅５cm程度の作業台に使われた思われる「台石」が１個検出されている。この中で、209 と218 の出土状態は特筆される。両者は、同一地点の出土で218 の高坏脚台部の上に209 の小型壺が乗る状態で２つがセットになり検出されており、両者の位置関係には単なる偶然性が、作用した可能性を考慮しなければならないものの、218 の機能が器台に転用さ.れ

た可能性を伺わせるものであり、小型壺の機能、使用方法をも想定させるものでもある。今後、周辺におけるこのようなセットを示す資料の増加を待ちたい。

非常に丁寧に作られたものが2個体検出されている小型壺、弥生時代後期後半からその存在が明らかになる鉢状の深いおおぶりの坏が付される駿河地域特有の高坏の系譜の中で捉えられる218 の高坏、簡略化され機能的なX字状の高坏などの形式組成を示す第1号住居跡の土器群は、多形式に亘り、高坏を含むなど駿河地域の弥生時代後期（第Ⅳ様式）には見られなかった組成を示し、古墳時代初頭（大廓式土器（古）段階）のメルクマルとなる良好なものとして捉えられるものである。（渡井英誉）

引用参考文献

馬飼野行雄 1985 『上石敷遺跡』富士宮市教育委員会
馬飼野行雄他 1991 『丸ヶ谷戸遺跡』富士宮市教育委員会
渡井一信 1982 『権現遺跡発掘調査概報』富士宮市教育委員会
瀬川裕市郎 1981 「静岡県東部地域における奈良時代土器の様相」『シンポジウム盤状坏－奈良時代土器の様相－』相武古代研究会他

9．長者ヶ原(ちょうじゃがはら) B遺跡

所在地　富士宮市上井出字向平
調査目的　サイクリングロード建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査他
調査期間　第1次調査　昭和61年4月15日～4月21日
　　第2次調査　昭和62年4月13日～5月6日
調査面積　第1次調査　約360㎡
　　第2次調査　約840㎡
調査主体　富士宮市教育委員会
調査担当者　馬飼野行雄

遺跡の位置と環境（図－7）

長者ヶ原遺跡は、田貫湖湖畔および湖中に展開する遺跡で、島状に残る長者ヶ原A遺跡と湖の東岸部に展開する長者ヶ原B遺跡に二分して現状では、捉えられているが、本来は湖中部分を中心とした同一の遺跡として考えられるもので、南北400m、東西500m程度を測る広範囲の面積を有したものである。

田貫湖は、元来その基盤を富士川谷第三系とする天子山脈中の長者ヶ岳から東に延びる田貫尾根の南側に分布していた田貫湖湿原を、昭和10年代に一部堰き止めて灌漑用水池にした人造湖である。遺跡は、富士根地区や星山、羽鮒丘陵上に占地している遺跡群と同様にその基盤を不透水性の古富士泥流として、その上部を新富士火山の火山性砂礫層が覆う地質構造で、田貫湖の南岸〜東岸部分を中心としたやや小高い丘陵上に位置している。つまり、長者ヶ岳や田貫尾根を背後に抱えるとともに、それらから開く谷部に形成された湿原を後背に持つ丘陵上の遺跡として、これは捉えられ、その東側を天子山脈と富士山西麓の接点となる古い活断層の西富士断層及び芝川が南下しており、遺跡の周辺は非常に複雑な地形を呈していることが分かる(小川1988)。

現段階では、その北側に猪之頭地区の湧水地帯を抱えるものの長者ヶ原遺跡の周辺には、同時代の遺跡を確認していない。確実に弥生時代後期に比定されるもっともその距離の近い遺跡は、山梨県上九一色村南二条遺跡（中山1985）で、北東方向に9km程の地点にあり、長者ヶ原遺跡とは、地形的に対峙する富士山西麓斜面上に位置している。また、市内で同時期の遺跡としては、潤井川中流域の滝戸遺跡、泉遺跡を代表とする青木〜大中里地区に所在する遺跡群が上げられるが、長者ヶ原遺跡から南へ12kmあまり離れており、直接的な関係は薄い。さらに、やや時代は下るが古墳時代前期の遺跡としては、北東4kmに位置している「姥穴」と称される溶岩洞窟の周辺に広がる姥穴遺跡が上げられる程度で、その数も少ない。自然地形上の要因や活動期の火山の影響を直接受けるといった自然環境上の要因などにより、長者ヶ原遺跡周辺の遺跡の発見を困難にしている部分が大きいと思われるが、根本的に遺跡の絶対数も少なかったものと理解される。しかし、富士山西麓部には、弥生時代後期〜古墳時代前期の遺跡として、この長者ヶ原遺跡を始めとして前述の姥穴遺跡や南二条遺跡、タタキ成形の平底甕が出土している上九一色村西一条遺跡（中山1985）などが点在しているのも事実で、弥生時代後期〜古墳時代前期の活発な遺跡の拡がりや集落の形成といった内在的な造営能力が飛躍的に増大し、単に自然発生だけでは理解されない状況を示すとともに、山梨県の郡内地方を中心とした地域と駿河湾の最奥部を結ぶルートの積極的な開発をも想定させるのに、十分な遺跡の分布を示している。

調査の概要と結果

第1次調査（図－7）

長者ヶ原遺跡は昭和60年度に行われた護岸工事による水位低下により、湖底より大沢ラピリを基盤とする黒色の落ち込みが数多く見られたことにより、その存在が確認された遺跡である。第1次調査は、遺跡の性格を目的として湖底に確認された黒色の落ち込みの内、竪穴住居址2軒の調査を行い、さらに湖畔の草原部分に樹木を避けるように4箇所のトレンチを設定し、遺跡の範囲確認も同時に実施した。

竪穴住居址は、弥生時代Ⅳ－４、５様式（山上1991）の土器を出土する２軒を調査している。完掘された第１号住居址は、長軸方位をＮ－35°－Ｅにもつ胴張隅丸方形の住居で、柱穴を持たないものであるが、住居の南西側中央で入口施設に付随する楕円形のピットＰ－１がみられる。Ｐ－１は、その規模が40×18cmで、床面からの深さ26cmを測り、梯子などの壁側から設置された施設に対応するように斜方向に掘り込まれたピットである。

炉は、中央やや北東よりにみられ、88×68cmの長円形の範囲で焼土が確認され、深さ15cmを測る皿状の掘り方を有す。また、その中央には23×9 ×5cm を測る角礫が「炉石」として使用されている。

掘り方は、中央がやや高まるものの、深さ40cmを測るほぼ平坦な掘り込みを有するもので、非常にしっかり掘り上げており、月の輪遺跡群分類（植松1981）のＣ類に相当し、この時期の住居の通有の掘り方に比べて非常に堅固に作ってあり特徴的である。

平面形は、胴張隅丸方形（小判形）を呈するが駿河地域の弥生時代後期の一般的な形態で、次段階の大廓式（古）段階に比定される上石敷遺跡の竪穴住居群（馬飼野1985）や丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡02（馬飼野1991）などの方形を志向する形態のものとは明らかに様相が異なり古相を示す。この段階の住居平面形の変化は、比田井克仁氏が述べているように、けっして漸次的なものでなく、時代の変化に則した新形態の出場による変化として理解されるものである（比田井1991）。方形に対する志向は、 外来系土器に具象化される東海地方西部からの活発な交流に関連したものと考えられる形態であり、この遺跡例のものより明らかに後出の要素としなければならない。

遺物は、炉の前方に胴部下半以下を欠損した台付甕が検出されている。また、その甕と北東壁の間には、人頭大の角礫２個と18×15×5cmの偏平礫が「台石」として設置されている。

第２号住居址は、第１号住居址の北へ５ｍほど離れた位置にあり、長軸方位をやや北に振るようであるが、ほぼ第１号住居址と同じ形態を示す。この住居は、遺跡の概要を知ることを第一義とした調査のため完掘はしていないが、第１号住居址よりも浅く、床面まで南壁で深さ30cmを測る。第１号住居址と同様にしっかりした床面を構築しているが炉や柱穴などの付属施設は確認していない。また、住居の壁際を中心に多量の焼土の分布が認められる。遺物は、南壁側に非完形の土器が、全て壺で散在する状況で検出されている。

各トレンチは、遺跡の範囲確認を目的としているため検出された落ち込み（遺構）個々の調査は実施していない。各トレンチでは、大沢ラピリを基盤とする溝状の幅の狭い落ち込みがそれぞれ確認されている。第１トレンチでは４条の溝状のものが見られるがそれぞれ東側より100cm、30cm、50cm、50cmの幅を測る。第２トレンチでは３条見られ東より50cm、40cm、70cmの幅をそれぞれ測る。第３トレンチは、トレンチを斜行し北西－南東に走る溝状の落ち込みが見られる。

第１、２号住居址出土遺物（図－22）

第１号住居址からは、台付甕Ｄと思われる甕の上半部の235が出土している。これは、口径12.5cm 胴部最大径13.4cmを測るもので胴径が口径を凌駕している。この特徴は、弥生時代第Ⅳ様式の中でもその後半部分で顕在化する型式的属性であり、Ⅳ－４様式あるいはⅣ－５様式に比定されるものである。台付甕とされる形式は、型式変化の上で、その特徴が乏しく単体の出土では厳密な時代設定は出来ないのが現状である。そのため第１号住居址については、上記の弥生時代後期後半(Ⅳ－４様式、Ⅳ－５様式)の時代幅を持たせて捉えておく。　第２号住居址からは、折り返し部の幅が狭く頸部に円形の貼付文だけ施すやや大ぶりの壺Ｄａに相当する238 、菊川様式の影響の伺われる胴過半が発達した237 、頸部の屈曲が顕著な236が、それぞれ出土しているが、口径に比して口縁部高や頸径が小さくなる238 の型式的属性や頸部と肩部の区画が明瞭化する236 は、Ⅳ－５様式以後出現するものである。ただ、これらが出土している住居の形態が古いことや弥生時代第Ⅳ様式の次段階である大廓式（古）段階に普遍化する東海西部地方、畿内地方の影響が土器型式に全く見られない点は、これらの土器群の時代が古墳時代まで下らないものと判断され、弥生時代Ⅳ－５様式の所産として理解される。

第２次調査（図－８）

第２次調査は、富士宮市の観光整備計画に基づく田貫湖湖畔を周遊するサイクリングロード建設に伴うもので、幅３ｍの細長く蛇行する範囲においてその調査が実施された。発見された遺構は、調査区の中央で溝状遺構が２条、調査区北側で土坑２基である。前者において発見された溝状遺構の内、図示したものは、上場最大幅146cm 、深さ48cmを測るもので、西壁が急に東壁がややなだらかにそれぞれ立ち上がる断面「Ｕ」字状を形成するものである。この溝状の遺構においては、底面よりやや浮いた状態で長さ172cm 以上、幅41cm、幅0.2～0.5mm の柾目の板状の炭化材が出土している。

この溝状遺構は、狭小な調査範囲のため、その機能についてこれだけのデータによる即断は避けなければならないが、溝の形態としては、やや貧弱であることや立地する地形に影響されて構築された部分が目立つことを加味しても、その構築場所を見ると、第１次調査時の各トレンチで確認されているそれぞれを横断する溝状のそれと対応するようで、第１次調査の竪穴住居で構成される集落の縁辺を図－８の溝状遺構推定線のように弧状に巡る環濠のような溝としての機能を有していた可能性がある。

また、上記の溝状遺構の西680cm に上場幅144cm 、深さ103cm を測りトレンチ内で終結する溝あるいは土坑状の遺構が、北－南方向に展開して検出されている。この遺構は、西壁が急傾斜を持って立ち上がり、断面「Ｕ」字状を呈する底面の起伏が著しいものである。さらに、その底面には、炭化物を含む多量の焼土がみられ特徴的である。

調査区の北側に隣接してみられる２基の土坑は、両者とも楕円形の大型のもので、N0.1土坑が365 ×145cm 、深さ120cm を測り、N0.2土坑がそれより若干規模を小さくし291×

122cm 、中央のやや窪む部分で深さ120cm を測る。この土坑は、それぞれその底面に小孔が穿たれ、NO.1土坑で深さ15〜28cmのものが15個、NO.2土坑で深さ８〜23cmを測るものが12個見られる。覆土では、両者ともその下半の大部分が層厚60cm程を測る橙色の火山灰で覆われ、同時期に一気に埋まった状況が看取される。また、この覆土の状況は、前述の第１次調査の第１号住居址においても見られるもので、火山の噴火による生活環境の大きな変化に左右されて各施設を廃絶させているものと考えるには、十分な状況をそれぞれ示している。さらに住居と土坑は、同時期に埋没した可能性もあり、後述するように両者の有機的な関係を考えると、この覆土中の火山灰は示唆的である。

この２基の土坑は、縄文時代以来伝統的に見られる「陥穴」と称される遺構の機能が考えられ、神奈川県横浜市霧ヶ丘遺跡での分類では、E型（今村1973）の溝状に細長く作るものに相当する。これらの立地は、その背後に聳える田貫尾根を抱える田貫湖湿原の湧水地を望むその西側の高台であり、湿原に集まる動物の狩猟に供する施設であったものと十分考えられる。遺物は縄文時代中期の土器片をその覆土より少量得ているものの、この２つの土坑の構築面は大沢ラピリ層であって、その年代は縄文時代晩期以降であると捉えることができる（註１）。現状では第１次調査において確認された集落と有機的な関係を持っていたものするのが、最も自然で、弥生時代第Ⅳ様式のものとして捉えておく。因みに第１次調査の第２号住居址からこれらの土坑までは、北東方向へ140m程の距離を有する。

長者ヶ原遺跡のような河川の上流域で火山の影響を的確に受け水田可耕地はおろか畑作についても良好な適地を求められない地帯では、農耕に対する依存度は極めて低く、前時代から脈々と続く狩猟、採集を生業とする生活が一般化していたものと思われ、これらの隣接する２基の土坑はその状況を的確に表している。（渡井英誉）

註１　大沢ラピリの降下年代は、3.P 約2,700 年前が与えられており、縄文時代晩期に相当する年代である（増島1978）。これは、縄文時代晩期以降を規定する鍵層となっており考古学的に極めて重要な層となっている。ところで、市内および近隣の縄文時代晩期〜弥生時代中期の遺跡の分布を概観すると、縄文時代晩期が辰野遺跡、大中里坂上遺跡の２例、弥生時代中期がその初頭に比定される別所遺跡、渋沢遺跡、押出遺跡、上九一色村南二条遺跡とその後半の芝川町辻遺跡の５例しか知られておらず、いずれも局地的な分布を示すものが多い。

大沢ラピリを切って構築されているこの土坑は、縄文時代晩期以降の年代が規定されるが、弥生時代第Ⅳ様式以降の遺跡の面的で爆発的な増大や近接する長者ヶ原遺跡の住居群を考えると、これが弥生時代第Ⅳ様式に比定される蓋然性は極めて強い。

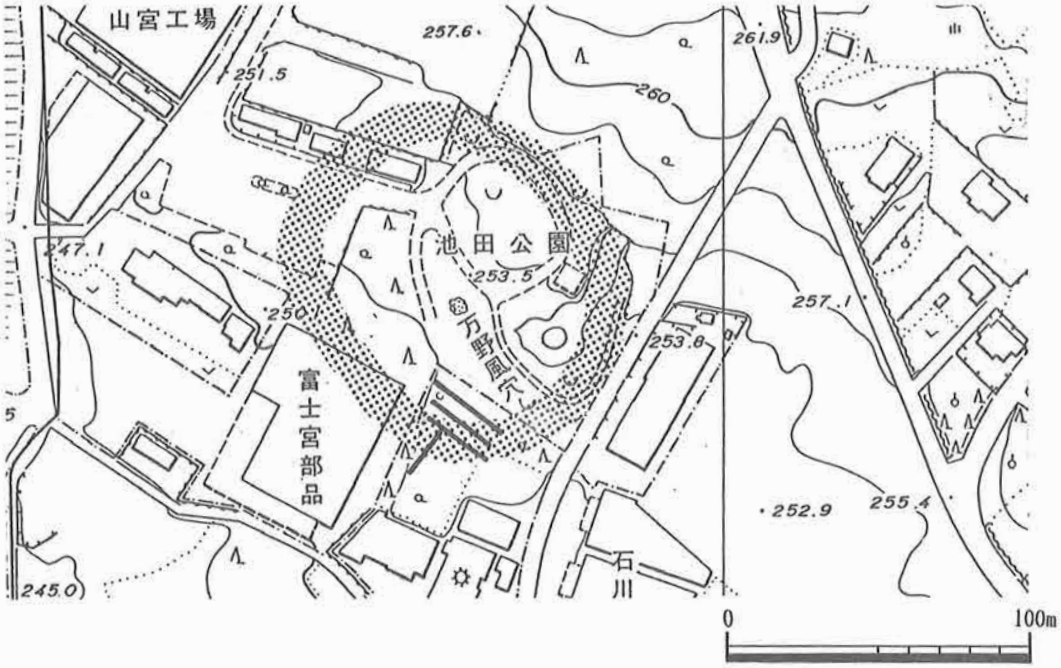
引用参考文献

小川賢之輔 1988 「§３地質詳説２小田貫湿原周辺の地質」『富士宮市の自然』富士宮市

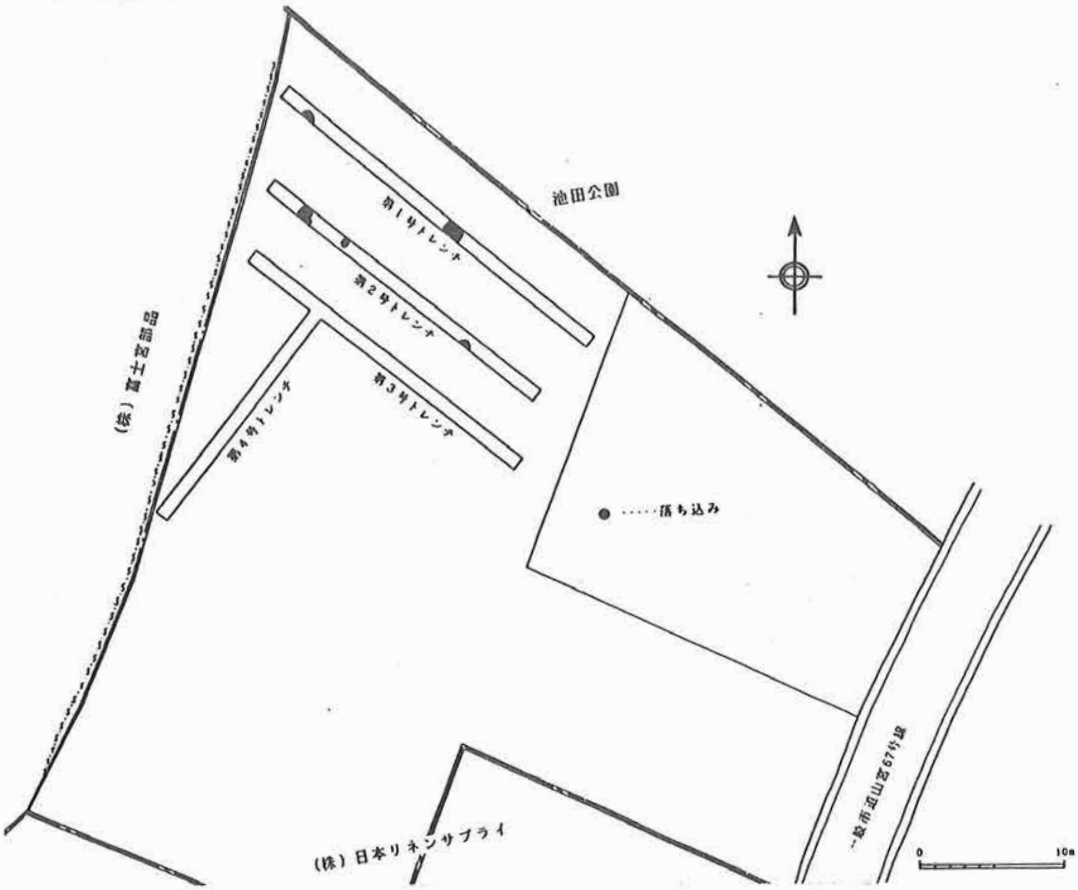
中山誠二 1985 「南二条遺跡、西一条遺跡」『上九一色村誌』上九一色村
山上英誉 1991 「静岡県（駿河）」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第Ⅱ分冊　東海埋蔵文化財研究会
植松章八 1981 「住居址床面の二重構造について」『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会
馬飼野行雄 1985 『上石敷遺跡』富士宮市教育委員会
馬飼野行雄 1991 「Ⅳ竪穴住居跡　竪穴住居跡02」『丸ヶ谷戸遺跡』富士宮市教育委員会
比田井克仁 1991 「住居形態の変遷とその画期－弥生～古墳時代の南関東－」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学考古学会
今村啓爾 1973 『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団
増島　淳 1978 「滝戸遺跡の土層について」『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅱ次）概報』富士宮市教育委員会

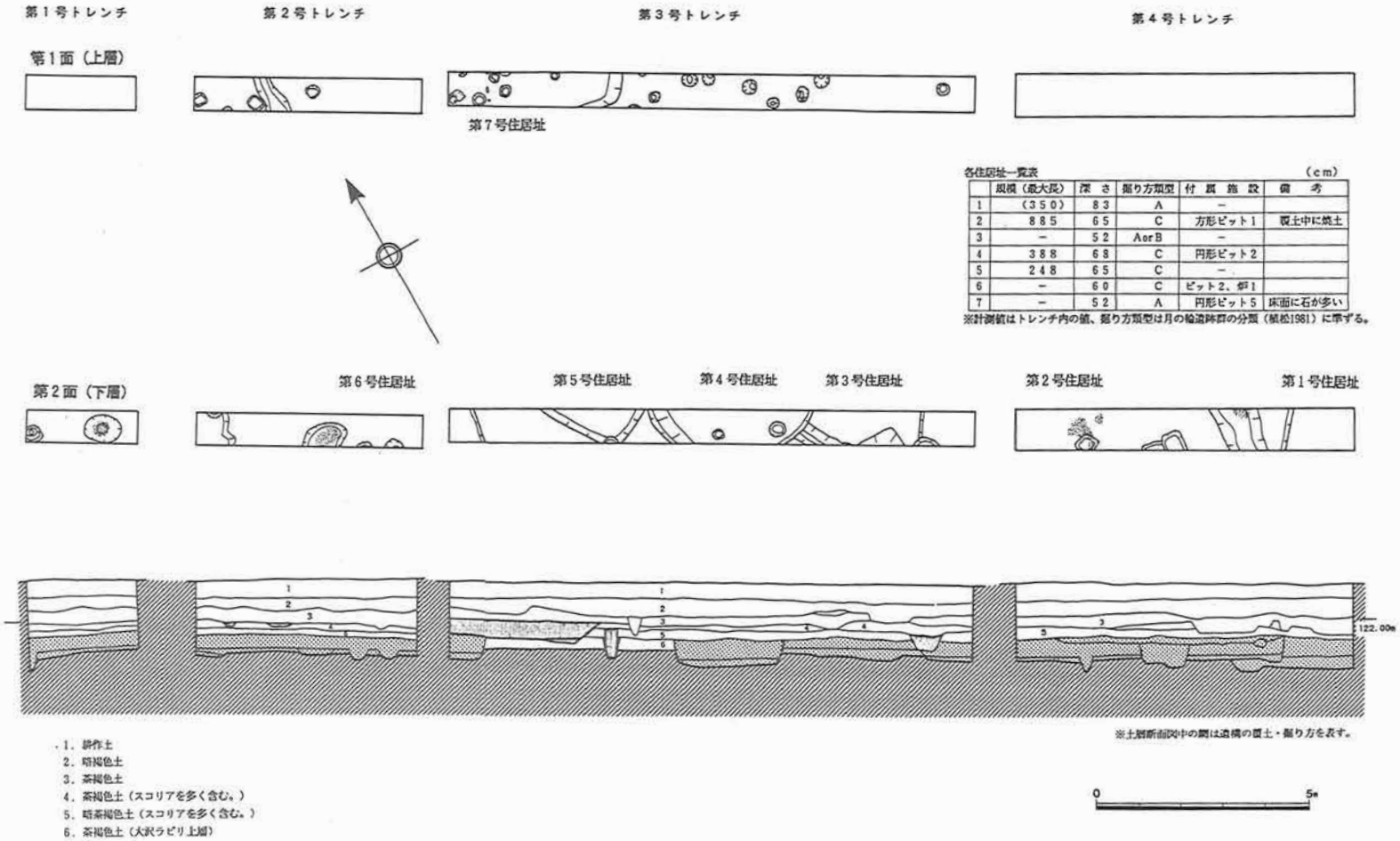
図－1　押出遺跡

遺跡周辺地形図・調査地点



調査区全体図





各住居址一覧表　（cm）

	規模（最大長）	深さ	掘り方類型	付属施設	備考
1	（350）	83	A	－	
2	885	65	C	方形ピット1	覆土中に焼土
3	－	52	AorB	－	
4	388	68	C	円形ピット2	
5	248	65	C	－	
6	－	60	C	ピット2、炉1	
7	－	52	A	円形ピット5	床面に石が多い

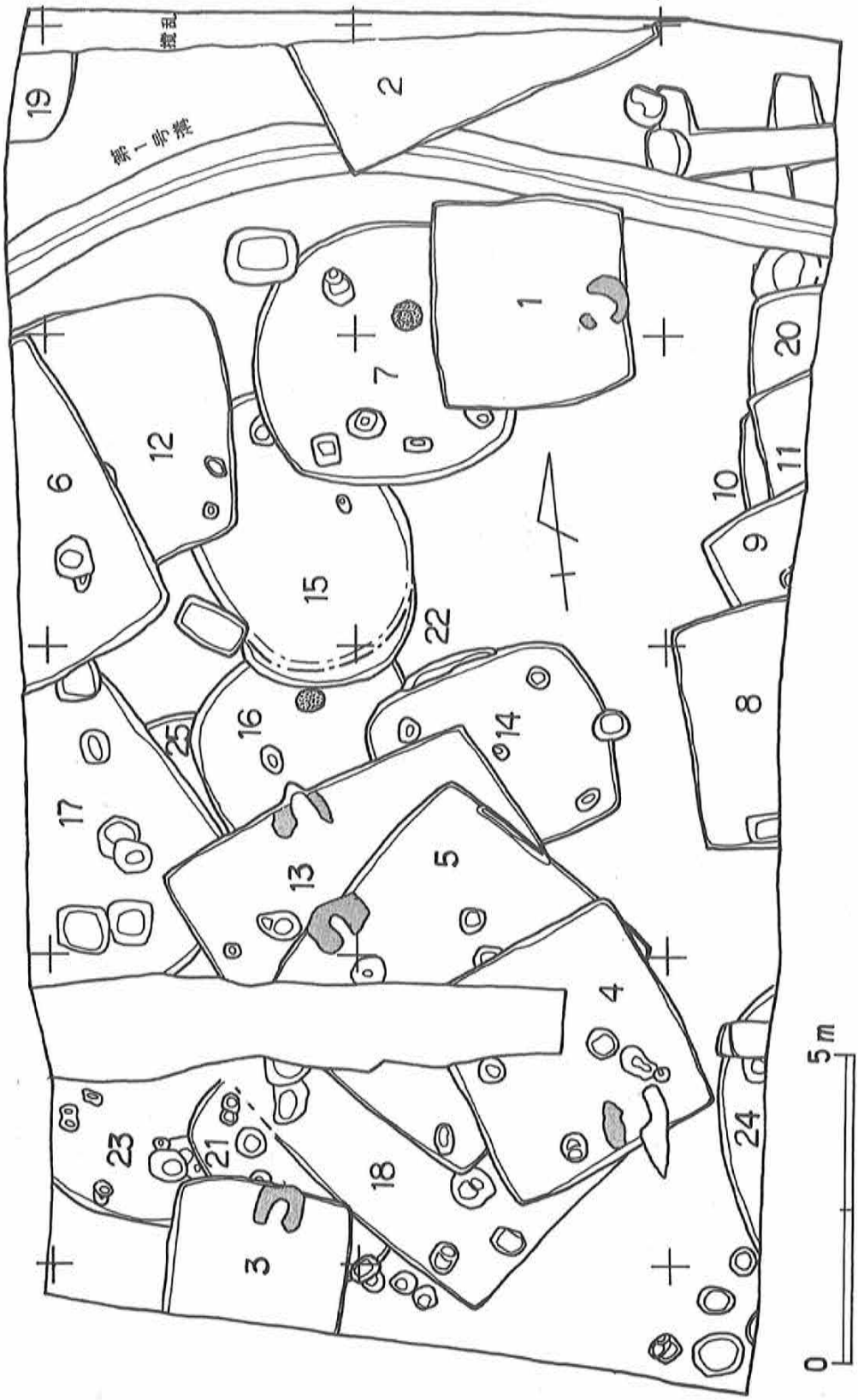
※計測値はトレンチ内の値、掘り方類型は月の輪遺跡群の分類（植松1981）に準ずる。

※土層断面図中の網は遺構の覆土・掘り方を表す。

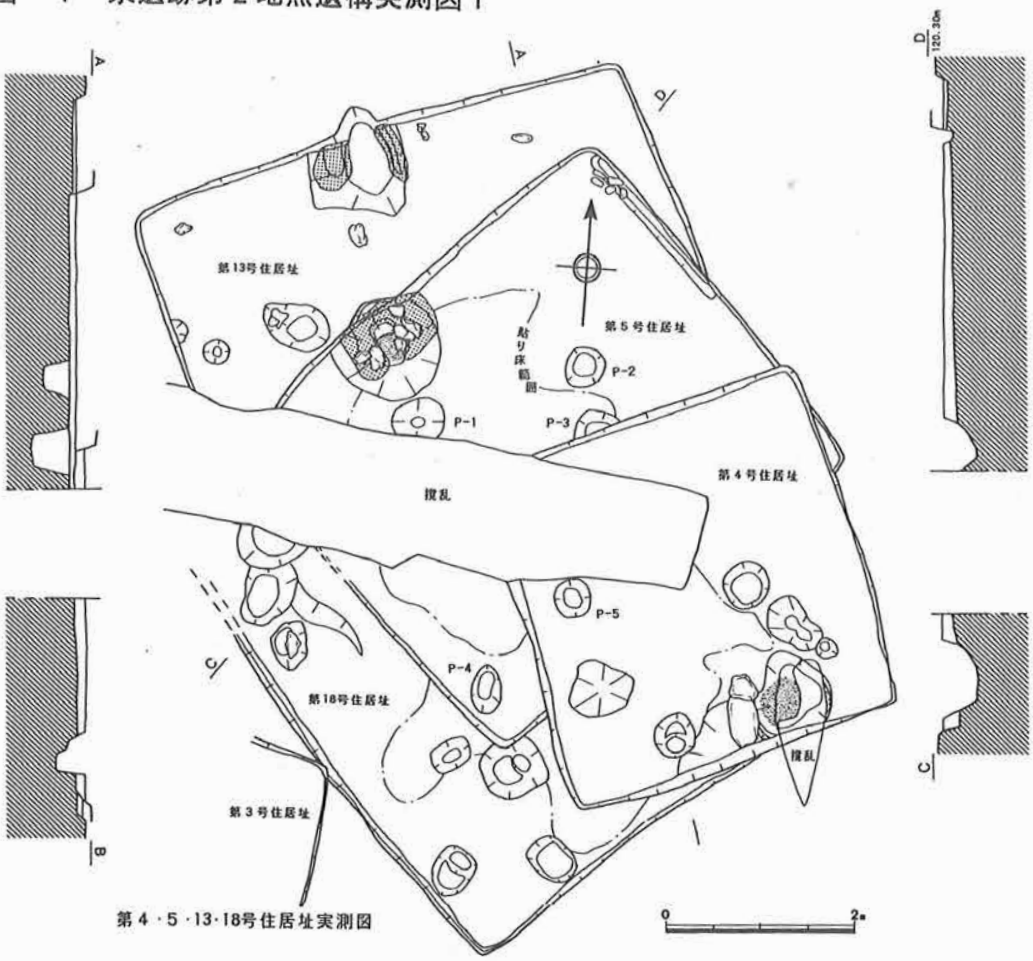
1. 耕作土
2. 暗褐色土
3. 茶褐色土
4. 茶褐色土（スコリアを多く含む。）
5. 暗茶褐色土（スコリアを多く含む。）
6. 茶褐色土（大沢ラビリ上層）

図－2　泉遺跡第1地点全体図

図－3　泉遺跡第2地点全体図



図－4　泉遺跡第2地点遺構実測図1



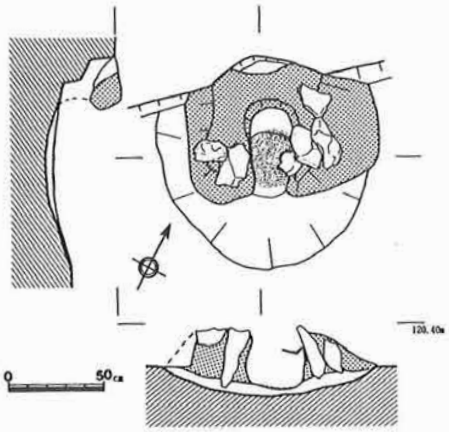
第4・5・13・18号住居址実測図

(cm)

	平面形	規模	主軸方位	床面積	カマド	重複関係
第4号住居址	方形	375x372	S-23°-E	13.5m²	南	18→5→4
第5号住居址	方形	448x482	N-43°-W	21.0m²	北	18→5，13→5
第13号住居址	方形	( )x551	N-22°-W	－	北	13→5
第18号住居址	方形	－	－	－	－	18→5→4，18→3

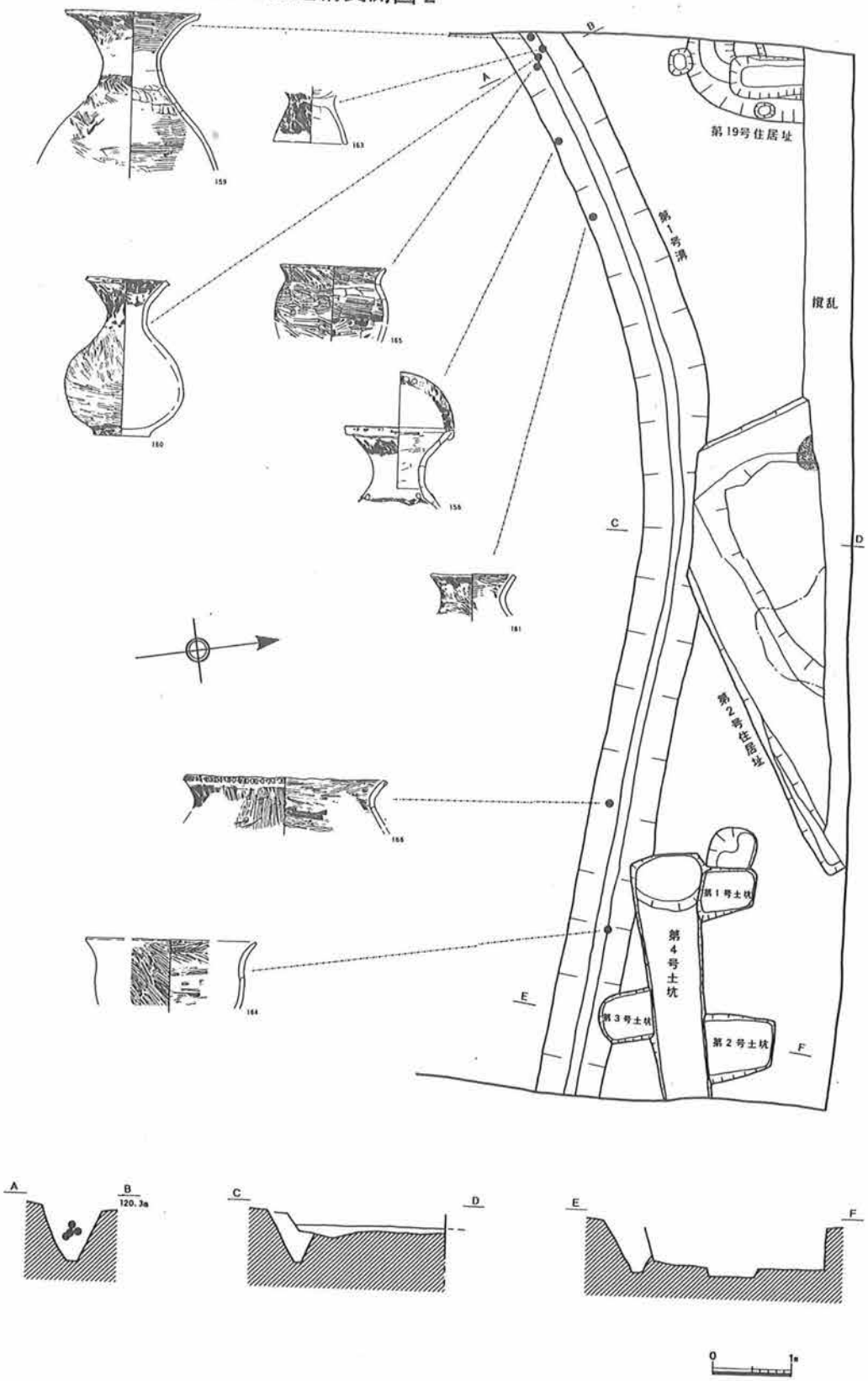
ピット計測表

	規模	形状	深さ	備考
P-1	55×48	楕円形	21	
P-2	47×40	楕円形	36	18住
P-3	56×50	略方形	50	13住
P-4	52×32	楕円形	23	
P-5	40×41	円形	25	4住内



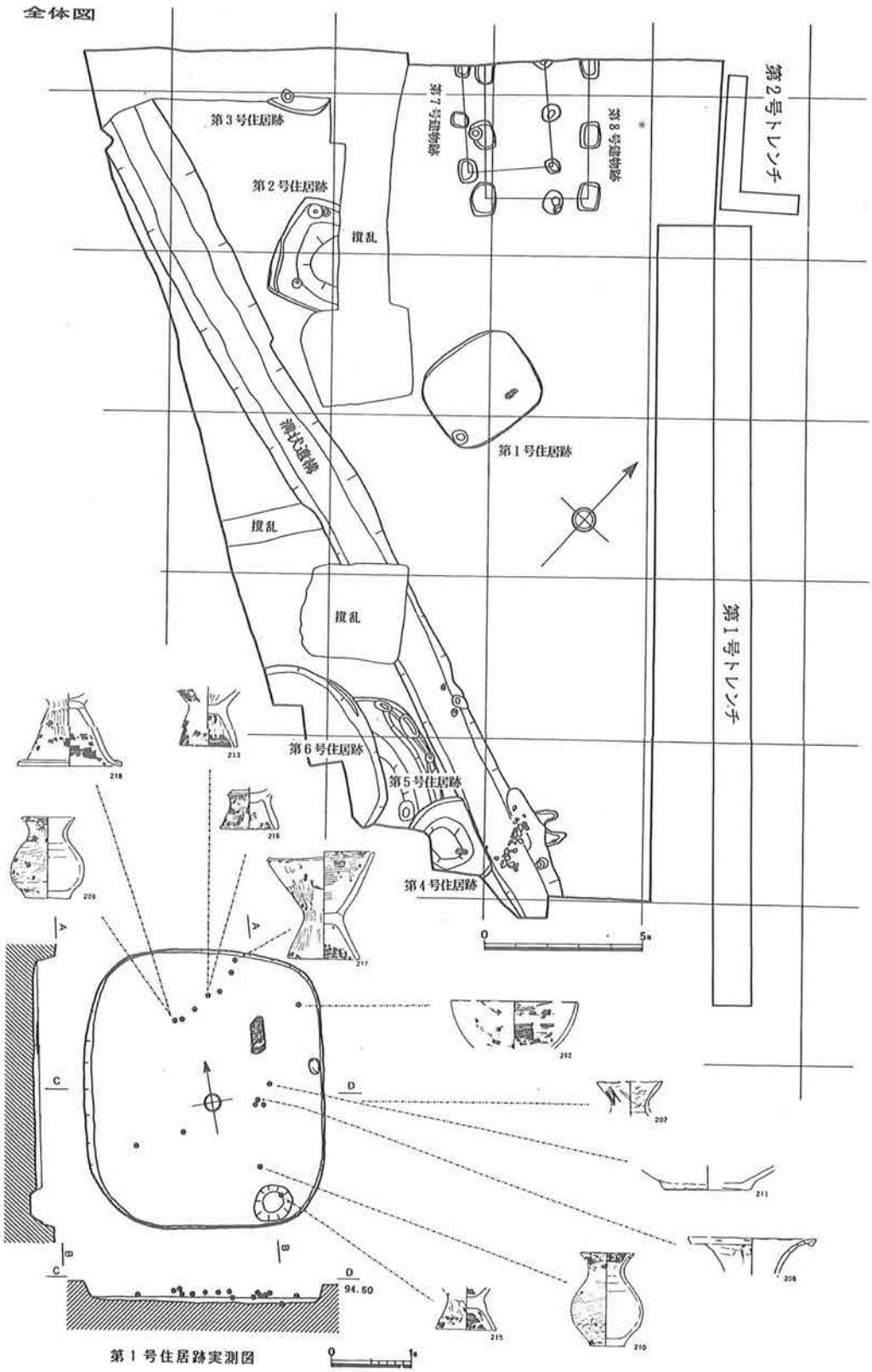
第5号住居址竈実測図

図－5　泉遺跡第2地点遺構実測図2



図－6　権現遺跡

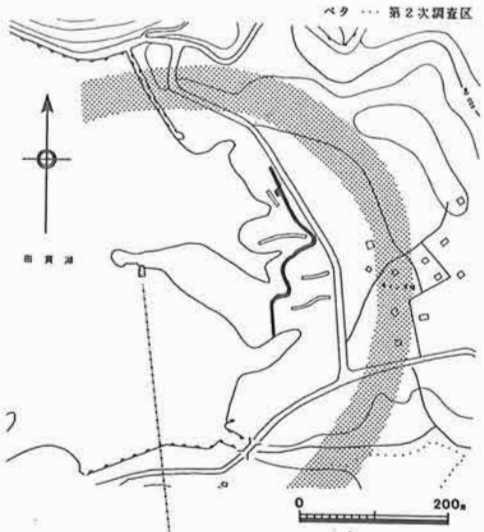
全体図



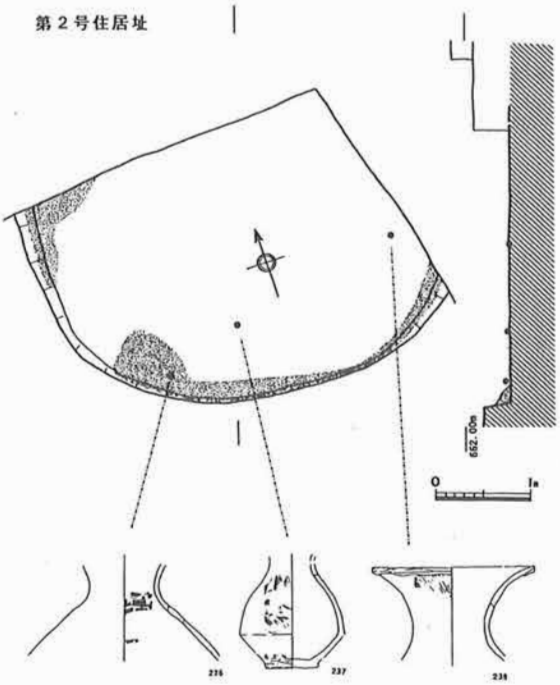
第1号住居跡実測図

図－7　長者ヶ原B遺跡1

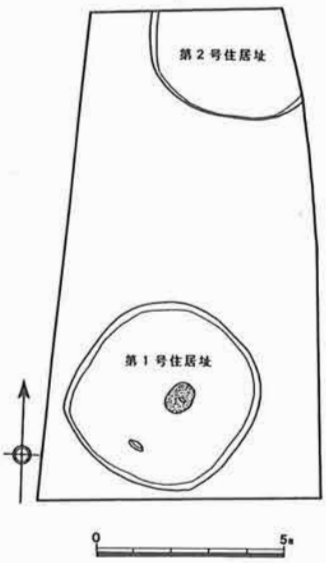
周辺地形図・発掘調査区域図



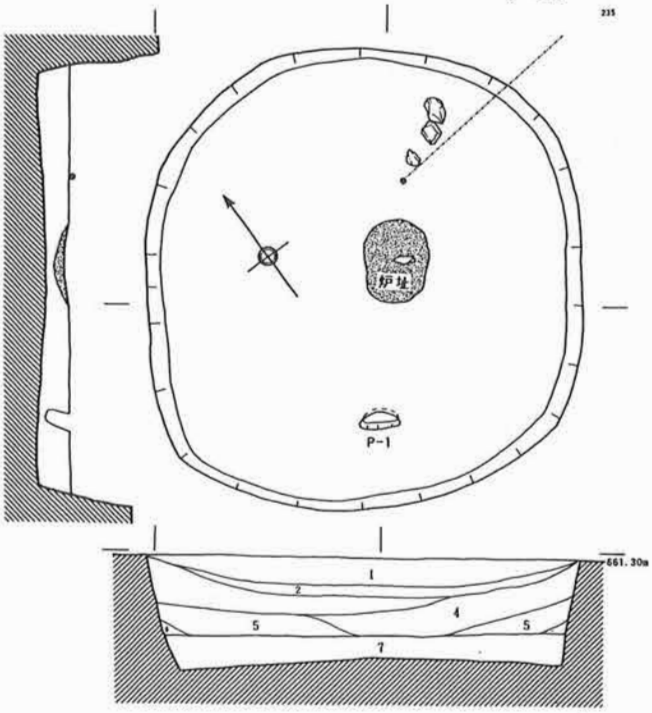
第2号住居址



第1次調査区



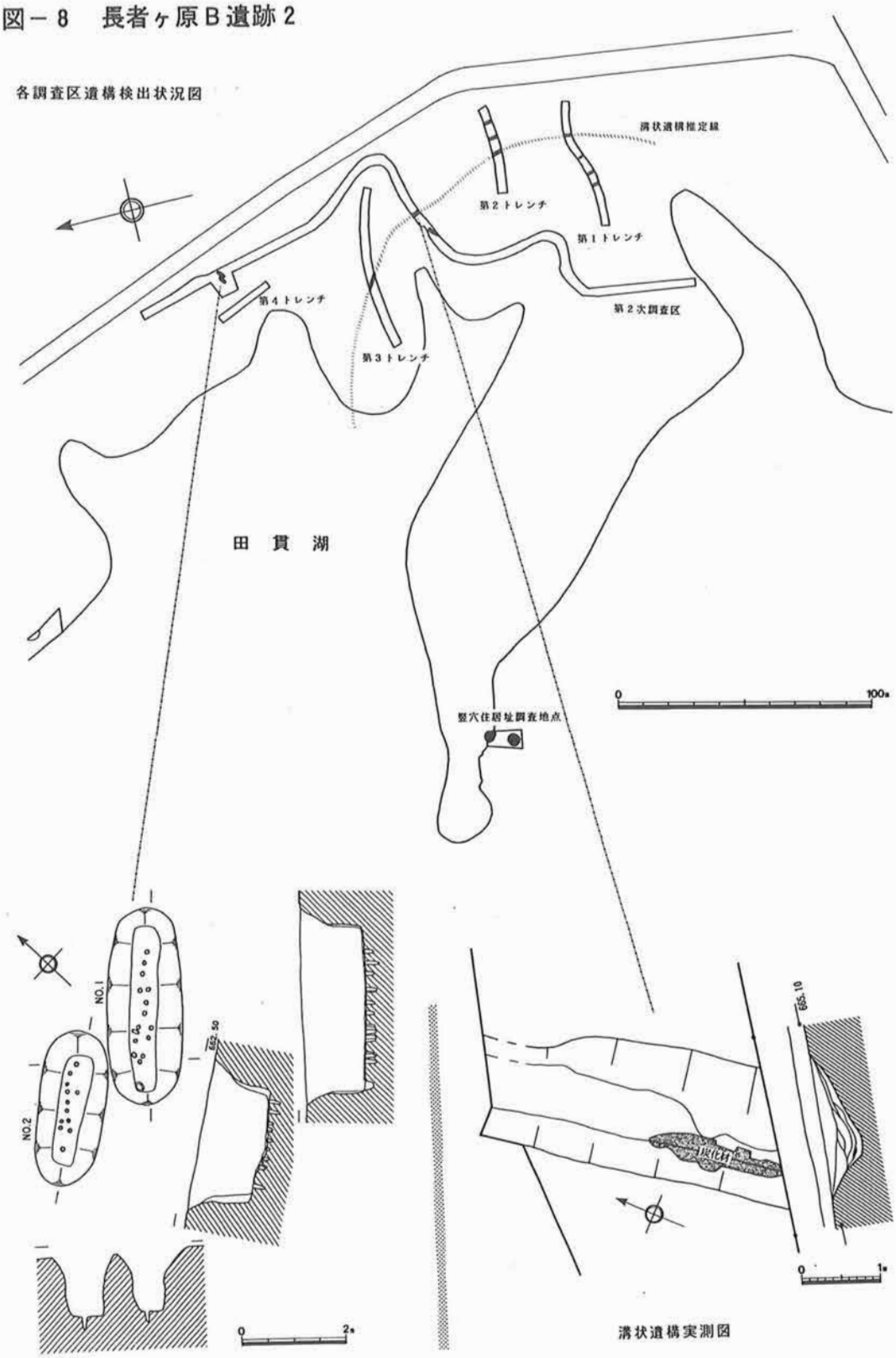
第1号住居址



	平面形	規模(cm)	長軸方位	床面積	掘り方
第1号住居址	隅丸方形	487 × 464	N-35°-E	16.1m²	C
第2号住居址	隅丸方形	(　) ×(475)	－	－	－

1. 黒色土
2. 黒色土　植物繊維の混入が目立つ。
3. 明褐色土
4. 明褐色土
5. 暗褐色土　焼土、炭化物を多く含む。
6. 褐色土
7. 明褐色土、暗褐色土ブロック（掘り方）

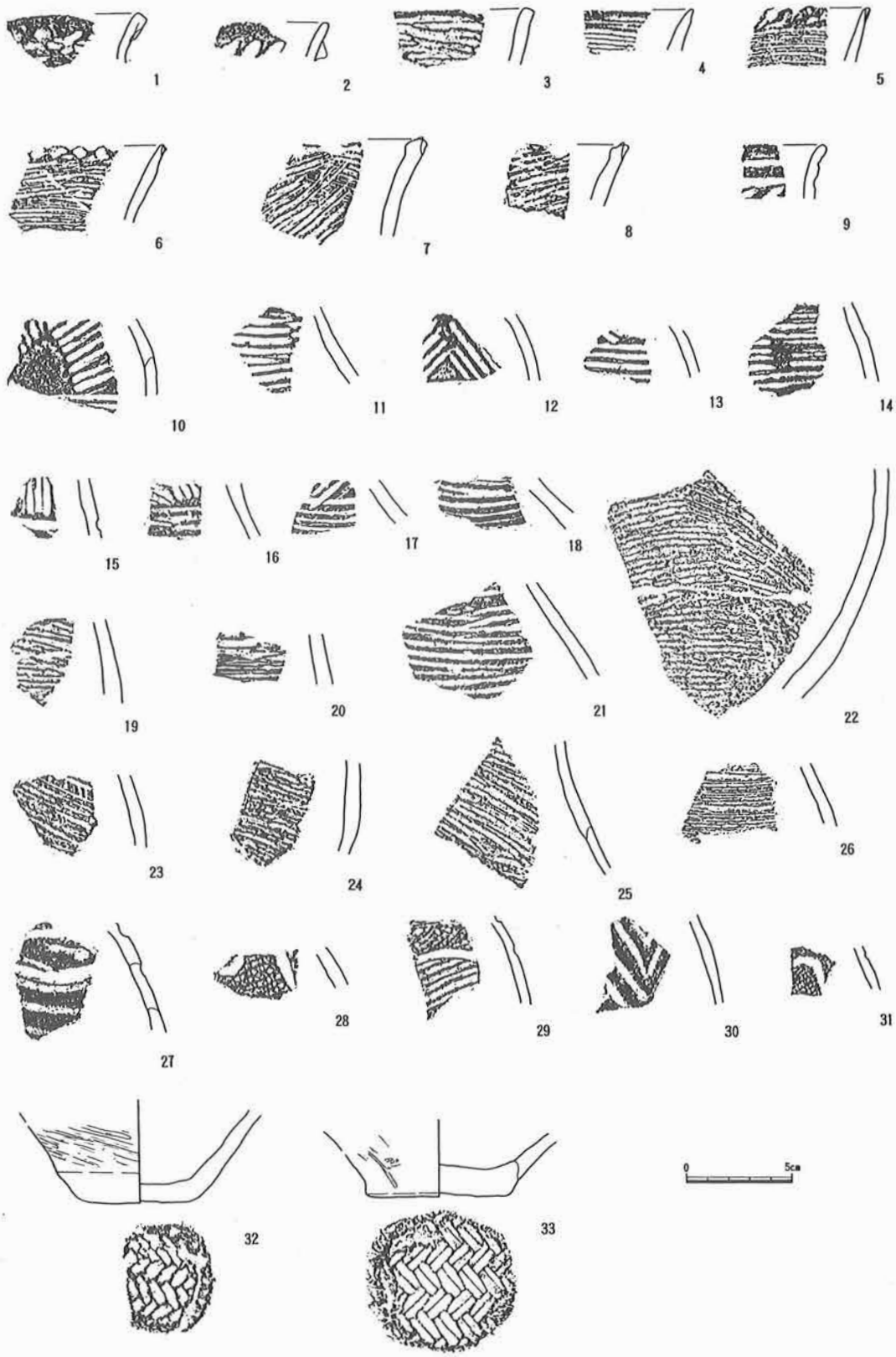
図－8　長者ヶ原B遺跡2


各調査区遺構検出状況図

土器観察表

番号	整形・施文の特徴	焼成	胎土	色調	備考
1	外面　折り返し口縁→刺突文、横位の条痕、	普通	きめが粗く、石英、長石、金雲母を多く含む。	明赤褐色	
2	外面　凸帯＋刺突文	普通	φ1mmの石英が目立つ。	明褐色	
3	外面　横位の条痕 内面　ヨコナデ	やや軟質	きめが粗く、石英、長石、金雲母を多く含む。	(外)黒褐色 (内)にぶい褐色	外面スス付着
4	外面　横位の条痕 内面　ヨコナデ	やや軟質	きめが粗く、石英、長石が目立つ 金雲母を多く含む。	橙色	
5	外面　横位の条痕、刺突文 内面　ヨコナデ	やや軟質	きめが粗く、石英、長石、金雲母が目立つ。	(外)　灰褐色 (内)　暗赤褐色	外面スス付着
6	外面　口縁部刷毛擦文、横位の条痕	普通	細かい長石の混入が多い。	灰黄褐色	
7	外面　口縁部刷毛擦文　斜位の条痕	普通	きめはやや細かい、長石の混入が多い。	にぶい褐色	
8	外面　口縁部刷毛擦文、斜位の条痕	普通	長石、赤色の砂粒の混入が目立つ。	橙色	
9	外面　2条の横線　刺突文又は斜線	やや軟質	きめが粗く、石英、長石が目立つ。	灰黄褐色	30に類似
10	外面　斜位→横位の条痕	やや軟質	φ1mm程度の石英の混入が顕著。	(外)　明赤褐色 (内)　にぶい褐色	10.11 同一個体
11	外面　横位の条痕	やや軟質	きめが粗く、φ1mm程度の石英が目立つ。	(外)　明褐色 (内)にぶい黄褐色	
12	外面　斜位→横位の条痕	やや軟質	φ1mm程度の石英、長石が目立つ。	(外)　浅黄橙色 (内)にぶい黄褐色	12～14 同一個体
13	外面　斜位→横位の条痕	やや軟質	φ1mm程度の石英、長石が目立つ。	(外)　浅黄橙色 (内)にぶい黄褐色	
14	外面　横位の条痕	やや軟質	φ1mm程度の石英、長石が目立つ。	(外)浅黄橙色 (内)にぶい黄橙色	
15	外面　縦位の条痕、横線文	普通	φ1mm程度の石英の混入が目立つ。	(外)灰褐色 (内)にぶい褐色	外面スス付着
16	外面　縦位の条痕＋横位の条痕	普通	きめは粗く、石英、金雲母が目立つ。	褐色	外面スス付着
17	外面　横位→斜位条痕 内面　ヨコナデ	普通	細かい石英の混入が多い。	(外)にぶい褐色 (内)にぶい橙色	外面スス付着
18	外面　横位の条痕 内面　ヨコナデ	普通	きめが粗く、石英、長石の混入が多い。 角閃石が少量見られる。	(外)暗赤褐色 (内)赤褐色	
19	外面　横位の条痕 内面　ヨコナデ	普通	きめがやや細かく、石英、長石 赤色砂粒が目立つ。	(外)赤褐色 (内)にぶい赤褐色	
20	外面　横位の条痕 内面　ヨコナデ	普通	きめが細かく、石英、長石が目立つ。	(外)明褐色 (内 橙色	
21	外面　横位の条痕 内面　ヨコナデ	やや軟質	きめが粗く、φ1~2mm程度の 石英、長石が目立つ。	(外)浅黄橙色 (内)にぶい黄褐色	12に類似
22	外面　斜位の条痕 内面　ヨコナデ	普通	石英、長石の混入が目立つ。	(外)にぶい赤褐色 (内)橙色	
23	外面　斜位の条痕 内面　ヨコナデ	やや硬質	石英、長石、赤色砂粒が見られる。	(外)黒褐色 (内)にぶい赤褐色	外面スス付着
24	外面　斜位の条痕	普通	長石、赤色砂粒が目立つ。	褐灰色	外面スス付着
25	外面　斜位の条痕 内面　ヨコナデ	やや硬質	ややきめが粗く、石英、金雲母の混入が 目立つ。	灰褐色	外面スス付着
26	外面　横位の条痕	普通	石英、長石が多い、金雲母を少量含む。	灰褐色	外面スス付着
27	外面　指頭による沈線、横位の条痕 内面　ヨコナデ	やや軟質	φ1mm程度の石英が目立つ。 金雲母を少量含む。	にぶい褐色	27.28 同一個体
28	外面　縄文(LR)を沈線で区画する	やや軟質	φ1mm程度の石英が目立つ 金雲母を少量含む。	にぶい褐色	
29	外面　縄文(LR)を沈線で区画、 斜位の条痕	やや軟質	φ1mm程度の石英が目立つ 金雲母を少量含む。	(外)暗褐色 (内)にぶい赤褐色	外面スス付着
30	外面　縦位羽状文	軟質	きめが粗く、石英、長石を多く含む。	(外)黄褐色 (内)灰黄褐色	31に類似
31	外面　縄文(LR)を沈線で区画する	軟質	きめが粗く、石英、長石を多く含む。	(外)黄褐色 (内)灰黄褐色	
32	外面　斜位の条痕 内面　ナデ　底部網代痕	普通	きめが粗く、石英、長石が目立つ。	(外)にぶい赤褐色 (内)黒褐色	内面コゲ付着
33	外面　斜位の条痕を粗く施す。 底部網代痕	普通	きめが粗く、石英、長石の混入が顕著	(外)にぶい赤褐色	

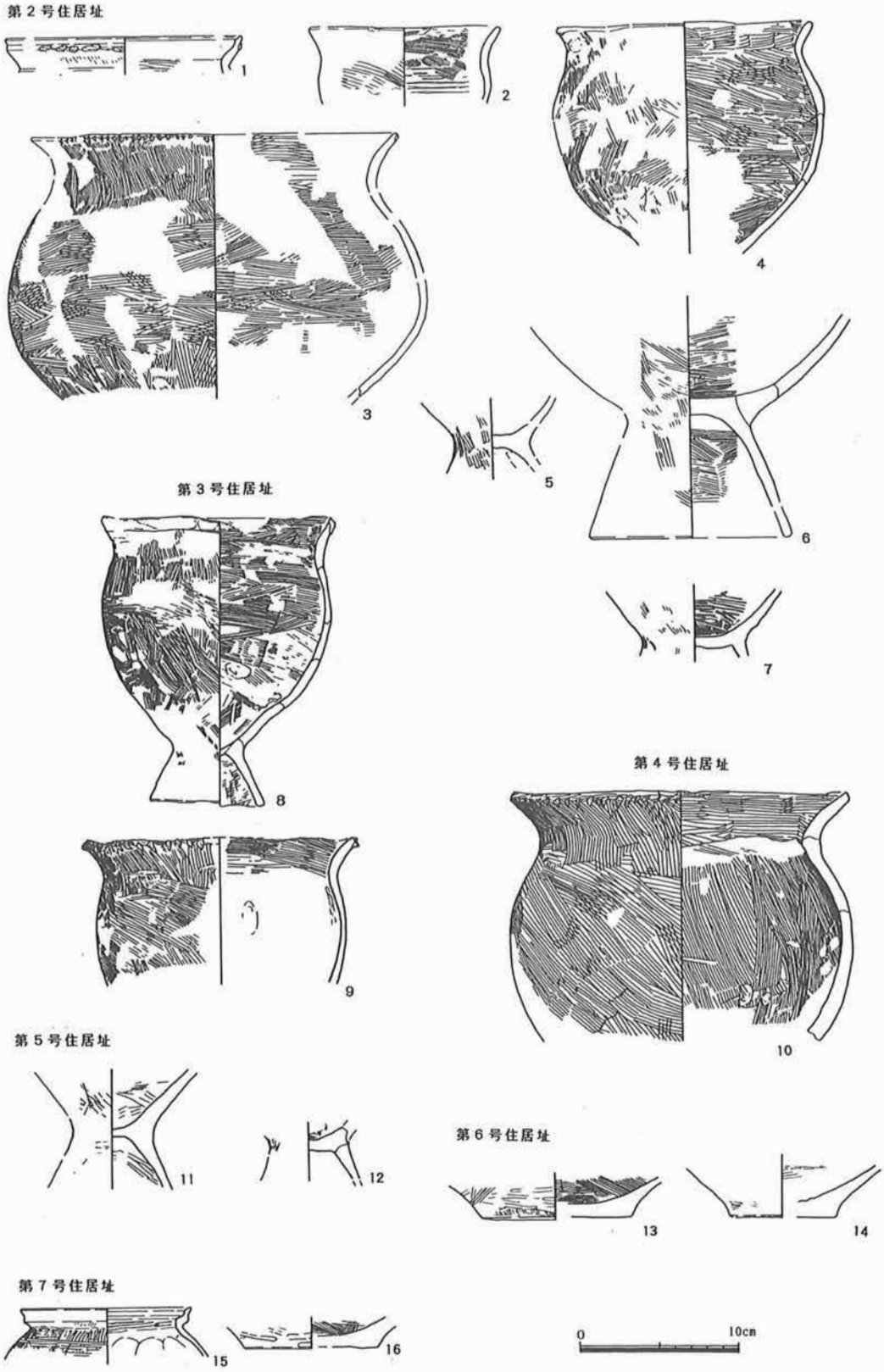
図－9　押出遺跡出土遺物実測図



土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 底径 器高	特徴	調整・文様	備考
1	第2号住居址	甕	(14.7) – –	胎土　きめが細かく石英、長石を含む。 色調　褐色 焼成　やや良い	外面　ヨコナデ、刺突文 内面　口唇部面取り、口縁部ヨコナデ、頸部ヨコハケメ	口縁部1/4以下
2	第2号住居址	甕	(11.6) – –	胎土　石英、長石、砂を含む。 色調　黄橙色 焼成　普通	外面　口唇部ナデ、肩部ナナメハケメ（5本/cm） 内面　口縁部細かいヨコ、ナナメハケメ（11~12本/cm）、 胴部粗いヨコハケメ（4本/cm）	1/4 以下
3	第2号住居址	台付甕 D	14.3 18.0 7.2	胎土　きめが細かく石英、長石を少量含む。 色調　外面黄橙色、内面橙色 焼成　やや良い	外面　口縁部折り返し口縁、胴部タテハケメ（8本/cm）、 中位ヨコハケメ、胴部～脚台部タテハケメ→粗いナデ 内面　ヨコハケメ　胴部中位摩耗	略ほぼ完存 外面　スス付着
4	第2号住居址	台付甕 D	23.0 – –	胎土　きめが細かく、石英、長石を少量含む。 色調　黄橙色～黒褐色 焼成　普通	外面　胴部中位ヨコハケメ（6~7本/cm）→、口縁部タテハケメ→ 胴部下位タテハケメ　口唇部刺突文 内面　ヨコハケメ	裾部1/3 存 外面スス付着
5	第2号住居址	台付甕	15.7 – –	胎土　きめが細かく砂粒が目立つ。 色調　橙色～黄橙色 焼成　やや悪い	外面　胴部中位ナナメハケメ（7本/cm）→口縁部タテハケメ→ 胴部下位タテハケメ 内面　ヨコハケメ	裾部2/3存 外面中位以上スス付着
6	第2号住居址	台付甕	– – –	胎土　石英、長石が目立つ。金雲母を微量含む。 色調　外面灰褐色、内面に ぶい赤褐色 焼成　普通	外面　粗いタテハケメ（8/cm） 内面　ナデ	
7	第2号住居址	台付甕	– – (11.5)	胎土　きめが粗く、石英、長石を含む。 色調　外面黄橙色、内面橙色 焼成　やや悪い	外面　ケテ、ナナメハケメ（6本/cm）→脚台部ナデ 内面　ヨコハケメ	脚台部1/2存 裾部外面スス付着
8	第2号住居址	台付甕 C	– – –	胎土　長石の混入が目立つ。 色調　黄橙色 焼成　普通	外面　粗いタテハケメ 内面　粗いヨコハケメ（5本/cm）→粗ヨコヘラミガキ （17~18本/cm）→粗いヨコヘラミガキ	2と類似
9	第3号住居址	台付甕 D	(16.7) – –	胎土　石英、長石の混入が見られる。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　口縁部タテハケメ（6本/cm）→胴部ヨコハケメ、 口唇部刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ→胴部ヨコナデ	胴部中位以上1/4存 外面スス付着
10	第4号住居址	台付甕 D	(21.0) – –	胎土　きめが細かく、黒色砂粒を含む。 色調　黄褐色～橙褐色 焼成　普通	外面　胴部ナナメハケメ（5本/cm）→口縁部タテハケメ、 口唇部刺突文 内面　口縁部ヨコハケメ→胴部タテハケメ	裾部1/3存
11	第5号住居址	台付甕	– – –	胎土　石英、長石を含む。 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ（4本/cm） 内面　ヨコハケメ	
12	第5号住居址	台付甕	– – –	胎土　石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調　橙褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ 内面　ヨコナデ	
13	第6号住居址	壺	– – (9.5)	胎土　石英、長石、金雲母を含む。 色調　外面褐色、内面明褐灰色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 内面　ヨコハケメ（7本/cm）	底部1/4 以下
14	第6号住居址	壺	– – (6.8)	胎土　きめがやや粗く、砂粒を含む。 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 内面　ヨコハケメ→ナデ	底部1/4以下
15	第7号住居址	台付甕 A	(10.6) – –	胎土　石英、長石、金雲母が目立つ。 色調　褐色 焼成　良好	外面　口縁部ヨコナデ、肩部タテ→ヨコハケメ（6本/cm） 内面　口縁部ヨコナデ、屈曲部ヨコハケメ	口縁部1/4存 S字甕B類
16	第7号住居址	壺	– – (8.7)	胎土　石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調　外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 内面　ヨコハケメ（7本/cm）	底部1/3存

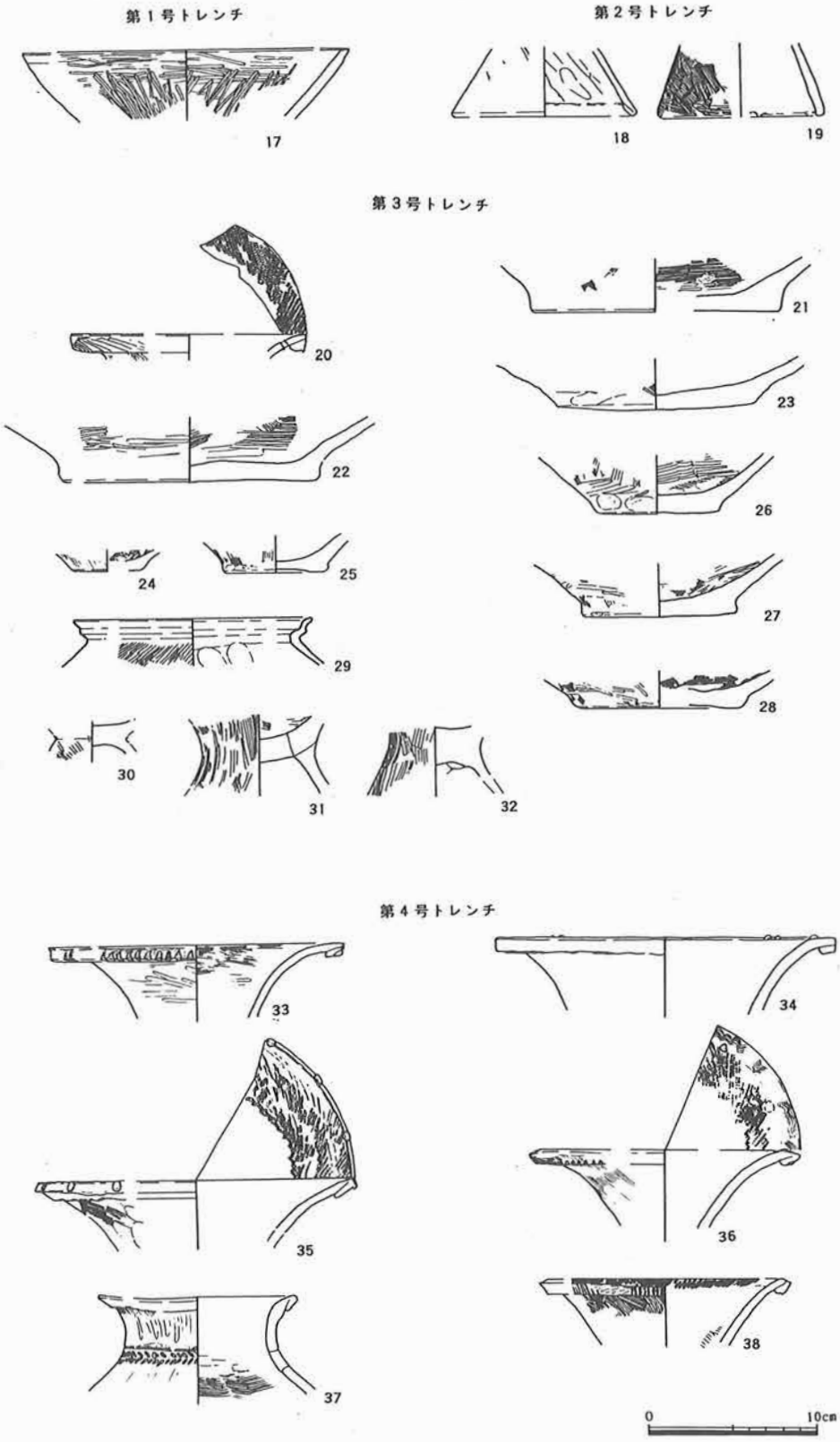
図－10　泉遺跡第１地点出土遺物実測図１



土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 底径 器高	特徴	調整・文様	備考
17	第1号トレンチ	高坏A	(19.3) － －	胎土　石英、金雲母の混入が顕著。 色調　外面橙色、内面明赤褐色 焼成　普通	内外面　ヨコヘラミガキ→タテヘラミガキ 口唇部面取り	口縁部1/4以下
18	第2号トレンチ	台付甕A	－ － (10.8)	胎土　金雲母、石英、長石を含む。 色調　にぶい黄橙色 焼成　良好	外面　粗いナナメハケメ 内面脚部折り返し	脚台部1/4以下
19	第2号トレンチ	台付甕	－ － (9.8)	胎土　きめが細かく石英、長石を含む。 色調　外面褐色、内面暗赤褐色 焼成　普通	外面　ナナメハケメ(11~12本/cm)	脚台部1/4存
20	第3号トレンチ	甕D	(14.0) － －	胎土　きめが細かく黒色砂粒が多い。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	口縁部内面　縄文（RL）＋小円孔（3個×）	口縁部1/4存
21	第3号トレンチ	甕	－ － (14.8)	胎土　小石の混入が目立つ。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	内面　ヨコハケメ(7本/cm)、底部ヘラ状工具による一定方向のナデ	底部1/4存
22	第3号トレンチ	甕	－ － (15.4)	胎土　緻密で砂粒が目立つ。 色調　明黄褐色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ、底部内外面ナデ 内面　ヨコハケメ(8本/cm)	底部1/4存
23	第3号トレンチ	甕	－ － (11.8)	胎土　石英、長石が目立つ。 色調　外面橙色、内面灰黄色 焼成　普通		底部1/4存
24	第3号トレンチ	甕	－ － (4.1)	胎土　長石、黒色砂粒を含む。 色調　外面にぶい橙色内面にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(5本/cm) 内面　ヨコハケメ→ナデツケ	底部1/3存
25	第3号トレンチ	甕	－ － (6.4)	胎土　緻密で黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテハケメが残る。 弱い凹み底	底部完存
26	第3号トレンチ	甕	－ － (7.2)	胎土　緻密で石英、長石を少量含む。 色調　浅黄色 焼成　普通	外面　タテハケメ→ヨコヘラミガキ、底面木葉痕 内面　ヨコハケメ(5本/cm)底部ナデ	底部1/4存 外面赤彩
27	第3号トレンチ	甕	－ － (9.1)	胎土　緻密で石英、長石を多く含む。 色調　褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ→ヨコヘラミガキ、底面木葉痕 内面　ヨコハケメ(9本/cm)→ヨコヘラミガキ	底部1/4存 外面底面砂圧痕
28	第3号トレンチ	甕	－ － (10.0)	胎土　石英、長石、金雲母を少量含む。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ→ヨコヘラミガキ 内面　ヨコハケメ(10本/cm)→底面ナデツケ	底部1/3存
29	第3号トレンチ	台付甕A	(14.2) － －	胎土　石英、長石、金雲母を少量を含む。 色調　黄橙色～浅黄色 焼成　良好	外面　ヨコナデ 内面　ナナメハケメ(5本/cm) →ヨコハケメ	口縁部1/4以下
30	第3号トレンチ	台付甕A	－ － －	胎土　石英、金雲母の混入が顕著。 色調　にぶい黒褐色 焼成　良好	外面　ナナメハケメ(6本/cm)	接合部完存
31	第3号トレンチ	台付甕	－ － －	胎土　石英、長石、砂粒を含む。 色調　にぶい褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(8本/cm) 内面　胴部ヨコハケメ、脚台部ナデ	脚台部1/3存
32	第3号トレンチ	台付甕	－ － －	胎土　石英、長石を少量含む。 色調　にぶい橙色～にぶい褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(6本/cm) 内面　脚台部ヨコハケメ	接合部完存
33	第4号トレンチ	甕D	(17.6) － －	胎土　きめが細かく石英、長石を少量含む。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ、折り返し部刺突文 内面　ヨコハケメ(9本/cm)→ヘラミガキ（赤彩）	口縁部1/4存 内面に赤彩が残る。
34	第4号トレンチ	甕D	(20.2) － －	胎土　きめが粗く黒色砂粒を含む。 色調　橙色～赤褐色 焼成　普通	内面　口唇部面取り、円形粘付文（2個×　）	口縁部1/4存 内外面赤彩
35	第4号トレンチ	甕D	(18.6) － －	胎土　やや緻密で石英、長石を含む。 色調　外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(7本/cm)→ナデ、口唇部円形粘付文(1個×　) 内面　縄文（1）＋連続文	口縁部1/4以下
36	第4号トレンチ	甕D	(16.1) － －	胎土　きめが粗く、黒色砂粒が目立つ。 色調　外面橙色、内面にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(9~10本/cm)、折り返し部刺突文 内面　波状文＋縄文（RL）＋円形粘付文	口縁部1/4以下
37	第4号トレンチ	甕D	11.6 － －	胎土　石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調　橙褐色 焼成　普通	外面　刺突による羽状文（疑縄文）＋疑横線文 内面　頸部下位ヨコハケメ(8本/cm)	口縁部2/3存 外面・内面上位赤彩
38	第4号トレンチ	甕D	(13.9) － －	胎土　石英、長石が目立つ。 色調　灰黄褐色 焼成　普通	外面　ナナメハケメ(7本/cm)、折り返し部縄文（RL）・刺突文 内面　口唇部縄文（RL）	口縁部1/4以下 内外面赤彩

図－11　泉遺跡第１地点出土遺物実測図２

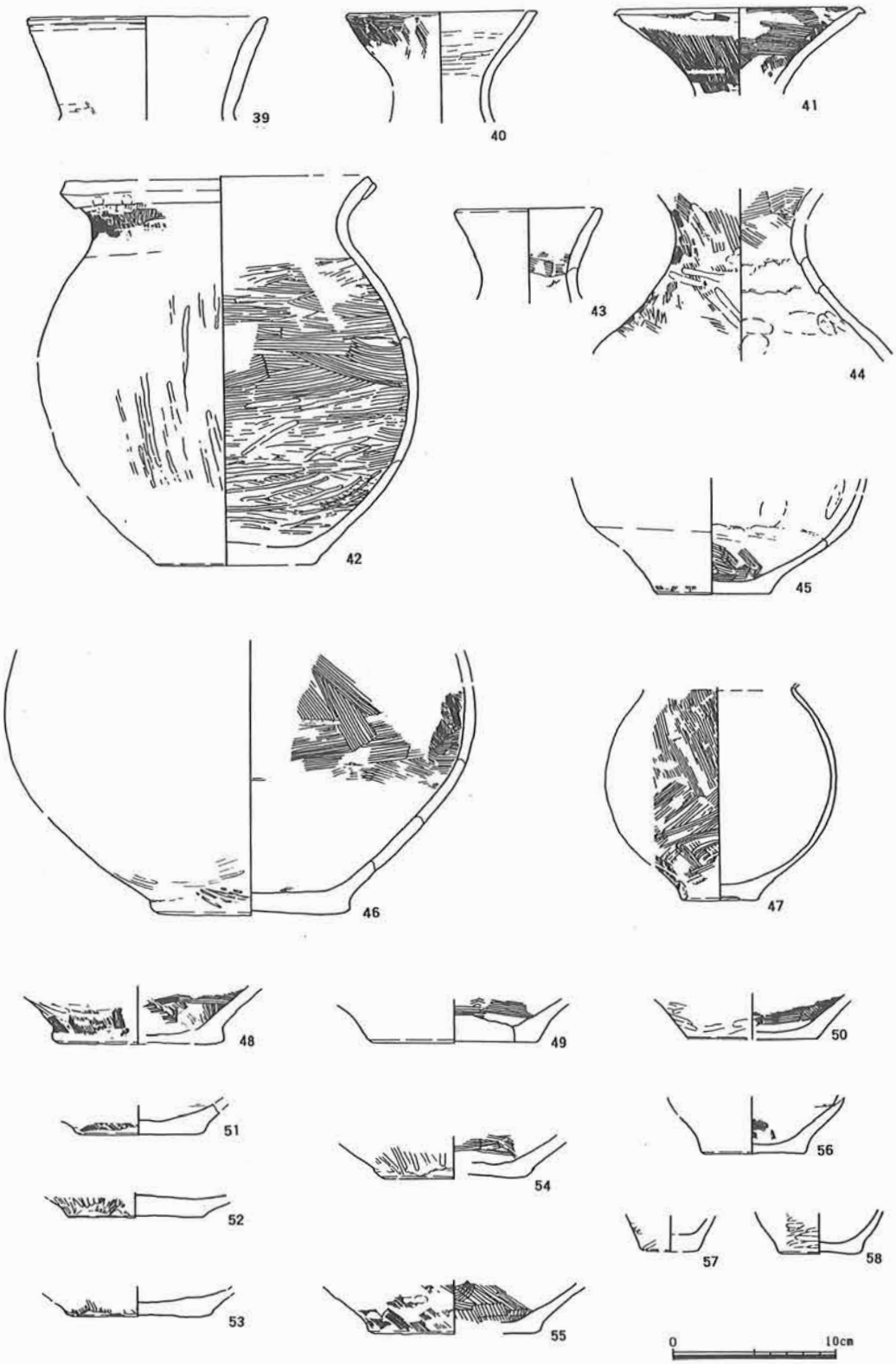


土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	法量 口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
39	第4号トレンチ	壺E？	(14.2) － －	胎土　砂粒、石英、長石の混入が見られる。 色調　外面橙色、内面にぶい黄橙色～褐灰色 焼成　普通	□唇部外面　ヨコナデ	□縁部1/4以下
40	第4号トレンチ	壺E	(11.8) － －	胎土　きめが細かく、石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　□縁部上位ヨコハケメ(8本/cm)→タテハケメ 内面　□縁部ヨコヘラミガキ、□唇部面取り	□縁部1/4存
41	第4号トレンチ	壺E	(14.7) － －	胎土　黒色砂粒の混入が目立つ石英、金雲母が少量 色調　外面明黄褐色、内面黄橙色～明黄褐色 焼成　普通	外面　細かいタテハケメ(1[~]2本/cm)→粗いヨコナデ 内面　細かいタテハケメ→□縁端部粗いヨコハケメ(7本/cm)	□縁部1/4存
42	第4号トレンチ	広口壺	18.5 23.8 9.7	胎土　きめが細かく、長石の混入が目立つ。 色調　赤褐色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ、頸部タテハケメ(6本/cm)→粗いヨコナデ 内面　ヨコハケメ→下位ヨコヘラミガキ	1/2存 外面スス付着
43	第4号トレンチ	壺E	(8.9) － －	胎土　きめがやや粗く、砂粒の混入が目立つ。 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ 内面　頸部ヨコハケメ(9本/cm)が残る	□縁部1/4以下
44	第4号トレンチ	壺	－ － －	胎土　きめ細かく黒色砂粒の混入目立つ石英長石を小量含む 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(5本/cm)→粗いヨコヘラミガキ 内面　□縁部ヨコハケメ	頸部1/2存
45	第4号トレンチ	壺	－ － 7.1	胎土　きめが細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　外面橙色、内面にぶい黄橙色 焼成　普通	内面　底部ヨコハケメ(4本/cm)	底部完存 外面赤彩
46	第4号トレンチ	壺	－ － 12.2	胎土　石英、長石を含む。きめはやや粗い。 色調　外面黄橙色、内面灰黄褐色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 内面　胴部中位ヨコハケメ(6本/cm)→タテハケメ	底部完存
47	第4号トレンチ	壺	－ － 4.9	胎土　2~3mm大の小石の混入が目立つ、きめは細かい。 色調　黄褐色～褐色 焼成　普通	外面　胴部上位ナナメハケメ(8本/cm)、胴部下位ナナメハケメ→胴部中位ヨコハケメ、底部凹み底 内面　全面摩耗	1/4存
48	第4号トレンチ	壺	－ － (10.6)	胎土　砂粒の混入が目立つ、石英、長石を少量含む。 色調　外面にぶい橙色、内面にぶい黄色 焼成　普通	外面　タテハケメ(8本/cm)→ヨコヘラミガキ、底部外面木葉痕 内面　ヨコハケメ	底部1/4以下
49	第4号トレンチ	壺	－ － 10.6	胎土　きめが細く黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　外面橙色、内面灰黄褐色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 内面　ヨコハケメ(4本/cm)	底部2/3存
50	第4号トレンチ	壺	－ － (8.2)	胎土　石英、長石、砂粒を少量含む。 色調　外面橙色、内面にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 内面　ヨコハケメ(8本/cm)	底部1/4存 外面赤彩
51	第4号トレンチ	壺	－ － 8.0	胎土　石英、長石を少量含む。きめは細かい。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(9本/cm)→ヨコヘラミガキ	底部完存
52	第4号トレンチ	壺	－ － 8.6	胎土　黒色砂粒の混入が目立つ 色調　外面にぶい褐色、内面灰黄色 焼成　普通	外面　タテハケメ(10本/cm)→タテヘラミガキ 底部外面木葉痕→ナデ	底部完存 外面赤彩
53	第4号トレンチ	壺	－ － 9.0	胎土　きめが細かく、石英、長石を含む。 色調　浅黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(5本/cm)、底部外面木葉痕	底部完存
54	第4号トレンチ	壺	－ － (9.2)	胎土　微密で黒色砂粒を含む、石英、長石を少量含む。 色調　外面明黄褐色、内面灰黄色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキ 内面　ヨコハケメ(7本/cm)	底部1/4以下
55	第4号トレンチ	壺	－ － 10.5	胎土　ややきめが粗く、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　外面明褐灰色、内面橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(8本/cm)→ヘラミガキ 内面　タテハケメ(5本/cm)	底部1/4以下
56	第4号トレンチ	壺	－ － 6.5	胎土　石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調　外面橙色、内面褐灰色 焼成　普通	内面　ヨコハケメ(11本/cm)	底部2/3存 外面赤彩
57	第4号トレンチ	小甕	－ － 3.5	胎土　石英、長石、黒色砂粒を少量含む。 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ	底部1/3存
58	第4号トレンチ	小甕	－ － 4.9	胎土　石英、長石を含む。金雲母の混入が少量見られる。 色調　橙褐色 焼成　やや軟質	外面　ヨコヘラミガキ	底部2/3存

図－12　泉遺跡第１地点出土遺物実測図３

第４号トレンチ

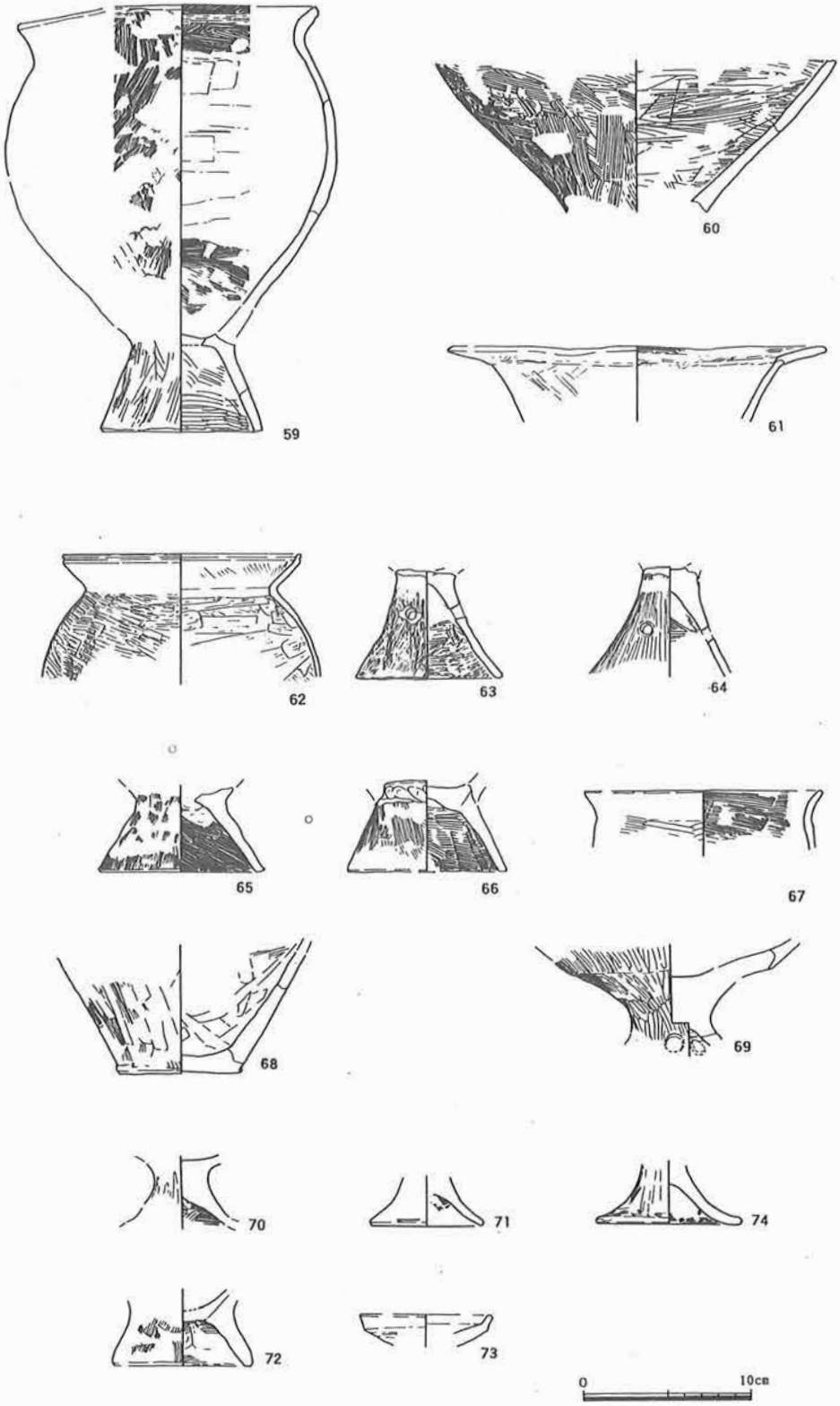


土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	法量 口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
59	第4号トレンチ	台付甕 D	17.6 25.2 9.5	胎土 石英、長石、砂粒を含む。 色調 橙褐色 焼成 普通	外面 口縁部タテハケメ(11~12本/cm)→脚部ナナメハケメ→ナデ 脚台部粗いタテハケメ(5本/cm) 内面 口縁部ヨコ、ナナメハケメ、脚部ヨコナデ、 脚部下位ヨコハケメ、脚台部粗いヨコハケメ	1/2存 外面上位スス付着
60	第4号トレンチ	台付甕	– – –	胎土 石英、長石の混入が目立つ。 色調 黄褐色 焼成 普通	外面 ヨコハケメ(7本/cm)→タテハケメ→ヨコハケメ 内面 ヨコハケメ	脚部下半1/2存 外面上位スス付着
61	第4号トレンチ	高坏	(21.8) – –	胎土 石英、長石、砂を含む。ややきめが細い。 色調 赤褐色 焼成 やや悪い	内面 ヨコハケメ→赤彩	口縁部1/4以下 内外面赤彩
62	第4号トレンチ	甕	(14.0) – –	胎土 石英、長石、黒色砂粒、赤色砂粒。 色調 橙色~黄灰色 焼成 良	外面 右下りタタキ→タテハケメ 内面 ヨコヘラケズリ　口唇部つまみ上げ	口縁部1/3存 外面スス付着 大和型甕か
63	第4号トレンチ	高坏	– – 8.0	胎土 長石の混入が若干見られる。きめは細かい。 色調 橙褐色 焼成 普通	外面 タテヘラミガキ、円孔(1 × 3) 内面 ヨコヘラミガキ、上位にヨコハケメ(6本/cm)が残る	脚台部2/3存
64	第4号トレンチ	高坏	– – –	胎土 石英、長石、砂粒を含む。きめは細かい。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテヘラミガキ、円孔(1 × 3) 内面 ヨコハケメ(8本/cm)	脚台部接合部完存 外面赤彩
65	第4号トレンチ	台付甕	– – (9.8)	胎土 きめが細かく、石英、長石を含む。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(12本/cm)→粗いヨコナデ 内面 ナナメハケメ→上位指頭押え	脚台部1/4存
66	第4号トレンチ	台付甕	– – (9.4)	胎土 きめが細かく、石英、長石を含む。金雲母微量。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(7本/cm)、接合部付近指頭押え 内面 ヨコハケメ	脚台部1/2存
67	第4号トレンチ	甕	(14.1) – –	胎土 きめが細かく、石英、長石を含む。 色調 橙色 焼成 普通	外面 ヨコハケメ(6~7本/cm)　口縁部ナデ 内面 ヨコハケメ　口縁部ヨコハケメ(15本/cm)	口縁部1/4以下
68	第4号トレンチ	平底甕	– – 7.4	胎土 石英、長石を含む。φ2~3mmの小石の混入が見られる。 色調 外面褐色、内面橙褐色 焼成 普通	外面 タテハケメ→タテナデ 内面 ナデ	底部完存
69	第4号トレンチ	高坏 A?	– – –	胎土 きめがやや粗く、石英、長石を含む。 色調 外面にぶい赤褐色、内面（坏部）褐灰色 焼成 普通	外面 タテヘラミガキ、円孔(1 × 3) 内面 タテヘラミガキ	接合部完存
70	第4号トレンチ	高坏	– – –	胎土 石英、長石を含み、きめが細かい。 色調 外面にぶい赤褐色、内面にぶい黄橙色 焼成 普通	内面 脚台部ヨコハケメ(6本/cm)	接合部完存 外面赤彩
71	第4号トレンチ	高坏?	– – (6.6)	胎土 きめが細かく、混入物が少ない。 色調 橙色 焼成 良好	内外面 ヨコナデ、一部ヨコハケメが残る	脚台部1/4以下
72	第4号トレンチ	台付甕	– – (8.3)	胎土 石英、長石を含み、きめがやや粗い。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 粗いタテハケメ(8本/cm) 内面 ヨコナデ→ヨコハケメ	脚台部1/4存
73	第4号トレンチ	器台	(7.7) – –	胎土 きめが細かく、石英、長石を含む。 色調 褐色 焼成 普通	内外面 ヘラミガキ	1/4以下
74	第4号トレンチ	高坏	– – 8.7	胎土 石英、長石を少量含み、きめがやや細かい。 色調 橙褐色 焼成 普通	外面 タテヘラミガキ 内面 ヨコハケメ→ヨコナデ	1/2存

図－13　泉遺跡第１地点出土遺物実測図４

第４号トレンチ



土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整文様	備考
75	第4号トレンチ	平底甕 B？	－ － 5.0	胎土　きめが粗く、石英、長石、砂粒の混入が目立つ。 色調　褐色 焼成　普通	外面　粗いタテハケメ(5本/cm)、底部凹み底 内面　粗いヨコハケメ	底部完存
76	第4号トレンチ	台付甕	－ － －	胎土　石英、長石の混入が目立つ。 色調　褐色～暗褐色 焼成　普通	外面　タテ、ナナメハケメ(6~7本/cm) 内面　ヨコハケメ→一部ヨコナデ	脚部1/3存
77	—	壺D	(11.1) － －	胎土　きめがやや粗く、石英、長石砂粒を含む。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　上位タテハケメ(6本/cm)、下位タテヘラミガキ 折り返し部縄文（RL） 内面　縄文（RL＋LR）	口縁部1/4以下 外面、内面口縁部赤彩
78	表採	壺E	(13.0) － －	胎土　きめが粗く、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメが残る。小円孔(2×　)	口縁部1/4以下 内外面赤彩
79	—	壺	－ － 6.6	胎土　きめが粗く、石英、長石を含む。 色調　外面暗色、内面にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　ヨコヘラミガキ 内面　ヨコナデ	1/4以下 外面赤彩
80	表採	台付甕 A	－ － －	胎土　金雲母、石英の混入が目立つ。 色調　外面暗色、内面にぶい黄褐色 焼成　良好	外面　粗いタテハケメ(5本/cm)	接合部完存
81	表採	壺D	(19.0) － －	胎土　きめが細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　外面暗色、内面淡黄橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(9本/cm)→タテヘラミガキ 内面　ヨコハケメ、縄文（LR）＋結節文	口縁部1/4以下 内外面赤彩
82	表採	台付甕 A	(13.3) － －	胎土　金雲母、石英の混入が顕著 色調　にぶい黄橙色 焼成　良好		口縁部1/4以下
83	表採	台付甕 A	15.7 － －	胎土　金雲母の混入が顕著 色調　褐色～にぶい橙色 焼成　良好	外面　ナナメハケメ(7本/cm) 内面　指頭押え＋ナデ	口縁部全周

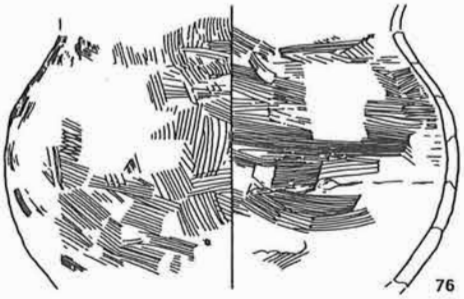
石器観察表

番号	出土地点	種別	石質	法量	調整等	備考
84	表採	砥石	凝灰岩	現存長 2.9　最大幅 3.0　最大厚 3.0　重量 43.3g	使用面1面縦方向	両端欠損

図－14　泉遺跡第１地点出土遺物実測図５

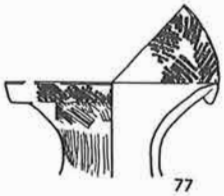
第４号トレンチ

75



76

そ の 他



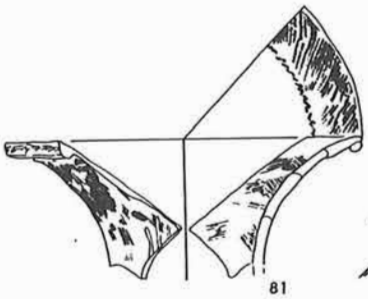
77

78

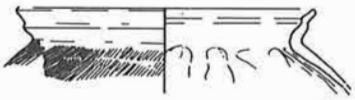
79

82

80

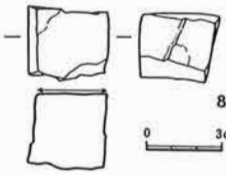


81



83

0　10cm



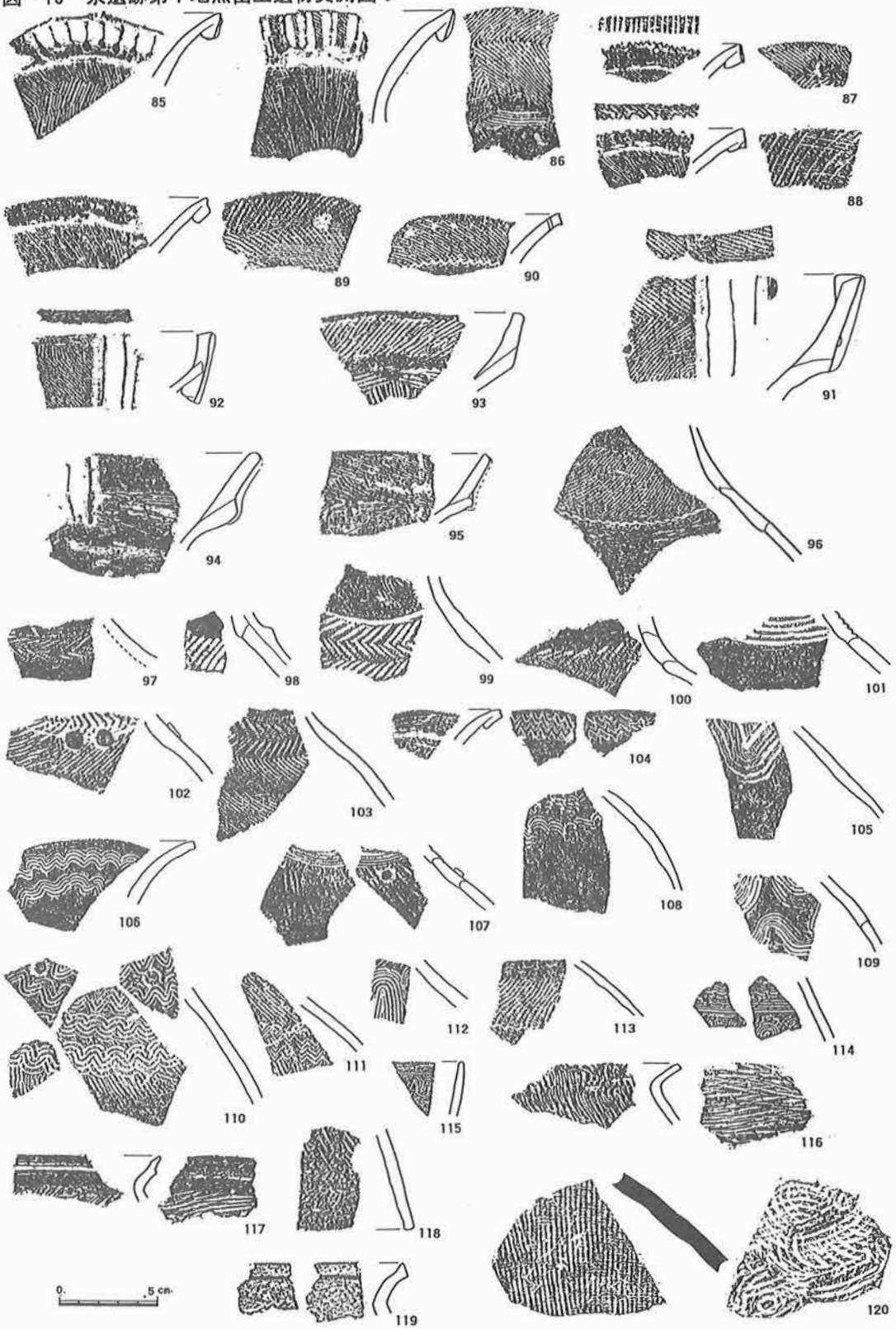
84

0　3cm

土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 底径 器高	特徴	調整・文様	備考
85	第2号トレンチ	壺D	—	胎土 小石、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(7本/cm)、折り返し部棒状貼付文 内面 ヨコハケメ→ヨコナデ	
86	第1号トレンチ	壺D	—	胎土 きめが粗く、石英、小石を含む。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ 折り返し部縄文（RL）+棒状貼付文 内面 縄文(LR・RL)、ヨコハケメ→ヘラミガキ	内面赤彩有り
87	第4号トレンチ	壺D	—	胎土 小石、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 ナナメハケメ(8本/cm)、折り返し部刺突文 内面 縄文(LR・RL)	
88	第4号トレンチ	壺D	—	胎土 石英、長石を含む。きめは粗い。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 ナナメハケメ(7本/cm)、折り返し部刺突文 内面 縄文(LR)	
89	第4号トレンチ	壺D	—	胎土 石英、長石を含み、きめがやや細かい。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(9本/cm) 内面 縄文(LR・RL)	
90	————	壺E	—	胎土 きめが細かく、石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	内面 縄文(RL+連続文)+円孔(2×　)	内面赤彩有り
91	第4号トレンチ	壺B	—	胎土 きめが粗く、小石の混入が目立つ。 色調 橙色 焼成 普通	外面 複合部 縄文(LR・RL)+貼付文(棒状、円形) 口唇部（複合部除）縄文（RL） 内面 ヨコヘラミガキ、口唇部折り返し	内外面赤彩
92	第4号トレンチ	壺B	—	胎土 ややきめが細かく黒色砂粒の混入が目立つ。 色調 にぶい橙色 焼成 普通	外面 複合部 縄文（RL）+棒状貼付文	内外面赤彩
93	第4号トレンチ	壺B？	—	胎土 大粒の小石の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(5本/cm)→ヨコハケメ　複合部ナナメハケメ 内面 ヨコヘラミガキ	
94	第4号トレンチ	壺B？	—	胎土 小石、黒色砂粒を含む。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 複合部 棒状貼付文、内外面ヨコヘラミガキ（赤彩）	
95	第4号トレンチ	壺B？	—	胎土 きめは細かく、石英、長石を含む。 色調 黄橙色 焼成 普通	外面 複合部 ナナメハケメ(7本/cm)→棒状貼付文	内外面赤彩
96	第4号トレンチ	壺	—	胎土 きめは細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 縄文（LR）+連続文 内面 上位ヨコハケメ(9~10本/cm)	外面赤彩
97	第4号トレンチ	壺	—	胎土 きめは細かいがφ1mmの小石が目立つ。 色調 灰黄褐色 焼成 やや悪い	外面 ヨコヘラミガキ、擬縄文+擬横線文	
98	第4号トレンチ	壺	—	胎土 石英、長石の混入が目立つ。 色調 外面橙色、内面にぶい橙色 焼成 普通	外面 有段、擬縄文	
99	第4号トレンチ	壺	—	胎土 黒色砂粒の混入が目立つ。 色調 外面橙色、内面にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 擬縄文+擬横線文	外面赤彩
100	第4号トレンチ	壺	—	胎土 きめは細かく金雲母、石英、長石を含む。 色調 明黄褐色、内面灰黄褐色 焼成 普通	外面 擬縄文	
101	第4号トレンチ	壺？	—	胎土 石英、長石の混入が顕著。 色調 橙色 焼成 普通	外面 ヨコヘラミガキ、擬横線文(5条以上) 内面 上位ヨコヘラミガキ、下位ナデ	
102	第4号トレンチ	壺	—	胎土 きめは細かく、黒色砂粒を含む。砂の混入が目立つ。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 縄文（LR）→擬縄文+擬横線文+円形貼付文（2×　）	
103	第3号トレンチ	壺	—	胎土 砂粒を若干含む。 色調 にぶい褐色 焼成 普通	外面 縄文（RL）→擬縄文+擬横線文	
104	第3号トレンチ	壺D	—	胎土 きめが細かく黒色粒子を多く含む。 色調 橙色 焼成 普通	内面 口縁部、波状文 外面 折り返し部 ヨコナデ	
105	第3号トレンチ	壺	—	胎土 ややきめが細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 波状文 内面 上位ヨコナデ←下位ナナメハケメ(8本/cm)	外面赤彩
106	第4号トレンチ	壺E	—	胎土 きめが細かく、黒色砂粒の混入が顕著。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテハケメが残る。 内面 波状文	内外面赤彩
107	第4号トレンチ	壺？	—	胎土 きめの細かい、黒色砂粒子の混入が目立つ。 色調 外面明黄褐色、内面にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 横線文+円形貼付文	外面赤彩
108	第4号トレンチ	壺	—	胎土 きめが細かく、石英、長石、黒色砂粒を少量含む。 色調 外面浅黄橙色、内面灰白色 焼成 普通	外面 波状文	
109	第3号トレンチ	壺	—	胎土 石英、長石の混入が見られる。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 波状文	
110	第3号トレンチ	壺	—	胎土 きめがやや粗く、石英、長石を含む。 色調 外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色 焼成 普通	外面 ナナメハケメ→波状文+円形貼付文 下位、ヨコヘラミガキ	外面赤彩
111	第6号住居址	壺	—	胎土 きめが細かく、石英の混入が目立つ。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 縄文（RL）+連続文+波状文	外面赤彩
112	————	壺？	—	胎土 きめが細かく、黒色砂粒が目立つ。 色調 外面黄橙色、内面灰白色 焼成 普通	外面 擬縄文+波状文	
113	第3号トレンチ	壺	—	胎土 きめがやや粗く、φ1mm大の黒色砂粒の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 やや良好	外面 波状文+縄文（LR）+連続文	
114	第4号トレンチ	壺	—	胎土 きめがやや粗く、石英、長石の混入が目立つ。 色調 外面橙色、内面褐色 焼成 普通	外面 波状文→横線文→波状文	
115	第4号トレンチ	壺	—	胎土 きめが細かく、混入物が少ない。 色調 にぶい橙色 焼成 普通	外面 横線文+波状文	
116	第4号トレンチ	台付甕D	—	胎土 きめが細かく、小石の混入が目立つ。石英、長石を少量含む。 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(4本/cm) 内面 ヨコハケメ	外面スス付着
117	第3号トレンチ	台付甕A	—	胎土 石英、長石の混入が目立つ。 色調 黄橙色 焼成 普通	外面 粗いナナメハケメ(5本/cm) 内面 口唇部面取り、頸部ヨコハケメ	
118	第4号トレンチ	台付甕A	—	胎土 きめはやや粗く、金雲母、石英、長石を含む。 色調 橙色 焼成 普通	外面 粗いナナメハケメ(4本/cm) 内面 指頭押え	
119	第4号トレンチ	平底甕	—	胎土 φ1mm程度の小石の混入が多い。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	内外面 ヨコナデ 内面 口唇部つまみ上げ	
120	第2号トレンチ	須恵器甕	—	胎土 微密で、石英の混入が少量見られる。 色調 灰色 焼成 良好	外面 平行タタキ 内面 同心円タタキ	

図－15　泉遺跡第１地点出土遺物実測図６



土器観察表

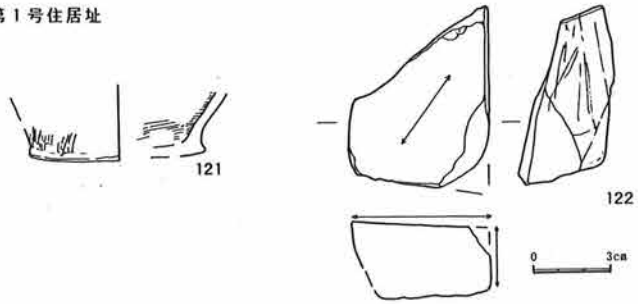
番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
121	第1号住居址	甕	– – (9.4)	胎土 きめが粗く、石英、金雲母が目立つ。 色調 暗赤褐色 焼成 普通	外面 粗いタテハケメ(4~5本/cm) 底部外面 木葉痕 内面 粗いヨコハケメ	底部1/2存 甲類型甕
123	第3号住居址	甕	(27.5) – –	胎土 きめが粗く、石英、長石、金雲母の混入が非常に多い。 色調 にぶい赤褐色 焼成 普通	外面 粗いナナメハケメ(3本/cm)→□縁部ヨコナデ 内面 細かいヨコハケメ(10~11本/cm)→□縁部ヨコナデ	□縁部1/4以下 甲類型甕
124	第3号住居址	甕	– – (9.5)	胎土 きめが粗く、石英、長石、金雲母の混入が非常に多い。 色調 にぶい赤褐色 焼成 普通	外面 粗いタテハケメ(3本/cm) 内面 指頭によるナデ→ヨコハケメ	底部1/4以下 甲類型甕
126	第5号住居址	坏	(13.1) – –	胎土 きめが細かく、金雲母、黒色砂粒、長石を含む。 色調 にぶい橙色 焼成 やや悪い	内外面 ヨコヘラミガキ 黒色処理 □唇部の摩耗が目立つ	□縁部1/4以下
127	第5号住居址	坏	13.0 4.2 –	胎土 きめが細かく、石英、長石を少量含む。 色調 外面橙色、内面暗褐色 焼成 普通	外面 体部ヘラケズリ □縁部~体部内面ヨコナデ 内外面 ヨコヘラミガキ、黒色処理	1/2存
128	第5号住居址	坏	(12.9) – –	胎土 きめが細かく、長石の混入が少量見られる。 色調 黒褐色 焼成 普通	外面 体部ヘラケズリ □縁部~内面ヨコナデ 内外面 ヨコヘラミガキ、黒色処理	□縁部1/4存
129	第5号住居址	坏	(12.4) 4.2 –	胎土 きめが細かく、混入物が少ない。 色調 外面にぶい褐色、内面褐色 焼成 普通	外面 体部ヘラケズリ □縁部~内面体部ヨコナデ 内外面 ヨコヘラミガキ、黒色処理	1/4存
130	第5号住居址	須恵器 坏蓋	10.0 3.4 –	胎土 緻密、混入物が殆ど見られず細かい石英、長石が目立つ 色調 灰色 焼成 良好	外面 底部回転ヘラケズリ→ヘラ記号 □縁部と体部の境に沈線が廻る	2/3存
131	第5号住居址	壺D	(18.9) – –	胎土 きめはやや粗く、砂粒の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 タテヘラミガキ 内面 □縁部ヨコヘラミガキ、□唇部面取り 頸部ナデ	□縁部1/4以下
132	第5号住居址	高坏	– – –	胎土 きめは細かいが砂粒の混入が目立つ 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 タテヘラミガキ 凸帯	接合部全周 甲類脚地系
133	第5号住居址	台付甕 A	– – –	胎土 きめが粗く、石英の混入が多く見られる。 色調 にぶい赤褐色 焼成 普通	内面 指頭押え	
134	第4号住居址	壺	– – (7.6)	胎土 きめがやや粗く、砂粒の混入が顕著。 色調 外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色 焼成 普通	内面 ヨコハケメ(8本/cm)	底部1/4存
135	第6号住居址	甕	(13.9) – –	胎土 きめが粗く、石英、長石、赤色砂粒を含む。 色調 暗褐色~黒褐色 焼成 やや悪い	外面 ナナメハケメ(12~13本/cm)→□縁部ヨコナデ 内面 ヨコハケメ→ヨコナデ □縁部ヨコナデ	□縁部1/4以下 鬼東型甕
136	第6号住居址	須恵器 坏身	(11.2) – –	胎土 緻密で、石英の混入が顕著 色調 灰白色 焼成 良好	外面 底部回転ヘラケズリ	□縁部1/3存
137	第9号住居址	坏	11.8 4.4 5.8	胎土 緻密で、砂粒を少量含む。 色調 橙色 焼成 良好	ロクロ成形	完存 須恵器横放
138	第13号住居址	壺E	(14.3) – –	胎土 きめは細かく、石英、長石、砂粒が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ→粗いタテヘラミガキ 内面 ヨコヘラミガキ	□縁部1/4以下
139	第13号住居址	壺	– – 8.3	胎土 きめが粗く、石英、長石の混入が目立つ。 色調 にぶい橙色 焼成 普通	内面 ヨコハケメ(13本/cm)を 粗く施す 底部外面木葉痕	底部1/3存
140	第13号住居址	壺	– – (12.0)	胎土 きめが粗く、φ1~2mmの小石が目立つ。 色調 黄橙色 焼成 普通	内面 ヨコハケメ(7本/cm)	底部1/4以下
141	第13号住居址	台付甕 A	– – (13.0)	胎土 きめがやや粗く、石英、雲母の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 良好	外面 粗く施されたナナメハケメがみられる 内面 端部折り返し	脚台部1/4以下

石器観察表

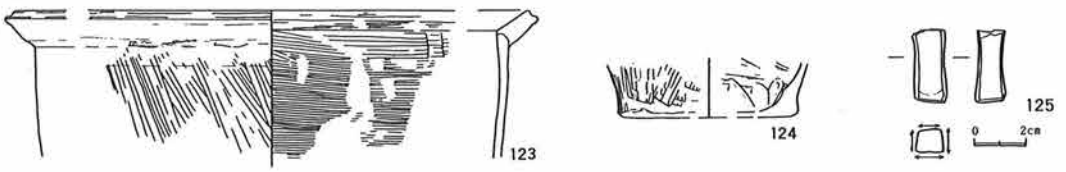
番号	出土地点	種別	石質	法量	調整等	備考
122	第1号住居址	砥石	凝灰岩	現存長 7.2cm 最大幅5.5cm 最大厚3.0cm 重量127.1g	使用面2面 縦斜方向	
125	第3号住居址	砥石	凝灰岩	現存長2.9cm 最大幅1.3cm 最大厚0.9cm 重量6.5g	使用面4面 縦方向	片端欠損

図－16　泉遺跡第２地点出土遺物実測図１

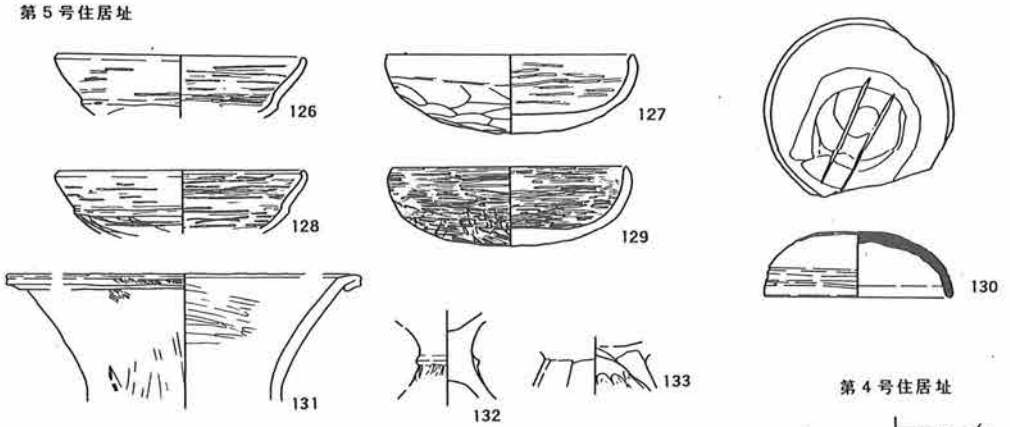
第１号住居址



第３号住居址

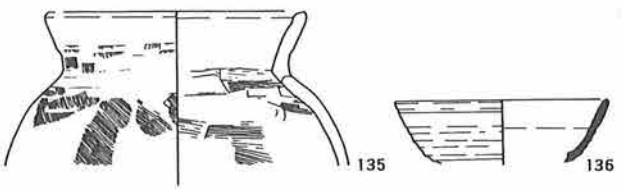


第５号住居址

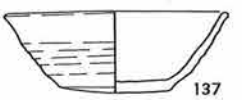


第４号住居址

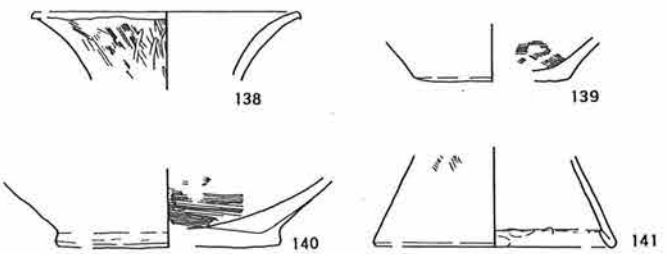
第６号住居址



第９号住居址



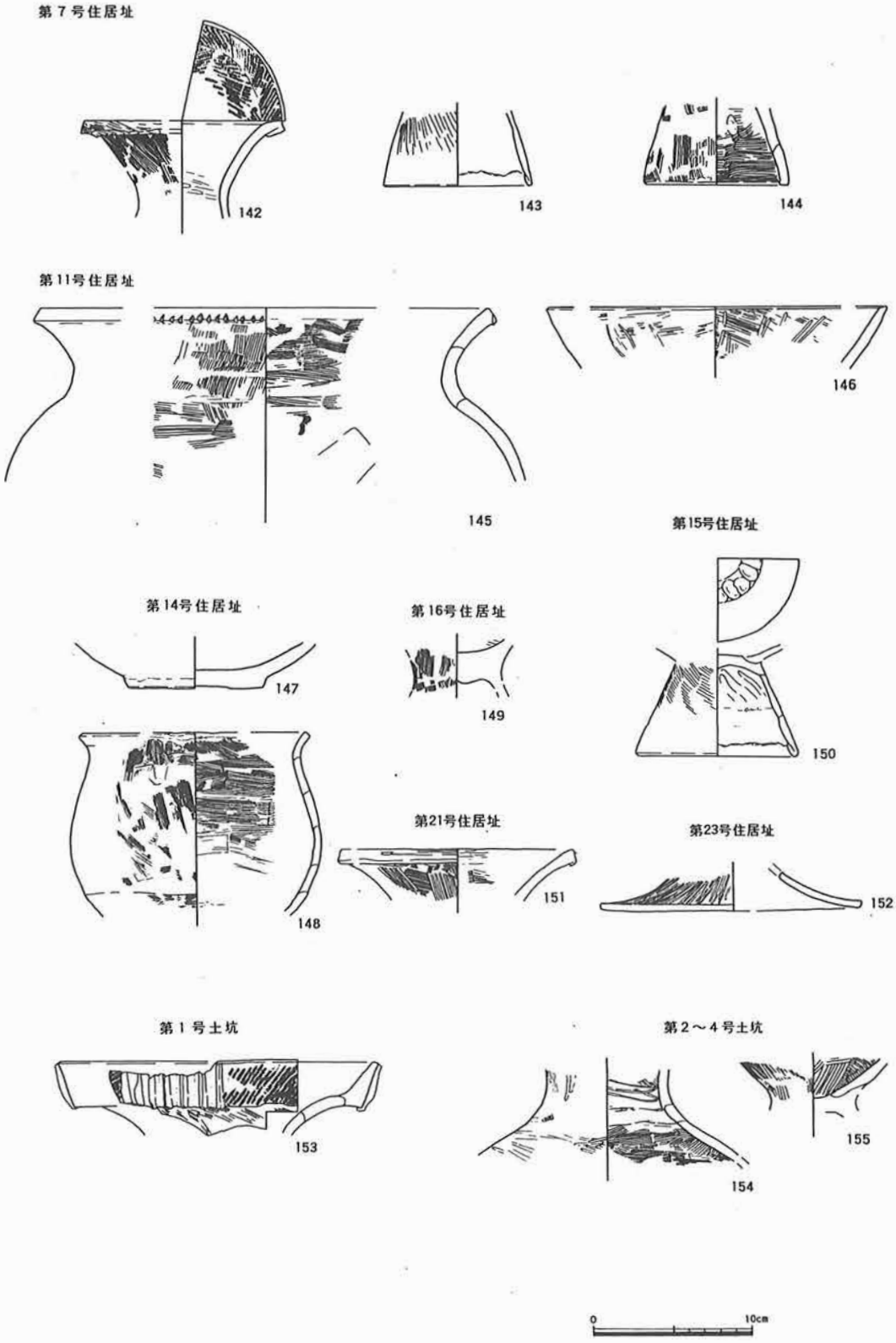
第13号住居址



土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 底径 器高	特徴	調整文様	備考
142	第7号住居址	壺D	(12.4) – –	胎土 きめが粗く、石英、長石が目立つ。金雲母を含む。 色調 にぶい橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(7本/cm)→下位ヨコナデ 内面 ヨコヘラミガキ 縄文(LR．RL)	□縁部1/4存
143	第7号住居址	台付甕A	– – (4.7)	胎土 きめはやや粗く、φ2~3mmの石英を含む砂粒の混入が目立つ。 色調 淡黄色 焼成 良好	外面 タテハケメ(4本/cm) 内面 ヨコナデ 端部折り返し	脚台部1/4存
144	第7号住居址	台付甕	– – (9.2)	胎土 きめが細かく、長石の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 タテハケメを粗く施す。 内面 ヨコハケメ(8本/cm)	脚台部1/4存
145	第11号住居址	大型 台付甕	(29.2) – –	胎土 きめが粗く、φ2~3mmの小石を含む。石英、長石の混入が目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 やや悪い	外面 タテハケメ(8本/cm)→ヨコハケメ、□唇部刺突文 内面 頸部ヨコハケメ(8本/cm)→□縁部ヨコハケメ(23~25本/cm) ヨコナデ	□縁部1/4以下 外面スス付着
146	第11号住居址	高坏A	(21.6) – –	胎土 きめは細かく、石英、長石の混入が目立つ。 色調 橙色 焼成 やや良い	外面 タテヘラミガキを粗く施す 内面 タテヘラミガキを粗く施す。□唇部面取り	□縁部1/4以下
147	第14号住居址	壺	– – (8.6)	胎土 きめが粗く、石英、長石の混入が顕著。 色調 外面にぶい黄橙色、内面明赤褐色 焼成 やや悪い		底部1/4存
148	第14号住居址	台付甕D？	(14.5) – –	胎土 φ1~2mm大の小石が少量みられ、石英、長石を含む。 色調 外面にぶい黄橙色、内面にぶい橙色 焼成 普通	外面 上~中位ヨコハケメ(17~19本/cm)を粗く施す。 下位ヨコハケメ 内面 上~中位ヨコハケメ、 下位ナデ □唇部内外面ヨコナデ	1/4存 外面スス付着
149	第16号住居址	台付甕	– – –	胎土 きめが粗く、φ1~2mmの小石、石英、長石のが目立つ。 色調 外面にぶい褐色、内面褐色 焼成 やや悪い	外面 タテハケメ(12~13本/cm)	炉中出土
150	第15号住居址	台付甕A	– – 10.1	胎土 きめは粗く、石英、長石、金雲母の混入が目立つ。 色調 橙色 焼成 良好	外面 ナナメハケメ(6本/cm) 内面 ナデ 端部折り返し 接合部面調整	脚台部ほぼ完存
151	第21号住居址	壺E？	(14.6) – –	胎土 きめが細かく、砂粒の混入が非常に顕著。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 タテ、ナナメハケメ(9本/cm) 内面 ヨコハケメ、肌荒れ	□縁部1/4以下 内外面赤彩
152	第23号住居址	高坏	– – 16.7	胎土 きめが細かく、石英、長石を含む。 色調 にぶい赤褐色 焼成 良好	外面 タテヘラミガキを粗く施す 円孔 内面 ヨコナデ 上位タテヘラケズリ	脚台部1/2存
153	第1号土坑	壺B	(20.1) – –	胎土 きめは細かいが、砂粒の混入がやや目立つ。 色調 にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 ナナメハケメ→ヨコナデ(7個×4所?) 極台部縄文(LR)＋棒状貼付文 内面 ヨコハケメ→ヨコナデ	□縁部1/4存
154	第2~4号土坑	壺	– – –	胎土 きめは細かく、砂粒の混入が目立つ。 色調 明黄褐色、内面にぶい黄橙色 焼成 普通	外面 頸部タテヘラミガキ 肩部ヨコヘラミガキ 内面 頸部ヨコハケメ→ヘラミガキ 肩部ヨコハケメ(8本/cm)	頸部1/4存
155	第2~4号土坑	台付甕	– – –	胎土 石英、長石の混入が目立つ。 色調 外面橙色、内面黒褐色 焼成 普通	外面 タテハケメ(6本/cm) 内面 下位タテハケメ→上位ヨコハケメ	内面コゲ

図－17　泉遺跡第２地点出土遺物実測図２

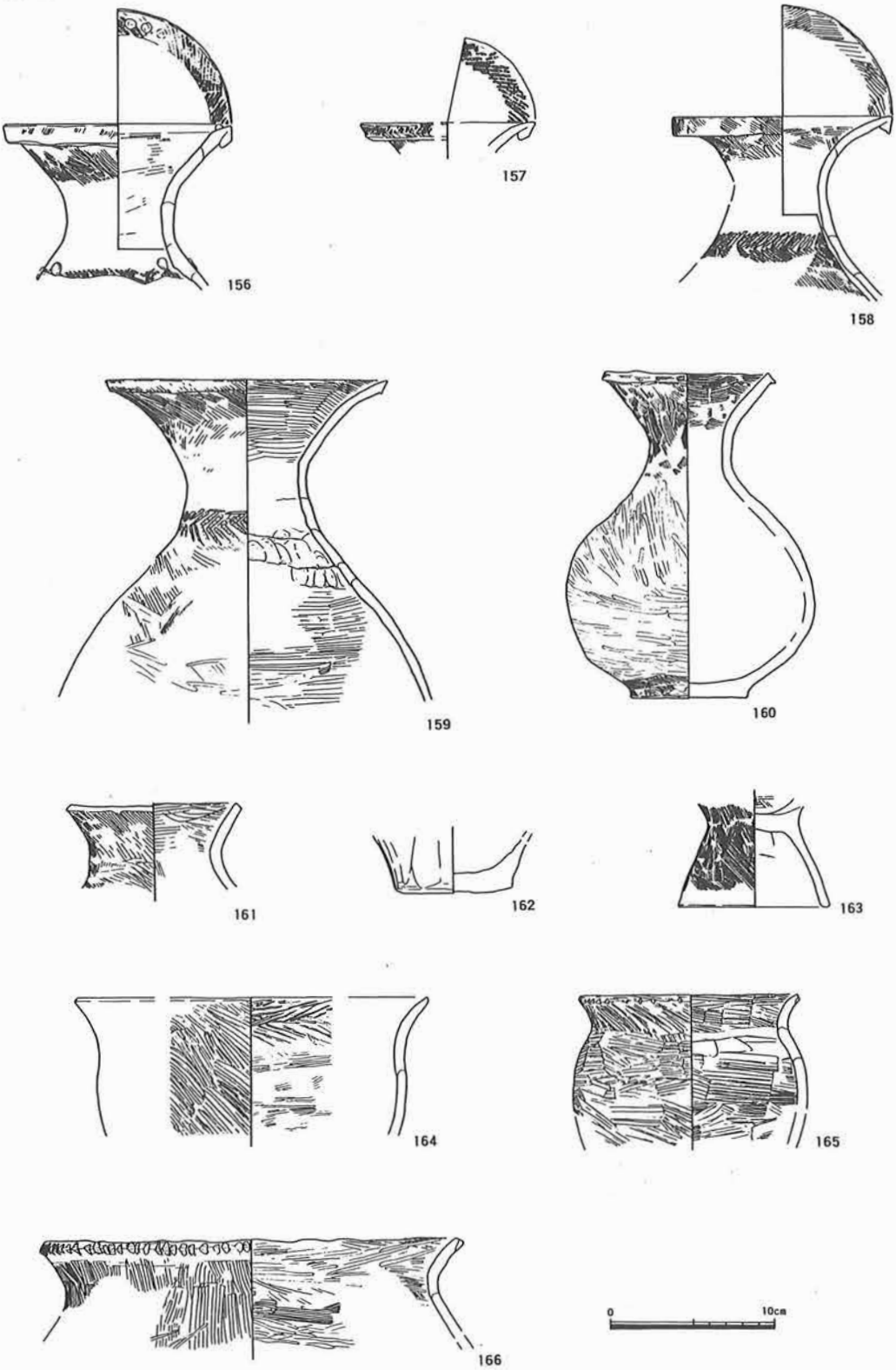


土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
156	溝状遺構1	壺D	13.8 – –	胎土　きめがやや粗く、砂粒子の混入が目立つ。 色調　外面に赤い黄橙色、内面に赤い橙色 焼成　普通	外面　口縁部タテハケメ(8本/cm)→頸部ヨコ所デ 肩部縄文(RL)+円形浮貼付文(3コ×3所) 内面　口唇部面取り→縄文(RL)+円形浮貼付文(3コ×2 所)	口縁部2/3存 外面、口縁部内面、赤彩
157	溝状遺構1	壺D	(10.7) – –	胎土　きめが細かく、石英、長石、黒色砂粒を含む。 色調　内外面明黄褐色、断面灰白色 焼成　やや軟質	外面　タテハケメ(5本/cm)、折り返し部縄文(LR) 内面　口唇部縄文(LR)	口縁部1/4以下
158	溝状遺構1	壺D	(13.5) – –	胎土　きめは極かく、石英、長石の混入が目立つ。 色調　に赤い黄橙色 焼成　普通	外面　口縁部タテハケメ(6本/cm)→頸部ヨコナデ 文様帯以下ナナメハケメ　肩部縦縄文 内面　口唇部にナナメハケメを残す　口縁部以下ヨコナデ	口縁部1/2存
159	溝状遺構1	壺E	(17.3) – –	胎土　きめが細かく、石英、長石の混入が目立つ。 色調　口縁部～胴部外面橙色、胴部内面灰黄褐色 焼成　普通	外面　ナナメハケメ(4本/cm)　横横縄文+縦縄文 頸部ナデ? 内面　口縁部ヨコハケメ　胴部ヨコハケメ	口縁部1/2存 外面、口縁部内面、赤彩
160	溝状遺構1	壺E	10.0 19.9 7.1	胎土　きめが細かく、石英、長石の混入が見られる。 色調　に赤い黄橙色 焼成　普通	外面　口縁部タテハケメ(10本/cm)、胴部上位タテヘラミガキ 下位ヨコヘラミガキ、底部木葉痕 内面　口縁部ヨコハケメ	完存
161	溝状遺構1	壺E	10.1 – –	胎土　きめはやや細かいものの石英、長石の混入が目立つ。 色調　橙色 焼成　普通	外面　ナナメハケメ(5本/cm) 内面　口縁部ヨコハケメ　頸部ヨコナデ	口縁部完存
162	溝状遺構1	平底甕	– – 7.2	胎土　粒子がやや粗く、石英、長石、金雲母が目立つ。 色調　に赤い橙色、底部内面灰色 焼成　普通	外面　タテ方向のヘラ状工具によるナデ?　底部凹み底 内面　ヨコナデ	底部2/3存
163	溝状遺構1	台付甕	– – 9.3	胎土　きめが粗く、石英、長石の混入が目立つ。 色調　に赤い黄橙色 焼成　普通	外面　タテ、ナナメハケメ(11~12本/cm) 内面　甕部粗いヨコハケメ(5本/cm)　脚台部ヨコナデ	脚台部ほぼ完存
164	溝状遺構1	甕	(21.7) – –	胎土　きめが粗く、石英、長石が目立つ。金雲母の混入が多い。 色調　に赤い黄橙色 焼成　やや軟質	外面　粗いナナメハケメ(4本/cm) 内面　口縁部ナナメハケメ→口縁部～胴部ヨコヘラミガキ	口縁部1/4以下
165	溝状遺構1	台付甕 D	13.5 – –	胎土　きめがやや粗く、石英、長石を含む。#5mmの小石を含む。 色調　に赤い橙色 焼成　普通	外面　粗いタテハケメ(4本/cm)→胴部ヨコハケメ 口唇部縄文 内面　口縁部、胴部ヨコハケメ、頸部～肩部ヨコナデを残す	胴部上位1/2存 外面スス付着
166	溝状遺構1	台付甕 D	25.9 – –	胎土　ややきめは粗く、石英、長石を含む。金雲母を少量含む。 色調　外面灰黄褐色、内面橙色 焼成　やや軟質	外面　粗いタテハケメ(6本/cm)→一部ヨコヘラミガキを粗く施す 口唇部ヨコナデ→刺突文 内面　ヨコハケメ→ヨコヘラミガキ	口縁部1/4存

図－18　泉遺跡第２地点出土遺物実測図３

溝状遺構１

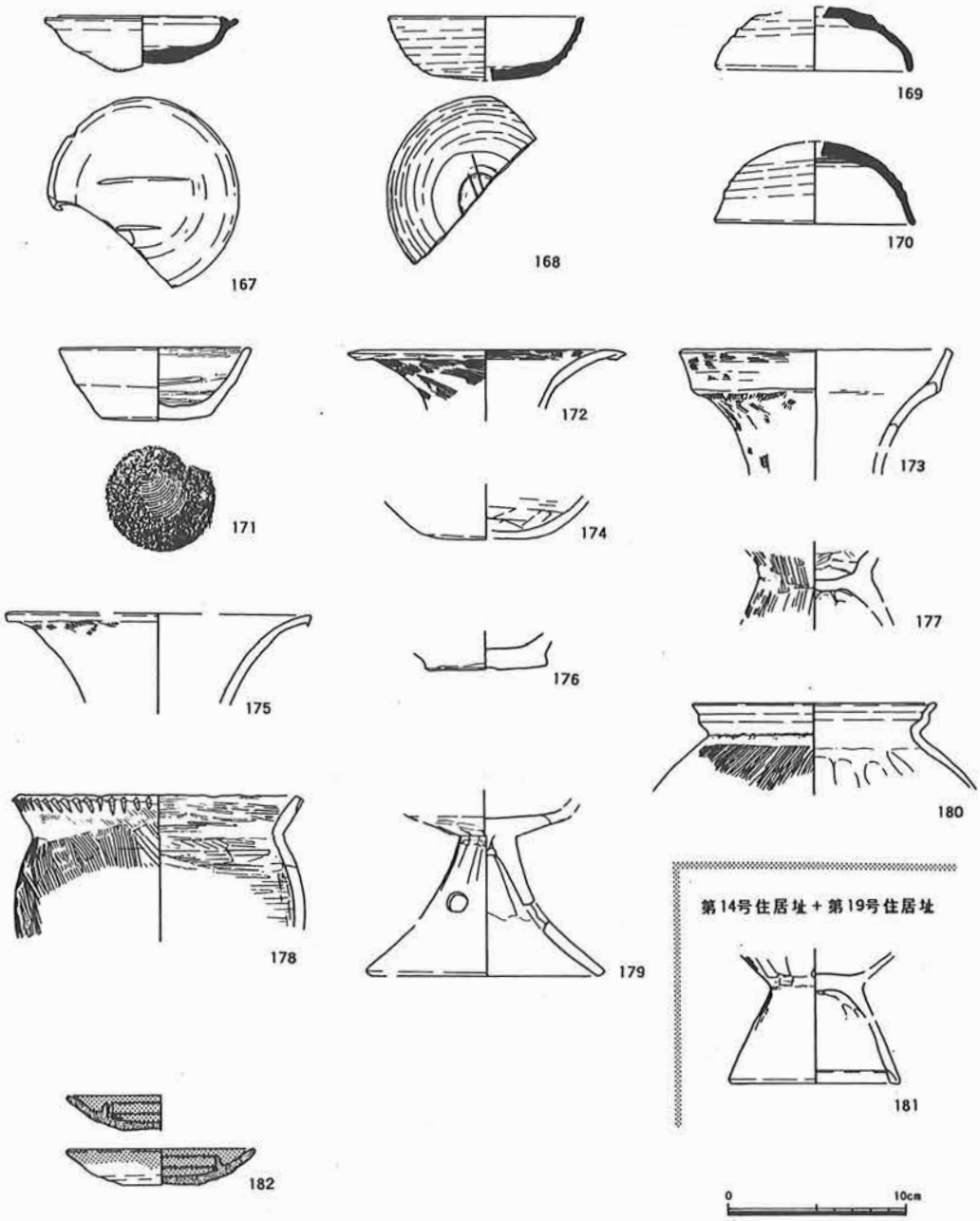


土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整文様	備考
167	遺構確認面	須恵器 坏身	10.8 3.1 －	胎土 緻密で細かい石英、長石を多く含む。 色調 灰色 焼成 良好	外面 底部ヘラ記号	2/3存
168	遺構確認面	須恵器 坏身	(10.8) 3.6 －	胎土 緻密で黒色砂粒を少量含む 色調 灰白色 焼成 良好	外部 底部ヘラケヅリ→ヘラ記号	1/3存 内面油煙付着
169	遺構確認面	須恵器 坏蓋	(10.7) 3.6 －	胎土 緻密で混入物がほとんど見られない。 色調 灰色 焼成 良好		1/3存
170	遺構確認面	須恵器 坏蓋	(11.1) － (4.6)	胎土 緻密で、石英、長石の細かい粒子を含む。 色調 灰白色 焼成 良好		1/4以下
171	遺構確認面	坏	(10.8) － 4.1	胎土 緻密で、石英、長石を含む。 色調 橙色 焼成 普通	底部外面 ロクロ成形 中央に糸切り状の痕跡 外周は不定方向へのヘラケヅリ	1/3存 駿東型坏
172	遺構確認面	壺D	(15.5) － －	胎土 きめが粗く、砂粒の混入が顕著 色調 浅黄橙色 焼成 普通	外面 ナナメハケメ(8本/cm) 内面 ヨコハケメ	口縁部1/4存 内外面赤彩
173	遺構確認面	壺B	(14.6) － －	胎土 きめが細かいものの、黒色粒子の混入が目立つ。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(8本/cm)→ヘラミガキ 複合部ヨコハケメ 内面 ヨコヘラミガキ	口縁部1/3存 内外面赤彩
174	表土中	壺	－ － (7.0)	胎土 きめが細かいが、小石の混入が少量見られる。 色調 にぶい橙色 焼成 普通	外面 ナデ 底部木葉痕 内面 ナデ	底部1/4存
175	遺構確認面	壺E	(17.2) － －	胎土 きめが細かく砂粒の混入が顕著。 色調 黄橙色 焼成 普通	外面 ハケメ→タテヘラミガキ	口縁部1/4以下 内外面赤彩
176	遺構確認面	壺	－ － 6.9	胎土 きめが粗く、石英、長石の混入が目立つ。 色調 暗灰黄色 焼成 普通	底部外面 木葉痕→中央部指頭押え	底部完存
177	表土中	台付甕	－ － －	胎土 きめがやや粗く、石英、長石が目立つ。 色調 外面 にぶい黄橙色、内面 灰黄褐色 焼成 普通	外面 粗いタテハケメ(5本/cm)	接合部全周
178	遺構確認面	台付甕 D	(16.4) － －	胎土 きめが細かく、長石の混入が目立つ。 色調 橙色 焼成 普通	外面 タテハケメ(6本/cm) 口唇部 刺突文 内面 ヨコハケメ→ヨコヘラミガキを粗く施す	口縁部1/4存 外面スス付着
179	遺構確認面	高坏A	－ － (13.5)	胎土 きめが非常に細かく、石英、長石が少量見られる。 色調 橙色 焼成 普通	外面 接合部タテヘラケヅリ 内孔(1コ×3ヵ所) 内面 脚台部上位ヨコヘラケヅリ←下位ヨコナデ	脚台部2/3存
180	遺構確認面	台付甕 A	(13.5) － －	胎土 きめが粗く、金雲母、石英、長石の混入が多い。 色調 にぶい橙色 焼成 良好	口縁部 内外面ヨコナデ 外面 タテハケメ(6本/cm)	口縁部1/3存 外面スス付着
181	第14号住居址 第19号住居址	台付甕 A	－ － (9.5)	胎土 きめが粗く、石英、長石、金雲母を多く含む。 色調 外面 橙色、内面 赤褐色 焼成 良好	外面 窯部タテヘラケヅリ→タテハケメ(4本/0.5cm) 脚台部タテヘラナデを粗く施す 内面 指頭押え＋ナデ 頸部折り返し	脚台部1/3存 内面コゲ付着 住居間の接合例
182	表土中	灯明皿	(10.5) 2.0 4.3	胎土 きめが細かく、石英が見られる。 色調 外面下 にぶい黄橙色、 軸範囲 暗赤褐色 焼成 良好	外面 口縁端部 内面全面鉄釉 底部 外面回転ヘラケヅリ	1/3存

図－19　泉遺跡第２地点出土遺物実測図４

その他



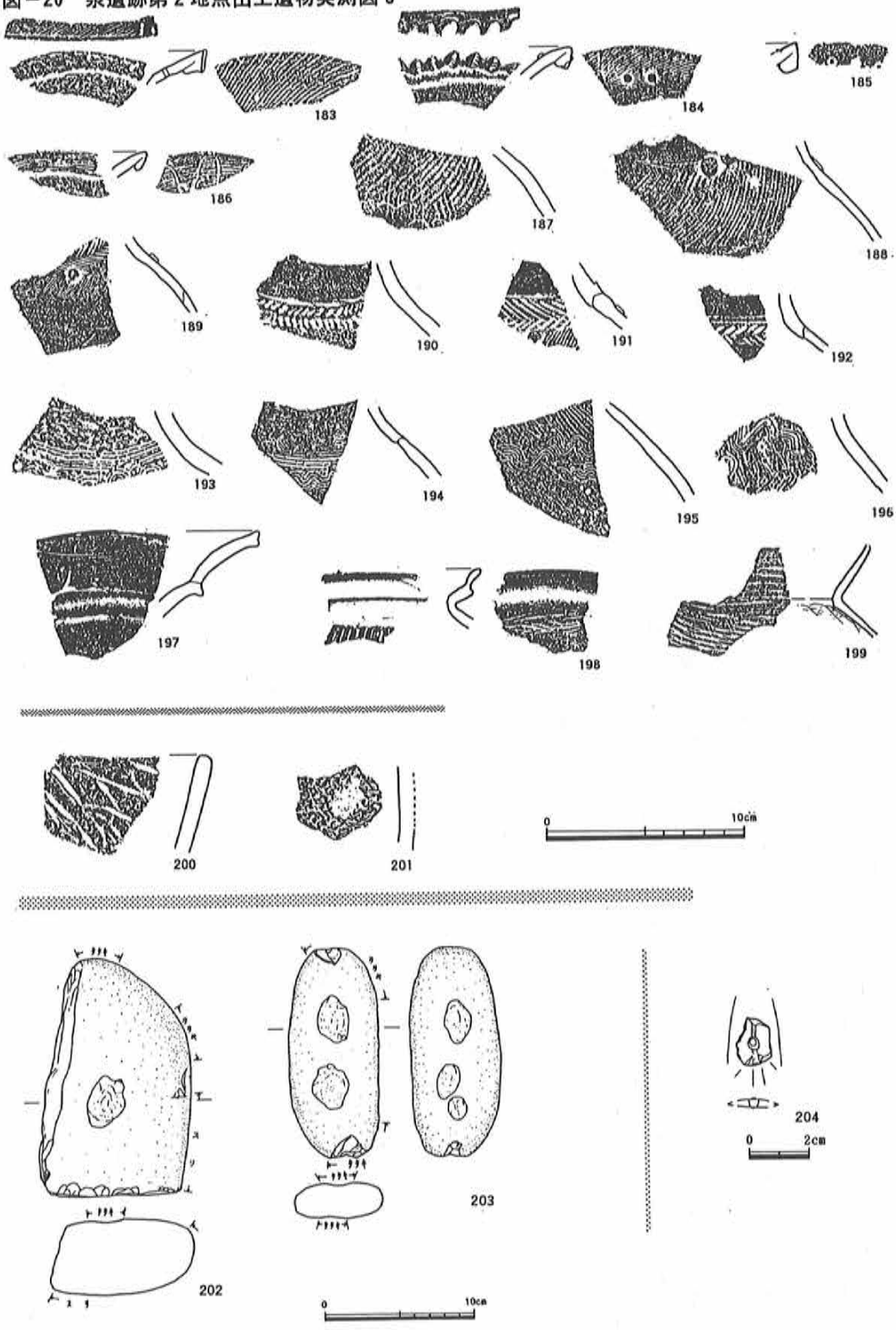
土器観察表

番号	出土地点	器種 器形	口径 底径	特徴	調整・文様	備考
183	第17号住居址	壺D	—	胎土　きめが細かく、石英、長石を含む。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　折り返し部棒状貼付文 内面　面取り、縄文（LR，RL）　円孔	折り返し部 外面～内面赤彩
184	第2-4号土坑	壺D	—	胎土　きめが細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　浅黄橙色 焼成　普通	外面　折り返し部刺突文 内面　縄文（LR）　円形貼付文	折り返し部 外面～内面赤彩
185	遺構確認面	壺D？	—	胎土　きめが細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　橙色 焼成　普通	内面　竹管による刺突文	
186	第17号住居址	壺D	—	胎土　きめが細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(5本/0.5cm)を粗く施す 内面　ヘラ描きの波状文	
187	遺構確認面	壺	—	胎土　細かい石英、長石、金雲母を含む。 色調　外面 にぶい黄橙色、内面 灰色 焼成　普通	外面　縄文（LR）＋S字状結節文	外面赤彩
188	遺構確認面	壺	—	胎土　細かい石英、長石の混入が多い。 色調　外面 浅黄色、内面 灰白色 焼成　普通	外面　擬縄文＋擬横線文＋縄文（LR）＋S字状結節文 ＋円形貼付文	外面赤彩
189	第20号住居址	壺	—	胎土　きめは細かく、黒色砂粒の混入が多い。 色調　外面 浅黄橙色、内面 灰白色 焼成　普通	外面　擬縄文＋縄文（LR）＋円形貼付文	
190	第3号住居址	壺	—	胎土　きめが粗く、黒色砂粒の混入が多い。石英を少量含む。 色調　外面 橙色、内面 灰黄褐色 焼成　普通	外面　擬縄文＋擬横線文 内面　下位ヨコハケメ(6本/cm)	
191	第23号住居址	壺	—	胎土　きめがやや粗く、石英の混入が多い。 色調　浅黄橙色 焼成　普通	外面　擬縄文＋縄文（LR）＋円形貼付文	
192	第7号住居址	壺	—	胎土　石英、長石、小石の混入が多い。 色調　にぶい橙色 焼成　普通	外面　擬縄文＋擬横線文（2条）	
193	第5号住居址	壺	—	胎土　きめが細かく、石英、長石を含む。 色調　外面 にぶい赤褐色、内面 浅黄褐色 焼成　良好	外面　波状文＋横線文（6条）	外面赤彩
194	第1号土坑	壺	—	胎土　きめが細かく、石英、長石を微量含む。 色調　外面 浅黄橙色、内面 灰白色 焼成　普通	外面　波状文＋横線文（6条）	外面赤彩
195	第7号住居址	壺	—	胎土　きめが細かく、石英、長石を少量含む。 色調　にぶい橙色、内面 灰白色 焼成　普通	外面　波状文＋縄文（RL）	外面赤彩
196	第4号住居址	壺	—	胎土　きめは細かく、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　外面 灰黄色、内面 灰白色 焼成　普通	外面　波状文＋縄文（LR）	
197	第18号住居址	壺A	—	胎土　緻密で、石英、長石、金雲母を微量含む。 色調　橙色 焼成　良好	内外面　ヨコナデ	外面赤彩有
198	遺構確認面	台付甕A	—	胎土　石英、長石、金雲母が目立つ。 色調　外面 暗褐色、内面 灰白色 焼成　やや良好	口縁部　内外面ヨコナデ 外面　タテハケメ(3本/cm) 内面　頸部ヨコハケメ(5-6本/cm)	
199	遺構確認面	甕	—	胎土　石英、長石の混入が目立つ。 色調　外面 褐色、内面 にぶい褐色 焼成　良好	外面　右下りのタタキ→タテハケメ 内面　ヨコヘラケズリ　口縁部内外面ヨコナデ	大和型住内模
200	第18号住居址		—	胎土　きめが粗く、石英、長石の混入が目立つ。 色調　外面 褐色、内面 浅黄色 焼成　やや不良	外面　附加状縄文	縄文土器
201	表土中		—	胎土　きめがやや細かく、長石、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	外面　縄文（RL）	縄文土器

石器・金属器観察表

番号	出土状況	種別	材質	法量	調整等	備考
202	第13号住居址	敲石	砂岩	現存長 16.1cm 最大巾 9.9cm 最大厚 4.9cm 重量 1.27kg	磨石、凹石併用	
203	第4号土坑	敲石	砂岩	現存長 14.1cm 最大巾 6.0cm 最大厚 2.4cm 重量 0.37kg	凹石併用	
204	第22号住居址	銅鏃	青銅	現存長 1.6cm　最大巾 1.2cm 最大厚 0.3cm 重量 0.95g	中央に円孔（単孔）有り	

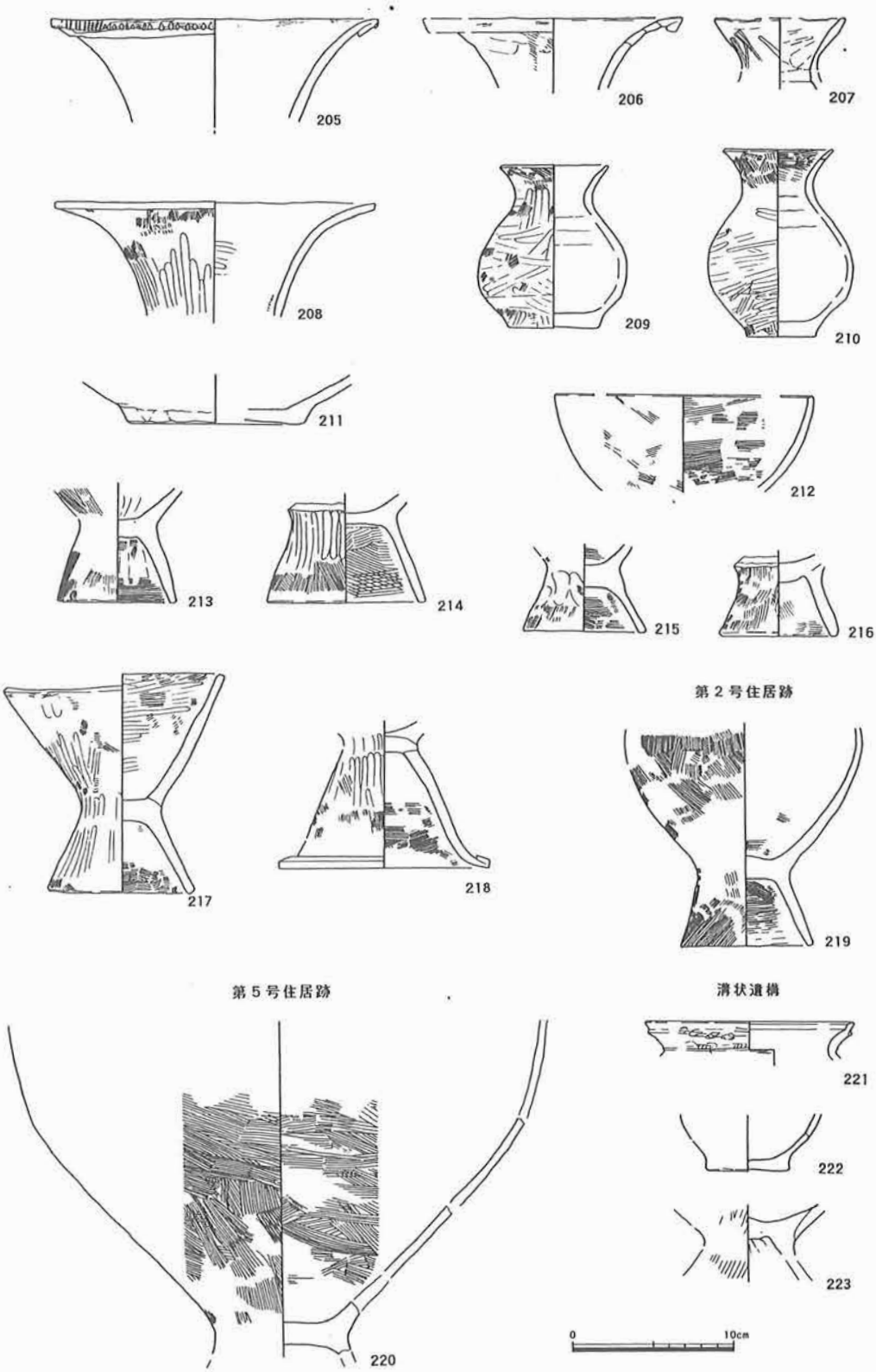
図－20　泉遺跡第２地点出土遺物実測図５



番号	出土地点	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
205	第1号住居跡	壺D	(20.2) — —	胎土　きめが細かく石英、長石、小石を含む。 色調　明茶褐色 焼成　普通	外面　口唇部（折り返し部）刺突文 内面　口唇部にヨコハケメが残る。	口縁部1/4存
206	第1号住居跡	壺D	(16.2) — —	胎土　砂粒を多く含む。 色調　明茶褐色 焼成　普通	外面　ナナメハケメ(6本/cm)→ヨコナデ 内面　口唇部面取り	口縁部1/4以下存 内外面赤彩
207	第1号住居跡	小型壺	(8.0) — —	胎土　石英、長石の混入が目立つ。 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテヘラミガキを粗く施す。 内面　ヨコナデ	口縁部1/4存
208	第1号住居跡	壺E	(19.8) — —	胎土　きめが細かく長石を少量含む。 色調　明茶褐色 焼成　やや良い	外面　タテハケメ→タテヘラミガキ 内面　下位ヨコハケメ、上位ヨコヘラミガキ	口縁部1/4存
209	第1号住居跡	小型壺	(6.7) 10.1 5.7	胎土　きめが細かく砂粒が目立つ。 色調　明茶褐色 焼成　やや良い	外面　タテハケメ(7本/cm)→不定方向ヘラミガキ	口縁部2/3欠
210	第1号住居跡	小型壺	6.8 11.6 4.3	胎土　緻密で長石を少量含む。 色調　灰褐色 焼成　やや良い	外面　口縁部タテハケメ(7本/cm)、肩部ハケメ→ヨコヘラミガキ 内面　口縁部ヨコハケメ　円孔(2個×2ヵ所)	完存 外面～口縁部内面赤彩
211	第1号住居跡	壺	— (10.9) —	胎土　きめが粗く石英、長石を含む。1~2mm程度の小石が多い。 色調　外面黄橙色、内面灰黄色 焼成　普通	外面　底部木葉痕 内面　表面の剥離が目立つ。	底部1/4存
212	第1号住居跡	鉢又 高坏	(16.0) — —	胎土　石英、長石が目立つ。 色調　黄褐色～赤褐色 焼成　やや悪い	外面　ナナメハケメが残る 内面　ヨコハケメ(11本/cm)	底部1/4以下
213	第1号住居跡	台付甕	— — 7.4	胎土　長石の混入が目立つ。 色調　明茶褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(8本/cm) 内面　脚台部ヨコハケメ	脚台部ほぼ完存
214	第1号住居跡	台付甕	— — 9.8	胎土　細かい石英、長石が目立つ。 色調　赤褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(10本/cm)→タテヘラミガキ　端部ヨコナデ 内面　ヨコハケメ(6本/cm)	脚台部完存
215	第1号住居跡	台付甕	— — 7.6	胎土　石英、長石を含む。 色調　赤褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ→指頭押え 内面　ヨコハケメ(7本/cm)	脚台部完存 甕部外面スス付着
216	第1号住居跡	台付甕	— — 7.4	胎土　石英、長石が目立つ。 色調　赤褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(8~10本/cm) 内面　下位ヨコハケメ	脚台部2/3存
217	第1号住居跡	高坏	13.5 13.5 9.1	胎土　石英、長石が目立つ。 色調　茶褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ→タテヘラミガキ 内面　ヨコハケメ→ヨコヘラミガキ 脚台部下半ヨコハケメ(7~9本/cm)	ほぼ完存 外面～坏部内面赤彩
218	第1号住居跡	高坏	— — (13.0)	胎土　1~2mm大の小石が目立つ。 色調　茶褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ～タテヘラミガキ　端部折り返し 内面　ヨコハケメ(12本/cm)	脚台部1/2存 外面～坏部内面赤彩
219	第1号住居跡	台付甕	— — 8.2	胎土　きめが粗く、石英、長石を含む。 色調　茶褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(10本/cm) 内面　甕部ヨコハケメ→ヨコナデ 脚台部ヨコハケメ	脚部下半1/2存
220	第5号住居跡	台付甕	— — —	胎土　細かい長石が目立つ。 色調　褐色～黒褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(7本/cm)→ヨコハケメ 内面　ヨコハケメ	甕部下半1/4存 外面スス付着
221	溝状遺構	受口系 口縁甕	(13.0) — —	胎土　細かい石英、長石が目立つ。 色調　外面にぶい赤褐色、内面橙色 焼成　普通	外面　ヨコハケメが一部見られる。口縁部ヨコナデ→刺突文 内面　口縁部ヨコナデ	口縁部1/4以下
222	溝状遺構	小型壺	— — (5.2)	胎土　石英、長石が目立つ。 色調　橙色 焼成　普通		底部完存 外面赤彩
223	溝状遺構	台付甕	— — —	胎土　石英、長石が目立つ。 色調　明褐色～赤褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(5本/cm)	接合部全周

図－21　権現遺跡出土遺物実測図

第１号住居跡

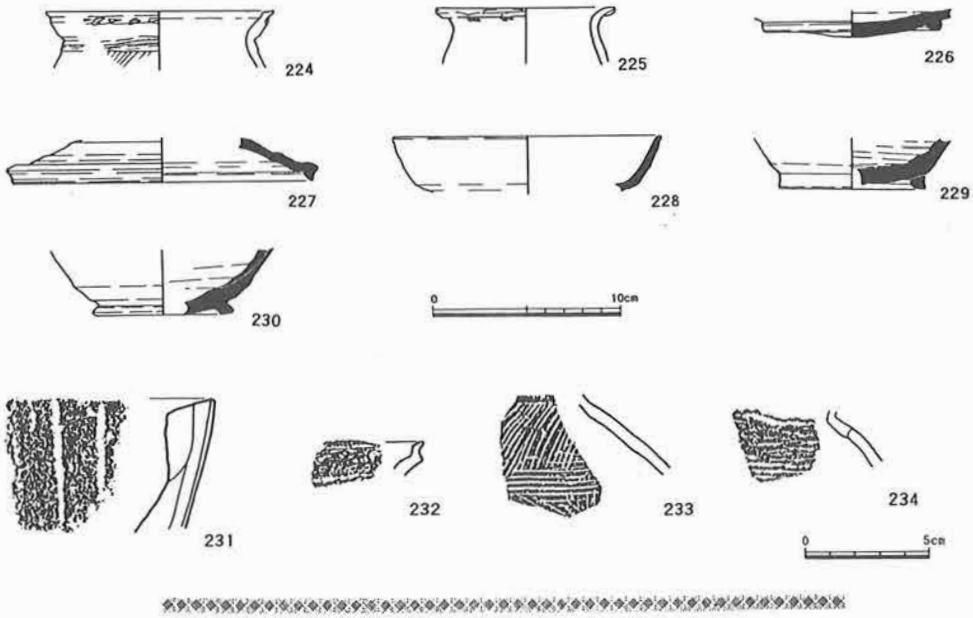


土器観察表

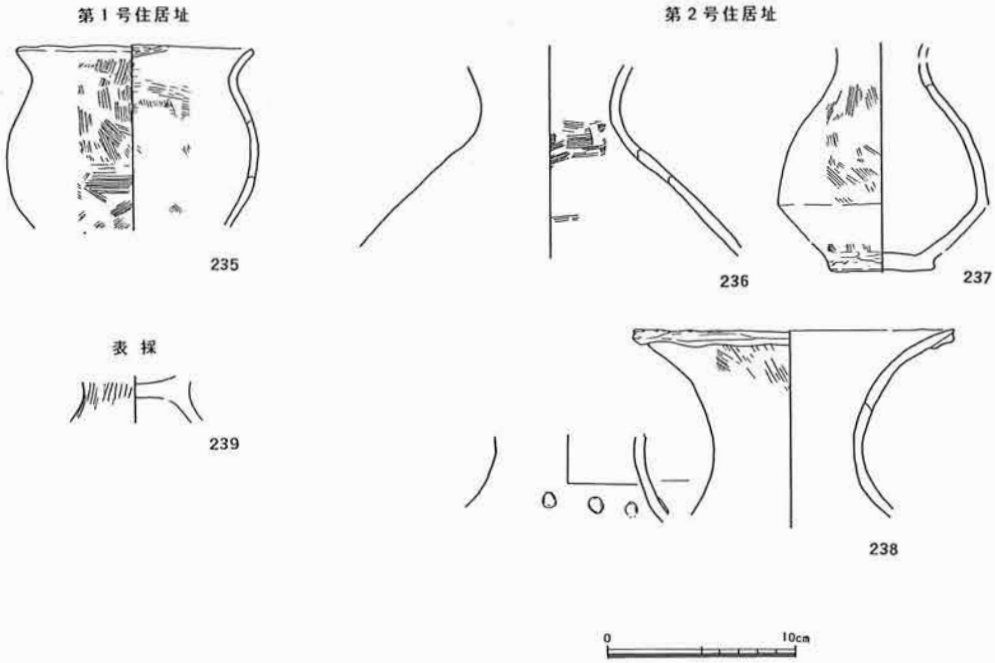
番号	出土地点	器種 器形	器高 口径 底径	特徴	調整・文様	備考
224	表土中	受口状 口縁部	(12.2) － －	胎土　細かい石英、長石が目立つ。 色調　橙色 焼成　普通	外面　タテハケメが一部みられる。口縁部ヨコナデ→刺突文 内面　口縁部ヨコナデ	口縁部1/4以下
225	溝状遺構	広頸壺 D	(9.5) － －	胎土　砂粒の混入が顕著 色調　褐色 焼成　普通	外面　口縁部折り返し	口縁部1/4以下
226	表土中	須恵器 坏	－ － (9.5)	胎土　石英、長石を含む。 色調　灰白色 焼成　良好	高台付、底部回転ヘラケズリ	底部ほぼ完存
227	表土中	須恵器 蓋	(15.8) － －	胎土　きめが細かく石英、長石を含む。 色調　黄灰色 焼成　良好	外面　天井ヘラケズリ	1/4以下
228	表土中	須恵器 坏	(14.1) － －	胎土　きめが細かく、石英、長石を含む。 色調　灰白色 焼成　良好		1/4以下
229	表土中	須恵器 瓶	－ － (7.9)	胎土　石英、長石の混入がみられる。 色調　灰白色 焼成　良好	断面方形の高台 内面　底部縁背り	底部1/2存
230	表土中	須恵器 瓶	－ － (7.6)	胎土　石英、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　褐灰色 焼成　良好	断面方形の高台	底部1/4存
231	表土中	大型甕 B	－ － －	胎土　きめが粗く、2~3mmの砂粒の混入が顕著 色調　黄橙色 焼成　やや悪い	外面　頸位の沈線文 内面　断面三角形の凸帯	
232	表土中	台付甕 A	－ － －	胎土　石英、長石、金雲母が目立つ。 色調　にぶい黄橙色 焼成　普通	口縁部ヨコナデ　外面刺突文	
233	溝状遺構	台付甕 A?	－ － －	胎土　きめが細かく、石英、長石を含む。 色調　赤褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(5本/cm)→ヨコハケメ	
234	表土中	甕?	－ － －	胎土　石英、長石、赤色砂粒を含む。 色調　にぶい褐色 焼成　普通	外面　左下がりのタタキ	
235	第1号住居址	台付甕 D	12.5 － －	胎土　きめが細く石英、長石が目立つ。 色調　淡赤橙色 焼成　普通	外面　タテハケメ(9本/cm)→ヨコハケメ 内面　タテハケメ、　口縁部ヨコハケメ	脚部中位以上ほぼ完存 外部スス付着
236	第2号住居址	壺	－ － －	胎土　黒色砂粒を主体とした細かい砂粒を多く含む。 色調　明褐色～黒褐色 焼成　普通	内面　頸部ヨコハケメ(9~10本/cm)	頸部～肩部1/3存
237	第2号住居址	壺	－ － 5.6	胎土　石英、黒色砂粒の混入が目立つ。 色調　褐色～黄褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(9本/cm)→ヘラミガキを粗く施す 内面　脚部屈曲以下ヨコハケメ	脚部1/2存
238	第2号住居址	壺D	17.3 － －	胎土　黒色砂粒を主体とした細かい砂粒を多く含む。 色調　橙色 焼成　普通	外面　口縁部上位タテハケメが見られる 頸部中形浮付文(3個×3 1所)	口縁部1/2存
239	表　採	台付甕	－ － －	胎土　石英、長石の混入が目立つ。 色調　にぶい褐色 焼成　普通	外面　タテハケメ(5本/cm) 内面　脚台部ヨコハケメ	接合部全周

図－22　権現遺跡・長者ヶ原Ｂ遺跡出土遺物実測図

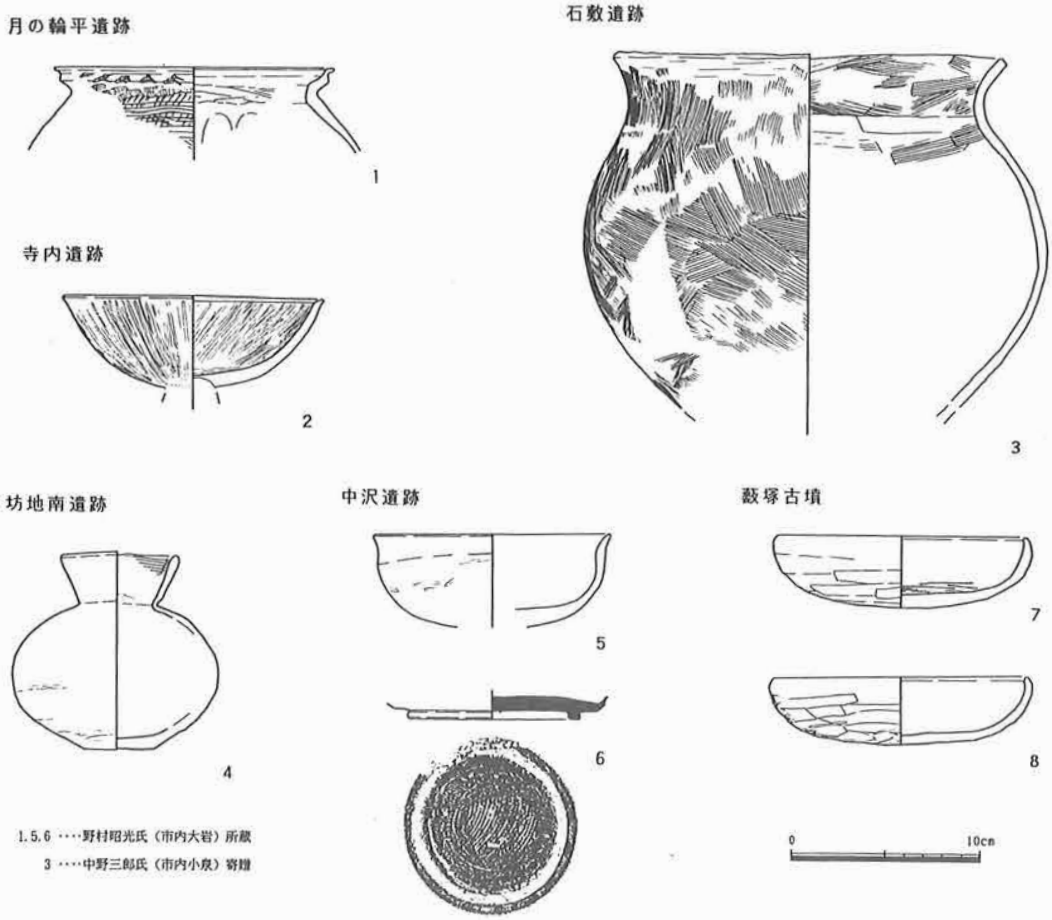
権現遺跡



長者ヶ原Ｂ遺跡



図－23　遺跡分布調査関連遺物実測図



1.5.6 ‥‥野村昭光氏（市内大岩）所蔵
3 ‥‥中野三郎氏（市内小泉）寄贈

土器観察表

番号	出土遺跡	器種 器形	口径 器高 底径	特徴	調整・文様	備考
1	月の輪平遺跡	台付甕A	(14.8) — —	胎土　石英、長石の混入が顕著 焼成　良好で硬質 色調　褐色～赤褐色	外面　押引剥突文 羽状ハケメ→ヨコハケメ 内面　口縁部面取り ヨコナデ→ヨコハケメ 指頭押え	S字甕A類
2	寺内遺跡	小型高坏A	13.8 — —	胎土　きめが細かく石英、長石、金雲母を含む。 焼成　普通 色調　橙色	外面　丁寧なタテヘラミガキ 内面　口縁部面取り タテヘラミガキ 底部一定方向のヘラミガキ	赤彩？
3	石敷遺跡	台付甕D	20.9 — (脚径) 24.6	胎土　きめは細かく、石英、長石を少量含む。 焼成　普通 色調　にぶい褐色	外面　上位タテハケメ 中位ナナメハケメ (10~12本/cm) 内面　上部ヨコハケメ＋ナデ	外面スス付着
4	坊地南遺跡	小型壺	6.2 10.4 3.7	胎土　ややきめが粗く砂粒の混入が目立つ。 焼成　普通 色調　橙色外面一部赤褐色	外面　表面剥離 底部木葉痕 内面　口縁部ヨコハケメ→ナデ？ 底部ヨコハケメ	
5	中沢遺跡	土師器坏	(12.6) (5.3) —	胎土　緻密で石英、長石を若干含む。 焼成　普通 色調　明褐色一部赤褐色	外面　中位一部ヨコヘラミガキ	内面赤彩残る
6	中沢遺跡	須恵器坏	— — 9.2	胎土　石英、長石を含む。 焼成　良好 色調　臀灰色	底部　静止糸切り→外周回転ヘラケヅリ→高台	
7	藪塚古墳	土師器坏	13.0 3.8 —	胎土　非常に緻密で砂粒を少量含む。 焼成　普通 色調　赤褐色～黄褐色	外面　体部ヨコヘラケヅリ→ヨコヘラミガキ 内面　ヨコナデ→ヨコヘラミガキ	
8	藪塚古墳	土師器坏	13.3 3.6 —	胎土　非常に緻密で砂粒を少量含む。 焼成　普通 色調　赤褐色～黄褐色	外面　体部ヨコヘラケヅリ→ヨコヘラミガキ 内面　ヨコナデ→ヨコヘラミガキ	

§付　編

弥生時代Ⅳ－３様式について
－弥生時代第Ⅳ様式の画期を模索する－

1．はじめに

静岡県は、温暖で風光明媚な土地柄とよく言われるが、それをして全県を言い表すわけにはいかない。険しい山並みが連なる南アルプスや日本一の標高を測る富士山などを抱えるのを始めとして、起伏に富んだ地理的な環境を示しているのは周知の事実で、狩野川、富士川、安倍川、大井川、天竜川と言った大型河川ごとにやや狭小な平野部を形成し、独自の地理、生活環境を生み出している。この内、富士宮市が含まれる東駿河～伊豆地域（以下東駿河と総称する。）は、概ね八ヶ岳をその源とする富士川、伊豆半島を北上する狩野川の各流域が相当し、天城、箱根連山や富士山、愛鷹山の山間地が周囲に展開し、それぞれ甲斐、相模、西駿河の地域とを分断している。

東駿河の弥生時代後期の土器編年は、加納俊介氏の従前の編年案に対する痛烈な批判（加納1981a ）が提示されているのにもかかわらず何の進展も見られず今日まで至っている。それは、根強く残る有名無実と化した従来の型式名に対する安易な使用を見ても分かるように、良好な一括資料が得られないとする地元研究者の怠慢だけでは済まされない事態まで陥っている状況によるものである。

さて、近年富士山西麓を南下する潤井川中流域において、弥生時代後期（以下第Ⅳ様式とする。）の転換期と目される特異な型式組成を示す土器群が確認されており、第Ⅳ様式を考える上で有効な情報を提供している。ここではそれらの資料の紹介と編年的な意義付けについて考えてみようと思う。

2．Ⅳ－３様式の資料

筆者は、現在東駿河の弥生時代後期を第Ⅳ様式とし、その中を５時期に細分して捉えている（山上1991a ）。この内、本論に関係してくるのは、Ⅳ－３様式とした段階である。ここでは、この段階の類例を概観してみることとする。

富士宮市泉遺跡第１号溝　（図－18）

本報告に掲載されている資料である。壺Ｄ、壺Ｅ、広頸壺Ｅ、台付甕Ｄがそれぞれ認められるわけであるが、158、159 の壺のように在来の系統では成立しない型式で、菊川様式の影響が如実に伺えるものがあり、単に壺Ｄ、壺Ｅとして共通に扱えず、それぞれの系統差を考えて各形式を分類する必要性を物語っている良好な例である。また、台付甕は、この形

式自体、型式的特徴が乏しく、その時間的、地域的な違いは不明瞭であるものの、164 、165 の台付甕に見られる粗いハケ状工具によるハケメは、その技法自体が菊川様式のもので、台付甕が共に主体を占めている地域として、形態的な違いは容易に確認できないものの、調整技術などの製作技法の一部に外来の要素が採用されたものとしては捉えられる好例である。

富士宮市滝戸遺跡第Ⅴ次調査第11号竪穴住居跡　（図－24）

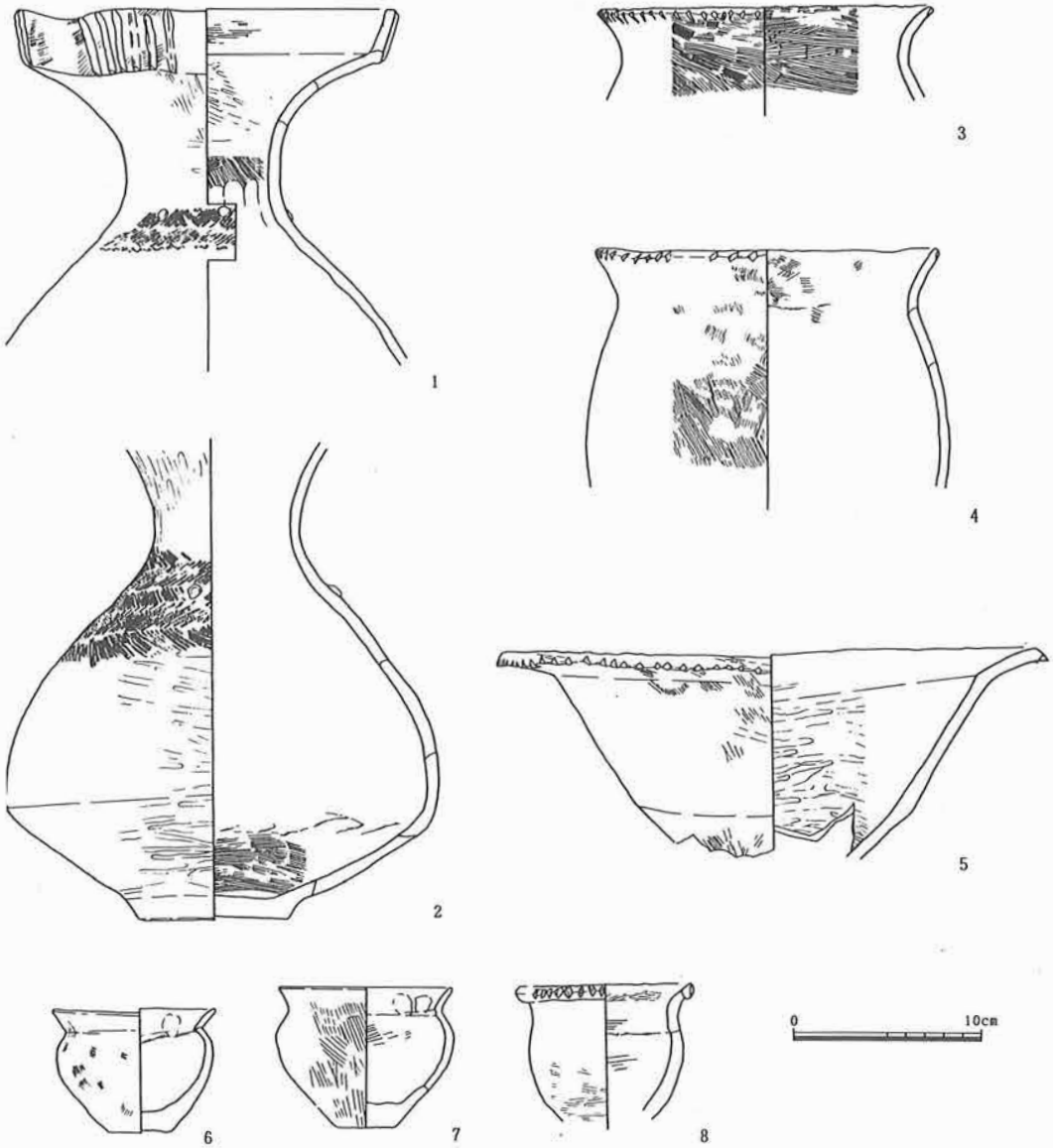
泉遺跡の潤井川を挟んで、対岸の標高130mを測る丘陵上に位置する滝戸遺跡第11号住居跡の出土土器は、壺Ｂ、台付甕Ｄ、鍔状口縁高坏、小型土器から成る。壺Ｂの１は、直立気味の頸部から緩やかに外反して口縁部を形成する。肩部には縄文、連鎖文、円形の貼付文を施し、複合部には棒状の貼付文が施される。この内連鎖文は、Ⅳ－３様式に新たに出現する文様で、縄文などの文様を区画するために使われ以後盛行する。２は、頸部以下が確認されている壺で、胴部の最大径をその下位に持つものである。張りの弱い肩部に縄文と円形の貼付文によるやや幅広の文様帯が見られる。この段階の文様は頸部の最小径を測る部分より下に施されることが主で肩部のみに限られるようになる。甕は、頸部を緩やかに外反させ、４のように明瞭な肩部を形成していないものが多い。そのため口径と胴部最大径は、同程度の数値を測る。

この住居の出土土器を最も特徴付けているのは、５の高坏であろう。高坏は、Ⅳ－３様式より出現する器類であるが在来系のものは存在しない。５は、深めの受部に外折する接合角度の弱い口縁部が付されるもので、その口唇部には刺突文が施されている。これは、東遠江（菊川様式）の鍔状口縁高坏の影響を受けたもので、在地で製作された外来系（東遠江系）土器として捉えられる。

富士市的場遺跡Ｆ住居跡

的場遺跡は、直接潤井川水系には含まれないが、愛鷹山の山裾で浮島ヶ原の低湿地を見下ろす台地上に立地している。富士地区(富士市、富士宮市、芝川町)では、弥生時代後期の前半段階(Ⅳ－１～Ⅳ－３様式)に比定され、それぞれの遺物の所属遺構がある程度明らかな遺跡は極めて少なく、公表されている資料は、この的場遺跡のものぐらいしか知られていない。この遺跡は、東海道新幹線建設に伴う事前の調査により、その内容が明らかになったが、簡単なトレンチ調査のためその全体像についてはまだまだ不明な部分が多い。

Ｆ住居跡は、弥生時代の中では最も後出もので、この遺跡の弥生時代集落の終末に位置づけられる可能性の高い住居である。この住居の出土土器は、全て壺で４個体確認されている。４個体の内１つは、ややおおぶりの壺Ｄで胴部が扁球形を呈し、口唇で幅の狭い折り返し部を作り長頸気味の緩やかに外反する口縁部を形成している。他のものは、頸部以下の破片で胴部のほぼ中位にその最大径を持つ扁球形のものと胴部下位でそれを測る無花果形の両型式が認められる。



図－24　滝戸遺跡第Ⅴ次調査第11号竪穴住居跡出土土器

沼津市雌鹿塚遺跡第15号住居址、竪穴状遺構－1

雌鹿塚遺跡は、浮島ヶ原低湿地内の微高地上に立地している弥生時代後期～古墳時代前期の間継続的営まれた遺跡である。特に弥生時代後期は、土器はもちろんのこと木製品、石器をはじめとして銅鏃、銅釧などの金属器まで豊富な遺物の出土を見ている。

第15号住居址出土の土器には、壺D、台付甕D、鉢、高坏などがある。壺Dは、折り返し部を短く幅広に折り返すもので、連鎖文を含む縄文を肩部外面と口縁部内面に文様として施されている。台付甕は口径と胴部最大径がほぼ等しいもので緩やかに外反する口縁部を形成している。また口唇部には、全て刺突文が施される。鉢は、口径15.5cmを測る口縁

部が短く外反するもので外面を丁寧なヘラミガキによって仕上げられている。高坏は、脚台部内面以外丁寧に赤色塗彩する中部高地箱清水式系の口径28.7cmを測る大形のものである。これは、受部が直線的に開き口縁部で大きく外反する形態を示すものでその口唇部に棒状の貼付文が施されている。また、脚台部には箱清水式土器特有の三角形の透かし孔が穿たれている。

竪穴状遺構－１出土の土器は、壺Ｅ、台付甕Ｄ、鉢、高坏で構成されている。台付甕Ｄは３個体出土しているが型式差が大きく、口縁が大きく開き胴部がほとんど張らずに脚台部に収束してしまう在来系のものと胴部が直線的に垂下しほとんど張らず、胴部下位の接合部で大きく屈曲して脚台部に展開する西駿河を主体としていると思われるものが共伴している。高坏は、深い受部に外折する折り返し口縁の口縁部が付され、その脚台部が下位で屈曲する滝戸遺跡第11号竪穴住居跡例と同様の東遠江系のものである。

このような類例のほかに、この段階のものとしては、学史的に著名な目黒身遺跡第１排水溝出土の土器群の主要な部分がそれに当てられる。

３.Ⅳ－３様式段階の外来系土器

２で概観して分かるようにⅣ－３様式段階になると外来系土器の搬入が顕在化してくる。外来系土器は、駿河湾を介在して直接的な搬入が想定される東遠江、西駿河のものを中心として西遠江、中部高地のものがみられ、特に東遠江（菊川様式）系の動きはその中でも顕著で壺、甕、高坏などにその影響を受けるものが多い。

鍔状口縁高坏と称される菊川様式の特徴的な器種は、２の項で取り上げた以外に富士宮市泉遺跡第１地点第４号トレンチ（図－13の61）、清水町矢崎遺跡、三島市手無遺跡、韮山町山木遺跡などで確認されている。また、同様式のもう一つの形式である口縁部が直立気味に開く鉢状の受部が付される高坏は、富士川以西の蒲原町梅原遺跡、富士川町中野遺跡寺畑第９号住居跡などの駿河の東西を画する庵原郡内において確認されている。壺は、壺Ｄ、壺Ｅと言った型式差が見られ、やや多様な様相を示し、前記の泉遺跡の第１号溝の好例のほか的場遺跡、雌鹿塚遺跡、清水町瀬戸川遺跡第４住居址、韮山町神崎遺跡第２号方形周溝、山木遺跡などその類例は多い。

これらの菊川様式の各形式は、胎土分析などの理化学的な分析によるわけではないため直接の搬入か在地産かは明確には判断されないが、細部に見られる型式的諸属性はオリジナルからの変容が進んだものが多く、在地産のものと推察されるものが多い（註１）。これからの型式群は、巨視的に見られる特徴から、中嶋郁夫氏の菊川様式中段階に相当し、土器が活発に動きだす段階に対応している。具体的には、外来系土器を介した菊川様式と東駿河のそれとの併行関係を考えた場合、菊川様式のなかでその型式的特徴が明瞭な高坏が特に重要な形式になる。この高坏は、坏部が浅くなり坏胴部と口縁部の接合角度が鈍化

し、脚裾部折り返しが直線化するなどの特徴が型式変化として上げられている(中嶋1991)。その変化に対応させると、東駿河にみられる類例は、まだ坏部が深く前述の中段階の資料のみに限られそうである。

東駿河は、その地理的環境から甲府盆地を中心とした中部高地系の影響が伺われるものも見られる。雌鹿塚遺跡第15号住居址出土の高坏はその端的な例であるが、そのほかには沼津市雄鹿塚遺跡Aトレンチ6区、裾野市宮原遺跡などで、その系統に属する櫛描文が施された甕が確認されている。

また、西遠江からの影響が伺われるものとしては、雌鹿塚遺跡、山木遺跡で高坏がそれぞれ出土しているが、この段階の類例は少ない。

このように東駿河におけるⅣ－3様式は、隣接する様式圏である東遠江の菊川様式や中部高地の箱清水式土器からの土器の搬入が顕在化し、弥生時代第Ⅳ様式での新たな動きとして捉えられる段階である。これには駿河湾や富士川と言った地理的な要因が、大きく関与していたことは十分考えられるが、第Ⅳ様式の中でのその移動は、その終末期（Ⅳ－5様式）を除いてこの段階が最も顕著な状況を示すことは、第Ⅳ様式段階での土器の移動が、あくまでも断続的であることを含めて、十分注意しなければならない。そして、そこに大きな社会的な力が作用していたものと理解されるが、その内容については今後の総合的な研究が必要となる。

Ⅳ－3様式段階は、菊川様式の中段階に併行することは既に述べたが、西遠江との併行関係を考えた場合はどうであろう。中嶋、久野正博両氏による研究でも明らかなように、菊川様式中段階は山中様式西遠型Ⅱに併行するとされている（中嶋1991、久野1991）。この成果をふまえて西遠江との併行関係を考えると、Ⅳ－3様式と山中様式西遠型Ⅱがそれぞれ相対するものと考えられ、雌鹿塚遺跡出土の西遠江型の高坏がこの山中様式西遠型Ⅱのものと型式的に類似する点は非常に示唆的だと言える。

4．Ⅳ－3様式の画期

Ⅳ－3様式の画期を考える場合、前段階の様式との比較が有効であると考えられるが、現状では資料の絶対数が少なく、確認されていない形式が存在する可能性がまだあることを十分考慮しなければならない。そのような状況の中で、前段階との比較を近年報告書が刊行された沼津市豆生田遺跡、雌鹿塚遺跡の資料を参考に考えてみたい。

前段階のⅣ－2様式は、壺、甕で構成されており、型式的特徴の乏しい鉢の存在は、考えられるものの比較的限定された器種構成を示す。

壺は、広口壺と広口短頸壺が見られる。広口壺は、壺B、壺D、壺Eに細分される。その内、壺Dは折り返し部の幅が広いものと狭いものとがみられ、多様な型式変化が見られるとともに、器種の構成比率も高い度合いを示す。壺Bは、加飾性が強いものが多く、複

合部が内傾するものや直立あるいは外傾するものなど型式的なバラエティーが認められる。また、この形式は一般的に大形品が多いものの、出土数が少ないと言った特徴も示す。壺Ｅは、長頸気味で口唇部を丸く仕上げるものと長頸気味に口唇部を外下方に僅かに肥厚させ、端部を面取るものの２型式に大きく区分される。

広頸壺は、この段階に出現する形式で折り返し口縁のもの（広頸壺Ｄ）と単純口縁のもの（広頸壺Ｅ）がある。胴部は広口壺と同調しており、その最大径を下位に持つ肩の張らない形態を示す。

文様は、縄文、貼付文、刺突文、小円孔が主体となり、櫛描文である波状文、横線文が激減する。この段階より縄文施文あるいは櫛描文による複数単位の横線で縄文を区画し、頸部の最小径部分より下位に文様帯を構成するものが現れるが、その数は少ない。

甕は、台付甕が主体で、平底甕などはほとんど見られない。台付甕は、その胴部が無花果型、扁球形あるいは胴部がほとんど張らない型式などが認められるとともにこの段階より口唇部に刺突文を施さないものが出現する。

以上がⅣ－２様式の概略であるが、これに対してⅣ－３様式になるとどのような変化が見られるだろうか。

まず壺であるが、在来系土器としては、その胴部で扁球形ないしは無花果型の２型式が認められ、相対的に口縁部の高さが低くなり、見かけ上は頸部が太くなると言った第Ⅳ様式全体を通して見られる型式変化を遂げながらも前段階を踏襲した器種構成を示す。特に広頸壺は、Ⅳ－３様式になってその様相が明らかになり、前段階同様広頸壺Ｄと広頸壺Ｅが認められる。広頸壺Ｅは、更に緩やかに外反する口縁部に無花果型の胴部を付すものと口縁部が直線的に開き、扁球形の胴部を形作るものとに型式細分される。

この段階の特徴としては、再三述べるように泉遺跡第１号溝の出土例のような壺Ｄ、壺Ｅの中に外来系土器とされるものが出現することにある。これらは全て東遠江（菊川様式）を淵源地として成立したもので、張りの弱い肩部に擬縄文、刺突による擬横線文、連鎖文などを施すものが多い。特に、在来系土器の中でも主体をなす壺Ｄの中には、その折り返し部の断面形が、在来の四角を基本としているものに対して「△」の断面形を形作る外来的要素とされる新たな型式的な属性が加わる。

文様は、基本的には前段階を踏襲するが新たに東遠江系のそれ（擬縄文、擬横線文）や連鎖文などが出現し多彩な構成を示す。また頸部～肩部の文様施文部位は、頸部の最小径より下位に限定されたものが多い。

器類構成の中で壺と並んで主要な位置づけを示す甕は、口縁部外面に２～３段の輪積み痕をそのまま残すものが、この段階を持って消滅する以外、前段階からの型式を踏襲しているが、その型式差はあまり大きくなく、明確な違いはみられない。ただ、調整方法などの型式的な属性の面では、前述したように条痕と呼称したほうが良いような非常に粗いハケ

メや壺の調整方法のヘラミガキが甕の調整方法として採用されている点は、注意される。これらは多分に外来的な要素として搬入してきた可能性が強い土器製作技法の一つと考えられ、雌鹿塚遺跡竪穴状遺構－１の西駿河系の甕は言うに及ばず、Ⅳ－３様式の段階には、すでに日常性の強い器類である甕にも外来系土器の影響が及んでいるものと捉えられる。

Ⅳ－３様式の大きな特徴の一つとして、器類－器種－器形とする形式分類(加納1981b)の器類レベルで取り扱う高坏類の弥生時代第Ⅲ様式（弥生時代中期後葉）以来の出現が上げられる。それらの全てが鍔状口縁高坏に代表される東遠江系を主とした外来系のもので占められており自生のものは存在しない。また、出土状況も他器類に較べてその構成比率が２～３％未満の極めて低い値で、主要な器類にはなりえていない。それは、この段階の遺跡を調査すれば必ず確認されると言った程度の出土を示すものではない器種ではある。

このようにⅣ－３様式は、基層にはⅣ－２様式から踏襲された在来系としての型式変化による土器があり、その土器様式に東遠江系を中心とした外来系土器の搬入が顕在化する段階として捉えられる。外来系土器は、中部高地系や西遠江系などの単体の土器の動きとして捉えられるものと東遠江系の在来系土器への文様や調整方法に代表されるようなその直接的な影響から理解されるように人的な動きとして捉えられるものとが認められる。その外来系の土器の動きのなかで、器類としての高坏が第Ⅲ様式以来再び登場する。

Ⅴ.まとめにかえて

潤井川流域では、近年弥生時代第Ⅳ様式段階の遺跡の調査例が増えており、土器を始めとして資料の蓄積も多くなっている。弥生時代第Ⅳ様式段階では、星山の月の輪上遺跡、黒田の滝戸遺跡、泉遺跡などが調査され、良好な資料が得られている。この内、泉遺跡は、Ⅳ－１、２様式からその集落の開始が伺われ（加納1981a ）、第１号溝（図－５）が埋められていることからも分かるように、Ⅳ－３様式をもってそれが終了する状況が確認されているが、それに較べて月の輪上遺跡や滝戸遺跡では、それぞれ数回に亘る調査が実施されているにもかかわらず、Ⅳ－２様式以前の資料は一切確認されておらず、Ⅳ－３様式段階にならないと集落が始まらない。各々の遺跡は、潤井川中流域の狭い地域の中でそれぞれ分布しているものでり、Ⅳ－３様式段階に終わる遺跡と始まる遺跡があることがわかる（註２）。　このようにⅣ－３様式は、集落の消長から見ても時代の画期として捉えられる段階であり、泉遺跡第１号溝や沼津市目黒身遺跡第１排水溝と称される溝がこの段階に埋められる事例は、その象徴的な出来事として捉えられる。

Ⅳ－３様式は、様式圏を違える各地域間の交流により成立したものと考えられるが、東駿河の場合は、東遠江（菊川様式）の影響を主体としてそれが成立している。特に、土器としての高坏の出現は、それが外来系の土器ではあるものの新たな土器様式が成立した事を具象化しているものとして重要である。ただ、外来系の影響は、第Ⅳ様式の主要器種で

ある壺、甕類の構成比率まで変えるものではなく、出土数が非常に限られ特異な状況を示す高坏は別として各形式は、その基盤に在来系の要素を残しながら、文様や口縁などで特徴的に見られるように、それを受容し変容させて在地化しているものが多い。その動きは、古墳時代の幕開けとなる次の大きな画期である丸ヶ谷戸遺跡の段階（大廓式古段階）(山上1991b)の広範囲な地域間交流に伴う土器の動きとは、自ずとその評価を違えるものではあるが、小地域間の交流による影響を受けて成立したⅣ－３様式以後の型式的な属性は評価しなければならない。そのため、各水系ごとにそれぞれの在来系の要素を、地域色として確固たる様式圏を形成しているⅣ－２様式以前とⅣ－３様式以後とを同一の様式名で包括することは出来ない。（渡井英誉）

註１　菊川様式については袋井市教育委員会松井一明氏、白澤崇氏のご教授によるところが大きい。両氏のご厚意により菊川様式中段階の良好な資料である袋井市堀越ジョウヤマ遺跡（白澤1991）の資料を実見させていただいた。

註２　これらの遺跡が沖積地と丘陵上と言った立地を大きく異にしている点は、遺跡の性格にその立地が大きく関与していたことを表しているが、泉遺跡と同時代で潤井川下流域の沖積地内に所在する富士市三日市廃寺跡の類例からも考えられるように、富士市域内の様相が明らかになった時点で改めて外来系土器の様相をもふまえ、その関連を検討しなければならない。三日市廃寺跡の資料については富士市教育委員会志村博氏、久松義昭氏のご厚意により実見させていただいた。

引用参考文献

加納俊介 1981a 「駿河湾東部の弥生土器編年のための覚書」『月の輪遺跡群Ⅱ』富士宮市教育委員会

山上英誉 1991a 「静岡県（駿河）」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第Ⅱ分冊　東海埋蔵文化財研究会

静岡県教育委員会 1965 『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ、Ⅱ』

中嶋郁夫 1991 「東遠江におれる後期弥生土器編年と土器移動」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第Ⅰ分冊　東海埋蔵文化財研究会

久野正博 1991 「三河・西遠江の後期弥生土器編年と地域性」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第Ⅰ分冊　東海埋蔵文化財研究会

加納俊介 1981b 「『弥生土器研究のための覚書』－比田井氏の論文に接して－」『考古学基礎論３』考古学談話会

山上英誉 1991b 「Ⅶ.土器」『丸ヶ谷戸遺跡』富士宮市教育委員会

白澤　崇 1991 『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』袋井市教育委員会

富士宮市遺跡関係文献

1. 赤星直忠 1931 「富士山頂経塚出土甕片について」考古学雑誌第21巻第5号
2. 赤堀英二 1930 「佐野氏の石器報告を読んで」人類学雑誌45-8
3. 足立鍬太郎 1930「富士山頂三島嶽南経塚遺物中の経筒と経巻とにつきて」考古学雑誌第20巻第12号
4. 植松章八 1978 「E　富士宮市滝戸遺跡の周溝墓」『静岡県考古学シンポジューム 静岡県における4～5世紀の墳墓について』静岡県考古学会
5. 植松章八 1984 「第1章・富士南麓文化のあけぼのと天間沢遺跡」『鷹岡町史』富士市
6. 植松章八 1984 「富士宮の原始・古代へのいざない－その2－弥生のはじまり」季刊富士宮わがまち第10号
7. 植松章八1984「古代へのいざない－その3－弥生から古墳」季刊富士宮わがまち第11号
8. 植松章八 1985「古代へのいざない－その4－弥生・古墳集落の語るもの」季刊富士宮わがまち第12号
9. 植松章八 1985「ふる里の原始・古代へのいざない－その5－群集墳と大化“前代”のころ」季刊わがまち第13号
10. 植松章八 1985「ふる里の原始・古代へのいざない－その6－律令のころ」季刊わがまち第14号
11. 植松章八 1986 「古墳のはじまりと珠流河（するが）」季刊わがまち第19号
12. 遠藤秀男 1973 『目でみる富士宮の歴史』緑星社
13. 大石原千居遺跡発掘調査団 1970 『大石原千居遺跡第1次発掘調査概報』
14. 大石原千居遺跡発掘調査団 1972 『大石原千居遺跡発掘調査概報』
15. 大仁町教育委員会 1971 『三福向原（静岡県における縄文時代住居址の研究）』町誌編纂資料
16. 大宮町　1930 『大宮町誌』
17. 岡本東三編 1982 『日本の美術 第189号 縄文時代　（早期・前期）』至文堂
18. 小野真一　1950 「静岡県東部地方に於ける縄文文化」沼津女子高校郷土研究1
19. 小野真一　1957 『静岡県東部古代文化総覧』蘭契社
20. 小野真一　1958 『駿河湾地方の弥生文化』
21. 小野真一　1959 『駿豆地方の土偶と顔面把手」上代文化29
22. 小野真一　1959 「富士宮市貫戸出土の環状石斧」駿豆考古第3号
23. 小野真一・笹津海祥・塩川正男 1962「富士宮市渋沢遺跡出土の弥生土器－丸子式土器の新資料－」駿豆考古第6号
24. 小野真一　1968 「静岡県における先史集落の研究」信濃20-2

25. 小野真一　1969　「東海地方東半の弥生文化(1)・(2)」信濃21-4・5
26. 小野真一　1970　「富士周辺における縄文早期の土器」富士古文化研究所
27. 小野真一　1970　「富士宮市の考古学的研究」駿豆考古第９号
28. 小野真一　1971　「静岡県の縄文文化」地方史静岡１
29. 小野真一　1972　「富士周辺の先土器文化」富士古文化研究所
30. 小野真一　1972　「駿豆地方における土師器の編年」小田原考古学研究会会報５
31. 小野真一　1973　「富士周辺の歴史と文化（２）」富士古文化研究所
32. 小野真一　1975　「駿河地方における縄文時代の土壙」加藤学園考古学研究所報３
33. 小野真一　1975　『ゆずり葉』加藤学園考古学研究所
34. 小野真一　1975　『千居』　加藤学園考古学研究所
35. 小野真一 1976「入門講座弥生土器－中部・東海東部－」考古学ジャーナル126・127・129
36. 加藤学園考古学研究所　1978　『特別展図録　静岡県の縄文土器』
37. 加藤学園考古学研究所　1979　『特別展図録　静岡県の弥生式土器』
38. 加藤学園考古学研究所　1980　『特別展図録　静岡県の土師器と須恵器』
39. 加藤学園考古学研究所　1982　『特別展図録　駿河・伊豆地方の考古資料』
40. 加納俊介 1881「弥生土器研究のための覚書 比田井氏の論文に接して」考古学基礎論３
41. 加納俊介 1987「用語に関する二・三の問題」『欠山式土器とその前後　研究・報告編』
42. 加納俊介　1991「東日本における後期弥生土器研究の現状と課題」
『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
43. 桑原藤泰　1930　『駿河記』（復刻）臨川書店
44. 県勢研究会　1954　『静岡県社会文化史』上巻
45. 小林行雄・杉原荘介　1968　『弥生式土器集成・本編２』
46. 佐藤由紀男 1985「静岡県」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』
愛知考古学談話会
47. 佐藤由紀男1991「静岡県」『東日本における稲作の受容』第１回東日本埋蔵文化財研究会
48. 佐野武勇 1928「静岡県大宮町及び其の付近の石器時代遺跡に就て」人類学雑誌43-10
49. 佐野武勇　1930　「富士山頂上三島ヶ嶽の経塚」考古学雑誌第20巻第10号
50. 佐野武勇　1930　「富士山南麓に於ける石器時代遺跡」人類学雑誌44-4
51. 佐野武勇　1935　「富士山南麓の遺跡分布」中部考古学彙報
52. 佐野要吉　1931　「富士南麓郷土史談」
53. 塩川浩正　1976　「富士宮市滝戸遺跡における最近の出土遺物」駿豆考古第18号
54. 塩川浩正　1980　「富士宮市滝戸遺跡の埋甕と配石遺構について」駿豆考古第23号
55. 塩川浩正　1983　「富士宮市泉遺跡出土の弥生土器」駿豆考古第24号
56. 静岡県　1930　『静岡県史　第１巻』

57. 静岡県　1931　『静岡県史　第２巻』
58. 静岡県　1932　『静岡県史　第３巻』
59. 静岡県　1965　『静岡県埋蔵文化財地図』
60. 静岡県　1990　『静岡県史　資料編１　考古一』
61. 静岡県　1990　『静岡県史　資料編２　考古二』
62. 静岡県教育委員会　1963　『静岡県の古代文化』
63. 静岡県教育委員会　1979　『静岡県遺跡地名表』
64. 静岡県教育委員会　1988　『静岡県文化財地名表　－静岡市以東－』
65. 静岡県考古学会　1984　『静岡県のあけぼの』
66. 静岡新聞社　1978　『静岡大百科事典』
67. 芝川町教育委員会　1972　『駿河小塚』
68. 修善寺町教育委員会　1976　『桜台（田方郡修善寺町桜台遺跡発掘調査報告）』
69. 新圧道雄　1975　『改訂駿河国新風土記』国書刊行会
70. 杉山元衛　1978　『郷土史事典（静岡県）』昌平社
71. 駿豆考古学会　1979　『駿豆地方の弥生式土器集成』
72. 駿豆考古学会　1983　『駿豆地方の縄文土器集成』
73. 瀬川裕市郎　1990.91　「入門講座縄文土器－東海地方－」
考古学ジャーナル 315.323.326.328
74. 関野哲夫 1988「静岡県下の押型紋段階の様相」『縄文早期を考える－押型文文化の
諸問題－』帝塚山考古学研究所
75. 月の輪遺跡発掘調査団 1972 『月の輪平 月の輪下 王藤内の塚 南部谷戸遺跡の概要』
76. 戸田哲也 1989 「縄文土器の型式学的研究と編年（中編その２）」神奈川考古第25号
77. 戸沢充則編 1985 『探訪 縄文の遺跡　東日本編』有斐閣選書Ｒ
78. 中伊豆町教育委員会 1991 『上白岩遺跡（６次・７次）』
79. 中島信哉　1984　「富士宮の原始・古代へのいざない－その１－あけぼの」
季刊富士宮わがまち第９号
80. 中野国雄 1954 「吉原周辺の原始時代」『吉原市史研究資料２号』吉原市教育委員会
81. 中野国雄 1981 「４、富士・富士宮地区の群集墳について」
『静岡県考古学会シンポジューム３ 群集墳と横穴』静岡県考古学会
82. 中村高平 1969 『駿河志料』（復刻）歴史図書社
83. 野村昭光 1969 「富士宮市大場山出土の縄文土器」駿豆考古第８号
84. 野村昭光 1970 「富士宮市代官屋敷遺跡出土遺物について」駿豆考古第９号
85. 野村昭光 1976 「箕輪遺跡出土の玉について」駿豆考古第18号
86. 平林将信 1981 「富士宮市」『静岡県の中世城館跡』静岡県教育委員会

87. 富士市教育委員会 1985 『富士市埋蔵文化財分布地図地名表』
88. 富士市教育委員会 1986 『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
89. 富士宮市 1971 『富士宮市史 上巻』
90. 富士宮市 1986 『富士宮市史 下巻』
91. 富士宮市教育委員会 1973 『富士宮の文化財』
92. 富士宮市教育委員会 1977 『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅰ次）概報』
93. 富士宮市教育委員会 1978 『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅱ次）概報』
94. 富士宮市教育委員会 1979 『西富士道路埋蔵文化財発掘調査（富士宮地区）概報』
95. 富士宮市教育委員会 1979 『大室古墳墳丘実測調査報告』
96. 富士宮市教育委員会 1979 『富士宮市遺跡地名表』
97. 富士宮市教育委員会 1980 『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報』
98. 富士宮市教育委員会 1980 『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅲ次）概報』
99. 富士宮市教育委員会 1981 『西富士道路埋蔵文化財発掘調査(富士宮地区)概報』
100.富士宮市教育委員会 1981 富士宮市文化財調査報告書第1集『月の輪遺跡群』
101.富士宮市教育委員会 1981 富士宮市文化財調査報告書第2集『月の輪遺跡群』
102.富士宮市教育委員会 1981 富士宮市文化財調査報告書第3集『滝の上遺跡』
103.富士宮市教育委員会 1982 富士宮市文化財調査報告書第4集『月の輪遺跡群』
104.富士宮市教育委員会 1982 富士宮市文化財調査報告書第5集『代官屋敷遺跡』
105.富士宮市教育委員会 1982 『上石敷遺跡発掘調査概報』
106.富士宮市教育委員会 1982 『権現遺跡発掘調査概報』
107.富士宮市教育委員会 1983 富士宮市文化財調査報告書第6集『若宮遺跡』
108.富士宮市教育委員会 1983 『滝戸遺跡発掘調査（第Ⅳ次）概報』
109.富士宮市教育委員会 1985 『富士宮の文化財 改訂版』
110.富士宮市教育委員会 1985 富士宮市文化財調査報告書第7集『沼久保坂上遺跡』
111.富士宮市教育委員会 1985 富士宮市文化財調査報告書第8集『上石敷遺跡』
112.富士宮市教育委員会 1986 富士宮市文化財調査報告書第9集『黒田向林遺跡』
113.富士宮市教育委員会 1986 『大宮神田曲輪跡発掘調査概報』
114.富士宮市教育委員会 1987 富士宮市文化財調査報告書第10集『古墳実測調査』
115.富士宮市教育委員会1987富士宮市文化財調査報告書第11集『駿州富士郡二股村石経塚』
116.富士宮市教育委員会 1989 富士宮市文化財調査報告書第12集『小松原A遺跡』
117.富士宮市教育委員会 1989 富士宮市文化財調査報告書第13集『渋沢遺跡』
118.富士宮市教育委員会 1990 『富士宮市のあけぼの』
119.富士宮市教育委員会 1991 『平成3年度市民考古学講座(発掘体験教室)
いなほしばいせき』

120.富士宮市教育委員会 1991　富士宮市文化財調査報告書第14集『丸ヶ谷戸遺跡』
121.富士宮市教育委員会 1991　富士宮市文化財調査報告書第15集『稲干場遺跡』
122.富士宮市教育委員会 1991　『富士宮の文化財 第三刷』
123.文化庁　1978　『全国遺跡地図　静岡県』
124.馬飼野行雄 1991「古墳出現前夜－丸ヶ谷戸遺跡の前方後方型周溝墓－」
『静岡の原像をさぐる』静岡県教育委員会
125.町田 洋 1964「Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史
－第四紀末ににについて－（その１）」地学雑誌Vol.73、No.5
126.町田 洋 1964「Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史
－第四紀末期について－（その２）」地学雑誌Vol.73、No.6
127.宮崎朝雄・金子直行 1990「撚糸文系土器群と押型文系土器群の関係（素描）」
『縄文時代』第１号
128.八幡一郎　1978『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（中）』慶友社
129.山上英誉　1990「弥生時代後期～古墳時代初頭期の集落の変遷について」
相武考古学研究所紀要第１集
130.山上英誉・稲村一美 1990「富士宮市渋沢遺跡出土の甕形土器」相武考古学研究所
紀要第１集
131.山上英誉　1991「静岡県(駿河)」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』
東海埋蔵文化財研究会
132.若林淳之　1970『静岡県の歴史』山川出版社
133.若林淳之　1982『静岡県地名大辞典』角川書店
134.若林淳之　1988『静岡県風土記』旺文社
135.渡井一信　1991「富士の巻狩りと猪土手」『月の輪』第６号　富士宮市郷土史同好会
136.渡辺繁治・小林常定 1950「富士宮市滝戸遺跡報告（一）」『ふるさと』富士高校
137.静岡県　1991『静岡県史　資料編３　考古三』
138.鈴木保彦　1986「続・配石墓の研究」『神奈川考古同人会10周年記念論集』
神奈川考古同人会
139.宮崎朝雄・金子直行　1992「若宮遺跡出土土器群の再検討」
『研究紀要』第９号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

図　版

図版－1

1. 焼　畑　遺　跡

2. 杉田中村遺跡

3. 滝ノ上遺跡

4. 田上原遺跡

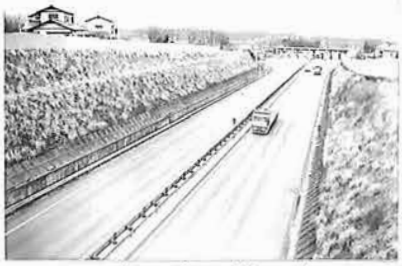
5. 丸　塚　遺　跡

6. 新　梨　遺　跡

7. 杉田西原遺跡

8. 大　辻　遺　跡

図版－2



9. 若　宮　遺　跡

10. ジンゲン沢遺跡

11. 代官屋敷遺跡

12. 蟹入越遺跡

13. 小泉向原遺跡

15. 中ノ土手遺跡

16. 寺ノ後遺跡

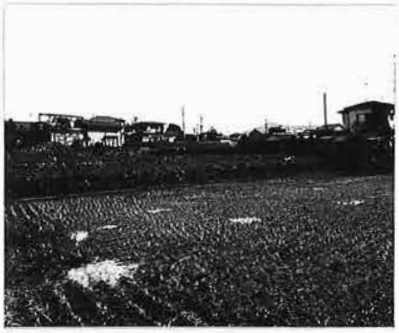
17. 上　宿　遺　跡

図版－3

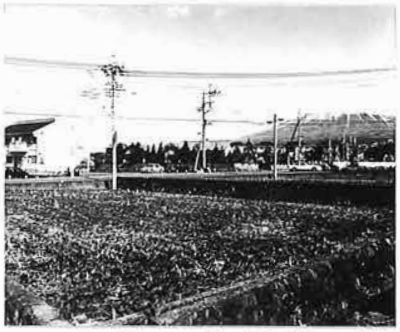
18. 神　祖　遺　跡

19. 寺　内　遺　跡

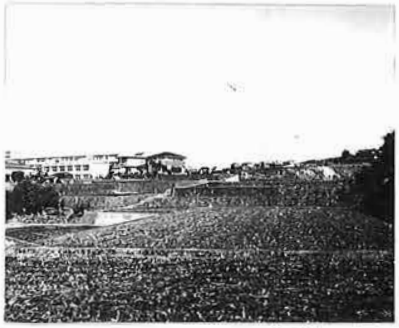
20. 大　室　遺　跡



21. 小泉中村遺跡



22. 三　ッ　室　遺　跡



23. 木ノ行寺遺跡

24. 権　現　遺　跡

25. 石　敷　遺　跡

図版－4

26. 向　田　遺　跡

27. 中　沢　遺　跡

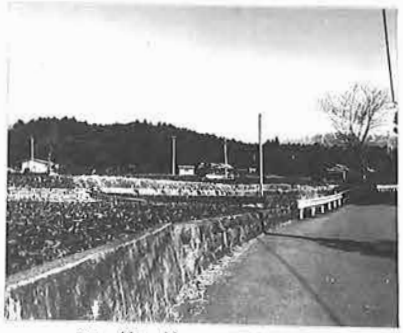
28. 大　室　古　墳

29. 神祖山ノ神古墳

30. 神　祖　2　号　墳

32. 寺内山ノ神古墳

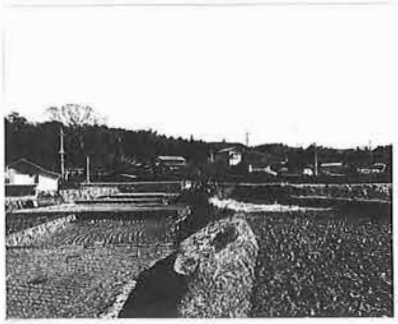
34. 虚空蔵社古墳



35. 箕　輪　A　遺　跡

図版－5

36. 箕 輪 B 遺 跡



37. 出 水 遺 跡

38. 峯 石 遺 跡

39. 丸 ヶ 谷 戸 遺 跡

40. 辰 野 遺 跡

41. 時 田 遺 跡

42. 宝 田 遺 跡

43. 峰 ヶ 谷 戸 遺 跡

44. 出 水 東 遺 跡

45. 出 水 西 遺 跡

47. 松 葉 遺 跡

48. 東 谷 戸 遺 跡

50. 稲 干 場 遺 跡

52. 社 領 東 遺 跡

53. 社 領 西 遺 跡

54. 舞 々 木 1 号 墳

図版－7

55. 舞々木2号墳

57. 姥　穴　遺　跡

58. 桟　敷　遺　跡

59. 白糸の滝遺跡

60. 白糸佐折遺跡

62.猪之頭養鱒場内遺跡

63. 富士丘遺跡

64. 根　原　遺　跡

図版－8

65.千 居 B 遺 跡

66.千 居 A 遺 跡

67.青 蓮 の 滝 遺 跡

68.丸 山 遺 跡

69.田 尻 遺 跡

72.琴 平 遺 跡

73.渋 沢 遺 跡

76.浅 間 大 社 遺 跡

77.羽衣町遺跡・82.西町遺跡

78. 城　山　遺　跡

127.大　宮　城　跡

80. 二　ノ　宮　遺　跡

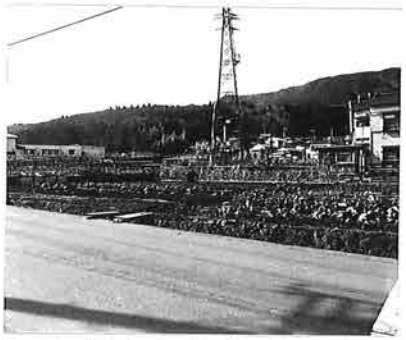
81. 福 知 神 社 遺 跡

82.西町遺跡・105.泉　遺　跡

83. 貴 船 町 遺 跡

84. 甲　石　遺　跡

85. 福　伝　遺　跡

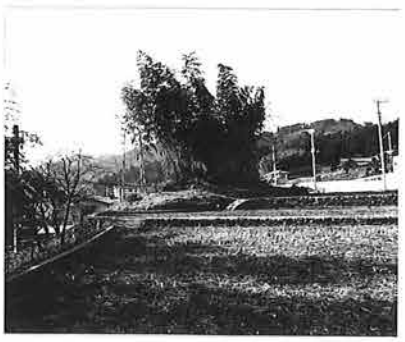


86. 大中里坂下遺跡

87. 大中里坂上遺跡

90. 別　所　遺　跡

91. 上　ノ　原　遺　跡



93.別所稲荷塚古墳

94. 摩　利　支　天　塚

95. 沼久保坂上遺跡

96. 谷　外　遺　跡

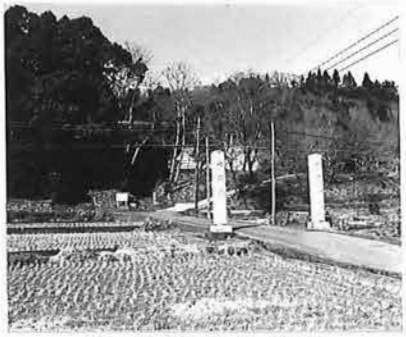
97. 下　田　遺　跡

98. 小 松 原 B 遺 跡

99. 小 松 原 A 遺 跡

101. 明 星 山 遺 跡

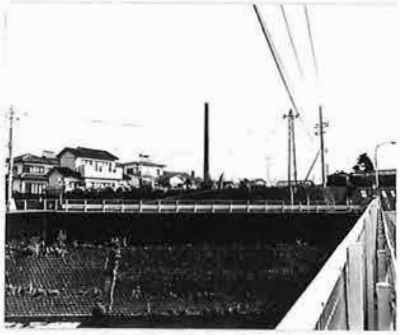
102. 坊 地 上 遺 跡



103. 倭 文 神 社 遺 跡

104. 野 中 中 村 遺 跡

105. 泉　遺　跡



106. 南部谷戸遺跡

107. 月の輪平遺跡

108. 滝　戸　遺　跡

109. 野中向原遺跡

111. 五反田遺跡

112. 月の輪上遺跡

113. 奥山地遺跡

114. 田　中　遺　跡

115. 坊　地　下　遺　跡

116. 坊　地　南　遺　跡

117. 月　の　輪　下　遺　跡

118. 塚　本　古　墳

121. 上　高　原　遺　跡

122. 出　口　遺　跡

123. 初　田　遺　跡

124. 光 徳 坊 遺 跡

26. 向田遺跡・34. 虚空蔵社古墳・126. 上石敷遺跡

126. 上 石 敷 遺 跡

127. 大 宮 城 跡

128. 黒 田 向 林 遺 跡

129. 長 者 ヶ 原 A 遺 跡

130. 長 者 ヶ 原 B 遺 跡

131. 精 進 川 神 田 遺 跡

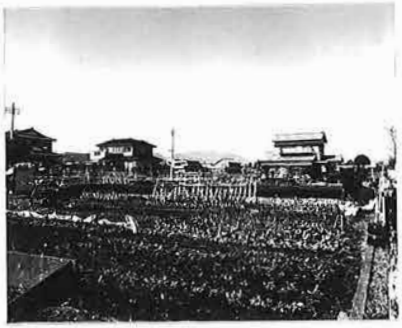
132. 明善谷戸遺跡

133. 東岳前遺跡

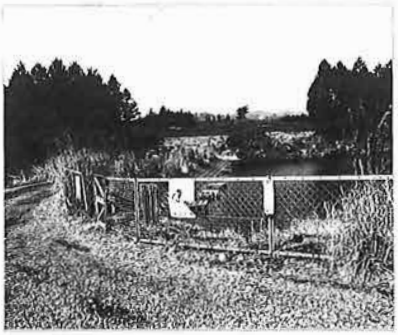
134. 石畑遺跡

135. 牛ヶ沢遺跡

136. 根方遺跡



137. 若ノ宮遺跡



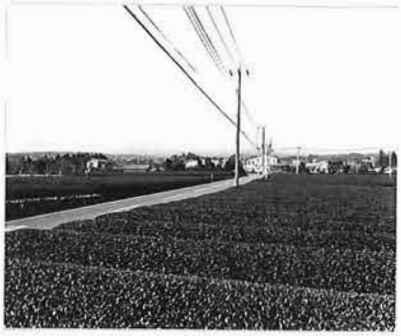
138. 上ノ山遺跡

139. 二股村石経塚

140.別所蛇塚古墳・93.別所稲荷塚古墳

141.外 谷 戸 遺 跡

142.押 出 遺 跡



143.寺 地 遺 跡

144.大 宝 坊 遺 跡

145.荻 間 遺 跡

146.金 井 坂 遺 跡

147.下 ノ 原 遺 跡

148. 山本船久保遺跡

149. 下ヶ谷戸遺跡

150. 杉　林　遺　跡

151. 東　田　遺　跡

152. 上 中 村 遺 跡

153. 舞　台　遺　跡

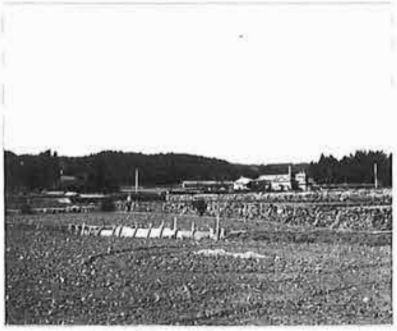
154. 馬見塚新屋遺跡

155. 棚　口　遺　跡

156. 西 ノ 原 遺 跡

157. 精進川小山遺跡

158. 北 原 遺 跡



159. 貫 間 遺 跡

160. 東 下 組 遺 跡

161. 御 園 遺 跡

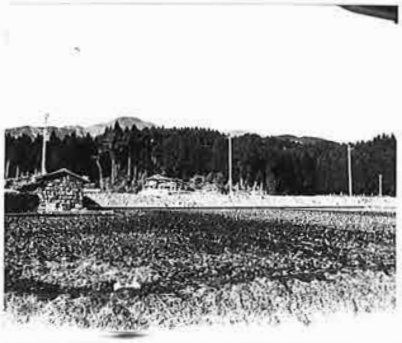
162. 辻 遺 跡

163. 足 形 上 遺 跡

164. 吉　野　屋　敷

165. 南　条　館　跡

166. 井　　出　　館



167. 内　野　城　跡

168. 高　原　城　跡

171. 川　坂　遺　跡

172. 三島ヶ獄経塚

173. 猪　　土　　手

174. 麓 金 山 堀 間 跡

175. 沼久保船着場跡

176.星 山 船 着 場 跡

181. 人　　穴

177. 新大宮口登山道跡
二合目小屋跡

178. 村山口登山道跡　小屋跡
（現・新五合目東側）

179. 札打ち場の大ケヤキ

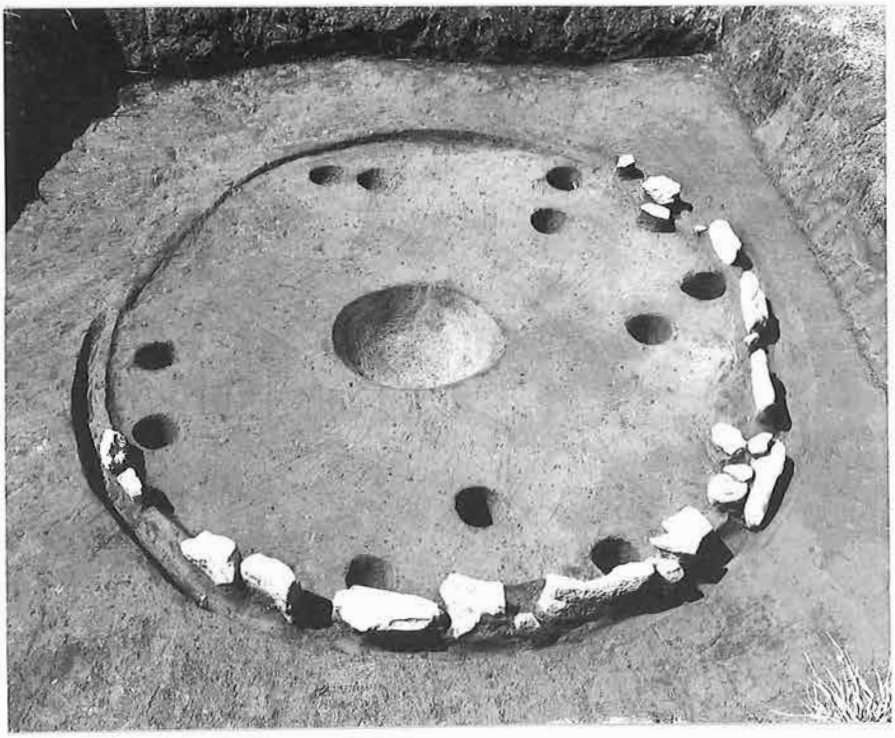
180. 中宮八幡堂跡

図版－22

福伝遺跡
完掘状況

辰野遺跡完掘状況

図版－23

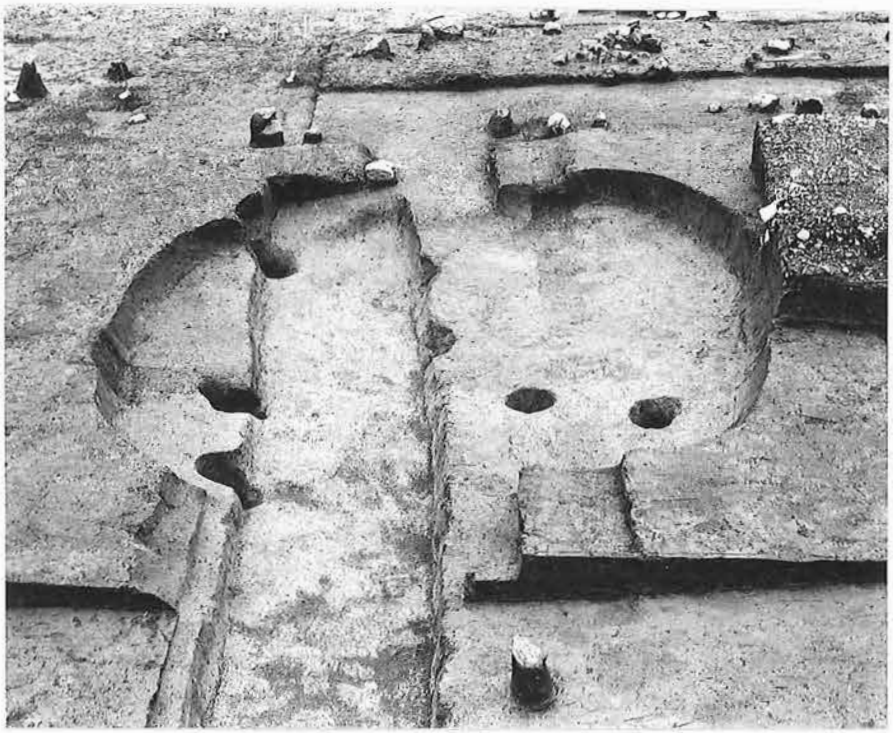


箕輪Ａ遺跡
竪穴住居
1.2

箕輪Ａ遺跡
土器集中区内
出土土器

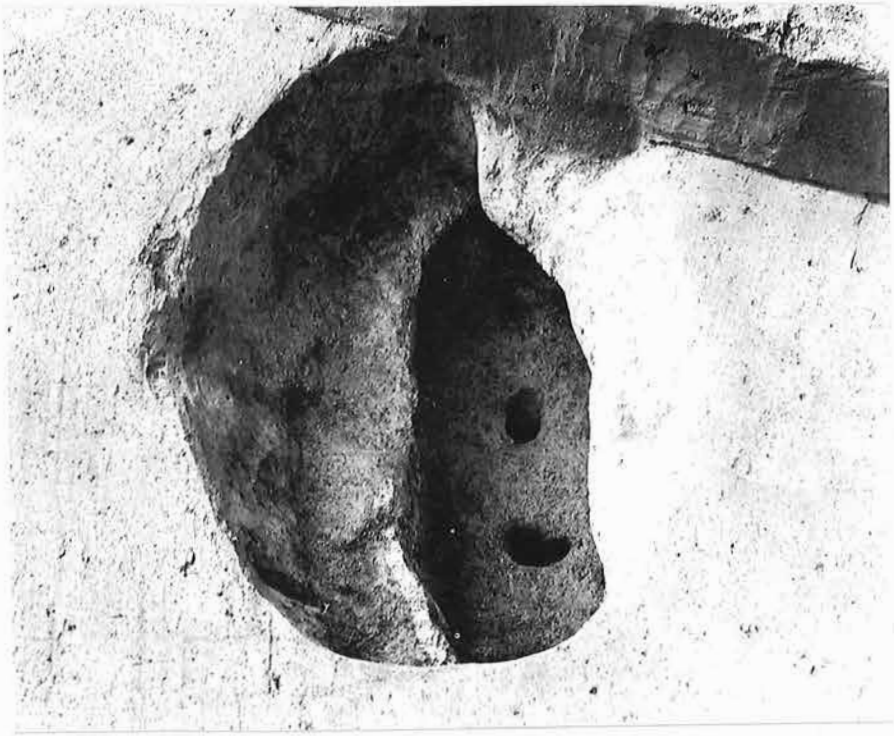
図版－24

箕輪B遺跡
完掘状況

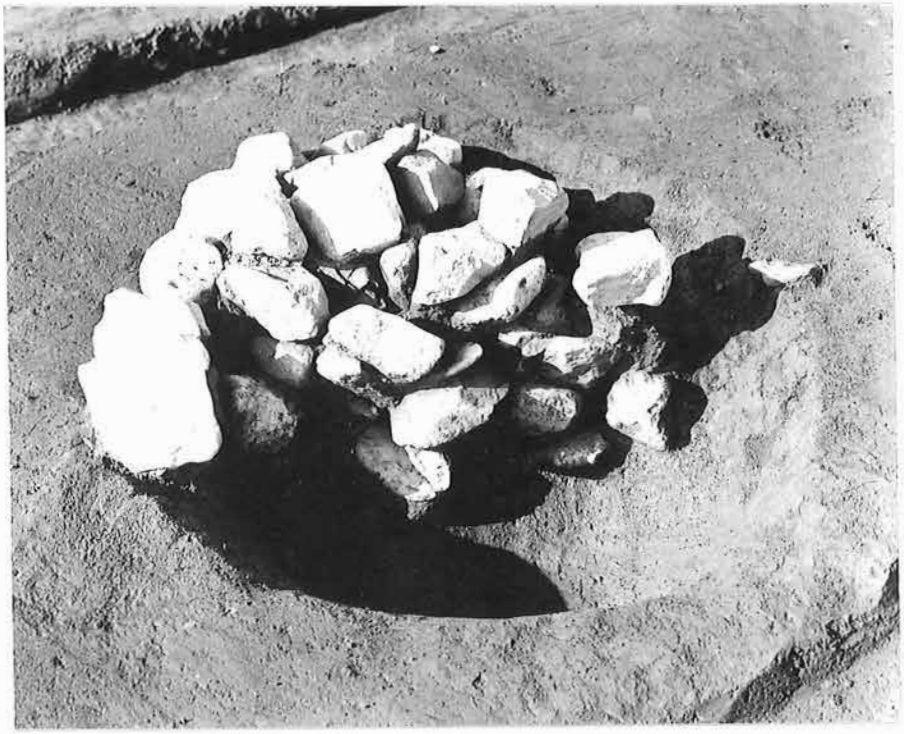


箕輪B遺跡
竪穴住居1

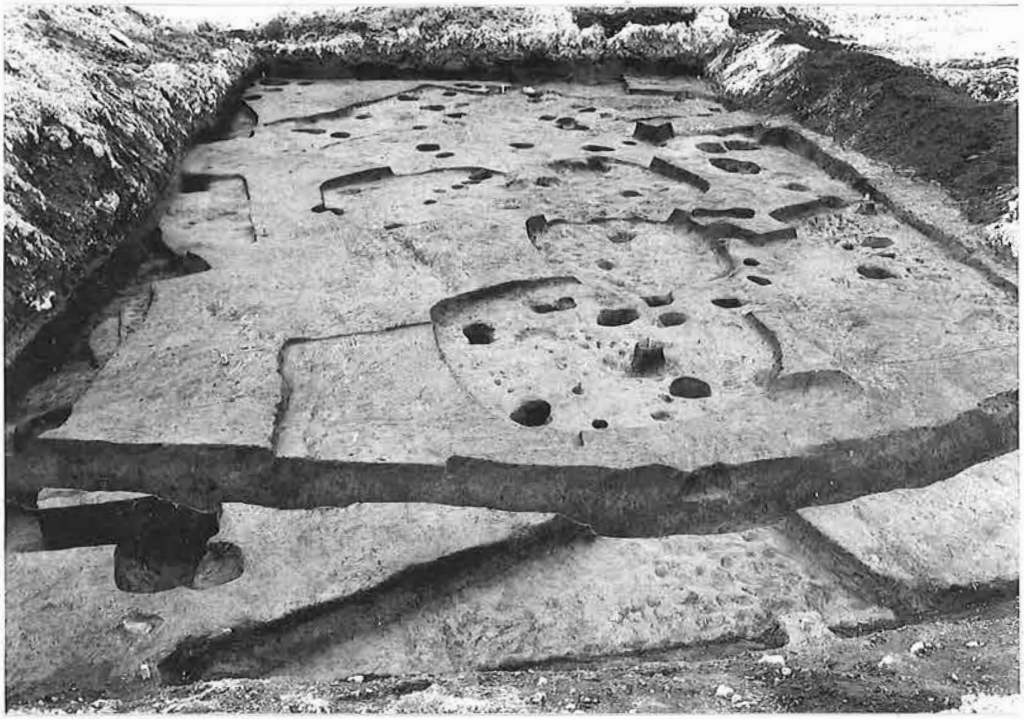
図版－25



箕輪Ｂ遺跡
陥し穴



箕輪Ｂ遺跡
集石土坑02



泉遺跡第２地点

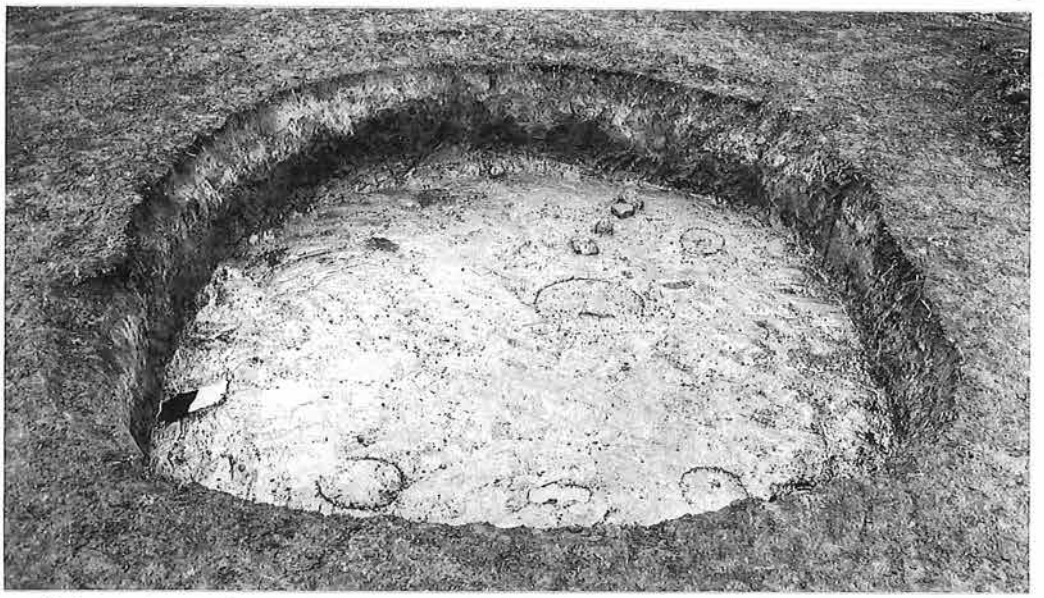
泉遺跡第２地点　第１号溝

泉遺跡第２地点　第４・５号住居址

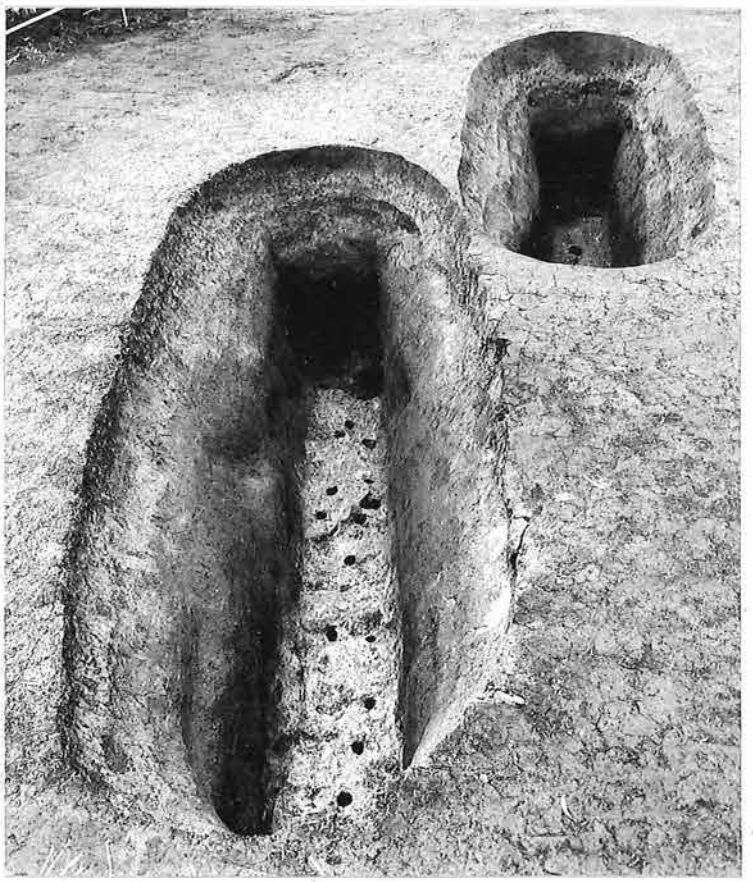
泉遺跡第２地点
第５号住居址竈

権現遺跡調査区

権現遺跡　第１号住居跡



長者ヶ原Ｂ遺跡　第１号住居址

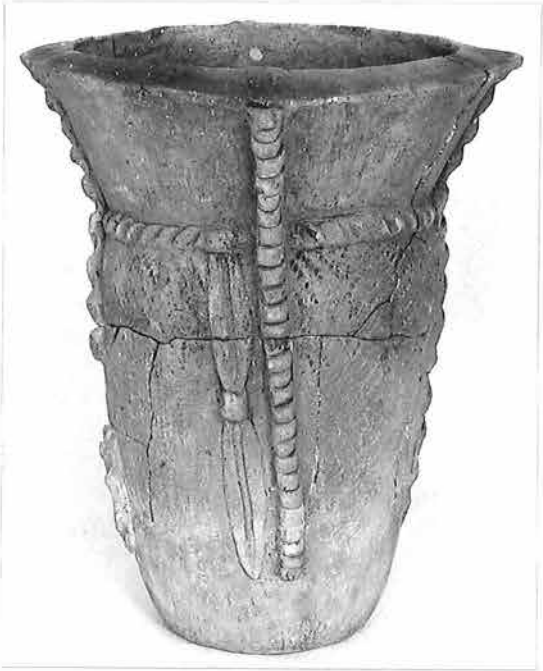


長者ヶ原Ｂ遺跡
NO.1・2 土坑

箕輪B　NO.10↑

箕輪A　NO.1→

箕輪A　NO.22↓



箕輪A NO.13↑

箕輪A NO.7↑

箕輪A NO.5↓

箕輪A NO.6↓

図版－32

泉　NO.8

泉　NO.59

泉　NO.165

泉　NO.156

泉　NO.10

泉　NO.160

図版－33

泉　NO.42

泉　NO.130

泉　NO.137

泉　NO.169

泉　NO.167

泉　NO.127

権現 NO.209

権現 NO.210

長者ヶ原 NO.235

権現 NO.217

長者ヶ原 NO.237

長者ヶ原 NO.238

図版－34

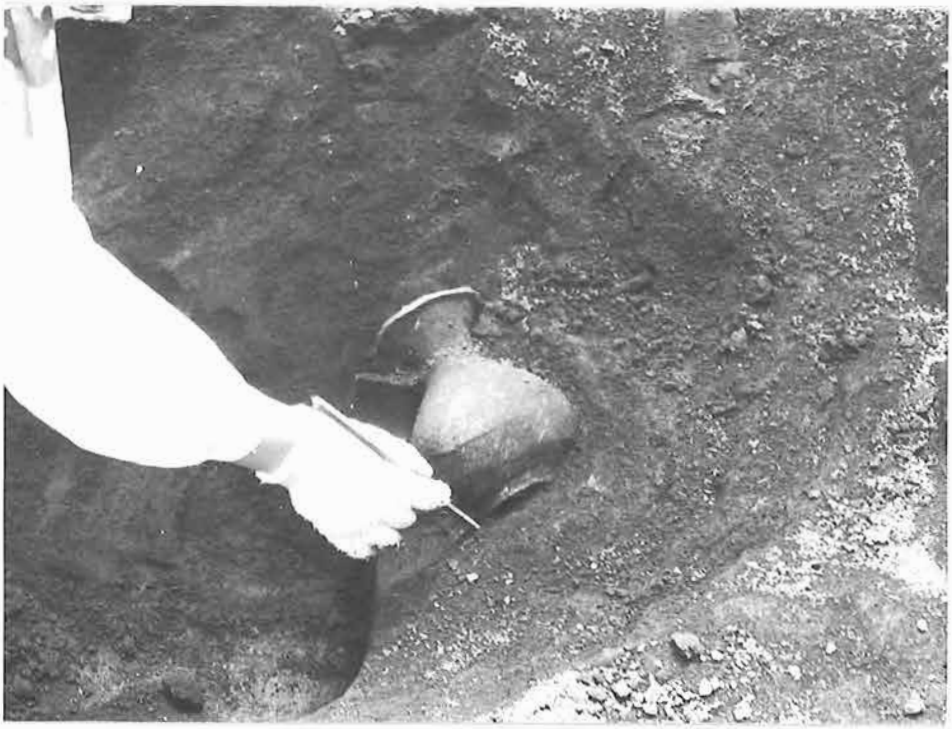
石敷 NO. 3

寺内 NO. 2

坊地南 NO. 4

薮塚古墳 NO. 7

薮塚古墳 NO. 8



泉遺跡 NO.160 出土状況（溝状遺構内）

富士宮市文化財調査報告書第16集

富士宮市の遺跡

平成 5 年 3 月 16日

編集　富士宮市教育委員会

発行　富士宮市教育委員会

静岡県富士宮市弓沢町150番地（〒418）

電話（0544）２２－１１１１(代)

印刷　㈱　緑　星　社

ＴＥＬ〈0544〉23-2882